

恵迪

第三号



- ◆有島武郎、恵迪寮での二百六日間〈北大・恵迪人脈Ⅱ第三部〉
- ◆恵迪？恵迪？それとも恵迪？（恵迪寮名をめぐる）
- ◆「論文」資源・エネルギーは幾らでもある
- ◆〈資料〉窓シヨンのことなど
- ◆一九九八年度開識社講演会「私の生きざま」

- 
 株式会社 富工務店

代表取締役社長 **繁富文承** (機Ⅱ修士1期・工博)

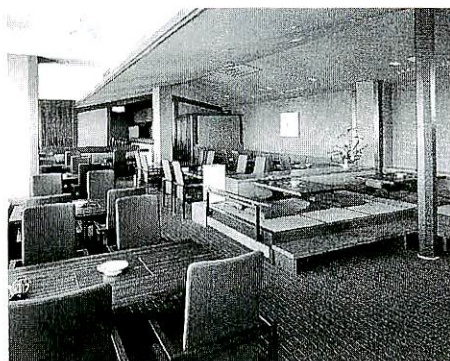
本社	札幌市中央区南12条西6丁目1番28号	☎札幌(011)代表511-3428
琴似出張所	札幌市西区発寒10条2丁目3番5号	☎札幌(011)665-4558
江別出張所	江別市緑町西3丁目10番6号	☎江別(011)382-2994
苫小牧出張所	苫小牧市字沼ノ端228番218	☎苫小牧(0144)51-6200
旭川出張所	旭川市バルブ町505番地	☎旭川(0166)22-5434
岩内出張所	岩内郡岩内町字大浜40番地の5	☎岩内(0135)62-6784
札幌工場	札幌市西区発寒11条12丁目2番5号	☎札幌(011)661-3588
旭川工場	旭川市永山3条9丁目1番5号	☎旭川(0166)48-2660

和食〈みやま〉22F

みやま

ご昼食 11:30 AM ~ 2:30 PM

ご夕食 5:00 PM ~ 10:00 PM



広大な北大キャンパスを
見おろしながら、ご昼食
から本格会席料理までお
楽しみいただけます。

晴れた日は、遠く石狩の海を見渡す。

京王フラサホテル札幌

〒060-0005 札幌市中央区北5条西7丁目

☎(011)271-0111 (代)



無農薬ホップ100%使用

芳醇の生
サッポロ **ブロイ**
新発売

350ml ¥145 / 500ml ¥195
参考小売価格(消費税抜き)[発泡酒]

参考小売価格は販売店様の自主的な価格設定を拘束するものではありません。



味わえる、味がある。

飲酒は20歳になってから。あきかんはリサイクル。④

サッポロビール株式会社

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は午後1時から午前5時まで停止されています。ホームページアドレス <http://www.sapporobeer.co.jp/brau>

巻頭の辞

恵迪寮同窓会会長

繁富 一雄（昭和六年入寮）

16

「グラビア」

北海道の自然

～恵迪寮歌の生まれた世界～

写真

高橋 邦臣（昭和二十八年入寮）

7

▼主張・評論▲

● 今なすべきこと

板谷 實（昭和二十一年入寮）

17

● 母校・北大の大学院化に想う

辻山 昌佑（昭和二十六年入寮）

19

● 外国に旅して感じたこと

茶畑 仁司（昭和二十六年入寮）

22

～このままで、我が国に未来はあるか～

● 高齢化社会の到来と農業・農村

幸 健一郎（昭和三十年入寮）

26

● 逆風満帆に生きる

横山 清（昭和三十一年入寮）

29

● 人生にロマンを、教育にヒューマニズムを

亀貝 一義（昭和三十一年入寮）

31

〈新しい学校「北海道自由が丘学園」の設立の理想〉

● Hokkaido Be Ambitious !

山本 博巳（昭和三十一年入寮）

36

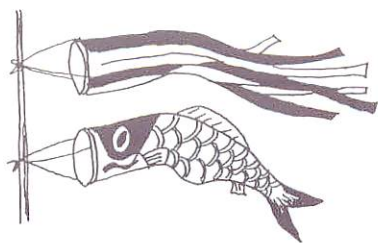
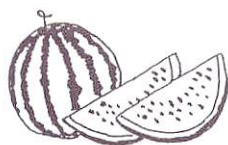
● チセ・フレップと士幌高原道路

山本 牧（昭和四十九年入寮）

38

世界をめぐる





竹筒おこわとカオ・パット

福竹 養造（昭和二十六年入寮） 44

ある地質屋のあとがき

太田 昌秀（昭和二十八年入寮） 50

カンボジア・NGO・恵迪

松本 清嗣（昭和五十九年入寮） 52

■北大、恵迪、人脈Ⅱ第三回■

有島武郎、恵迪寮での二百六日間

井口 光雄（昭和二十八年入寮） 62

「連載」恵迪寮の野球部の先輩たち（その三）

古川 俊美（昭和三十一年入寮） 80

「都ぞ弥生」の米寿に思う

石川 舜（昭和三十二年入寮） 92

恵迪寮名・慣習・寮歌をめぐって

恵迪？恵迪？それとも恵迪？

柴田松太郎（昭和十九年入寮） 98

「恵迪」の故郷・碑林を訪ねて 書経・大禹謨を読んで

旧制高等学校記念館特別展

小篠 守正（昭和十七年入寮） 109

寮歌祭事情／寮歌祭はその役割を終えたのか

阿澄 昌夫（昭和二十二年入寮） 111

窓シヨンのことなど

石村 義典（昭和四十年入寮） 114

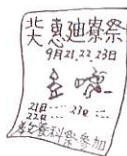
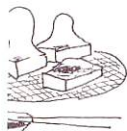
思い出の恵迪寮／知られざるエピソード

◆燻製ニシンを焼くけむり

大條 正義（昭和九年入寮） 120

◆恵迪寮の思い出

野原 博（昭和十二年入寮） 122



◆私の思い出にある恵迪寮（B面）

高安 一郎（昭和十二年入寮）

126

◆送られてきた古いレポート

村山 正（昭和二十三年入寮）

134

◆先人記念館と島 善鄰先生の思い出

水庭 久尚（昭和二十六年入寮）

135

◆思い出は、版画に

入江 恂（昭和二十七年入寮）

132

◆「恵迪」回顧

寺田 周史（昭和二十八年入寮）

137

◆あの頃

高根 仟（昭和二十八年入寮）

139

◆恵迪寮越冬記

高津 敏（昭和四十五年入寮）

141

同窓・同期交流

☆熊の仔会

岩田 善輔（昭和十五年入寮）

144

☆昭和二十六年入寮同窓による「仙台での集い」も終えて

久門 雅史（昭和二十六年入寮）

146

☆愉快なる哉！恵迪寮スキー部OB会

高野 豊（昭和三十二年入寮）

149

●●●現恵迪寮●●●

男女学生の共同寮となつて五年、

現恵迪寮の総決算を、と構えてみたが……

高橋 邦臣（昭和二十八年入寮）

151

■一九九八年度開識社講演会

「私の生きざま」

トルコ国の現状

岡部 賢二（昭和二十九年入寮）

152

老人福祉について

河原 克巳（昭和二十六年入寮）

153

現生の子ビームを収り巻く伏見

牟田 隆三（昭和二十年入寮）

154



人生エピソード・エッセイ・俳句

宇宙飛行迄なし遂げた独乙V1号の威力

繁富 一雄（昭和六年入寮）

180

俳句「春愁」

小沢 久弥（昭和十七年入寮）

203

「入れ歯」後日譚

中瀬 篤信（昭和二十六年入寮）

183

恵迪とフィリピンの子供達（郷愁を超へて）

小寺 義彦（昭和二十七年入寮）

186

私とドイツ

坂西 八郎（昭和二十八年入寮）

189

ビー・ジェントルマン、今も

加藤 法愷（昭和二十九年入寮）

193

”恵迪” おゝ、わが原点

鰐淵 俊之（昭和三十二年入寮）

195

砂上の人生回想

窪田 開拓（昭和三十二年入寮）

196

「雑感雑語」

谷口 哲也（昭和四十八年入寮）

199

自作「武蔵の剣」ゝススキノ有線曲第3弾

田中 信義（昭和三十二年入寮）

201

論文

資源・エネルギーは幾らでもある

高木 任之（昭和二十六年入寮）

204

▽紀行△

シルクロード一万五千キロ、五十五日間バスの旅

小林 正人（昭和二十八年入寮）

216

編集後記

題字 初代北海道帝国大学総長 佐藤昌介 ■表紙・目次・扉・本文カット

河辺 傑（昭和二十八年入寮）

226

編集委員会



開場36年、北海道が誇る北の名門！

昭和50年から札幌とうきゅうオープン開催
全国無比、大空に連なるはてしない原始の森

札幌国際カントリークラブ 島松コース

理事長 繁 富 一 雄

恵迪寮同窓会会長 (機械10期)

副理事長 勝 木 郁 郎

常務理事 加 藤 信 吉

常務理事 田 垣 親 雄

キャプテン

コ ー ス 北広島市島松49番地5

(011) 376-2221

札幌事務所 札幌市中央区北2条西4丁目 北海道ビル

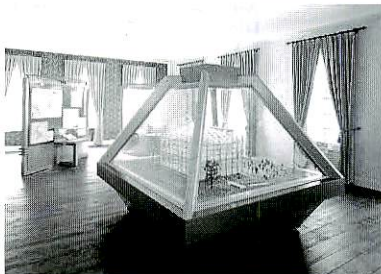
(011) 231-1875

H O K K A I D O

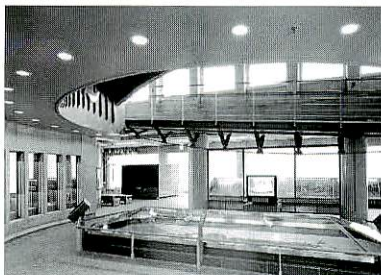
- 士別市郷土博物館
- 函館市北洋資料館
- 日高町郷土資料館
- 本別町歴史民俗資料室
- 白老町アイヌ民族博物館
- 沼田町農業資料館
- 網走市オホーツク流水館
- 北海道立文書館(札幌市)
- 有島記念館(ニセコ町)
- 旧有島武郎邸(札幌市・芸術の森)
- 中頓別町郷土資料館
- 厚沢部町郷土資料館
- 北竜町郷土館
- 神恵内村郷土館
- 札幌市青少年科学館
- 札幌市冬のスポーツ博物館
- 熊石町歴史記念館
- 厚岸町海軍記念館
- 札幌市屯田郷土資料館
- 留萌市海のふさと館
- 函館市文化資料館
- 佐呂間町交通資料館
- 釧路市米町ふさと館
- 北海道開拓の村
- 中富良野町郷土資料室
- 清水町図書館郷土資料館
- 江差町青少年研修施設「開陽丸」
- 滝川市川の科学館
- 平取町義経資料館
- 壮瞥町郷土資料館・北の湖記念館
- 標津町サーモンパーク科学館
- 興部町交通記念館
- 網走市川と湖の学習室
- 岩見沢市郷土科学館
- 歌登町ふさと館
- 霧多布湿原センター(浜中町)
- 北方民族資料・石川啄木資料館
- 士幌町ふさと館
- 白老町仙台藩白老元陣屋資料館
- 阿寒国際ソルセンター
- 厚岸町水鳥観察館
- 寿都町文化財展示室
- 紋別市オホーツクタワー展示室
- 名寄市北国博物館
- 増毛町史料展示室「元陣屋」
- えりも町水産の館
- 札幌歴史館(時計台)
- 旧樺山衛志郡役所(江差町)
- 沙流川歴史館(平取町)



札幌歴史館(時計台)



旧樺山衛志郡役所(江差町)



沙流川歴史館(平取町)

いま、博物館がおもしろい。
まもなく二十一世紀、北海道のフロンティア・スピリットとの出会いに出かけてみませんか？。

株式会社現代ビューロー

〒060-0002 札幌市中央区北2条西3丁目札幌第1ビル47F TEL(011)231-6049

代表取締役会長 井口 光雄(昭和28年入寮)

代表取締役社長 片野 和夫

*上記は当社が設計・施工した
展示施設の一部です

MEIJI

人間はもっと健康になれる。



明治乳業株式会社

東京都中央区京橋2-3-6
TEL:03-3281-6122

代表取締役社長 中山悠

KING of 酒。

京都・伏見に生まれて三百六十余年。
伝統の技と日本人の味覚に
磨き抜かれた銘酒です。
勝利と栄光のシンボル。
その名「月桂冠」にふさわしい
本格派の味わいをお楽しみください。

※1997年の日本での清酒販売課税数量に於いて
月桂冠はNo.1です。(当社調べ)



お酒は20歳になってから。
お酒はおいしく適量を。

月桂冠株式会社

北海道の自然

〜恵迪寮歌の生まれた世界〜

「写真提供」 高橋 邦臣

(昭和二十八年八月)

(株)現代ビュロー

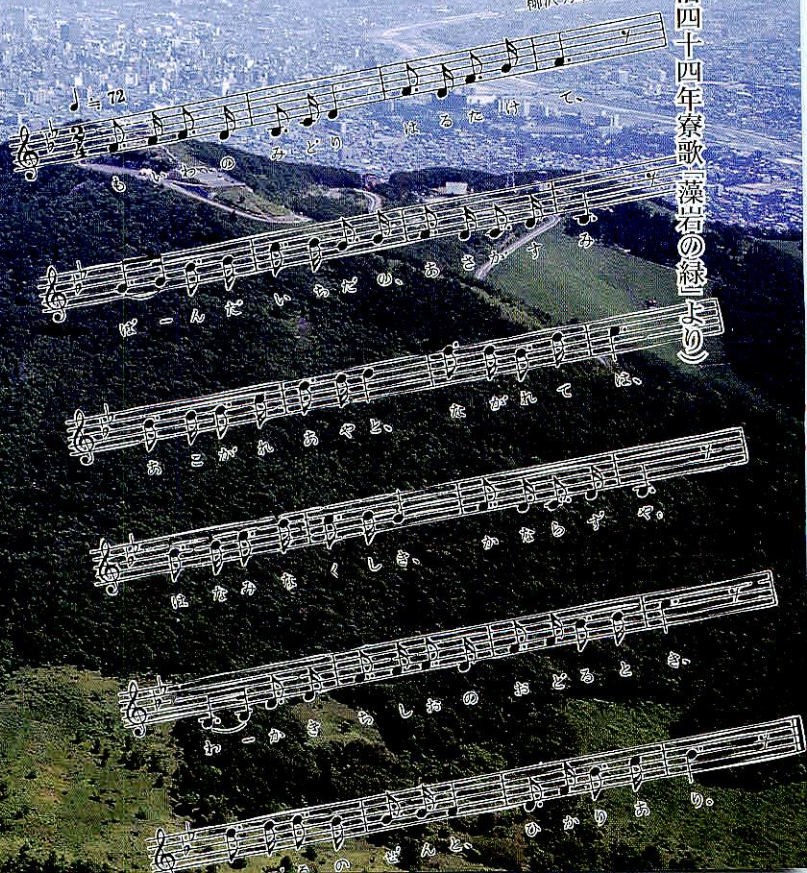
(新雪の十勝岳連峰)

”
自然を己が揺籃に
“

藻岩の緑

柳沢秀雄君作曲

(明治四十四年寮歌「藻岩の緑」より)





ニセアカシアの花



樹氷



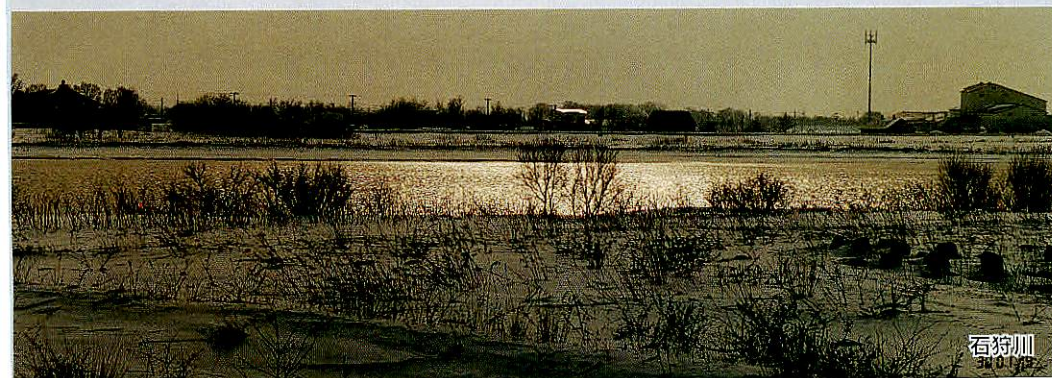
流氷



支笏湖



“豊平の川尽きせぬなかれ”（「永遠の幸」）
現在の豊平川はビルに囲まれた都会の川である



石狩川

”
浜茄子紅き磯辺にも

鈴蘭薫る谷間にも

(大正九年桜星会歌より)



水芭蕉

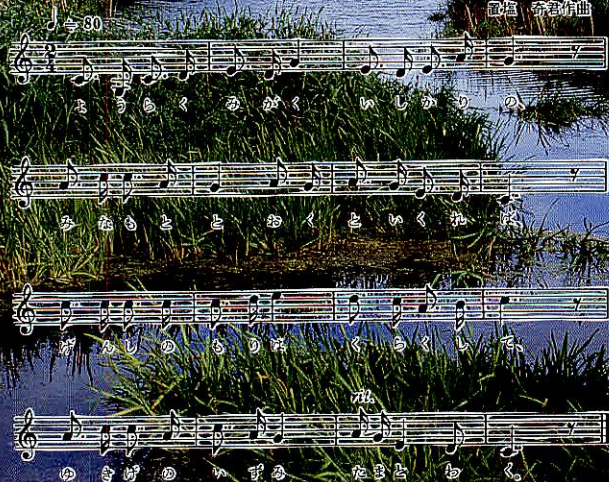


ハマナス

ズラン



環珞みがく



243 373
配曲 奇想曲

66



エゾノエンゴサク



カタクリ



オオバナノエンレイソウ

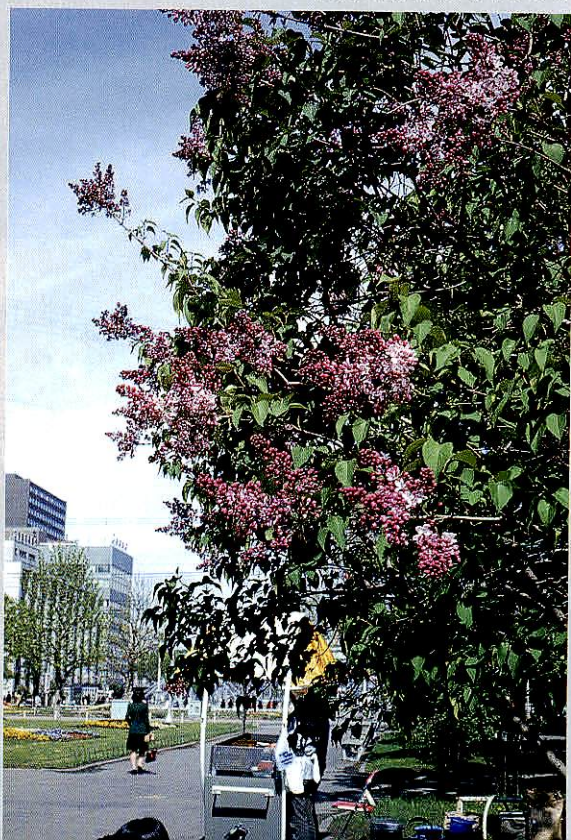


ギバナノアマナ



クロユリ

札幌大通公園のライラック



(明治四十五年寮歌「都ぞ弥生」より)

赤木颯次君作曲

Maestoso ♩ = 90-100

芦別岳と紅葉

はなのか

ただよう うたげの むしろ。 うきせぬ おごりに

と き くれ ないや、 そ の は る く れ て は う つ ろ う

あき、し げみに、
ひととき

も先ねん かがねん かいをのせて


 原しかけ さやかに 田かゝる 音たせ 山の上

♪ 一上白く花とあはれ九



余市岳から見た羊蹄山



帆尻岳とトツタベツ岳



支笏湖と風不死岳



雪の旭岳



暑寒別岳連山を望む



手稲連山に沈む夕陽

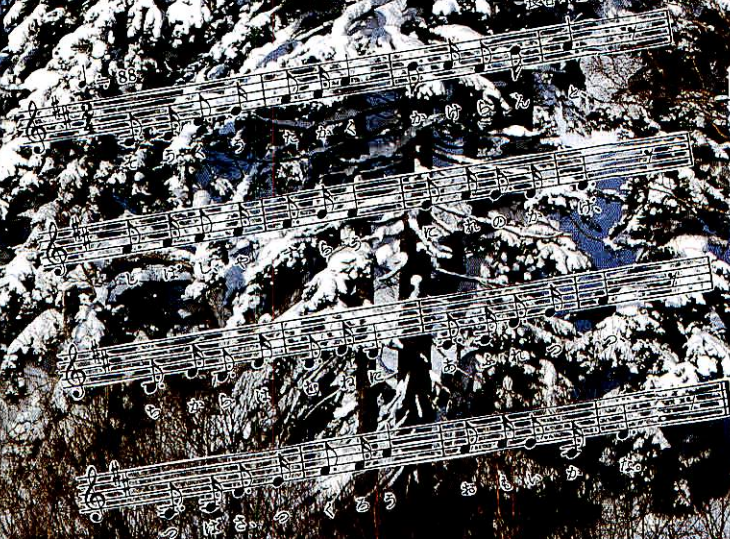
”雪さんらんと散るところ

われらが魂の故郷かな”

（昭和二年衆歌者高く翔らむとより）

蒼空高く翔らむと

長谷川白郎君作曲



惠 迪

KEITEKI

第 3 号

1999 · 3 · 1





会誌「恵迪」第三号巻頭の辞

恵迪寮同窓会会長 繁富 一雄（昭和六年入寮）

平成十年九月二十日北大恵迪寮同窓会総会に於いて又々会長に選出された。引き受けた以上は恵迪寮同窓会の発展に全力を尽くす心算で居る。

平成十年度の会誌「恵迪」第三号の発刊をはじめ、平成十二年度に「同」第四号、平成十四年度には恵迪寮同窓会名簿の刊行、この間、年二回の恵迪通信の発行、また、北海道開拓の村に保存されている旧恵迪寮舎の十年振りの追加展示を計画して居る。さらに毎年、一月には札幌市に於いて新年恵迪寮歌会始めをし、九月には親睦ゴルフ会を札幌国際カントリークラブに於いて開催して、会員の親睦と相互理解を深めて行く予定である。

会誌「恵迪」を発刊するにも、恵迪寮同窓会名簿を刊行するのも、大変な手間暇がかかり、それを担当する理事、幹事諸兄には何と御礼を言つて良いかわからない程で、見返りを求めない奉仕に対し、心から深く感謝を申し上げる次第である。

現在日本は未曾有の経済危機に見舞われており、何をするにも苦勞が多い。特に、わが会のような任意団体の運営が苦しい事は、会員諸兄も良く判つてくれている事と思う。時代が大きく変わって大銀行と雖も倒産し、金利も従前の十分の一度程度になって、終身会員諸兄から納入いただいた終身会費からの利息をもって運営していこうとした当初の計画が崩壊しつつある。

昨年、こうした実状を会員諸兄に訴え、同窓会を運営するため「組織運営負担金」をお願いしたところ、多くの終身会員諸兄からご協力をいただき、お陰様で会の運営が順調になりつつあるとの報告を代表幹事より受けた。当誌面をお借りして、この度の会員諸兄のご協力に心から感謝申し上げますと共に、今後一層のお力添えを祈念し、発刊のご挨拶とさせていただきます。

【主張・評論】

今なすべきこと

板 谷 實

(昭和二十一年入寮)

「ノーパンしゃぶしゃぶ」が官官接待の中でクローズアップされ巷間の話題となった。私も大いに驚いた。高級官僚がこんな接待に應じていたとは全く嘆わしい限りであるというよりも、日本の官僚は何時からこんなに落ちぶれて仕舞ったのかとビックリしている。

私も若い頃、技術導入の担当で仕事の性質上通産省へはよく出入りした。時には大蔵省へも出向いたこともある。交際費は会社から無制限といってもいいくらい持たされていた。しかし、役人と一緒に食事することが如何にむづかしいか、飲みに行くようになるまでにはどれだけ親しくならなければならないかをよく知っている。更に現在の位置よりまだ上へ昇る可能性の

ある人、コースに乗っている人とでも云うのであろうか、エリートとでもいうのであろうか、このような人はまず絶対に接待に應じない。局長に夢がある人、課長が望める人とは本当に立派なものだと思っていた。これが日本の官僚だと思っていたのが最近の汚職さわぎを見て私の役人を見る目がまちがっていたのかと疑わざるを得ない。

この「ノーパンしゃぶしゃぶ」ではもう一つの意味で驚かされた。「トップレスバー」「ミニスカート喫茶」など風俗営業での新しいものは全部大阪で生まれていた。しかし「ノーパンしゃぶしゃぶ」は歌舞伎町で生まれている。これが大阪なら何も驚かないが歌舞伎町なのが問題なのである。大阪の経済は東京の経済とは異質なものである。大阪人関西人のほうが関東人よりも自立心ははるかに強い。国の力、政府の力に頼らず自分の力で前へ進もうとする意欲は強烈である。東京に対する競争心もまた旺盛である。東京がオリンピックなら大阪は万博で、成田空港なら関西空港でという風に一事が万事こうである。

一方、名古屋はどうだろうか。名古屋は東京と大阪に挟まれて、この両者の激しい競争の間に埋没することなく、むしろ特色ある中京経済を樹立して確固たる地位を保つと同時に発展している。

こんな見方で北海道を見たらどうだろう。東京に負けるな、大阪、名古屋を追い抜け、東北を追い越せという意欲が今の北海道に感ぜられるだろうか。北海道は百年そこそこの短期間に五百五十万人を超える人口を擁するまでに発展したという世界の歴史に例を見ない大発展を遂げた。素晴らしいことであり、世界に誇る大躍進である。しかし、その後はどうであろうか。一向に発展がない。国のGDPへの寄与率はかつての五%をはるかに割り、平成に入ってから四%に達したことはなく、今や三%経済の名称を与えられても仕方がない。北海道の域際収

支もかつて二兆円のマイナスであったが、最近では三兆円のマイナスとなっている。道民所得も道民資産も全国比では低下を続けている。あの大躍進はどこへ行つたのだろうか。何故発展しなくなったのだろうか。どうしたらよいのだろうか。ゆっくり考えてみよう。

一つには、明治維新以来北海道が大発展を遂げたのは国の力が大きい。人もお金も技術もどんどん北海道へ投入してきた。これが北海道発展の大きな原因である。ここで考えなければならぬのは何故国がこれほどまでに、人材、資産、技術を北海道につき込んだのである。それは国は北海道を必要としたからである。北への護りのため、殖産振興のため、資源確保のため、北海道が必要であったからである。

今はこれがない。ただ積雪寒冷の地だ。社会資本整備が遅れている。ただけでは国の目は北海道へ向かない。国の北海道必要論を北海道が打ち立てて、国の目を北海道へ向かせるのである。国は現在多くの問題を抱えている。エネルギーの問題、安全保障の問題、食料の問題、国際協調の問題など数え上げれば限りがないくらい多い。これらの難問のうち、一つでも二つでも北海道が受け持つて解決することを国に約束する。必然的に国の目は北海道を向き、国の北海道必要論が起る。

一つの例をあげてみよう。飛行機の高速化が進み、近く超音速機による世界各地への日帰り飛行機時代が訪れることはもう目前に迫っている。アジアの各国でもこの対策が立てられつ、

あるにもかかわらず、我国では全く対応が考えられていない。超音速機対応のみではなく大型機対応のためにも、四千メートルあるいはそれ以上の長さの滑走路を、一本ではなく複数持つアジアの名実ともにハブ空港を持たなければ、日本経済はアジアの中心には居座ることは出来なくなる。しかし、我国で空港一つ造るだけでも大変な月日と資金が必要である。このアジアのハブ空港を日本で造るのは北海道以外にはない。今この運動を起こして、国の国際ハブ空港問題の解決を北海道が背負うことで、国のこの問題からの解決と北海道のアジアのハブ空港としての地位を確立するという、一石二鳥の手を担うべきである。この種の手段は北海道はまだ二つや三つは打てる。何としてでも、国が北海道を必要とするような、むしろ北海道を頼るような提案を北海道が唱えなければならない。

もう一つのことは、北海道人は先人の培った開拓魂を今一度思いおこし、屯田兵のたくましさ思いをいたし、安易な“今日食べられるのだから無理をすることはない”という心から脱出し、大阪人のような他人の力を借りず自力で競争する心を持たねばなるまい。私は苦小牧に住んでいる。“自動車産業は裾野が広い。自動車産業が進出すれば機械工業をはじめ多くの企業が潤う”といわれている。いすゞ自動車が進出してもう十数年を経過している。エンジンの組み立てには多くの部品が必要である。いすゞ自動車が進出したときに、北海道内から調達した部品は極く少なく数品に過ぎなかった。十数年経ったいまこ

そ納入部品の数は増えていろうと思うかもしれないが全く増えていない。自動車産業の激しい技術革新ときびしい品質管理、納入条件について行けないのだという。

“そんなきつい仕事に挑戦しなくても何とかやって行ければいい”という気持ちで北海道に残っているのは、北海道の機械工業のみならず、すべての企業の競争力は低くなる一方である。激しい技術改革に、きびしい品質管理、納入条件に挑戦して行つてこそ国際競争力がついてくるのである。国からの、道からの公共事業にのみ依存しては明日の北海道はない。屯田兵の開拓魂をもって国際社会に挑戦して、はじめて明るい住みよい北海道が生まれけると信ずる。



母校・北大学の大学院化に想う

辻 山 昌 佑

(昭和二十六年入寮)

我が国では、基幹の大学を大学院化することになり、北大もその一つです。その故か、かつての学科が消滅し、新しい学科・研究科となり、OBにとっては、淋しい状況も生まれている場合がママあります。一方、行政簡素化の流れの中で、大学を含む国立学校を、独立法人化する動きが、急となってきました。そこで、門外漢ながら、大学院化について考えてみたいと思います。

最初に、丹保総長が、この件について、一九九五年十月北大関西同窓会総会、九六年十月北大創基百二十年祝賀会、九七年九月読売新聞北海道版「大学新時代」で話されたことを、私なりに要約し、紹介させていただきます。

総長は、大学院化を話される前提、時代認識として『今二百年続いた近代が終わろうとしている。成功したと云われる文明を捨て、新しい生き方を模索するのは、容易ではない。使える道具は、その近代を作った科学しかない。地球環境の閉塞という絶対制約条件下で現有知識を複合的・融合的に活用し、縦割型の近代社会の無駄を消去し、先端的知識を創造し、人と人、人との生物との共生システムの効率化と高度化を造り上げねばならない』として、(一) 北大は研究大学になる。(二) 北大

の主体は研究科で、学部はその付属。(三) 産業分類別の学科・カリキュラムは作らぬ。(四) 学部四年間で汎用的基礎と職業的倫理を身につける。(五) 大学院(研究科)では世界に通用する先端の学問。(六) 学部間、学科間の垣根を低く。(七) 学部大学から創る大学へ、発信型の大学。(八) 大学と社会の能動的連携、地域社会の核。(九) 卒業後の教育、社会人へのカリキュラムを重要視。(十) 二十一世紀に向けて確立する。

以上要約いたしました。是非このように進めていたゞきたいと存じます。

しかし乍らこれで一〇〇%満足かと申しますと、重要な点の強調が不足しているように思われてなりません。

近代とは、エネルギー消費の動力と科学技術による大量生産

の産業革命、宗教をこえた大衆による統一国家の樹立、開拓精神と侵略と植民地化、資源の争奪と大量殺戮兵器の發明、要するに富国強兵であつたとすれば、総長の意図する大学院化によつて、近代の弱点を解決できるものもあるが、逆に科学技術の更なる高度化によつて、より問題を解決不能にする怖れもあると云わざるを得ません。

近時の日本を見ても、東大法学部卒業者を頂点とする高級官僚、地方官僚の腐敗、代議士や知事等の政治家の腐敗、金融機関を含む企業の紛飾決算や不正。オウム事件の如き科学知識の悪用。原燃の核輸送容器検査データの改ざん、朝日新聞記者が沖繩サンゴを自ら破損させておき乍ら、「誰がサンゴを傷つけたか」とジャーナリストに書くたてた事件もあります。

科学は、学問は、そして大学院は、戦争を止められるか、平和をもたらすか。科学は万能か、人間は科学のみで生きられるのか。地球を作り変え、人間を作り変え、そして不老・不死は果たして本当に幸せなのか。全てを作り変えて、あげくの果てに壊してしまい、元に戻せなくなるのではないか。又、科学はモラルを正しく保持せしめられるのか。

科学に欠けているものを知る必要があります。科学をコントロールせねばなりません。

人の左脳は論理・分析・計算・文字・言語を司どり右脳は総合・音楽・映像・直観・感性・言語(包括)を司どるといいます。右脳の発展も大切に思われます。宗教・哲学・思想・倫

理・政治・心理・芸術・文学・そして美しいもの、味覚、触覚、聴覚、嗅覚も大切だと思います。勇氣・忍耐・寛容・ユーモア・友情などなど科学の反対側にあるもの、非合理なものの不条理なもの。これらは何才頃に、何処で学んだり磨いたりしたらよいのでしょうか。

大学院は、これら右腦的なものを既にもつた者を受入れると云うのでしょうか。ところで旧学制が全てよいとは申しませんが、旧制は中学五年高校三年で計八年。更に旧制高校では、哲学に或いは芸術に耽けり、裏表六年という話も聞きます。新制が全て悪いと申しませんが中学三年高校三年で計六年。新制では浪人があつて二浪・三浪と申しますが、予備校通い。予備校で哲学・芸術にという話は余り聞きません。

大学・大学院が社会制度として教育システムの最終段階にあるとすれば、ここでの受入れ方法、受入れてからの教育方法・内容が、その下部の教育システムのありようを、いやでも規制して参ります。小・中学校で、今、ゆとりの教育をすべしといわれていますが、大学入試が、知識を中心とした選抜(競争システム)ならば、学外の塾教育が盛んになると思われます。暗記・詰込が主体であれば、創造力は弱くなり、右腦的な能力の学び、育成と発達には阻害されるでしょう。

今、我々は試されています。競争させて選抜するという考えが誤っているのではないか。学部なり、大学院のカリキュラムをこなす能力があればよいのではないか。特定の大学なり、大

学院に、志望者が集中したら、弾力的に少し定員を増加させる。受入能力をオーバーしたら抽せんでもよいのではないのか、などと夢想しています。社会全体が競争をし、社会のありようが、現在の姿を作っている中で、学校システムのみに、その責を負わせるのは酷ではありますが、まずは大胆に学制

の改革をと思っております。

お互い、いろいろ考えて、そして発言してみようではありませんか。我々母校の未来のため、日本の未来のため、そして人類の二十一世紀のために。

外国に旅して感じたこと

——このままで我が国に未来はあるか——

茶 畑 仁 司 (昭和二十六年入寮)

馳せ参じるのだから不思議である。

二日目の夜(繫温泉・ホテル大観)は寮歌は一次会のみで、二次会は期せずして深夜に及ぶ開議社となった。多士済々殆ど全員が弁士として登場し、議論は多岐にわたった。

途中、二川君から最近の寮歌が紹介され、それをきっかけに現代学生気質と教育の在り方などに関し議論が展開された。若者に対し悲憤慷慨する様は何時の世も同じだなと思いつつ聞いていると、そのうち久門君が私を指名した。

一九九八年九月、昭和二十六年入寮の同期会が東北で開催された。私にとつては支笏湖(九二年十月)以来、六年振りの諸兄との再会であり、大変懐かしく楽しい三日間であった。

色々詳細は幹事の方から報告があると思うので割愛するが、初日の夜(松島・大観荘)は一・二・三次会共に寮歌祭の再現となった。こんな事を言うのと叱られるかも知れないが、今時「寮歌祭」なんてのは正にアナクロの最たるものと思っているが、それがまた堪らない魅力で、遠くから飛行機に乗ってまで

適当に所見を披露している内、ふと日頃小生なりに憂えてい
る問題について述べてみる気になった。わが国の将来について
特に懸念される防衛問題、食料安保についてである。これにつ
いても大いに議論されたが言い残したことなど、ここに紙面を
借り改めて少々述べてみたい。

話題を変えるが、私は旅することが大好きである。知らない
土地の風景（特に山岳や湖沼）を眺め、そこに住む人々の人柄
に触れ、愛する人？と差し向かいで名物料理を食べる——、
これほど楽しいことはない。国内はもとより、海外へもぼつぼ
つと出掛けている。海外については、近い所はもう少し歳をと
ってからと：まだ体力のある内に遠くを優先して訪ねている。
とは言え、金にも限りがあり（大変厳しい）、一番好きなヨー
ロッパへもこれまで六回といった程度である。

その中でスイスとドイツが各三回と比較的多くなっている。
そんなことからこの二つの国を訪ねた時、鮮烈な印象を受けた
事実を挙げながら話を展開してみたい。ただ長くて二週間、短
ければ八日間といった駆け抜けるような旅であり大した見聞が
できる筈もない。従って大見得を切る気は毛頭ない。

海外旅行の後、私は毎回A4で三〇ページほどの「旅行記」
を書くことにしている。見聞した事柄を整理記録するためで、
以下の記述もそれを基にしたもので、臆気な記憶によるもので
ないことを付言しておきたい。

一九九六年の夏、私達はアルプスの三大名峰（モンブラン・
ユングフラウヨッホ・マッターホルン）へ、ハイキングの旅に
出掛けた。ルツツェルンからグリンデルワルドへ田園地帯をバ
スで走りながら感じたことだが、美しい風景の割りに道路の幅
が狭い。バスが如何にも走り難くそうなのである。日本では交
通量の少ない山中でも立派な道路があるというのに（これこそ
建設行政の大きな問題点＝税金の無駄遣いと思っているが）、
観光立国スイスとしてもう少し何とかしてもいいと思いつつ窓
の外を眺めながら、一つのことに気が付いた。

田舎町なのに家が大きく立派なのである。貧しげな家は一戸
だに見当たらない。そしてどの家もキッチンとして一つ共通した
風格を持っているのである。窓という窓には一杯の花が飾られ
て、規格化された中でその美しさを競いあっている。

スイスでは全ての家が「核シェルター」を持つことになっ
ていて、既に九〇%以上が、地下に核シェルターを有している。
二〇〇〇年までには一〇〇%にすることが、義務づけられてい
て、そのため家を造るには大変お金が掛かるのだという。だか
ら何家族かで共同で建てる訳で、必然的に小規模の集合住宅に
なって仕舞うのだそうだ。また暑くても、わが国のようにクー
ラーを付けるようなことはせず、窓を開けて風を入れるだけ—
わが国ではクーラーの使用量が年間の最大電力＝必要な発電能
力を決めている。スイスは実に合理的である。

ただ虫が入って来るのを防ぐため、臭いのきつい虫が嫌がるゼラニウムの花などを飾っている。それにしても綺麗な花々に溢れるスイスの家並みである。スイスは永世中立の国、それを堅持するため国民皆兵となっていて、男性は毎年何十日かの軍事訓練を受ける。毎年収穫された小麦は先ず一年分の備蓄に回され、前年収穫の小麦でパンが焼かれる。従ってスイスのパンは不味い。一旦緩急あれば、二四時間以内に軍隊が集結し、臨戦態勢に入れるよう、組織化されているのだ。

こんな話がある。昔、神様がスイス人に「何でも三つの願いを叶えて上げよう」と言った時……スイス人は先ず「山が欲しい」と願って叶えられ、次に「牛が欲しい」と頼み、それも叶えられた。スイス人は喜んで神様に一杯の牛乳を献上した。神様は牛乳を飲み干しながら尋ねた。「三つ目に欲しいものは何か」と。

スイス人は「今差し上げた牛乳の代金が欲しい」と。

この逸話はスイス人の国民性を顕しとも言われる。それにしても、一杯の牛乳代にこだわるスイス人が、核シエルトーに高額な金を使うのは不思議でさえある。

私が初めてスイスを尋ねた頃（八〇年）には、街の中を小銃を持った兵士が三々五々歩いてたが、今回のアルプス観光ルートではそうしたこともなく、外見的には長閑な国であつた。

九六年春、ドイツのロマンチック街道を訪れた時のこと――

かの有名なノイシュバンシュタイン城を訪ね、ミュンヘン市街へ戻って、オペラ劇場前でバスを降り、新旧市庁舎が並ぶマリエン広場の仕掛け時計の前で記念撮影などしていると、向こうからハッピー姿の若者の集団が奇声を上げながら近づいて来た。背中には色々と落書きがされていて、一目で何かのデモだと分かった。丁度その日が、チェルノブイル事故十周年に当たっていたことから、ドイツにも反核デモがあるのかと変に感心しながら眺めていると、ガイドさんが「あの方々は兵役終了の人々よ」と教えてくれた。

ドイツには徴兵制度があり、男子は一八―一九才に達すると二年間兵役に服さなければならない。ただし大学在学中は延期が認められ、また身体障害者の親を持つ長男だけは免除。更に五年間のボランティアに従事する者も免除という。所がそのボランティア（障害者の介護など）の方がなお大変だそうで兵役の方を選ぶのだそうだ。

そうは言っても、みんな誇りをもって行っているという。その代わり二年間が終わると一日あややつてお祝いして廻る。あの恰好をしていれば何処のお店に入っても、その日の飲み代はタダ、喜んで店側が振る舞うのが習慣だという。そんな話を皆は感心して聞いていた。

ここミュンヘンでも住宅問題は厳しく、一戸建ての家を持っているのは余程の金持ちで、普通は二家族・三家族で部屋を分けて住んでいるという。

だから〇しなど間借りするにしても、普通は相部屋だそうでも、それでも給料の半分位は家賃に消えて仕舞うのだそう。

また、ドイツではマイスターといつて職業学校が尊重され、日本のような学歴偏重はなく、医者が弁護士など特殊な分野を除けば、大学卒は余り必要とされないとも聞かされた。

もう一つ加えよう。九八年の春、私達はベルリン→ブラハ→ザルツブルグ→ウィーン→ブダペストと中欧の旅を楽しんだ。海外を旅する時、私は出発に先立つて色々勉強することになっている。

先ず地図を見て歴史を学ぶ。その国の栄枯盛衰と共に、国の大きさ（国境）が変わっていく。日本地図でも戦前戦後で赤色の部分（ピンク色の部分も）が変わった訳だが、ヨーロッパの場合その変わり方が実に激しい。

オーストリアがその典型である。現在の国土は北海道とほぼ同じ。そこに八百五十万の人が住む小さな国である。しかも国境を接する国が八ヶ国。これを全部言える人はマズいまい。

ドイツ語を話すゲルマン民族だが、性格は芸術的で優しい。国境を越えてオーストリアに入った途端、明らかに景色までが変わった。ソフトで優美な田園風景に一転したのだ。

音楽の都ウィーンを首都とし、観光収入はスイスを引き離して欧州第一位。現在は永世中立国として、多くの国際機関などが集中している。遡ればこの国もかつてはハプスブルグ帝国と

してヨーロッパ最大を誇った国である。それが帝国崩壊後は没落の一端を辿って今日に至った。芸術に優れた国であったが、残念なことに軍隊が弱かった。戦う度に敗れ、その都度国土を狭くして行ったのである。

ここで現時点でのオーストリアの隣国八ヶ国を紹介しておきたい。ドイツ、チェコ、スロバキア、ハンガリー、スロベニア、イタリア、スイス、リヒテンシュタインの国々である。

さて、戦後わが国の足跡を顧みれば、東西冷戦の中にあつてアメリカの核の傘下に巧みに身を寄せ、戦争放棄を大義名分とし、軍備に金を費やすことをせず、経済と技術両面でアメリカの支援を得、ひたすら働いた結果が、何時の間にか経済大国を築き上げていたというのが、今から十年前の姿だったと思う。我々世代はその中の一面において勤勉な働き手として大きな功績があつたと自負してよい。

それが八九年十一月、ベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦の終結から流れが変わることになる。あれから既に九年が経過した。ソ連崩壊を始めとして世界の情勢は全く新たな局面を形勢しつつある。わが国でもバブルが弾け、かつて想像もなかったことだが、大手銀行が潰れる事態を呈している。

今や、内外共に何が起るかわからない時代になっている。つい最近も北朝鮮のミサイルに右往左往したが、この際わが国の防衛問題について、しっかり考えておく必要がある。

考え方が異なり利害が反する国が、軋轢を生じトラブルから戦争まで発展する例は、歴史上枚挙に暇がない。今の日本だけが蚊帳の外に在る訳にはいかなのである。

これまでスルクと核の傘下に納まって、平和と繁栄を享受してきたが、何時かアメリカが日本から撤退する日が来ることだつて十分想定できる。少なくとも一旦有事の際、アメリカの青年が日本のために血を流すことなど期待する方が常識に違いない。そういう時、どうするのか？ 国防に関する哲学を確立し、盤石の備えを持たねばならない。

関連して在るのが食料安保の問題である。わが国は少子化の問題で悩んではいるが、世界の人口急増はなお進みつつある。殆どの食料を輸入に依存し、飽食を続けているわが国として先行きどう対応しようとしているのか？ なかなか見えてこないのが不安である。

勿論エネルギーについても同様の問題がある。かつて電力に勤めた身として、現状を掻い摘んで解説すると、不測の事態に柔軟に対応できるよう電源の多様化（ベストミックス）を進めている。昨年の電力量で言えば、原子力三六%、LNG二四%、石炭一五%、石油一三%、水力一%といった具合にである。因みに石油の備蓄は、国と民間それぞれ八十三日分、合計百六十六日分となつており、十年間で倍増近くなっている。原子力のウエイトもグンと高まった。原子力の燃料は四年間燃え続けるので、これもエネルギーの備蓄に繋がる。

こういう分野は大企業が意識して促進するため、それなりに成果が上がる。一方食料問題はどうしても個人に依存する面が多くなる。それだけに行政の指導が重要だと思ふのである。

成長することが当たり前のように考えられていた繁栄の時代が、バブルの崩壊で大きく変わった。この程度の意外性で済むならば大した心配はいらない。私達は人生の初期において、支那事変から太平洋戦争そして敗戦と、大変な激動を経験した。あの時だつて何とか凌いできた——と安穩としていられない。そんな異常事態が発生する可能性が高くなりつつある。それは国家安全の危機であり、食料枯渇の懸念である。

寮生時代、我々はよく「歴史的必然」という言葉を使い論じ合つたものである。翻つてみれば、国家単位で生ずる全ての変動は、この必然性の結果とみられる。そろそろ、国民の英知によつて「必然的危機」の回避が図られて然るべきだと思ふのだが、如何？

高齢化社会の到来と農業・農村

幸 健 一 郎

(昭和三十年入寮)

昭和三十六年に制定された「農業基本法」を改訂すべく、政府は平成九年四月、総理府に「食料・農業・農村基本問題調査会」を設置し、約二年間の検討期間を経て、平成十年九月調査会は総理大臣へ答申が行われた。

この答申にもとづき、政府は「新しい農業基本法」を制定するが、この調査会の答申を見ると最早、農業・農村は農業者だけのものではなく広く国民の理解のもとに食糧の供給を中心に国民全般が共有すべきものであると規定している。このような立場でいま、農業・農村が抱えている問題点を指摘したい。

一 日本は世界一の高齢化社会

わが国の六十五歳以上の人口割合は、一九九五年国勢調査によると一四・八％であり、北海道の割合は若干高く一五・二％となっている。

今後の将来推計人口は、生活環境の変化、教育問題等から少子化の傾向にあり、若者の結婚の晩婚化に伴う出生率の低下などの要因から高齢化がますます進むであろうとされており、人口問題研究所の一九九二年時点の推計では、日本は二〇一〇年

に二一・三％となり世界一の高齢化社会になると見込まれている。

ひるがえって、農村部の高齢化率は、若者の都会指向によって、都市部の一〇～一五％に対し、すでに二〇％を超えているのが現状である。新規就農率が年々低下する状況を思うとき、農村における高齢化社会の到来は最早、避けることのできない現象であると断定せざるを得ない。このように到来する農村の高齢化社会を悲観的に捉えるのではなく、逆手にとつて前向きに農村の高齢化への対応を考える必要がある。

二 若者の減少で農村の高齢化促進

北海道における農家の減少率は、一九九五年平均三・二％である。現在、北海道の農家戸数は約八万戸であるから、毎年約二千五百戸がリタイヤする勘定となるが、一方ではこの補充が毎年約五百戸に過ぎない。この状態が続くならば、農村の過疎がすみ農地の受け手がなくなるといふ問題が生じかねない。

ここで問題を提起したいのは、離農する二千五百戸の約八割の二千戸が六十五才以上の高齢農家で、後継ぎがいいためやむなく離農するということである。何故、六十五才以上の農家はリタイヤしなければならないのか、町村や農協にはお年寄りはご引退願わなければならないという固定観念があるのではないか。勿論、若者を中心とした村づくりが基本であるがお年寄りにも参画して貰うための支援方を講ずるべきである。府県の農村は、北海道より一足早く、高齢化社会を迎え、お年寄りを農業に従事させるための方策が全国各地で展開されている。

三 誇りにする農村の高齢化

雑誌「現代農業」の二月増刊号によると、山口県大島郡東和町は高齢化率が日本一高い町である。現在、人口約五千七百人で高齢化率は四八％を超えている。つまり住民の二人に一人がお年寄りである。この町ではお年寄りの多くが農業に従事して

おり、「五十、六十は、まだ若い、八十代でも現役」を合い言葉に「生涯現役」を謳歌している。

その東和町で、平成九年に町出身の定年退職者に帰農を呼びかける「かえるかい」が発足した。これまで農家戸数九百五十戸のうち定年後Ｕターンした農家が約五十戸となっている。

東和町ではＵターンに限らずＪターン、Ｉターン者でも歓迎している。そして、それらの帰農者に対する支援策として休眼中の農地や家を活用し、帰郷あるいは転職して農業を始める人達に貸与することが検討されており、また新しい農業を始める人達への研修として「ニューファーマー研修支援事業」を実施している。一般的には、医療費の負担問題等から高齢者の移住を歓迎しない自治体が多いが、東和町の西木宏町長は「退職者の受け入れに関してはなんら懸念はありません。高齢化が進むということは別の言い方をすれば「長寿の町」ということであり、誇りでもあるからです。」と断言している。

事実、東和町では昨年の高齢者の年間医療費は山口県の平均六十万円に対し半額の三十二万円ということであり、年をとつても生き生きと働くことが高齢者の健康に良い結果をもたらしていることを物語っている。

四 定年退職後は農村で生活

さきに紹介した「現代農業」によれば、東和町のような事例

は全国各地で数多く見られる。

事実、農水省の一九九五年の調査で、新規就農者十万人のうち六十才以上の就農者が六万人を占めていると言われている。

今後、六十才以上の定年退職者がどのような状況になるかについて国勢調査に基づき推論してみると自営業、自由業を除く、会社員、教員、公務員、銀行員などのいわゆるホワイトカラーと言われる人達の毎年の六十才定年者が全国で三十二万人、北海道では一万人の人達が離職する。これからは団塊の世代の人達が定年を迎えることを考えると、益々、定年退職者は増加してゆくであろう。そしてこれらの人達は、鉄とコンクリートの生活にストレスを感じており、老後はきれいな空気と水を求めて農村での生活に強い憧れを抱いている。この人達の生活面を考えると、サラリーマンの退職金は壹千〇二千万円で、年金が年額百五十万円〇二百万円と言われている。すでに府県の定年退職者が定年で農業に従事した場合の農業所得は年間五十〇百万円であると言われている。このように考えると、住居と土地が確保されるならば農村での生活は十分可能である。

国は、このような定年退職者の新規就農に配慮して、平成九年度、就農支援資金制度の改正を行い、従来四十才未満を対象とした補助制度を特認として六十五才まで認めることとしている。いずれにしても、離農者に対する若い就農補充者が圧倒的に少数であり、耕作放棄地が大量に生ずることを考える時、この定年退職者の農業・農村の受入れを前向きに対処すべき時期

を迎えている。

五 高齢者が農村を活性化

これら高齢者の人達が農業生産の主体を担うとは考えられないが、少なくとも、農村の過疎に歯止めをかけ、農村の活性化に貢献できることを期待するからである。

何故なら「定年帰農」を希望する人達が農業・農村への共通の認識は「安全でおいしいものを作って食べたい」「健康のためにも豊かな自然の中で人間として喜びが求められる生活を送りたい」という哲学を持っていることである。貿易自由化の中で競争原理に追いつけられ、何となく重苦しい雰囲気の中で農村にあつて、この人達の農業・農村への参画は農業・農村に自由で新しい文化を持ち込んでくれるものと確信している。また、都市と農村の交流が強く叫ばれている今日、この人達が大きな役割を果たしてくれるであろう。そして農村の若い男性の結婚難に対し都会で幅広い人脈をもつこの人達が結婚相談員としての役割をも担うことができることを期待したのである。

以上のように、日本の農業・農村は都会で疲れ切った定年退職者を暖かく迎えたいという雰囲気醸成されつつあります。定年を迎えられた恵迪寮のOBの皆さんもふるって、故里、農村へかえられては如何ですか。

逆風満帆に生きる

横 山 清

(昭和三十一年入寮)

寮歌をはじめて歌ったのは、炭鉱労働者として炭塵と機械油に塗れてのた打ち廻っていた十八才の頃だった。教えてくれたF君は入寮が叶わず、私が恵迪寮生となったのは運命の悪戯だったのかも知れない。入寮時に玄関でウロウロして、巡視の親父に新聞配達と思われた事も今では懐かしい。

寮務執行委員長だった昭和三十二年は北大創基八十周年で「都ぞ弥生」の歌碑建立に携わり、その縁で、作曲家である赤木顕次氏と何度かの食事を通じて、明治時代の寮生活の様子を拝聴したのも僥倖であった。曲折はあったが、故あって食品小売業に身を投じ、三十八年目を迎えた。潜在失業者の分野と誇られ、産業化の遅れた暗黒大陸とも言われて久しいが、未だ悪戦苦闘の毎日である。炊務委員であった干場一正君とは三十五年間パートナーとして経営に当り、寮生活の延長に近い関係であったが、還暦を期に、誠にあっさりとして退陣し札幌近郊長沼町で畑作農家に変身してしまった。会計委員矢島淳吉も定年退官

後、寒村で荒地を耕し蕎麦を栽培し、自宅に蕎麦工房を持ち自給自足の生活に入ったと聞くが、恵迪寮の欠食後遺症を今頃になつて治療しているのだろうか。

倒産した食品市場の跡を改造し、セルフ・サービスを導入してスーパーマーケットらしきものを始めた昭和三十六年は、札幌市は人口が五十万人台に乗ったばかりで、海のものとも山のものとも見当もつかぬ仕事に振り回される毎日だったが、何とか目処がついたところで辞める積もりだったが逃げ遅れた。こうなれば、いつその事どつぶり首まで浸かつて小売屋に徹するしかないと開き直り、何とか百億売れる企業になろうと大見得を切ったが、達成するまで二十三年もかかってしまった。

のんびりした性格は改め様もないが、一周遅れの人生だから遅れた分だけ長生きすれば良いのだと言ひ聞かせながら老骨に鞭を打っている。ビリオン\$ビジネス、つまり千億企業に挑戦しようと思ひはじめたのは平成元年だった。全道に店舗を持つ

衣料チェーン金市館を合併し、東京店頭市場に株式公開をしたのも千億企業実現のためでもある。

拓銀破綻で倒産続出、貸し渋りで設備投資どころか、生産意識はガタ落ちだし雇用情勢は最悪で、失業率は全国一の北海道は暴風圏を喘ぎながら航海中である。

幸運にも、私達はグループ六社で総売上一千百億円で八期連続の増収増益となる予定だが、塞翁が馬の如く、禍福は変転して定まりなきものであるから安寧のない日々である。

昨年六月、北海道経済連合会の副会長に任命されたが、流通業界では初めての就任なので多少、話題となった。地方経済界とはいえ、人が犬を噛んでニュースになる類で、やはり士(官)・農・工・商の序列が厳然と生きている社会なのかと僻んでいると、北海道新聞の卓上四季が小さな声援を送ってくれた。

曰く、▼道経連は戸田会長が続投するが、副会長を七人に増やした。本道経済活性化のための「総動員体制」だが、今ここにある危機を乗り越えるには、大企業の社長、会長が名誉職的にポストを埋める時代ではなくなったということだろう ▼その意味で、さしあたってはラルズ社長の横山清さんがスーパー経営で見せた「進取の気性」に期待してみたい。――

さしあたってとは、チョイと気になる表現ではあるが、人間は褒め殺しには弱いものである。このコラムの一文で積年のモヤモヤがスッキリと霧散したのだから、私も他愛のない人間だが大目標を得た。大所高所から天下を論ずる人物は数多いし、

鳥瞰図で見る世界があるなら、私は虫の眼で見る虫瞰図で行くのだと悟ったのである。

二〇〇一年は目前にあり、新世紀であると同時に北大創基百二十五周年でもある。北大は大学院重点化大学としての道を選び、世界に通用する先端技術と人材育成に邁進しているが、北海道はどうなるのだろうか。全国各地の同窓諸氏が心配されている通り、公共投資に依存している体質は開拓史の設置以来変わってはいないのである。自主、自立に向けての積極的な取組みが始まり危機感が高まっているが、産業クラスター構想を軸とする起業化促進も効果を現すまでに到っていない。北海道独立論があつたり、苦東ラスベガス論や新幹線早期着工など珍論や奇策が展開されるが、ナンセンスな話である。しかし本道は、開国百三十年しか経っていない新興国であると考えれば悲観することはない。札幌農学校が開校したときの札幌の人口は二、六〇〇人余であつたが、平成十一年一月の数は遂に百八十万五百一人に及んでいる。

逆風でも満帆で前進する生き方はある。バイオニア・スピリットはこれから生まれ、清貧という古典的な生き方でもない、二十一世紀の環境にも調和する新しいライフスタイルは北海道から生まれる。

人生にロマンを、教育にヒューマニズムを

〈新しい学校「北海道自由が丘学園」の設立の理想〉

亀 貝 一 義（昭和三十一年入寮）

恵迪寮時代に我が人生の原点が

今思えば半世紀近く前のことなのだが、鮮明に焼きついているのは、恵迪出身の諸兄と同じように、あの二年間過ごした青春の朝昼晩の一こま一こまだ。六十年の来し方、人生の節々で恵迪寮時代と北大生活が我が精神的な支えになっていた。

まだまだ田舎から出たばかりのガキにちかい自分に「一生の仕事は教育」などと迫った何物かが北大と恵迪寮にはあった。そういう意味で、人生の原点は二年間の恵迪寮にあったことはまぎれもない事実である。

一九六〇年、教育学部を卒業するとすぐ札幌市内の私立女子

高校に奉職した。この学校もご多分にもれず服装と容儀、テストの成績向上がポイントだった。それは昭和四十年代以降、ど

この高校も大同小異であつたろう。学校が荒れだした。子どもたちの間にさまざまな異常が生まれだした。大人は必死になつて、問題の所在と打開策を模索しだした。しかしその後の経過は誰もが知っているとおりである。

北の大地に自由と協同の学校Ⅱ

北海道自由が丘学園の設立の方針確立

一九八六年四月、北大教育学部の小会議室で、恩師の一人の鈴木秀一教授らとともに、「北海道からの教育と文化の発信」を標榜するために「新しい教育・学校をめざす研究会」を結成した。これが現在の「北海道自由が丘学園設立運動」の先駆けである。

鈴木秀一さんらといつも語り合っていたのは、まず身近な所

にある教育の教訓をしつかり踏まえて進もう、ということだった。その一番大きなヒントが札幌農学校時代の精神であった。

クラーク先生は一八七七年四月に離道するまで、ただだか九か月間しか在職しなかったのにもかかわらずいかに大きな感化を、学生のみならずその後の日本の若者たちに与えたかは驚くべきことだった。蝦名賢造氏の著「札幌農学校」は、クラーク先生の「少年よ……」の言葉は、「本当は『青年よ、この老人のごとく野心を持って』というのであったと考えるのが至当であろう」という引用をしている（七十一頁）が、これにも共鳴するところが多い。今の若者たちの大志や野心があまりにも小さいことは周知のとおりである。北大を出て四十年近くなった今、人間教育をとえ、実学を重視し、まず自らを厳しく律したクラーク先生の態度と精神に思いをいたすこと、ますます大である。

我が学校づくりもいろいろな経緯があったが、今日の方ができたのは一昨年の秋である。すなわち自治体の協力、最低限の費用等を想定して北海道夕張市で新しい学校づくりを進めるという路線である。

市としては一定の条件、つまり行政による認可獲得の見通しがあったときに、（今プレススクールの場となっている）旧鹿の谷小学校を譲渡するというものである。これであれば、土地建物という一番費用のかかる部分をクリアーできるので、立ちあげ資金は最低ですむ。しかしこの最低といっても1億円は用意

しなければならぬ。補修にかかる費用、二、三年間の運転資金などである。この資金を私たちは全国の心ある人たちに訴えてつくりだそうと決意している。これを市民立の運動（ヒューマントラスト）と呼ぶ。

「北の大地に自由と協同の学校の設立を」との呼びかけは今全国に発信されている。これまで各地から六千人の人びとが応えてくれている。また、カネは難しいが労力をという人も多数いる。ボランティアとしてさまざまな形で協力を申し出てくれる人も多数いる。私たちはこれらに力づけられ着実な歩みを展開している。

不登校・高校中退が表している問題

私自身のことを語ることを許していただきたい。

一九九〇年以來、不斷に子どもとの関わりの中にいた。学習塾的な形で、また父母の教育相談を受ける立場で。生活の不安もあったが、規制された「学校」という一組織で無数のしがらみの中で過ごすよりもはるかに楽しかったし、生き甲斐もあった。「オレの人生はこれから」という感慨みたいなものを絶えず感じ取ってきた。

九三年十一月、不登校の子どもや高校を中退した若者たちのための居場所と学習の場としてのフリースクール「札幌自由が丘学園」を開校した。

「皆さんは多額の浄財を募集しているが、今困っている子どもたちのためにやり得ることをまずやってみるべきではないか」といった声に應えていこうという考えであった。

私は五年間このフリースクールのマネージメントをしてきた。学校に行けない、行かない、あるいは学校になじめない、いろいろと表現できる最近の子どもたち。このいわゆる不登校の子どもたち（小中学生）の数が十万人を超えている。またこの小中学生の不登校と問題の本質は同じであると考えられる高校中退者がやはり十万人を超えている。子どもの数が減っているのに、ここ数年むしろこの両者は増える傾向にすらある。この現象は何を物語るのだろうか。

これまでの経験からいえることは、確かに少子化に伴う子育ての問題（俗にいうしつけ）や衣食住の変化も要因にあるだろう。社会的な環境の問題、例えば遊び場がない、外での遊びがなくなったこと、等から来る他の子どもどうしのふれ合いが少なくなったこと、もある。しかしなんとといっても学校と教育に關係する諸要因が根本であると考えざるを得ない。

昭和四十年代以降の高度経済成長時代から平成の今日まで、明治以来の伝統的な「身を立て名を挙げ」といった教育原理がいつそう助長されてきた。いい学校に行くためには、とにかく勉強だ、偏差値が高いのだから教育学部ではもったいない、医学部をねえ、等というバカげた指導まで堂々行われてきた。逆のこともあるのはいうまでもない。

偏差値と相對評価という教育原理は、いわば「他人け落とし」を人生の原理にせよ、ということである。学校がいやだという子どもたちが増えて当然と思う。いじめやこの延長上の自殺が問題になるのもけだし当然というのは極論であろうか。

五年間のフリースクールの経験は、これから開校するであろう北海道自由が丘学園にとって貴重な教訓をつくってきた。

フリースクールの生徒たちにとって、それまで体験したことがないことを今感じ取っている。「学校とは楽しい所」だという体験を。私たちの時代、学校は楽しかった。しかし今の子どもたちの中でそう感じているのはどのくらいいるだろうか。

「学校が楽しい」という要因は次のようにまとめることができると思う。

まず第一は、差別と他人け落とし的な競争がないこと。第二に、学ぶことに強制がないこと、第三に教師がまともな信頼できると実感されていること、などであろうか。

反面、競争は必要だとか、厳しい世の中を甘い考えで過ごすことなどできないだろうとか、青春のひととき一種の強制があってもいいとか、よく指摘されることだ。札幌自由が丘学園にはスタッフが十人近くいる。年齢もまちまちだが、専任非専任を問わず皆すぐれた教師である。中には教師の資格もない人もいるが、どこかの先生よりもはるかにしっかりしていると思う。大学卒の給与にも遠く及ばないのに、ひたすら子どものことを考えて頑張るスタッフの熱意に私は逆に励まされる。



(朝のミーティング)

夕張プレススクールも発足した

昨年四月、私たちは正式認可に先立って（市の協力を得て）「プレススクール」を開校した。ただ、いろいろな事情からまだ寄宿舎の条件がでなかったもので、全国から集まった子どもたちは皆、スタッフといっしょに分宿の形で同居することとなった。だから希望者を全員収容できず、二十名弱の生徒のミニ学校である。

「自由が丘」のこれまでの議論と（フリースクールの）実践などを総合しての教育の展開である。

この日本で初めての試みがマスコミなどでも大きく取りあげられている。子どもたちとスタッフは共同して実にさまざまなことにチャレンジしている。

そしてこの四月から、夕張の校舎の近くに旧い各種学校の建物を再活用して寄宿舎（兼研修センター）を始めることとしている。昨年のプレススクールの発足に続くさらなる前進の基礎を固めることができるのである。

学校づくりに皆さんのご支援を！

私の晩節の願いは、今「自由が丘」に結集するスタッフたちと心をひとつとして子どもたちのために奮闘することである。先に記したように、夕張市で新しい学校をつくろうと多くの人



(上) 生徒達が料理を作る
～この日は、コロッケとシチュー～



(左) プロジェクト＝新聞局の
打ち合わせ

びとに支援を呼びかけている。この取り組みは、私たちだけのテーマではない。次の時代をなう子どもたちに、意欲と人間的な交流の力をどうつくるかは大人みんなのテーマではないだろうか。私たちのめざす新しい学校は、北海道を起点として全世界に羽ばたくことになったクラーク先生の精神に通じると確信している。そして、この取り組みは大人である私たち一人一人の生き方を語ることに通じる。

人生にロマンを、教育にヒューマニズムを！
北大恵迪同窓の皆さん、ぜひこの試みに熱い支援をお願いしたい。

開校目標は西暦二〇〇一年四月。

学校を運営・推進する力と教師は万全である。問題はカネ。必要な費用は約六千万円（一億余のうち六千万円は集まった！）

連絡先…自由が丘本部（亀貝一義）

〒〇〇一〇〇一六 札幌市北区北十六条西四丁目二
十一番地

(TEL) 〇一一七三六―五三四五
(FAX) 〇一一七三六―五七五五
インターネット：www.aurora-net.or.jp/~dns03178/

HOKKAIDO BE AMBITIOUS !

山 本 博 巳

(昭和三十一年入寮)

以前、NHK朝の連続テレビ小説で「ノンちゃん」の夢という番組をやっていた。

太平洋戦争末期から戦後の混乱期に女性の雑誌に夢を託して頑張る主人公「ノンちゃん」の物語だが、その番組の中で、まともな人間としての扱いをされていなかった当時の女性のつらい日々を描きながらも、これからの新しい社会の到来に、「ガールズ・ビー・アンビシャス」というメッセージを託す、という場面があった。

激動の時代に、困難だけを見るのではなく、その中に新しい希望の光を見なければ、いや、見えるはず、というのはまさに今の私たちではないだろうか。

北海道拓殖銀行の破綻、相次ぐ倒産のニュースに、北海道はあこがれの地、夢を描ける土地というイメージから、今や、疲弊し、助けを請う弱々しい悲鳴に満ちた北の地になってしまったかのようだ。もともと、わたしの職場（＊北海道庁、編集部注）の悪いニュースもイメージダウンに一役買ってしまったが。

だが、ここで、座しているわけにはいかないだろう。ピンチの裏には必ずチャンスがあるというではないか。

わたしの仕事のことでは恐縮であるが、最近、バス停留所が吹きさらしのままなのは、先進国では日本ぐらいだ、フード付のバスシェルター（と言うそう）が北海道では必要だ、と売り込んできた外資系の会社があった。道路は規制が厳しいが、結局、国を動かし実現しそうである。しかし、日本で、シェルターを作っている企業はないそうである。

また、最近、道内で風力発電の風車が人気である。北海道内は風力発電に適している地域がとて多いからだ、新しい地域エネルギーへの可能性と観光に役立つと地域振興の目玉にする市町村が出てきたのである。これには賛否があるだろう。

しかし、問題は、これもすべて道外製品（多くは外国製）であるということである。

つまり、北海道の企業はこの北海道に大きなニーズがあったのに、それに目を付けたのは、遠い国の企業だったということ

である。

これは、今さらのことではなく、言い古されたことだろう。しかし、今まで、北海道には何年も多額の資金が投入されてきたのに、どうしてなのか。変らなくてはならないのである。国からの金も当てにはなくなるかもしれない。だが、私たち

が足に地のついた仕事をすれば、必ず、挽回のチャンスが生まれてくるはずである。これからでも遅くはない。

かつて、私たちの先人たちが、全く何も無いところから数々の優れた企業を生み出し、今の日本を担っているように。

北海道 BE AMBITIOUS!

チセ・フレップと土幌高原道路

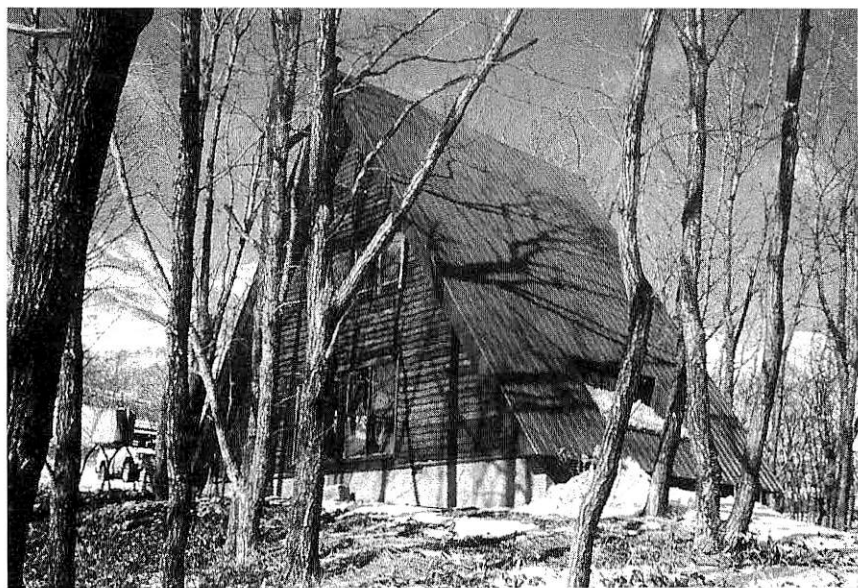
山 本 牧

(昭和四十九年入寮)

北海道庁の「時のアセス」(事業見直し)の対象となり、未開通のまま揺れる土幌高原道路。その入り口にあたる土幌高原のミズナラ林に隠れて、小さな赤い三角屋根の山小屋がある。「チセ・フレップ」。アイヌ語の「小屋・赤い実」という言葉をつないで命名された。もう一つの名前を「恵迪寮土幌小屋」という。

一九七八年十月二十三日に完成したこの小屋は、恵迪寮生が自分たちの拠点を自然に恵まれた十勝に持ちたい、と願い、四年がかりで資金を集め、寄付を募り、場所や設計の議論をしながら、実現させた。寮内の公式自治機関である設立準備委員会は完成後、運営委員会となり現在に至る。昨年(一九九八年)八月、OBや地元町民ら多数が集まり、小屋の誕生二十周年を祝った。壁や柱はさすがに黒ずんできたが、大きな傷みはなく、頼もしさに風格さえ加わった。

十勝の一角に、どうして小さな「恵迪」が生まれ、息永く活動を伝えてきたのか。渦中の高原道路ともけつして無縁ではないその存在と、寮生たちが描いてきた夢を振り返ってみた。



チセ・フレップ〈恵迪寮士幌小屋〉

「狩勝峠の向こうに、本当の北海道がある」。そう誘ったのは、早稲田大助教授から士幌町立幼稚園長に転身した結城清吾氏だった。道外出身者が多く、札幌に住み始めて一、二年という寮生たちに、「道東」「十勝」を語る言葉はとても刺激的だった。結城氏自身も、飯島房芳士幌町長（当時）の「町づくりプラン」に共鳴して移住した「開拓者」だった。

一九七五年。デモに参加するのが当たり前だった時代から、セクトが遠い存在となり、シラケ・無気力といわれ始めた時期。木造寮の古さは限界に近づき、新寮要求と学生管理の溝は深くなっていた。寮内では、自治の源流への手探りが試みられ、寮史編纂委員会の設立、開識社（寮内講演会）再発足などの動きがあった。開識社に招かれたゲストのひとりが結城氏だった。

講演後の座談で、「士幌へ来てみませんか」と誘われ、「山小屋なんてのもいいね」という話が出た。翌年春、「士幌自由大学」が町内で開かれた。十人あまりの学生が一週間、農家に分宿し、若手農家とさまざまな話し合いをした。その中で、寮生側は「お客さんでいたくない。根拠地を持ちたい」と言い、町側も「土地はいくらでもある」と応じた。

七十六年十月の寮生大会で「士幌小屋設立準備委員会」が認められ、寮生たちはマイカー学生に頼み込んだり、ヒッチハイクやキセルで十勝に通って、「わが小屋」のデザインを描いた。ちようど、老朽化した「支笏寮」の閉鎖が決まり、文部省の新寮方針も、「大部屋から個室へ」「猥雑から小綺麗へ」と強まっ

た。「個は孤ならず」。同一空間を共有することこそ、コミュニケーションの始まりであり、「タフな個」が育つ、と大部屋志向の、自主運営の小屋を持つ、という願いは、「廃寮かアパート型新寮か」という現実の危機にせき立てられた。

土幌高原の農協牧場の一角を町の保証で借り受けることになり、七七年二月から寮OBや教官に募金が始まった。目標五百万円。反響はさまざまだった。快く激励とともに送金してくれるOBもいたが、教官の多くは懐疑的だった。「何に使うのか」「どんな小屋だ」「本当に建つのか」と。「お前たちの酒代になるような寄付はできん」という断り方さえあった。大学当局は「非協力」の態度を崩さず、最後は趣意書の「北海道大学恵迪寮土幌小屋設立委員会」から「北海道大学恵迪寮」の名称を削除するよう求めてきた。

資金計画の甘さや建設構想のほころびは、大人たちの厳しい指摘に耐えられなかった。設立準備委は着工の一年延期、計画の練り直しを決断する。夢のスケッチ描きは、デザインのシビアナ見直しに変わり、募金の見通し、設計の詰め、維持運営の協議などが、OBらの知恵を借り、町側と進んだ。

いちばん最初の「掘っ立ての自由な空間」の発想は、本職大工の手を借りる山小屋風キャンビンとなり、安全性、利便性を考えて電気や水道も引くことになった。薪ストーブ支持派も「火をつけられない奴も多い。燃料補給はどうする」と言われて断念した。ただ、「大きな一空間で、人が集まる場所」というコンセプトは維持された。コンセントの数や位置、照明器具

の形や窓まで、徹夜の議論が交わされた。「自分たちが建て、自分たちが使う」はずの小屋が、「公共性」を帯びてきた。「誰のために建てるのか」そんな疑問も抱えながら、スケッチは具体化していった。

「空間を共有する交流」。それは、五人大部屋の当時の恵迪寮の構造から、ごく自然に導かれた発想だ。物理的な障壁に頼らず、煩わしさも矛盾も抱えながら、個を確立し、同じ大部屋の同世代寮生同士で付き合いを深める。そういう「場」をチセ・フレップに描いた。横系には土幌・と仮・北海道という地域に開放された広がり、縦系には、たとえ恵迪寮が消えても、世代間を超えた寮生の結節点として残したい、残るだろうという思い。二つの機能を期待しながら、「恵迪廃寮」という危機を感じつつ、農学校として始まった大学の原点、北海道に学びに来た自分たちのよりどころ、そういうものの具現化が土幌小屋・チセフレップであったといえる。

設立準備委員会の着工延期の判断は、正しかったといえる。問題点が洗い出され、課題と進路が明確になり、寮生たちは自信を取り戻した。趣意書は「北海道大学」を削り、「恵迪寮生による」と改められた。七七年十一月、奉加帳の筆頭に今村学長の芳名を得て、募金活動が再開された。

南寮階下は作業場兼社交場となり、入れ替わり寮生たちが宛名書きに従事した。封筒の入ったミカン箱を何箱も、リヤカーに積んで郵便局に通った。冬の間に七千通の趣意書を、北大卒業生に送った。OBからの返信率は一割を超え、振込用紙の余

白には、寮歌の一節や「子供と行きたい」「遠くで見守る」と、見ず知らずの後輩たちへの励ましや助言がつづられていた。

教官回りも、貴重な意見交換の場になった。門前払いもあったが、設立の目的や用途、さまざまな質問が、学生を試し、鍛えてくれた。話題は新寮問題や寮生の栄養状況にまで及んだ。教養部の学生にとって、学部教官との出会いは、「大学」を実感できる刺激的なものだった。ポータス時期を狙う作戦をたてながら、町補助二百万円、道補助八十万円を加え、工費六百十三万円を整えることができた。設計施工もOBの無償・格安提供だった。支庁長が寮OBだと聞いて、役所に出かけ、地元の先輩からは腹いっぱいのジンギスカンをごちそうになり、予定地の木々を眺める時間が流れた。



着工は七八年八月二十一日。その前日、建設作業に参加する「土幌土方ツアー」と名乗った寮生と山元周行先生（顧問）ら一行二十五人は、土幌町の産業まつり仮装盆踊り大会になだれ込んだ。高下駄や長靴、ジャンパー、ジャージの、寮生の普段着がそのまま仮装になった。盛大な拍手と差し入れを受け、念願実現への期待は一層高まった。この年以來、北大生の仮装参加が、ほぼ恒例となっていく。

地元青年による利用は、思ったほど増えなかったが、学生が夏に開く林間学校は、町内の子どもたちとの貴重な接点になった。田舎の子の意外な自然知らず、学生の田舎知らず、お互いに教えられる日々だった。

小屋の申込書には「目的」の記入欄がある。使用料も一泊単位ではなく、一日単位の計算。「昼寝」でも「茫然とする」でもいい、ただの一夜の安宿ではない場所として使ってほしい、という願いがこもる。小屋の夜を照らす木とガラスを組んだ質素で明るい「シャンデリア」は、初代設立委員長芹沢利文君の作である。

設立委OBは、今でも顔を合わせると語り合う。「よく相手にしてもらえたなあ」。町や土地所有者の土幌農協、そして北大OB。得体の知れない、空想好きの学生の話を、何とまともに聞いてもらえたものか。当時の「大人たち」の寛容さに頭が下がり、一方で「北大」「恵迪」というブランドに助けられた側面を思う。

それにしても、小屋に関わったメンバーには、道産子以上に大きな顔をして、今も道内に住み着いている面々がやたらと多い。さもなくば、アジア・南米などで悠々と仕事をしている連中が目立つ。そういう人間が集まっていたのか、あるいは、そういう方向に導かれたのか。また、うんと年の離れた「運営委員」の後輩たちと話すとき、そうしたチャンスを作ってくれる小屋の存在に感謝し、また、そう機能していることに、少しの満足感を覚える。

町は管理運営の条例を設け、寮生たちを一方の主体として対等に扱ってくれた。小屋の運営をどう将来にわたって担保するか、議論のすえ、小屋は建設後に町に寄贈する形を取り、その代わりに町が財産的な維持管理を引き受けた。運営は町、寮生、

識者と三者からなる運営協議会が設けられ、寮内には運営委員会がおかれた。

当時、「三つの心配」と真顔でいわれた。「過激派のアジトになる」「若い娘を連れ去られる」「高原道路建設の反対拠点になる」。第一の心配の代わりに、一時、バイク族の安宿になりかけた。これは学生たちが、旅行雑誌などに小屋の趣旨を説明し、いつしか収まった。第二の心配は、寮生に力がないのか、地元女性と結婚したのは一人だけ、それも、うまい具合に地元に住んでいる。第三の心配が、もつとも現実味を帯びた。



小屋の誕生は、土幌高原道路と密接に結びついている。結城清吾氏を招いた飯島房芳町長の念頭には、「土幌高原ユネスコ村構想」があつた。私もその大きな絵図面を町長室で見せられた覚えがある。道路沿いに国際的な施設が建ち並び、そのはずれに「北大小屋」とマークがあつた。

元々、土幌高原はやせた溶岩台地で、「北大の先生が作物は実らん、と太鼓判を押した」という話さえある。戦後、引揚者らが炭焼きに入ったが、開拓とさ言いづらいほどの厳しい暮らしだったという。そこに再準備の波にのり一九五二年、警察予備隊（現自衛隊）演習地の話が湧いた。隣の鹿追はそれを受け入れ、現在の然別演習地となる。演習地は町境一つですばりと切れ、土幌町側は「新田牧場」という農協草地になる。

「演習地には売らん」と、あくまで農地化を主張した、当時の土幌の若手リーダーが、太田寛一、秋間勇、飯島房芳の三氏。

太田は農協運動に、獣医だった秋間は酪農指導、町職員の飯島は行政面で働き、後に「日本一」土幌農協と土幌農業の基礎を築いた。早世した秋間を除き、飯島が町長、太田が農協組合長（のち全農会長）とトップにたつ。この三人の銅像が小屋の少し上の土幌高原に建ち、十勝平野を見渡す。像は自然公園法で無届だったことが判明したが、「地元感情を考慮」して環境庁は撤去命令を出せなかった、といういわくがある。地元で「三偉人」と呼ばれるこの銅像は、寮生がいたずらをすることは、きつく止められている。

この三人の同志を自認するのが、元参議院議員の丸谷金保氏。池田町長になる前、土幌農民同盟の事務局長だった。「高原道路開通は我々が夢見た農村ユートピアの最後の仕上げ。これを見届けないと、俺は三途の川で三人に追い返される」と力が入る。然別湖へ骨休めに、山火事対策に、観光の期待に、当時、道路は何にも勝る「善」だった。

酪農と畑作で日本一の規模となった土幌農協。その基盤を作った「三偉人の遺言」が高原道路であり、その開通は「町民の悲願」とまでいわれる。高原道路問題が多くのリゾート開発と異なり、大企業の姿がなく、「地元要望」が強調されるのはこのせいだろう。その願いを、「ナキウサギより道路が大事か」と攻められ、土幌町側が強い被害者意識を持つのも仕方ない気がする。だが、その裏返しに、三人の一種の神格化、地域における一枚岩の強制ともなつて、町全体に覆いかぶさる。

また、この工事凍結見直しの発端も特異だった。一九九二年、

十勝自然保護協会に労働組合員が大量加入し、多数派工作・分裂騒動が起きた。地区労OBが指導し、工事再開に保護協会の同意を取り付ける動きだった。当時の知事が社会党の横路知事、間に立ったのが労組幹部、と十勝社会党人脈が色濃く反映される。単なる「開発か保護か」「大資本による環境破壊」などという紋切り型では読み解けない、地域・歴史・党派が絡み合った課題なのである。

ともあれ、こうした激浪と、チセ・フレップも無縁ではない。チセ・フレップ完成時、町と寮生側が結んだ協定書には、「相互信頼の原則」の条項に、「町づくり計画その他、長期にわたる町振興計画を理解し、町発展に寄与するものとする」の一項がある。「その他」とはもちろん、道路構想を指す。「あえて道路と明記しないだけでなく、『協力』とあったのを『寄与』に変えてもらった」と当時の寮生は言う。建設的な批判、提言なら「寄与」のうち、という含みがそこにある。

幸か不幸か、この問題での正面衝突は今のところ起きていない。十年前、寮生委員OBが土井たか子社会党委員長（当時）に道路問題を訴え、土井委員長から「道路反対」を支持する内容の葉書が返ってきたことがある。これには十勝社会党が大慌てし、「別の道路との勘違い」と取り消し会見を開いた。その後は、学生側が遠慮がちに避けている、というのが実状だろう。「僕は客人、よそ者ですから」とつぶやく声が聞こえる。

完成当時、牧場の一角のミズナラ林に囲まれた小屋のたたずまいは変わらないが、周囲は様変わりした。百メートル先を改

修道路の土手を通り、視線を遮る。川向こうのカラマツ国有林は「今世紀道内最後的大型農地開発」として伐採・売却され、牧草地に造成された。その中にあった巨大なミズナラ、「神様の木」は辛くも命長らえた。小屋の数メートル先を国立公園境界が通るが、その内側にレストハウスやキャビンが建った。

九八年夏、完成二十周年の記念式が元寮生や町民の多くが集まり、小屋で挙行された。二十年間だった小屋の借地協定は延長が決まった。この年十一月には、設立当時の教育長だった小川寅之助町長が引退し、後任にやはり道路推進派の町職員、小林康雄さんが圧倒的多数で当選した。「時のアセス」の結論は、まもなく出される。

変わるもの、変わらないものを見ながら、チセ・フレップは二十年を経て、静かに建っている。この小屋をきつかけに、遙かに年代の離れた多くの先輩、後輩と知り合いになり、高原のゆったりとした時間を過ごせた。伝統だの、趣旨だの、強制されるべきものではないが、小さな山小屋がこれからさらに現・元寮生や地域の人々を迎え入れ、そこでどんな会話や体験が繰り広げられ、小屋日誌がどれほど厚みを増すだろうか。「地域」「自然」というものを、実感あるものとして教えてくれたこの小屋に感謝したい。

（北海道新聞江差支局長）

世界をめぐる

「竹筒おこわとカオ・パット」

福 竹 養 造（昭和二十六年入寮）

私は昭和三十年理学部地質学鉱物学科を卒業しました。そして、その年電源開発株式会社（以下電発と呼称）という会社に入社しました。名前は株式会社ですが、実際はほぼ100%近く政府が株を保有する特殊法人でした。しかしこの会社の初代総裁が民間人で、有名な事業家であった高崎さんと言う方であったこと、私の入社したのが会社創立三年目の若い会社であったこと、それになによりも会社に「戦後の電力不足を早く解決する」という大きな目標という使命感があつたことなどの理由で、活気と若手の活躍の場がおおいにあつた会社でした。ちなみに私は二十三才で入社し、約十年間で百メートル級のダム、トンネル、発電所等を一人で四地点も調査から建設まで担当することが出来ました。時代が違ふとはいえ、いまでは考えられない幸せなことでした。しかし、昭和四十年代に入りますと戦後も終わり、日本の国力もついてきました。それと共に国としての、発展途上国への技術協力がぼつぼつ始まりました。

昭和四十一年、初めての海外プロジェクトに出張したのがトルコ国でした。その後昭和四十五年まで約四年間は南米のエクアドル、コロンビアによく出かけていました。当時の南米は日本から遙かに遠く（距離もさることながら文化、知名度等）、

仕事をしながら感じたのは、やはり南米はアメリカを中心とした白人社会の支配圏だなということでした。

ある時、コロンビアのボボヤンという旧都で、その地域の水力発電計画に携わっていましたが、東京から上司が出張してき

まして、今度帰国したらタイ国に政府専門家として行つてくれないかとの打診がありました。南米での仕事に上述したような“何とはなく”むなしさを感じていた時でもあるし、タイのプロジェクトが大規模で、地質が難しく、やり甲斐のある仕事であるうえに、電発としてもこのプロジェクトを将来コマースャルベースに結びつきたい計画でありました。私は了解しました。

私がタイ国電力公社に政府専門家として派遣されたのは、昭和四十五年の六月でした。今のJICAの前身である海外技術協力事業団(OTCA)が組合運動の真最中の時期で、私の派遣手続も本省から出向組の課長さんが自らしてくれましたことを覚えています。電力公社に着任しますと、早速仕事が待ちかまえていました。

当時私を待ちかまえていたプロジェクトはクワイヤイNo.1計画といって、例の“戦場にかける橋”で有名なクワイヤイ河の中流にダムを建設し、総貯水容量百七十五億トンというとてもない貯水池を造り、約三十六万KW(現在は七十二万KWに増設)の水力発電所を建設するプロジェクトで、私が着任した時点では既にFeasibility Reportは終了しており、次のステージであるDefinite Design Report(実施設計報告書)を作成するための地質調査をこれから始める段階でした。

この地質調査が問題で、タイービルマ(現ミャンマー)国境に近い熱帯ジャングルに集水面積(貯水池に貯める水を集める範囲の面積)約一万平方km、総貯水量約百七十五億トンの

池を造るのですが、造った池に水が貯まるか否かを確認するための地質調査なのです。通常の岩石が分布する地域であれば、このようなジャングル地域で、しかも広大な貯水池の地質調査は既存の広域地質図と地形図を参考にして、貯水池からの漏水の有無を判断しても差し支え無いものです。ところが、このクワイヤイNO.1貯水池の問題は、この貯水池基礎内に石灰岩が分布していたことです。

先日、昭和二十六年入寮の仲間と一緒にツアーをした岩手県の見所の一つに硯鼻溪(げいびけい)がありました。この河川は石灰岩からなる峡谷地形が見せ物になっています。船頭さんの案内にもありましたが、この地形は地殻変動とその後の浸食作用の結果造られたものです。地殻変動(造山運動)はなにも硯鼻溪だけに起こったものではありません、北上山地全域の地質現象ですが、ここに石灰岩が分布していたことにより、あのような断崖絶壁が形成されたのです。その原因は石灰岩が水に浸食され易い性質を持っていることです。そして船頭さんが洞窟の前を船で案内してくれましたが、この洞窟がこれからの本題に関係します。

東南アジア、中近東、東ヨーロッパ地域では石灰岩の分布が著しいので、ダム基礎や貯水池基礎に石灰岩が分布する場合は、地質調査が重要な課題になります。トルコなどではアナトリア高原(内陸部)の湖の水が地中海の海底に湧水(漏水)しているケースもあります。

さて、タイの話に戻りますと、私の政府専門家としての最大のテーマは、広大な貯水池地域に石灰岩が分布しているらしいが、ここに貯水池を建設しても耐水性（水が漏れないこと）が保証されるか否かを定めることでした。実を言うと、私は東京を出るときはこのような大変な仕事を引き受けなければならぬといとは誰にも指示されていませんし、主にダム地質調査が主体だと思っておりました。ところが、着任してみますと、このプロジェクトはこれから実施設計を発注しなければならぬ段階で、早く貯水池地質の基礎資料を纏めなければならぬし、ダムを含めた土木工事に融資する世界銀行は、融資の条件として、貯水池の耐水性を保証しない限り融資できないと言っていたのです。

受け入れ側のタイ電力公社は、私の前に政府専門家（土木、地質、電気）を何人も受け入れダムの地質調査や設計の指導は受けていました。しかし、貯水池の問題は考えてもいませんでした。というのも、もともと日本にはこのような大貯水池もありませんし、ましてや石灰岩地帯での経験はありません。そのうえ、かの有名なキングコブラの名産地であるジャングル地域の調査など誰も現実問題として考えてもいなかったのです。しかし、タイ側は新任の専門家に指導して貰い、世銀の宿題を解決しようとしていました。そこに現れたのが、ひとときわ背の低い、まだ若い日本人でした。

この公社は、既にアメリカのコンサルタントの指導でフミボ

ン水力発電所を完成し、私の着任時はカナダのコンサルタントの指導でシリキットダムおよび発電所を工事中でした。

既述の通り、クワイヤイNO1計画は日本の政府専門家達の指導で進んできたのですが、これはあくまで政府ベースの立場です。すなわち、これから始まるコマーシャルベースの実施設計や建設時のコンサルタント業務とは表向きは関係ありません。しかし通例から判断すると、日本側、特に電発としては永年このプロジェクトに関わってきたのですから、これからのコマーシャルベースの業務を受注したいのは当然です。また、当時の日本はまだ国際的に話題になるプロジェクトの持ちちもありませんでした、殊に世界銀行融資のプロジェクトは魅力があったと思います。

他方、着任後数ヶ月も過ぎると、だいぶ事情が分かってきたので私自身も“やる気満々”になっていました。何と云っても、やり甲斐のあるプロジェクトでした。ところが、電力公社はなにかしら慎重でした。“日本の専門家で大丈夫かな”という心配があったとおもいます。電力公社が採った方法は、貯水池予定地内に湧水箇所のあることを聞き、この湧水現象がこれからやる貯水池耐水性評価の参考にならないかと、話題を提供し、一度現地を視察して欲しいといいました。さらに、それをシリキット・ダムで働いていたカナダのコンサルタントの地質担当、Dr ボロスキーと二人で現地視察して欲しいと条件つきでした。

私としては、このプロジェクトの担当は日本政府から派遣されている私にあるものと思っていましたから、いささか不快感を感じましたが、派遣先のトップがそういうのであればと割り切るより仕方ありません。他方、雇い主から自分の担当外のプロジェクトの視察をたのまれたボロスキー氏は悪い気はしなかったのではないかと思います。

忘れもしませんが、ダムサイトに建てられたバンブーハウスに泊まり、夕食後、雑談を交わしながら時間を過ごしました。電力公社のカウンターパートは、明日の昼食のため、昼間切つてあった竹を、底に節を残して三十〜四十cmの長さに切り、その竹筒に洗った餅米と小豆を入れ、さらに水の代わりに椰子の液を入れて、“たき火”の周りに立て、煮ていました。竹筒の上は藁を丸めて詰めていました。食べるときは、これを二つに割ると丁度日本の“おこわ”が出来ていますので、手で食べられるという寸法です。運搬は人夫が背負つて運べますし、食べたかすは竹ですし、しかも、衛生的で、弁当としては最適だと記憶しています。ただ、ココナツの液は結構甘いものですから、毎日の弁当にはむきません。

さて、次の朝人夫がこの“竹筒おこわ”と水筒を背負い、私とボロスキー氏は調査用具を、カウンターパートは腰にピストル（護身用です）をぶら下げて出発です。五月頃のタイ国での山歩きは大変な暑さです。私は日本人の中でも小さいですが、ボロスキー氏は、脊は西欧人の普通でしたが、太り気味でした。

最初から、山歩きに関しては私に分があつたようです。昼弁当の時間になると、人夫が背負つてきた竹筒を二つに割ると新鮮な竹の香りと甘いココナツおこわが現れます。私にも甘いおこわは初めてでしたが、おこわそのものには別に違和感がありませんので、空腹を満たす昼食として十分でした。しかし、カナダ人にはやはり不向きなランチボックスだったように記憶しています。その上、彼に気の毒だったのは太った体に熱帯地域の山歩きは正に難行苦行といった、その時の顔をいまでも忘れません。

二日目の弁当は、日本風といえば“醤油味焼きめしに目玉焼き添え”でした。ただこれがすごい臭いです。まづ、焼きめしに使う油が椰子油です（いまは使われていませんが、相当なものです）。それに醤油はタイ語でナンプラと呼ばれている、魚醤油ですから強烈に臭います（慣れると、これを好む人が結構います）。その上に、目玉焼きがのせられ、パクチーと呼ばれる香草が添えられています。このパクチーは日本におります緑色の“かめ虫”をさわつた時に発せられる臭いと同じようなものを想像して下さい。この焼きめしはタイ語でカオ（飯）パット（炒める）と呼ばれ、この後、私にとつては山でも、町でも定番の昼食になりました。さて人夫がカオ・パットを背負い昼まで歩きますと、体温と気温で暖められ、諸々の臭いが発せられますと東洋人の私でも、疲れた体には“むっと”くるものでした。ましてやボロスキー氏には大変気の毒な弁当で

した。この二日目の夕刻、キャンプに帰った時、彼は本当に疲れ、貧血を起こした時のように顔色が白かったことを記憶しています。

このように二泊三日の調査が終わったのですが、いまだに理解出来ないのは、この時何故私とボロスキー氏と一緒に歩かせたかです。その後、大貯水池の本格的な地質調査は私が担当するようにになりました。本格調査終了まで約二年かかり相当苦労もありましたが、私にとつては三十代の最後に、思い出に残るすばらしい仕事に恵まれたと今でも満足に思っています。

昭和四十八年六月、三年間の政府専門家の任期を終え電発に戻りましたが、半年本社に勤めた後、昭和四十九年いよいよこのクワイヤイN O 1プロジェクトの建設が始まりましたので今度は電発の地質担当の立場として再度赴任しました。プロジェクトは電発がコンサルタント、イタリアの建設会社がコントラクターで、昭和五十三年にダムはほぼ完成しましたから、最初の専門家のときから約六年このプロジェクトに関わったことになります。この発電所は現国王の御母上のお名前を頂き、シーナカリン発電所と呼ばれ、合計出力七十二万KWの大水力発電所としてタイ国経済発展のためのエネルギー供給基地となっています。

最近では自然環境保護の観点からダム建設にいろいろ問題が提起されていますが、アジアの発展途上国の中には、国家経済の立場から水力発電を開発する必要がまだあります。環境問

題は大変重要な問題だと認識したうえで、どうすれば、最も環境破壊を起こさないで水力開発ができるかを考えるのは経験を積んだ我々シニアの仕事ではないかとも思っています。これから機会があればアジアの国々のお手伝いをするつもりです。最後に、少し専門的になりますが石灰岩を基礎とする貯水池の耐水性を調査する基本的な手法三つについて簡単に述べます。

「地質学的手法」

貯水池内に石灰岩が分布する場合、その石灰岩体が貯水地域内での様に分布しているかを純地質学的手法で現地調査するのです。例えば、溶食空洞の多い石灰岩が分布していても、その岩体が非石灰岩の地層で囲まれ、貯水池集水域外に連続していなければ問題が無いわけです。スポンジで例えますと、スポンジを直接地面に置いて上から水を注ぎますとスポンジ内の空隙を充填したあと、水はじわじわと地面にしみ出てきますが、スポンジをある器に入れその上から水を注ぎますとスポンジの空隙を充たしたあととしみ出てくる水は器の中に貯まります。瀬戸物の器を非石灰質岩石と想像していただくとう理解し易いと思います。

「地下水分布調査」

例えば、ダム地点に近い貯水池内に広く石灰質岩石が分布し

ています。その分布範囲内に貯水池方向に流れている沢がある
とします。その沢の流水は雨期には地表を流れますが、乾期に
は流れないとします。このような場合、次に述べる石灰岩の化
学分析と同時にその沢周辺にボーリングを掘り、ボーリング孔
内の地下水面の高さ（標高）を測ります。

地下水面の標高が貯水池満水面より十分に高い場合は、

- ① 十分な地下水が分布していることは、地下に連続性のある
空洞が無いことを示唆している、
- ② 貯水池満水面より十分高い地下水面があることは水圧の見
地から貯水池の水がダムより下流に漏れない。等の情報になり
ます。この地下水調査は貯水池耐水性の評価に有益な調査手法
になります。

「岩石の化学分析」

純粋な石灰岩は炭酸カルシウムをほぼ一〇〇％含有し、これ
と二酸化炭素を含む水の作用で、可溶性の重炭酸カルシウム
を生成することにより、溶食作用が進行することはよく知られ
ています。しかし、石灰岩中にはよく不純成分（炭酸カルシウ
ム以外の鉱物）が含まれています。この不純成分の含有量が多
くなれば石灰岩本来の特性が失われ、たとえば地表部に溶食が見
られても貯水池の耐水性に影響するような大きな空洞が出来に
くいたことが経験に分かっているので、ボーリングや地表から岩
石をサンプリングし、化学分析を行います。

石灰岩分布域に貯水池築造の計画が企てられたら、上記のよ
うな調査が詳細に行われます。

地質調査の結果、ダム建設を諦めるケースはもちろんありま
す。問題は、調査が不十分にもかかわらず建設に踏み切った結
果、水が貯まらないケースです。南西アジアのある国で発電用
貯水池を建設したのですが、発電に必要な最低水位の貯水は出
来ていまずものの計画通りの水位までは貯まりません。

修復の為どうしているかと言いますと、土を運ぶ大きな船を
建造して貯水池に浮かせ、石灰岩の空洞の上とおぼしき位置で、
せつせと土を捨てています。もうすでに一年以上この作業を続
けているのではないかと思います。まだ漏水が止まったとは思
聞いていません。大変原始的な手段だと感じる方が多いと思ひ
ますが、自然を相手に失敗したときには、やはりこの様な原始
的な手段しか無いのでしょね。自然に対しては謙虚に対応し
なければならぬ一例です。

「ある地質屋のあとがき」

私の同期生諸兄はすでに定年を迎えられ、悠々自適の日々を送っておられること、遠察する。私は六十七才まで正式に現役で、その後も数年は仕事から逃れられそうもない。

私が初めて訪れた北欧は、北緯七十九・三度、東経十三度付近のスピッツ・ベルゲン島北西部で一九六六年の夏であった。この地域はオランダのバレンツが一五九六年に発見してスピッツ・ベルゲンと名づけ、十九世紀にはいくつもの有名な探検の基地となった、北欧探検の名所である。山々を作っている石は変成岩で、いく度かの地殻変動が記録されているが、それらの出来事の年代は判らなかつた。私はこの地域の仕事の締めく、りのつもりで、一九八三年から放射性同位体を使っての年代決定を始め、最近は一、一粒の鉱物粒の中の二十五ミクロン直径の部分だけを蒸発させて年代決定をしている。

結果が出てみると、今まで四・五億年前のものとされてきた石の中に、九億年前や十八億年前のものが沢山あり、最古の年代は三十六億年前を示している。こゝまで遡ると、四十五億年の地球の歴史の約八割を見ることがになり、生物界では光合成をする藻類が栄え、大気中の酸素がふえ始めた頃のことになる。

太 田 昌 秀 (昭和二十八年入寮)

このような長い時間を相手にしていると、人間の時間についての視野が狭いことが気になる。環境問題が現れてから、空間的視野や学問の多分野化など、人間の視野は随分広がった。しかし普通の人々の中での歴史的時間は、せいぜい祖父母から孫までの二百年位が実感できる時間で、千年を超える話はまったくお伽話であり、まして数億年という話をする、そんな研究に吾々の税金が使われているのは心外だ、と非難を受ける。環境問題を地質屋の眼で見ると、便利さや豊かさを追求する科学技術が、地球が数十億年かけて築き上げてきた調和ある自然を無視し、その歴史に逆行していると思われ、地球史の研究も人間にとってまったく無駄なことではない、と云い訳をしたくなる。

人間は科学の成果の中に何か便利で有用なものがあると、それと周囲の関係を知らぬまま、あるいは関係を断ち切つて、役立つ技術だけを肥大化させて利用してきた。この“つまみ食い”的科学技術の発展が、自然の中の調和を乱して環境問題をひき起こしている。“つまみ食い”の結果が自然や社会に悪いインパクトを与え、環境技術によって悪影響を乗り越え、適応しよ

うと努力している。しかしこのような原因―影響―適応の過程がひとつ片付くと、すでに次の問題が待っており、時には環境対策自身が次の問題を作り出す。こうしてこのサイクルは果てしなく螺旋状に続く。人間が充分賢ければ、このサイクルは次第に小さくなり、人間が自然と調和して生きていけるようになるだろう。現状はその逆で、このサイクルは益々大きくなり、救い難く発散するようである。公害などの汚染は、人間が自分で汚したものだから、当然自分で清掃すべきであるが、それだけが環境問題ではない。大切なことは如何にして環境問題の原因をつくらないようにするか、ということだと思う。

現代の公害問題などの悪循環は、釈迦の指摘した業^{II}カルマを思い出させる。今、行われているような環境対策は、無限に繰り返される救いのない業の輪廻のようである。大切なことは釈迦が云ったように、輪廻を断ち切って解脱することであり、それには何よりも“つまみ食い”を止めることである。

人は誰でも、たゞ一度しかない人生を豊かに楽しく過ごしたいと願う。人間は社会を作ってきた歴史の中で、経済力が豊かさの源であると信じ、利益を求めることが幸せへの道である、と教え込まれ、それが人間の本性であると思ひこんでいる。しかしこの本性は歴史の中で作られたもので、人が作ったものである。人が変えられない筈はない。この本性より遙かに重要な「人間という種の存否」が問題になっている今、人は悪循環の輪から脱け出すために、この本性を変えなくてはならない。

こういう話をする人々は“お前のように大学と研究所しか知らない奴には、世間の厳しさが判らないのだ”と嘲笑う。日々、利益を求めて汲々と苦勞している人々にしてみれば当然の云い分であろう。しかしこのような形の発展の先には、人間という種の絶滅が待っているとしたら、人はその叡知は異なった方向へ活用しなくてはなるまい。

人間の知的能力を過信してはならない。科学をやってきた者として痛感するのは、人間の自然理解が如何に不完全なものか、ということである。環境問題の中で、“自然を守ろう”とか“自然にやさしく”という標語をしばしば聞く。これこそ人間の思ひ上がりの無意識な表れであり、化けたつもりの狐の尻尾である。守られ、やさしくしてもらわなくてはならないのは人間の方である。自然は人間の浅知恵や思惑には関知せず、自身の存在原理に従って厳然と存在し続ける。人類の絶滅など眼中にはない。環境問題は自然の問題ではなく、人間の問題なのである。地球の長い歴史を勉強してみると、人類は何ら特別な生物種ではないことが良く判る。幾百万の生物種の中の一つでしかない自分達の立場を正しく理解していくところから、自然の中で人間の在り方が考え出されてくると思う。人智を過信すると、お釈迦様の手の平をとび出せなかった孫悟空と同じことになってしまうだろう——というような言葉を、私の人生の卒業論文のあとがきにしたい、と思っている。

(ノルウェー極地研究所教授)

カンボジア・NGO・恵迪

松 本 清 嗣 (昭和五十九年入寮)

一九九二年よりカンボジアに入り、NGO (民間協力団体・るしな こみゆにけーしょん やばねしあ) を設立、農村開発の活動を行っている松本清嗣です。恵迪寮には一九八一年より四年間、旧寮二年、新寮二年在寮しました。「恵迪」がなくなる云々で物議を醸した時代に寮にいることができた者の一人として、寮をめぐる状況が揺れた時だけに自分にとって「恵迪」とはいったい何であったのか、考えることも多かった世代なのかもしれません。

本稿では、この間のカンボジアでのNGO活動と照らし合わせながら、その中で生かされている恵迪の暮しで学んだこと、寮で培われたであろう精神性などについてふれてみたいと思います。

まずは、私が現在カンボジアでどのような活動を行っているか、紹介させて頂きます。

《カンボジアでの活動》

日本による援助事業の多くは、物や建物 (ハード) の供与に大きな比重がかかってきましたが、我が「るしな」のプロジェクトでは、村人の中で人材を育成し、自助自立のための基盤を作るお手伝い (ソフト) を中心に活動しています。

カンボジアのバットアンバン州・タケオ州・パンチエイミンチエイ州で、この四年間に二十の相互扶助協同組合 (約三千世帯加入) を新たに設立しました。各協同組合では貸付を中心とし

て活動し、一部の協同組合で、農業・保健・教育・人権・福祉・文化・環境等多方面の取り組みを始めています。

《少額資金の貸付け・村の発展のための自己資金充実》

貸付け事業では、村の全世帯に二十ドル程度の資金を貸付け、鶏・アヒル・豚を飼ったり、網を購入し魚を獲ったり、小さな商売をはじめするなど、生活を向上させる営みを促進することで、

(右) トロ村での井戸掘プロジェクト
～村の中心部のお寺では、若い坊
さんが自ら汗を流して井戸を掘る
～



(左) 井戸掘りプロジェクトで掘った
井戸の前で

生活を底支えています。食料に事欠くその日暮らしの最貧困家庭にとって、ささやかではありますが生きる支えとなることもあるようです。耕耘に欠かせない牛の購入資金の支援貸付も行っています。資材としては化学肥料や米を貸付けます。協同組合がその資金を粉として貯蔵するための米倉建設も支援しています。貸付の利子は協同組合の基金として積み立て、村の中の各種の自力更正事業（農業・保健・教育等々の活動）を実施する基盤となります。

《保健・農業ヴォランティアの活動促進》

保健・農業分野では村の中で農業・保健ヴォランティアを選出し、様々な活動を行っています。保健ヴォランティアに対して定期的に保健研修を実施し、地域での健康を守る活動のリーダーシップを育てています。貧困家庭への水瓶の貸付け、十家族程度で協力しての井戸（二〇メートル程度）掘り、小学校や村の中での健康教育、応急処置・健康教育等、村人の健康を守る地道な取り組みを育てています。農業分野では、二ヘクタールの試験農場での持続的農業／有畜複合農業の試験作業、子豚の貧困農家への貸付け、農業研修を農業ヴォランティアに対して実施しています。農薬・化学肥料を使わない稲作実験では、緑肥と有機質肥料の施肥により、現地での化学肥料使用に匹敵する収穫をあげ、普及段階に入っています。プロジェクトを通

じた地域レベルでの農業改良事業（農業用水路・水門等の整備）も地道に進んでいます。

《村の弱者支援・学校建設・孤児院運営等》

村のなかで弱い立場に置かれた人々（マイノリティー：女性・老人・障害者・寡婦・身寄りのない子供等）の生活支援事業、小学校の建設事業（本年度一校）、小学校への書棚（文庫）の寄贈、身寄りのない子供を養育する孤児院設立運営事業、漁民との協力による水産資源環境の調査事業等々、活動は試行錯誤を伴いながら多岐にわたってきています。

《地域の伝統を振り返り、保存し、

地域作りに生かしていく活動》

ボタンパンとタケオの五カ村で月に1度、ご老人に集まって頂き、伝統的な行事や暮らし、農作業等についての聞き取り・保存する作業を行っています。伝統的な暮らしの知恵を受け継ぎ、地域の活性化に生かしていくことが活動のねらいです。

《一人で始めた活動》

上記のように活動分野は様々で、支援対象の裾野も広がって

きていますが、「るしな」の日本人スタッフは私一名のみ。日本サイドでは、寮での仲間を含む多数の友人たちがヴォランティア・ベースで支えてくれています。農業・医療・保健・地域作り・環境等の分野で、さまざまな専門家の方々の協力を得ており、一人が始めることで次第に大きなつながりに展開していくものだなあと自分自身驚いています。

この間の展開を支えてくれたのは、我田引水ながら、『フロンティア・スピリッツ』なのかもしれません。NGOでも、大きな団体はややもすれば様々なことに足をとられがちで、小さな試行すら難しい、身動きの取れない状況に陥ることもあるようですが、「るしな」の場合、カンボジア人スタッフの創意工夫を生かしながら、村人との共同作業のなかで試行錯誤を繰り返すことを基本にしているため、大胆ではありますが着実に活動を積み重ねてこれたのかもしれない。ただ、組織としての基盤が弱いため、資金面での脆弱さはいかんともしがたく、各方面での支援を募っていますが運営費は十分ではありません。松本自身の給料の支給にも事欠く状況が続いているのは残念なことです。

《コミユニティー開発》

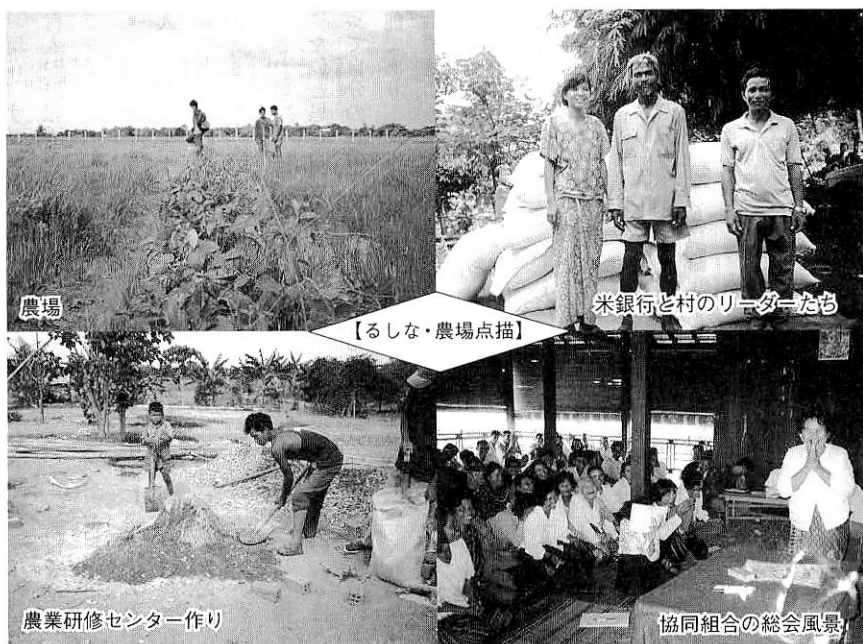
カンボジアでは、四半世紀にのぼる内戦が一部の地域のコミユニティー（地域共同体）の力を著しく弱めてしまいました。

特に、一九七五年から七九年にわたるクメール・ルージュによる虐殺・恐怖政治が、人々の間に疑心暗鬼の念を植え付けたことは、カンボジアの社会に大きな暗い影を投げかけています。カンボジアに住む人々にとって、地域コミュニティの再生―地域の人々が協力し、信頼し合える関係の回復が極めて重要であることは論を待ちません。私がカンボジアで活動するときに、コミュニティを中心として考えるのは、それが人々の暮らしを守り、心を豊かにしていく上で必要不可欠であると考えられます。

このようなコミュニティの重要性を認識した農村開発の方法は、欧米のNGOsや国連の開発プロジェクトでは、すでに一般的で主流を占めていると言えますが、日本ではその手法があまり知られておらず、採用されてもいません。私の中で、コミュニティ開発の重要性の認識と意識形成の原点が恵迪寮での生活にあったことは、恵迪に対する感謝の念を強くするものです。

《寮の自治意識とコミュニティ》

恵迪寮は一つのコミュニティであり、二十四時間寝食とともにしながら、大まじめで議論し、馬鹿なこともやり、自分たちの暮らしに関することは自分たちの討論によって決定―実行するという環境が、胸の内に自治の気風を形成しました。「自治



意識」という言葉で当時語っていた内容が私の中では、「コミュニティ」の自立・重要性を認識した成員の自覚」という形で、現在のプロジェクトにつながっています。

《担い手としての誇りを大切にする》

「人はパンのみにて生きるにあらず」は本来、神による愛を意味するところでしょうが、ここに「担い手意識」や「誇り」（もうちょっと言えば「ロマン」）と云った言葉を入れてもよいかと思われます。クラーク先生のおっしゃった「ビー・ジェントルマン」は、学生の誇りを鼓舞するものでした。いかなる形態をもつて「ジェントルマン」とするか？ は、恐らくその後、寮生の「赤ふん／ストーム」といった形態と、クラーク先生ご自身が抱かれた「ジェントルマン」イメージとは、かけ離れたものであったろうことは想像に難くありませんが、「担い手意識」「誇り」という点においては、クラーク先生の鼓舞された真意は、後世の私たちの内にも脈々と伝わっていると言つてよいと思われます。

カンボジアでの活動の中心にコミュニティ開発を置き、その担い手集団として、村人のヴォランティア活動による協同組合を据える際に、できる限り村人の主体性を大切にしています。村人の誇りなくして村の発展はなく、担い手意識のないところに責任ある持続的な地域活動も成立しません。

現在、プロジェクトにおいて設立された協同組合の活動は、村人の無報酬の行為で支えられています。この無報酬のヴォランティア活動が極めて成立しにくいのがカンボジアの現実でもあります。ボル・ポト時代以降の強制労働にあきあきした人々にとって、いかなる美名のもとにも「自発性」を強制されることは願ひ下げなのです。日々の暮らしに追われる人々にとって、ヴォランティア活動と言ってもピンとくるものではなく、できれば、ちょっとでも金や物になる仕事をし、その日の糧を得たいと思うのは人情でしょう。また、カンボジアの人々にとって自分の立場を利用して不正利得を得ることは、ある種の才能であり、殊に多くの親戚を扶養し助けることが、一般的な社会道徳より優先される傾向があるカンボジアでは、不正利得を拒否する馬鹿正直さはそのまま親戚などから馬鹿者扱いされかねません。

このような状況は、欧米人にとっても私たち日本人にとっても好感の持てるものではありません。現地で活動する国連・NGOs・一般企業の方々がカンボジア人を軽蔑する大きな理由の一つに、この倫理性の低さがあると思われます。しかし、現実には摩訶不思議なものです。ある面で腐敗した社会であるがゆえに、村の中にもちゃんと倫理性の高い人はいるもので、また、その少数派である「正直」な人々の呼びかけが村人の心を揺り動かし、地道なヴォランティア活動につながるというのも事実なのです。村人の誇りを鼓舞し、自治意識を鼓舞し、担い手と

しての気持ちを高めることが、ある面で私達の村での活動の中でも重要なものかもしれません。

恵迪寮での経験が「担い手意識」や「誇り」の大切さを教えてくれたことは大変ありがたいことでした。人は一人では生きることとはできず、いつも家族や地域、所属する集団のなかで生活・活動しています。自分が属するコミュニティに誇りを持ち、よきコミュニティを仲間とともに支えていく過程において自己実現をはかっていくという体験が恵迪において得られたことは何ものにも代え難い宝物でありました。

ただ、寮での暮らしがあまりに特別であり、また、私達の在寮時期が旧寮から新寮への移行期ということもあって大学サイドと対立する場面も多く、「寮は他の社会とは違う」と言った形で、寮を特殊化することで一般化して捉えることを拒否する向きも、卒業した寮生のなかではまま見られます。特殊性に重きを置くか、普遍性を強調するか、共通の経験をしても人それぞれによつてその捉え方が様々であることも、人間の妙と言えるでしょう。寮の精神性等を語ることの難しさとおもしろさもそこにあるのかもしれませんが。

《言うべきことを言う》／

ダイナミックな人間関係実践の場として

佳き人間関係は馴れ合いだけでは形成されません。お互いを

尊重しつつ、しかし対立を恐れずに言うべきことを言い、互いに切磋琢磨し合える関係は、人生にとつて最もよき関係かもしれません。世間では『優しさ世代』とか云つて、厳しい相互批判を避ける若者たちが多いようです。また、赤提灯のしたでしか本音を出さず、愚痴をたれることで溜飲を下げるのみのお父さんたちや、陰口がメインテーマの、井戸端会議のおばさんたちが圧倒的多数を占める大人の状況の中で、ダイナミックで創造的な人間関係をつくることなど異端としか云えないのかもしれません。

NGOの世界を見ても、日本人の若手のワーカーが言うべき事を言えず、言うタイミングも悪く、スタッフや村人・政府関係者ともいい関係が作れないケースがまま見られます。カンボジアの村人もスタッフも、内戦・混乱の中をくぐり抜けてきた云わば海千山千の人々であり、こちらが「ちよろい」と簡単に舐められてしまうのは、甘い対応ではいい関係が作れないという、単にそれだけのことであり、カンボジア人の資質を云々し、揶揄することで非を押しつけることでは、何も改善されないことは明らかでしょう。

相互批判は、お互いが良き方向に変わりうるという前提にたった希望の表明であり、言うべきことも言えず、言わない状況のなかでは相互不信は醸成され、関係は欺瞞に満ちたものとなります。若者にとつて、信頼に裏打ちされた厳しい相互批判の環境が与えられることは、当人にとつても、当人が創り出

す様々な関係にとつても非常に貴重であり、恵迪がそのような環境を与えてくれたことは、私たちにとつて天恵であつたと言わざるを得ません。

《激動のカンボジア社会》

一九七五年から四年にわたるクメール・ルージュ時代は、カンボジア社会の近代化と伝統を、人民に対する抑圧装置として否定し、破壊する時代でもありました。近代的な技術者、僧侶・教師・伝統的な技能の持ち主が、百万人から三百万人といった規模で殺され、貴重な文物も数多く失われてしまいました。八〇年代、ソ連・ヴェトナムの支援を受けて最低限での生活と政治の復興はなされましたが、伝統的な行事や芸能の復興は、シエムリアップやプノンペン等の都市部において部分的に再開されたに過ぎません。

一九九〇年代に入り、市場経済のあら波に一気に呑み込まれたカンボジアでは、ここ数年の間にプノンペン市街の様相も一変しました。マーケットには輸入物資があふれ、車やバイクの数が増え、プノンペンではすでに交通渋滞の問題も生じています。町中にはゲーム屋が並び、子供達がストリート・ファイター等のゲームに熱中する姿は、日本と何ら変わるところはありません。

輸入物資は農村部にも流入し、バイクによるタクシーが日常

的な乗り物として定着し、ビデオ小屋のない村を見つけるのが難しい状況となっています。変化の乏しい農村の暮らしの中で、日本円にして三円程度で見られるビデオは村人にとつて大きな娯楽となっています。しかし、ビデオや白黒テレビ（バッテリーで見られます）が農村に入り込んでくることを、一概に手放して喜べることではないような気がします。

ビデオには都会の消費生活が映し出されます。蓄えはなく、その日暮らして魚や蛙や貝など食べられるものを探し求めている最貧困農民にとつて、天地の開きのある都会の消費生活を画面を通して見てしまうことは、ある面で不公平感を募らせるものでしょう。特に若者にとつて、都会での消費生活は魅力的であり、カンボジアの農村にもちゃらちゃらした今風の若者が出没するようになってきました。

《現代社会の毒に対する抵抗力としての伝統》

カンボジア農村でも世代間の価値観の違いが指摘されます。社会変動のスピードが早い分だけ、前の世代の人々と若者たちの意識のズレはすさまじいものがあります。プノンペン等の都会では金品目当ての強盗が横行し、拝金主義が一般的な世相となつてしまっている状況は嘆かわしいといしか言いようはありません。物質消費の面で近代化が進む一方、ご老人が文字通り煙となつて消えてゆかれる中で、二度と思ひ起こされることなく



(トレーニングで大笑いする産婆さん)

とは、現代に生きる私たちの務めであるのかもしれない。

消えていく伝統的暮らしや知恵があるまま。

このような暮らし方や知恵こそは、混迷するであろう今後のカンボジア社会を振り返る上で、かけがえのないルーツとなり、新たな時代の切り所として再生されるべきものと言える。人々が年月をかけて培ってきた、伝統的な価値観や自然観・暮らし方が、物質消費の及ぼす人間の意識に対する毒を中和し新たな時代意識（コミュニティ意識）へとつながっていく基点とすること。

カンボジアにおいて村人の伝統的な暮らしは、一部の外国人の記録による伝説・英語等の資料を除いて保存されてはいません。自分たちの伝統的な暮らし方や知恵が、地域のなかで後世に伝わらないということは、子孫をある種の文化的根無し草にすることに他ありません。カンボジアにおいて、一般の若者が伝統的なものの価値に目覚めるのはまだ先であるのかもしれませんが、それ故にこそ、NGOの村人への働きかけは重要であると言えるかもしれません。寮がつねに、伝統の中にその時その時の若者の息吹を吹き込み、青春を謳歌する若者を育ててきた現在の意味を、決して軽んじてはならないと思います。

《地球を一つのコミュニティとして》

飛行機でカンボジアと日本とを年に二回ほど行き来していると、地球がとても小さなものに見える。近代技術と消費の力は、アジアの山々をあっという間に禿げ山にし、水産資源を減少させ、何万年に及ぶ年月を経て蓄えられた石油を、あっという間に使い切らんとし、地球の温暖化を止められずにいます。日本でも大不況の嵐が吹き荒れ、リストラ・過労死が続発し、学校では殺伐とした状況が続いています。技術力・破壊／生産力の強大さに比べて、人間社会や自然環境の貧困さは目を覆いたくなるほどです。

先進国・低開発国を問わず、人間や自然の尊厳が著しく損な

われている現実が、多くの人々に知られているにも拘わらず、対策として実施されているものは焼け石に水に過ぎず、現代は、人間が人間の可能性を疑っている時代も少なからうと思われる程です。人間社会や自然界を抑圧し、その尊厳を脅かしている力を「構造的暴力」として、その暴力に対して戦うことが現代社会の最重要課題とするならば、地域や自己の属するコミュニティでの地道な活動と地球規模の問題解決を結びつける新たなコミュニティ規範・意識・行動の形成が、今最も必要とされていると言えると思います。

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」「ビー・ジェントルマン」「フロンティア精神」は、閉塞した時代状況に切り込んでいく自覚と勇気を我々に鼓舞するものであり、新たな時代を作り出すうえでかけがえない力を生み出すものです。

「恵迪寮」は、そこにいた私たちに、日常のなかで忘れてしまいがちな青春の大切な想いを蘇らせてくれるとともに、混迷の現代を改めて考える際の拠り所ともなってくれる存在でしょう。いかなる形で「恵迪」を自分と社会の中で生かすかは、そこに生きた我々に課された課題と言えると思います。

「るしな活動内容」

● 統合的コミュニティ開発プログラム

様々な分野での活動を統合的に組み合わせることで、コミュニ

ニティー（地域共同体）の発展・自立を促進する。

● 活動分野

コミュニティによる貸付事業、農業改良普及事業、地域保健事業、教育事業、人権擁護・福祉事業・文化事業・環境調査・保全事業等

● 活動地域（カンボジア王国）及び設立協同組合数

バタンバン・タケオ・バンチエイミンチエイ州四郡に二十の協同組合を設立（一九九八年度まで四年間）。

● 協同組合加入世帯数

約三千世帯（約一万八千人）

● 専従日本人スタッフ：一名（松本）

専従カンボジア人スタッフ：十三名

ヴォランティア：多数

日本国内の事務所等：五カ所（千葉・浅田／昭和五十五年入寮、札幌・北沢／五十七年入寮、留萌・市村／五十六年入寮、富山、松本、大阪、明石等）

「資金」

● 維持会員からの会費の他、協力団体（明日のカンボジアを考える会・どさんこ海外保健協力会等）からの寄付。一九九五年度より、郵政省国際ボランティア貯金配分金の交付を受ける（一九九八年度は、五百八十八万四千円）

● 一九九七年、北海道青少年科学財団より奨励賞、中田厚仁記

念基金より奨励賞受賞。

〔国内連絡先〕

●千葉事務所…〒二七四〇〇六三 千葉県船橋市習志野台四丁目

八三一〇一三〇五（浅田正吉）

電話&FAX…〇四七四一六三一八六三九

●銀行振込先…さくら銀行

（口座名）るしな・こみゆにけーしょん・やばねしあ

店番号…二三五 口座番号…六三三三三三三九



（カンボジアでの松本清嗣君）

〔松本清嗣略歴〕

●大阪・北野高校卒業。一九八一年恵迪寮入寮。旧寮二年新寮二年在寮。放浪舎、焼きうどん同好会、寮自治会執行委員会、恵迪寮新聞会、活動として北大寮連執行委員会、寮史編纂委員会、八八年文学部哲学科、中国哲学卒業。

●一九八八年四月北星学園余市高校教員となり、九一年卒業生を出すとともに、「アフリカに行き、世界で最も苦しんでいる人々のそばに行きたい」との想いを抱いて教員を退職。

●大阪・釜ガ崎で九カ月の土方暮らしの際に知り合ったカトリックの方々とのご縁で、米NGO・CRS（カトリック・リリーフ・サーヴィシズ）の研修生として九二年三月にマニラに赴く。同年四月カンボジア・プノンペン入り、五月任地であるバットアンバンに入る。会計とプロジェクトを担当。九三年五月CRSの研修期間終了。帰国。同年十一月、自力でのプロジェクト実施を検討するためにカンボジア・バットアンバンに再度入り、十二月独力でNGO設立を決意。

●一九九三年十二月「るしな・こみゆにけーしょん・やばねしあ」設立。現地よりニュースレターを友人に発送し協力を呼びかける。十二月末日、帰国。浅田正吉氏に東京連絡事務所としての活動を依頼。高校時代からの友人三浦直氏に富山連絡事務所の活動を依頼。一九九四年六月土方等の作業による資金五十万円を携え、カンボジア・バットアンバン入り、現地事務所開設。プロジェクト開始。

有島武郎、恵迪寮での二百六日間



(東北帝大札幌農科大学予科教教授時代の有島武郎)

井 口 光 雄

(昭和二十八年入寮)

羊蹄山とニセコの山々を間近にみるニセコ町字有島の丘陵地帯に、瀟洒な白亜の建物が立っている。有島記念館である。ここは作家有島武郎が父親から贈られて所有したが、後に農民に開放して、広く世間に知られるようになった有島農場があったところである。記念館は昭和五十三年（一九七八）、有島武郎生誕百年を記念して建設された。

当時私は、展示プロデューサーとしてこのプロジェクトに関わっていたため、有島研究家の山田昭夫さん（藤女子大教授―当時）らと一緒に、よくこの有島農場跡を訪ねた。また、武郎の末弟で作家の里見弴さんや、次弟の作家、故有島生馬さんのお住まいがあった鎌倉も何回か訪ねた。弴先生は当時既に九十

才になられていたが、お元気でよく麻雀をされておられた。

あれから既に二十年、記念館の題字を揮毫していただいた弾先生は、今はもういらつしやらない。当時、むさぼり読んだ武郎の作品や、資料の大半も記憶から薄れようとしている。でも、札幌農学校時代の青春を描いた未完の小説「星座」や、東北帝大札幌農科大学の予科教授時代、一時寄宿舎係をされていた恵迪寮の寮生達とのふれあいを記した武郎の日記「観想録」は、今でも強く心に残っている。

大正五年以来、毎年、新しい寮歌を加えて発刊され続けてきた「恵迪寮歌集」は、実に八十有余年にもなる一大ベストセラーであるが、その序を飾る「恵迪寮生諸兄」と題する、有島武郎の寮生に寄せた愛情溢れる一文をご記憶の方は多いことと思う。しかし、寄稿した武郎と恵迪寮生との交流の背景はあまり知られていない。かつて有島武郎の資料収集に関わった縁もあって、今回、視点をそこにあてて纏めてみた。題して「有島武郎、恵迪寮での二百六日間」

草創期の恵迪寮での様々な出来事や寮生との付き合い、加えて妻となる安子との出会いなどもあって、この間の半年余は、武郎にとって非常にドラマティックな日々でもあったと言えよう。

(なお、引用文の出典は末尾に纏めて掲載。出来るだけ原文を生かしたので、旧仮名使いや旧漢字などで読み辛いかもしれないが、ご寛容を。また文中では敬称を略させていただいた)

北大出身者の方は、大学の先輩でもある有島武郎について、また勿論、文学好きな方は、有島武郎の人となりや作家としての業績等について概ねご承知の事と思われる。しかし「生れ出る悩み」や「カインの末裔」「或る女」などの名作を残した大正期を代表する作家とはいえ、現在の若い諸君の中には、あまりなじみのない方もあろうかと思われる。本題に入る前に、武郎のプロフィールを簡単にご紹介したい。

有島武郎は、明治十一年（一八七八）三月四日、父・武、

母・幸の長男として東京で生まれた。父は元薩摩藩の士族で、当時関税局勤務、後には関税局長や国債局長にまで登っている。恵まれた家庭に出生したと言っていいたろう。前述のように、弟に生馬（旧名、壬生馬）、里見 弾（本名、英夫）など、四人の弟と二人の妹がいた。

東京女子師範附属幼稚園、横浜英和学校、学習院予備科、中等科を経て、二十九年（一八九六）年九月、札幌農学校予科五年に編入学、同校教授の新渡戸稲造（註一一）の官舎（北三条西一丁目）に寄留した。同期に星野純逸、半沢洵等がいた。

明治三十年（一八九七）本科に進み、夏休みで帰京の際には札幌農学校の大先輩内村鑑三（註―二）を訪問、新渡戸同様、人生上の強い影響を受け、後にキリスト教に入信する。翌三十一年、南二条西六丁目にあつた白官舎に移ったが、この頃の学生生活については、後に書かれた「星座」に生き生きと描かれているので是非一読されたい。三十三年札幌農学校二十五周年記念のため、校歌「永遠の幸」を作詞した。

明治三十四年（一九〇一）親友森本厚吉（註―三）と共著で「リビンゲストン伝」を出版、七月本科農業経済科を卒業。卒業論文は「鎌倉幕府初代の農政」。父が武郎の将来に備えて取得した狩太（現在のニセコ町）の農場を、来道した父と共に初めて訪問した。

明治三十六年（一九〇三）から四十年（一九〇七）年までの四年近く、アメリカに留学、ハーヴァード大学の大学院、ハーバード大学専科で、主に経済、歴史を学び、またこの間一時期、クウェーカー派の精神病院で看護夫として働いた。こうした経験は、武郎のキリスト教信仰に動揺を与え、またロンドンでの社会主義者クロボトキン訪問が、思想的変容を決定的にした。滞米中、処女作「かんかん虫」を書く。帰国途上、弟の壬生馬と共にヨーロッパを歴訪、スイスでホテルの娘ティルダ・ヘックを知り、生涯文通を続けるようになる。

明治四十年十二月、札幌農学校の後身、東北帝大札幌農科大学英語講師の発令を受け、翌四十一年一月札幌に赴任、母校に

奉職した。そして同年三月、前年「恵迪寮」と命名されたばかりの寄宿舎の係を命じられた。

知らせを受けた恵迪寮委員会は、「明治四十一年三月三日、有島講師、宿舍係として入舎に關し橋本学生生監（註・名は左五郎、札幌農学校第八期生）より問い合わせがあつた。委員会は

即日大歓迎の旨を答へる。乃ち十九日、有島講師入舎さる」と、喜びを寮史に記録している。



（当時の恵迪寮舎、中央が玄関、右側が南寮で、その二階の角が武郎の居室）

明治四十一年三月十九日朝、この日は曇って肌寒かったが、有島武郎は二台の櫓に荷物を満載させて恵迪寮に移ってきた。三十才になったばかりの少壮気鋭の教師と恵迪寮生との二百六日間の付き合いの日々がここに始まるのである。ちなみに武郎は、この年六月に大学予科教授となり、

面会し、二、三の雑誌に眼を通す。

三月二十五日 水曜

澄んで明るい朝、凍えるような寒さ。藻岩山に登ったらいいだろうと思った。

三月二十八日 土曜

夕食後、開識社の月例会があった。大勢の学生が話をし、僕もまた話した。寮生が實によく訓練されていることは十分信じてよいと思う。上手に導けば、彼らを勇氣ある前途有為の若者に育て上げることができるだろう。

寮史でも、この日の事や開識社での講話について詳しく記しているの、以下、関わる部分を紹介する。

「三月二十八日（註・午後六時より）、有島寄宿舎係の歓迎会を兼ねて第三十四回開識社を開く。「米国学生の生活」と題しての有島先生の米国帰朝談は若い寮生の心にアピールするところ多かった。

第一席 有島先生歓迎の辞 田中義麿委員長

第二席 御製を拜して諸兄に告ぐ 山内憲次君

第三席 人生と旅行 鈴木（？）君

第四席 辰丸は何を教ふるか 谷村愛之助君

第五席 米国学生の生活 有島武郎先生

（有島武郎講話内容）

何時もより活気があつて、うっかりした事が言へないが、此處に來た理由は家がなくなつたのと、諸君と一緒に居る方が、brown people になるからで、別段誰を監督するなんて言ふ様な大変な事では無いので、又來たくなかつた理由は賄の食事が非常に不味いと言ふ事と、此處に居るとどうしても缺點を出すからで、教室に居る中が良いが、ここではさうは行かぬ。まあ大決心でここに来る事になったからは、どうか諸君のお近づきになつて、何か面白い研究でもやりませう。

（中略・米国の学生生活について話す）

終わりに於て寄宿舎生活の精神を言ひたい。寄宿舎の下宿舎と違ふ點は、其、Meetingにあるのだ。即ち相互に信頼し、相互の權利を尊重して、家族的の親密を保つ事である。他人の權利を承認して、親しき青年等が斯く集合して一つの屋根の下に住むと言ふのは、實に面白い事で、又斯んな面白い生活は他に無い。之が又生涯中の美しい回想の一つとなる。世の中に出ると、皮ばかり被つて居る生活を爲さねばならないが、青年の時代に此の天真爛漫な美德を養つておけば、一生のpleasant Recollection（訳註・思い出）を味はふ事が出來て、愉快に且有為に暮らす事が出来る」

三月二十九日 日曜

曇、雪なし。自分は今朝藻岩山へ登ると学生達に宣言した。三十二名が一緒に行くことになった。三時に起床し、四時に

出発した。空気は気持よいくらいに冷たく、風はやや強く吹いている。学生達は嬉しくて有頂点になっている。山に近づいたころ、東の方、雲の切れ目に三日月が見えた。見渡す限り雪が廣がり、まるで寥々たる大海原の真只中に居るような気がした。實に感銘深い眺めだ。鑛泉の近くから登りはじめた。前に札幌に居た頃は、この邊りはこんもりと樹木が生い茂り、密生した森に特有の湿気のおいを放っていた。しかし今はそれらは切り倒され、邊り一面耕地に變っている。このように自然は早々人間に屈服し、遂には人間の手に触れられない所はなくなってしまうのだろうか。その時地上に生まれる者こそ災いなるかな。未開のままの自然が見られなくなつた環境に置かれたら、人間にどんな變化がもたらされるか、ほとんど想像すらできない。恐らくその時こそ、悲しむべき滅亡から二度と救われることのない、人類の完全な墮落の時代なのだろう。

頂上から滑り降りたので、学生達は大いに喜んだ。彼等は文字通り夢中になっていた。

恵迪寮史も、第一回藻岩山雪滑りと題して、以下のように紹介している。「三月二十九日午前四時、在寮生有志の者有島寄宿舎係引率の下に藻岩山の雪中登山を試み、雪滑りをなして午前九時帰舎した。未だスキーの行はれなかつた此の時代に於いて、有島先生の發案になる藻岩山雪滑りは、冬期肥肉の嘆に堪

へない寮生にとつて誠に適當した試みであつた。果たせる哉、以後この試みは本寮の行事の一つに數へられるに至つた」

田中義磨(明治三十八年入寮・第二十一、二十二期寮委員長。最初の寮歌「一帶緩き」作詞者)も「有島さん以下寮友三十三名、何れもボロ服に身を固め炭俵を崩して作つた古孤や古い畳表の切片を羽織つた異様の行装で寮を出発し、昨夜の寒氣に凍つた雪面に滑る足を踏締めながら午前六時半藻岩山の絶頂に達し、札幌市に面した急斜面を莫塵や菰を臂下に敷き雪上に両膝を立てて座り、敷物を股の間に挟んで前端を両手に持ち、足で調子をとりながら滑走するのである。その中に敷物が切れて了ふと松の枝を折つて敷いたり、或は全然敷物なしで滑つたり、スキーなどは樺太のロシヤ人が使ふさうなといふ話だけで誰も見たこともない頃のことだから、この原始的なスポーツにも百パーセントの興味を感じたのは申すまでもない」と回想する。

四月八日 水曜

十一時に寮の記念式があつた。学長(註・佐藤昌介。札幌農学校第一期生、札幌農学校校長を経て、初代学長、のち北海道帝大総長となる。註)、橋本、時任、森本の各教授が出席した。学長の話はとてもよかつた。夜、余興があつた。喜劇と道化芝居、大騒ぎと乱雑の夜だった。

恵迪寮史では「四月八日、本寮も開舎以来既に三歳、乃ち例

年にも増して盛なる記念式を挙行した」と記す。

四月十一日 土曜

曇、ときに雨。学長が予科のクラスで倫理学を講義なさる。一時まで家で勉強した。午後、再び読書する。夜、前田（註・名は謙吉、明治三十九年入寮。以下同）、板倉（勝則、同上、第二十五期炊務調度委員）、小熊（捍、同上、第二十五期、第二十七期委員長）の諸君が来訪する。

四月二十四日 金曜

寮の賄い問題が起こった。どうしても解決しなくてはならないところまで来た。委員会が成立した。多分自治が一番いい方法だろう。

賄い問題についての寮史の記述は「二十三日、室長会議に於て、自炊制度の採用が正式に決議されて以来、従来の賄問題調査委員会は自炊制度調度委員会と改まり、自炊制度実施を目指して活発な活動が開始された」

四月二十八日 火曜

曇。学校で四時間教える。とても疲れた。午後、寮で庭の手入れをする。

五月二日 土曜

朝、春が来たように明るく暖かい。顔を洗っていると、窓を

通して二人の学生が鳥を入れた鳥籠を持って来るのが見えた。彼らはそれを僕の前に置いたが、その中には白と黄色のひよこがいた。それらは柔らかな絹のうぶ毛のようで、柔らかな緑葉の上を妖精のようにころげ廻り、土から餌をとろうとしてよろめいている。めんどりは母親らしく、やさしく熱心に注意深く、ひよこたちを見守っている。長いことそれを見ていた。それに夢中になって、我を忘れていた。それから突然まるで夢からさめたように、我に返るとすぐに、ある考えが浮かんだ。僕はいった、「人間には生活をつづける十分なスペースがあるのだ」。涙が流れてきた。どうしてもかわからない。ひよこことどんな関係があるのだろうか。ああ、でも嬉しい瞬間だった。

朝食後、農場の裏手の方へ散歩に行った。春がこっそりと地中に息づいている。草も萌え始めた。針柵は枝一面に緑の新芽をつけている。そして見よ。青空で雲雀が囀っている。僕はじっと立って、荘厳な気持ちで、彼らの歌を聴いていた。僕を感動させているものは希望でも至福でも、喜びでもない。何かもつと悲しいもの、もつと甘酸っぱいものなのだ。多分、死の囁きかもしれない。

武郎も手入れた寮の庭について、寮史は「五月三日、小熊捍君、寮生十数名労働者一名にて作れる花壇（南寮、中庭及び玄関前）本日をもって落成す」と伝える。

五月九日 土曜

曇、暖。今日は野外教練日だ。

夜、学生が四人会いに来た。皆可愛い。真面目に話した。

寮史の記述「五月九日、午前十時より本寮前運動場にて第二十六回遊戯会開催さる。天候不良で時々小雨が降ったが観衆は群をなして集まった」

五月十六日 土曜

夜、寮で講演。吹田（順助。註―四）の「なぜ悲劇が面白いのか」と僕の「ゴチック建築」である。聴衆多数だった。

五月三十日 土曜

晴。朝、倫理学の講義。「愛」について話す。「自慰」を強調して話した。なるべく早くそれが悪徳であることを知り、やめるように希望した。

六月一日 月曜

妙な話だが、絵が書きたくて仕方ない。スケッチ・ブックを取り出して、時の経つのも忘れて耽った。実際に、僕は紫色の他の色に対する不思議な効果に深い関心を持っている。だから紫色と他の色との上品な調和を見出そうと努めてみせた。ある程度まで成功したようだ。紫と不透明な青とが混ざると死の感じを思わせるような非常に神秘的な印象を与える。



（明治41年6月6日、自炊制度祝賀会の日の記念撮影。
2列目の中央白い帽子をかぶっているのが有島武郎）

武郎と絵についての想い出を、原田三夫（明治四十年入寮、第二十五期炊務委員）が書いている。「寮の窓からでも、いくらかでもスケッチの題材を求むることができた。況や玄関を一步出ると、清流あり、緑野あり、森林あり、米国の田舎そっくりな牧場あり、画を好むものは胸をおどらせて彩管をふるった。当時寮の一室に起臥して寮生の指導にあたつてゐた有島武郎先生を中心に、画の好きな寮生十数人が集まつてきたのが黒百合会であつた。有島先生は、美術の方も相當に研究されてゐたし、画も非常に巧かつた。有島先生は林檎に南京豆が好きで、よく先生の部屋へ遊びに行つて南京豆を頬張りながら画の話をしたものだ。時々會員を集めて美術に関する講話もして下さつた。冬は誰かの部屋で、静物のスケッチ会もやつた。厳寒の日に牧場へ出て水彩の写生をしたこともあつたが色をぬるとすぐ水になつてしまふので諦めてしまった。黒百合会の第1回展覽会が開かれたのは、明治四十一年の秋であつた」

六月六日 土曜

午後、寮の仲間たちの写真をとる。夕方、自炊制度の祝賀会があつた。この問題は長いこと続いてきたもので、ついに彼らはこの制度を確立し、今日までのところ成功しているようにみえる。

寮史には「六月一日、終に自炊制度採用の日は来た。自分達

の飯を自分達の手でやつてゐるのだと考へた時に委員の苦勞も實に明かであつた。六月六日、午後一時から運動場に於て、卒業生送別記念撮影並に自炊制度実施記念撮影をなす。午後五時より食堂に於て自炊実施記念祝賀会を開く。多年の宿願成つて茲に芽出度く自炊制度の実施を祝ふ日を迎へ得た事は全寮生の非常なる喜びであつた。橋本学生監・有島寄宿舎係の祝辞があつて楽しい晚餐を共にす」と喜びが記されている。

六月七日 日曜

曇。朝、教会へ行く。帰宅して、少し本を読んだ。夕方、外出して森本を訪問、それから夜学校（註・遠友夜学校）へ行った。

六月十四日 日曜

札幌では今お祭りの最中だ。創成川沿いにたくさんの見世物が出てゐる。大変な人出だ。

六月二十日 土曜

強風、やれやれ。朝、予科一年の試験。夕方、緑の草木でこんなもと飾られた博物館の庭を散歩した。美しく落ちて着いてゐる。

六月二十四日 水曜

集会室で水産科の会があつた。彼らは皆いい青年だ。窓越しに緑色の葉を見ると美しい。何と新鮮で、また何と爽やかだろう。

六月二十六日 金曜

夜、寮の最後の会（注・当時は九月が新学期で、六月が学年末）。アメリカ滞在中の夏の仕事について彼らに話した。武者小路（実篤、作家。註一五）から二十八日に着くという葉書が来た。

この日の行事について寮史は、「六月二十六日、一般学年試験の終了を期に午後八時より食堂に於て離別会を開く。有島寄宿舍係の『米国に於て暑中休暇中精神病院に過せし折の話』と題する講話があった。茶菓饗應・余興等あり、頗る盛会であつた」と伝えている。

七月一日 水曜

家に戻ると、納富（註・名は喜雄、明治三十八年入寮、第二十四期衛生委員。以下同）と平野（善嗣、明治三十九年入寮、第二十六期委員長）が、寺本（秋作、同三十八年入寮）の問題を話していた。哀れにも、彼はとうとう「生存競争」に敗れたのだ。生存競争とは何だ？ 社会は厳しくその好みによつてでき上がっていて、もしその好みに自分を適合させることのできない者が現れると、その人は生存競争に敗れるのだ。もう少しこの問題を考えてみよう。救済策は何か。

平野等が有島に相談した寺本の一件については、平野自身が

『武郎の想い出』の中でふれている。「僕の友人にTといふ器用な男がいたが、一寸した機勢から道楽を始め、遂に札幌を去らねばならぬ羽目となった。所が肝心の旅費がないので、今製麻会社の技師をして居る納富君などという苦心の結果、有島先生へ持ち込んだ。先生は善いとも悪いともいはずに沢山の金子を與へてくれたので、これをTに渡したが迷路に陥入つてゐた彼のことだ。其大切な金も遊興に悪用されたと後でわかつて、我々は先生に対し顔向けもできなかった。併し先生は例によつて善いとも悪いとも言はれなかった。

其後Tの消息は絶えた、而して有島先生も永遠の眠につかれた。数年前、東京での話にTは満州で立派な人格の所有者として活動してゐるとあつた」

七月十一日 土曜

午前、武者（小路実篤）が札幌を去つた。思ったほど武者をもてなせなかつたのが残念だ。彼の性格は僕が考えていたのとは違つている。彼は所詮は苗床の植物だ。しかし洞察力や感情と理性の融合した力といった稀な才能のある男だ。

七月十三日 月曜

夜、寮生たちが会いに来る。全部で十二名。とても楽しかつた。

七月十四日 火曜

曇り。今日から入学試験（註・東北帝大札幌農科大学入学試

験)が始まった。試験に出るのは嫌いだ。不安と長い間の努力から来る疲れとで瘠せて青白い顔をした若い連中を見るのは酷だ。

七月十六日 木曜

晴。午前、英語の試験。午後、答案を見る。彼らの英語の能力は恐ろしく貧しい。中学校の教育に何か欠点があるに違いない。

七月二十八日 火曜

晴。朝、出校。それから札幌発十一時四十五分の列車で狩太に向かう。農場(註・有島農場)を訪ねて、この一年間に溜まった仕事をかたづけるのだ。(註・八月四日帰札)

八月七日 金曜

十一時四十五分の列車で狩太に向かう。

このとき武郎は、有島農場で三泊のあと帰京。東京で陸軍少将・神尾光臣の次女安子と見合いをし結納をかわした。一カ月余を過ごしたのち札幌に戻ったのは九月十七日で、表題の「有島武郎、恵迪寮での二百六日間」も、実際、武郎が寮に滞在していたのは、百五十日程度と言えるだろうか。札幌へ向かう前日、武郎は日記に、安子についてこう記している。

九月十四日

彼女を書斎に連れて行き、僕の社会的、個人的、宗教的立場

のすべてを説明し、名誉や財産で彼女を満足させることは出来ないむね強調した。安子は僕のいったことを理解し、申し出に同意した。僕は彼女の手を握った―初めて―、決して忘れ得ない感情を抱いて。夕方、我々は新渡戸博士を訪問し、熱心に話した。

九月十五日

安子は来て、主婦のように手伝ってくれた。僕は彼女を抱きしめ、何度もキスした。彼女は泣いた。夜、東京を去って、札幌へ向かった。

九月二十七日 日曜

明るい、穏やかな秋日和。朝、安子へ手紙。それから日曜学校(註・独立教会日曜学校)へ行った。あそこも何か改革をしなくてはならない。学校の運営上、何かを改良するために、できるだけのことをする決心だ。

十月七日 水曜

陽光、雨、嵐。かくも激しい天候の変化! 秋の天気がこうも度々変化するとは気がつかなかった。天地の様に何か落ち着かないものがある。まるで自然が近づく冬を怖れて喘いでいるようだ。

十月十日 土曜

概して晴、時々雨。北三条東三丁目九番地へ引越す。守谷(註・名は勝三郎、明治三十九年入寮)、板倉、前田、米田(繁次郎、同上)、それに足助が手伝ってくれた。十二時ま

でに落ち着いた。安子からの手紙なし。寮で僕の送別会。

有島武郎の退舎について恵迪寮史では、以下のように伝えている。「十月十日、半歳に亘って當寮寄宿舎係として精神上に種々貢献された有島武郎先生は都合により本日退舎され、代わって恵迪寮自治建設の為に努力された先輩高松正信（第十八期委員長）講師寄宿舎係となる。有島先生の寮生に及ぼした感化は實に偉大であつて、開識社を始め色々の集會に於ける数々の講話が今尚先輩諸氏の腦裏に深く印せられてゐる事實に照しても明かである。集會室に寮生を集め、あの輝かしいまなざしに愛を湛へてクロポトキンを講ずる先生の姿は、想像するだに胸の高鳴りを禁じ得ない。寮生が如何に先生の退舎を惜しんだことか！乃ち當夜兩寄宿舎係の送迎会を行ふ」と。

有島武郎が恵迪寮に移ったときの寮委員長、田中義磨は、「森本（厚吉）さんはあの精力的な迫力を持つて盛にローズベルト主義を鼓吹され、また毎週集會室でカーライルのサーター・レザータスを講義したりして大きな感化を與へられたし、有島さんはまたあの高雅な風格と真摯そのもののやうな態度を以つて、開識社例會での講演や、係室での座談や、また朝夕の起居動作に於て、舎生に深い敬慕の念を刻みつけられた。一見冗員のやうに見える寄宿舎係なるものが、その實大きな役目を勤めてゐた」と回顧し、また平野善嗣（第二十六期委員長）は『武郎の想い出』の中で「森本先生のあまりに米國式なるに反して、

（有島）先生は純日本式であつた。舎生と食卓を共にし、而も麦飯や沢庵など喜んで上がられた。出きるだけ舎生に接触されたので自然親しみを感ずる様になり、果ては金の才覚から戀愛の後始末まで持ち込まれた」と、懐かしむ。

有島武郎は、寄宿舎係を辞めて寮を去つてからも開識社で講話をするなど恵迪寮への思いは深く、永年にわたつて寮とのつながりが続いた。退寮してまもなく行われた寮の名物行事の一つ、定山溪徒歩旅行にも参加している。

十月十七日 土曜

晴れ、午後、風。寮の自治会の遠足に参加して、七時に定山溪に向かう。沿道の景色は美そのものだ。どちらを見ても一面秋の紅葉である。

十月十八日 日曜

また晴。定山溪を十時に一人で出発した。全然休まないで全行程を歩き続けて、自分の脚力を試さんがため、それに、僕の優しい愛情に抱かれてゐる人の思いに耽らんがためでもある。

有島武郎日記「観想録」からの引用はこれで終了し、開識社でのその後の武郎の講話を恵迪寮史から抜粋してお伝えする。

第三十八回開識社

明治四十一年十二月二十一日午後六時より食堂に於て、忘年会を兼ねて開く。

先づ委員の報告あり、終りて直ぐ有島先生の演説を請ふ。先生は非常なる熱心を以て、ノルウェーの文豪イブセンの「ブランド」に就き話さる。舎生一同静肅に傾聴す。

第四十一回開識社

明治四十二年四月二十四日午後七時より開催さる。

第一席 杜鵑一聲 赤木顕次君

第二席 一里塚 谷村愛之助君

第三席 津軽海峡の南北 小熊 捍君

第四席 宗教と科学 有島武郎先生

最後の有島先生の演説の大意は、科学界が古来数度の大打撃を宗教界に与へたり。然れども科学の最も進歩せる今日、尚ほ種々の点に於て神なる存在を離れて解釈することを得ず。然もこれ迄受けたる大打撃の大部分は、却つて宗教界にとり幸福なる結果を表はせり。今日の大打撃たる進化論の如きも、或は又宗教界にとり却りて幸福とならざるなきを保せず。要するに宇宙間の現象は、之を科学的に言ひ得ずして、神なる考を得て始めて理解し得るものなりと。

次に田中義磨君が之に就いて辯駁の質問演説をなし、先生又之に対して辯解する所ありたり。

第四十二回開識社

明治四十三年五月二十二日午後七時より開会す。本夜は討論会を催す。

第一席 開会の辞

第二席 委員報告

第三席 討論

議長を有島先生に託し、左の題目にて討論す。

- 1 人生には目的ありやなきや
- 2 日本前途は樂觀すべきや、將た悲觀すべきや

第六十一回開識社

明治四十五年二月十一日開催す。

第一席 人類 福山伍郎君

第二席 世界と平和 渡瀬次郎君

第三席 信仰と慰安 清水時雄君

第四席 無題 有島武郎先生

人生觀を説かる。即ち現代は既に意の時代に入りたる事を説き、吾人の針路は忠実なる科学者、熱烈なる宗教家否信仰によりて定めらるるものなることを述べらる。

第六十六回開識社

大正二年一月二十五日午後六時より開催す。

第一席 物質文明を賛美せよ 荒川謙吉君

第二席 日本に於ける精神文明發達の必要

黒川鷹揚君

第三席 十年後の今日今夜

第四席 西洋画發達に就いて

志賀恭次君
有島武郎先生

有島武郎は、恵迪寮を去った翌明治四十二年、安子と結婚して札幌に新居を持った。予科教授として、また新渡戸稲造から託された遠友夜学校の代表者として、さらに明治四十三年に創刊された「白樺」の同人としての活動が始まるなど、生活は多忙を極めていった。また札幌在住中、長男行光（後の俳優、森雅之）、次男敏行、三男行三の三児をえた。



（両親と武郎夫妻＝札幌＝）

ますます重くなり、この年三月、武郎は農科大学に辞表を提出

した（休職扱い）。その際、記念として、恵迪寮に英、独、和書五十冊を寄贈した。また翌五年四月には、「恵迪寮歌集」に、かの序文「恵迪寮生諸兄」を寄稿した。妻安子は、この年八月三人の幼子を残して他界した。

大正六年、休職満期となって、有島武郎は東北帝大札幌農科大学を正式に退職した。こうした人生の大きな変動の中で武郎の作家としての活動は、急速にピークに向かう。彼の代表作がこの前後相次いで発表、発刊されていた。

（大正三年）「お末の死」

（大正四年）「宣言」

（大正六年）「惜しみなく愛は奪う」、「カインの末裔」、

「迷路」

（大正七年）「小さな者へ」、「生れ出づる悩み」

（大正八年）「或る女（前編）」、「或る女（後編）」

（大正九年）「一房の葡萄」

* この頃より次第に創作力落ちる。

（大正十年）「小さな灯」、「白官舎」

* この年、有島武郎は母校北海道帝国大学（大正七年に独立）の苦学生のために「故有島安子記念奨学金」の名をもって五千円、同大学協済会に五百円、同大学基督教青年会にも相当額を寄付した。

（大正十一年）「宣言一つ」、「星座」、「ドモ又の死」

* この年、札幌時計台で、「惜しみなく愛は奪う」を

講演、狩太（現・ニセコ町）の有島農場の解放を宣言。

（大正十二年）六月九日、軽井沢三笠山の別荘で、「婦人公論」記者・波多野秋子と心申。

ここで、寮生、友人による有島武郎の想い出のいくつかをまとめてご紹介する。

『教師としての武郎氏』

XYZ（氏名不詳・明治四十四年当時在寮の恵迪寮生）

「（有島）先生は予科の語学を受け持って居られました。若し訳語に適当な辞句が見つからない時は、真黒な、心持ち縮れた長い櫛目の通った事のない髪の下がった白い額に手を当てて瞑目されます。それは何うしても語学の教師でもなければ、勿論農学士でもなく、思想界の人のやうに見えました。一体先生の御顔は何ちらかと申せば沈鬱な、影の多い方です。そして、レクチュアに油が乗ってくると、先生は教壇の一方に立たれて、椅子の一本の脚を中心として、ぐるぐる廻しながら話をされる癖がありました。教壇に於ける先生と、学校の会なぞで御得意の思想上の講演をなさる時の先生とは、全く別人の感がありました。先生の講演のある時は何時も講堂は満員で、少し遅れて行くと聴かれないことが度々ありました。学生の受けは先生位一般的に好感と尊敬とを以て迎へられた人はありますまい。中

には有島宗とも云ひ度い程熱烈に先生の人格に推服して居たものもありました。（中略）先生は多くの教師の中で我々若い者の心に対して常に理解と同情とを持った有力な味方でした。学生が人生観とか倫理問題とかいふものに疑ひを抱いたりして、先生に御相談に行けば、何んな学生に対しても決して好悪の差別なく一様に熱心に聴いてやって、御自分の意見をも述べ、注意をも与へられたといふ事です」

樋口 櫻五（明治四十四年入寮。大正三年度

寮歌「我が運命こそ」作歌）

「僕の入舎する一、二年前まで寄宿舎係をして居られた有島先生を中心として、会名はなかったが予科生の多くが集まつて課外講義があり、それは凍影社の文学的に比して稍思索的であり哲学的であつて、而も先生のカーライルのサーターレザルタスを頗る示唆に富む調子で譯述された頃の感銘は、クロボトキンの相互扶助論の梗概をきいた夜と共に、青年の僕達に如何に眞善美に対する憧憬を深くさせた事であつたらう」

『極めて人間的なる人』

足助 素一（註一六）

「（有島君は）英文学を教へてゐた。真偽は保証出来ぬが、

或時の英文和訳試験に、一生徒の巧妙な答案から自己の教示の誤謬を発見した彼は、自己の予て教へた通りに解答したものに満点、前者にも満点を与へ、次学期の開始と共に級生一同に向かつて自己の誤謬を明白にし、陳謝の意を致したといふことである。(中略) 札幌には、新渡戸稲造氏の札幌農教授在職中設立せられた、遠友夜学校といふ、貧しき人々の子弟の為に建てられた小学程度の夜学校がある。その校歌「楽しききわみ」は彼れが在学中作歌したもので、清教徒的思想を鼓吹し、今日までの随分生徒の品性陶冶に資したものである。彼れは農大教授在任中にこの校長を兼ねてゐた。(中略) 彼れは誰にでも融け合ふ心を持つてゐるから。大正四年春、彼れは愛妻の病を看んが為に家を挙げて帰京した。大正五年夏、其妻を失ふまでの彼れの心尽しは、感心とか感服とか位の言葉では到底表はし得ない」

『札幌時代の有島君』

吹田 順助

「札幌にゐた時代は、君は可也急がしいやうだった。学校の方でも教授以外にいろんな用があつたやうだし、講演会などにも度々引つ張り出されたし、日曜学校や遠友夜学校の校長をしたり、それから黒百合会といふ学生達のやつてゐる絵画の会にも関係したり、「白樺」の原稿なども押し迫つてから書かねばな

らなかつたり——然し君はさういふ忙しい中を、活動的にグングン切り抜けて行つた。それに君の家は、一時は一部の学生や僕等のグループのサロンのやうな趣きがあつた。(中略) 科学上の問題を持つて、君の所へ議論をしに来る学生や、境遇上或は人生観上の苦悶を訴へに来るものもあつた。それから暖炉の周りで林檎や南京豆を齧ぢり乍ら、無邪気な呑気な話に打ち興ずるやうな夜もあつた。さういふ時には君はやはり無邪気な青年となつて、腹を抱へて笑ひ崩れた。さうかと思ふと、快活な君は時々蒼白な顔を曇らせて、独自の道を行く人のみが知つてゐる孤独と懷疑とに深く悩まされてゐる様な事もあつた。あの時分は蓋し君のシュツルム・ウント・ドラング時代だつたらう」

最後に、本稿冒頭において、私が本稿を書くきっかけとして記した、有島武郎の寮生への暖かい愛情に溢れた一文「恵迪寮生諸兄」(主要部分を抜粋)を紹介して本稿を締め括りたいと思う。大正五年(一九一六)、初の「寮歌集」発刊にあたつて、武郎がその序文として寄稿したものである。

『恵迪寮生諸君』

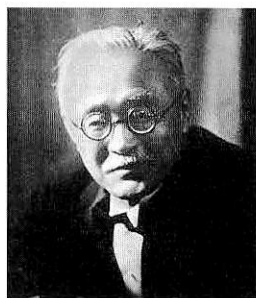
半年ばかりの短日月ではあつたが、私も寮の飯を喰ひ、寮の寢室に寝たものです。私の部屋は南寮の二階の西の隅で、其所

からは毎日手稲山の後ろに落ちる夕日を拝む事が出来ました。而して寮生諸兄は私を齡の違った友達として取り扱ってくれました。一緒に圓山（藻岩山？、註）の雪にりにも行き、一緒に鶏の雛を盗む鼠賊の征伐もし討論会には議長に祭り上げられて、散々油も搾られ、食堂では一葉に舌鼓を打って飯の喰ひ競らべもしました。その記憶は今でも眼に見るやうに頭の中に焼き付けられて居ます。然し時は過ぎて消えました。それを思ふと不思議に自分の過去がなつかしめます。

今寮にある諸兄の上にも聴て私と同様な経験が到来する事と思ひます。恵迪寮は幾百幾千の人の若盛りの記念碑です。其所に毎夜ともされる灯の光は爲す事もなく徒らに老いた人々にとつて如何に痛烈な鞭撻でありましょう。其所に毎日歌はれる寮歌の声は遠い未来を目掛けて勇み立つ少年の群れにとつて如何に羨むべき樓閣でありましょう。諸兄の今あるやうな美しい力強い躍進的な時期が一生の中に幾度現はれ出るでしょうか。寮の出口は入り口より大きいに違ひありません。然し諸兄が一度その出口から外に歩を移すと、その大きな出口さへも再び諸兄を迎へるべく余りに小さな門となるのでありますまいか。私は諸兄の若盛（り）を祝します。而して諸兄がこの時期の為に最上最善の満足を求められん事を祈ります。

一九一六・四月

有島 武郎



（註一）新渡戸稲造。札幌農学校二期生（恵迪寮の前身、農学校寄宿の二期生）札幌農学校教授時代に貧困家庭の子女のため遠友夜学校を設立、のち京都帝大教授、第一高等学校長、東京帝大教授、東京女子大初代学長を歴任、大正十五年（一九二六）国際連盟事務局次長に就任。

「われ太平洋の橋とならん」という有名な言葉がある。



（註二）内村鑑三。新渡戸稲造と同期の札幌農学校二期生で寄宿舎生活も共に過ごす。クラーク博士の直接の薫陶を受けた第一期生の伝導を受けてキリスト教に入信、札幌基督教会（後の独立教会）設立に参加、のち

渡米。帰国後「余は如何にして基督信徒なりし乎」等を著した。内村の無教会主義に基づく聖書研究は、当時の青少年を惹きつけ、明治期の思想、文学、教育界に大きな影響を与えた。

（註三）森本厚吉。札幌農学校の学生時代に有島武郎と知り合い、武郎の生涯の親友となる。在学中に武郎と共に著「リビングストーン伝」を出版。同校卒業後、アメリカ・ジョ

ンス・ホプキンス大学を卒業。経済学博士。東北帝大札幌農科大学予科教授時代は、武郎に先がけて恵迪寮の寄宿舎係になるなど寮生に大きな精神的影響を与えた。

(注一四) 吹田順助。一高、東京帝大卒業後、有島と同時期、東北帝大札幌農科大学予科教授となり有島や足助と親しく交友を深めた。

(注一五) 武者小路実篤。明治十八年生まれ。東京帝国大学中退。明治四十三年(一九一〇)志賀直哉、有島武郎らと『白樺』を創刊。武郎同様、白樺派を代表する作家として、大正時代の文壇の先頭に立った。代表作に「お目出たき人」「幸福者」「愛と死」「馬鹿」などがある。

(注一六) 足助素一(あすか そいち) 札幌農学校予科時代からの有島武郎の親友。卒業後、数奇な人生を歩んだが、叢文閣を作り有島の作品集の発刊に功績を残した。

(資料)

有島武郎の紹介や略歴等は、山田昭夫、内田満共編の近代文学資料「有島武郎上・中・下」(桜楓社発刊)を主に、「有島武郎全集」(有島武郎と作家たち)(有島武郎研究会編、右文書院発刊)なども参照した。

引用の有島武郎の日誌「観想録」は、私自身かつて東京の近代文学館に所蔵されていた原文に目を通す機会があったが、今

回は有島武郎全集(筑摩書房版)の小玉晃一氏訳(原文は英語)を利用していただいた。

恵迪寮の歴史叙述は、昭和八年発刊の「恵迪寮史」から抜粋した。同様、田中義麿氏、平野善嗣氏、原田三夫氏、樋口桜五氏の有島武郎に関わる記述も「恵迪寮史」の回顧録所載の中から抜粋した。

吹田順助氏の「札幌時代の有島君」、XYZ氏の「教師としての武郎氏」は、共に角川文庫「生まれ出づる悩み」所載から引用(抜粋)した。原文はいずれも大正六年九月発刊の「新潮」に発表されたもの。足助素一氏の「極めて人間的なる人」は、角川文庫「カインの末裔」所載から引用(抜粋)した。原文は大正六年九月発刊の「新潮」に発表されたもの。

特集「有島武郎、恵迪寮での二百六日間」において使用した写真の所蔵者は左記の通りです。

- ① 有島武郎：日本近代文学館蔵
- ② 旧恵迪寮：北大図書館蔵
- ③ 寮生記念撮影(明治四十一年)：北大図書館蔵
- ④ 武郎夫妻と両親：日本近代文学館蔵
- ⑤ 内村鑑三ならびに
- ⑥ 新渡戸稲造：「青春の北大恵迪寮」(恵迪寮同窓会発刊)から転写

恵迪寮の野球部の先輩たち（その三）

古 川 俊 実

（昭和三十一年入寮）

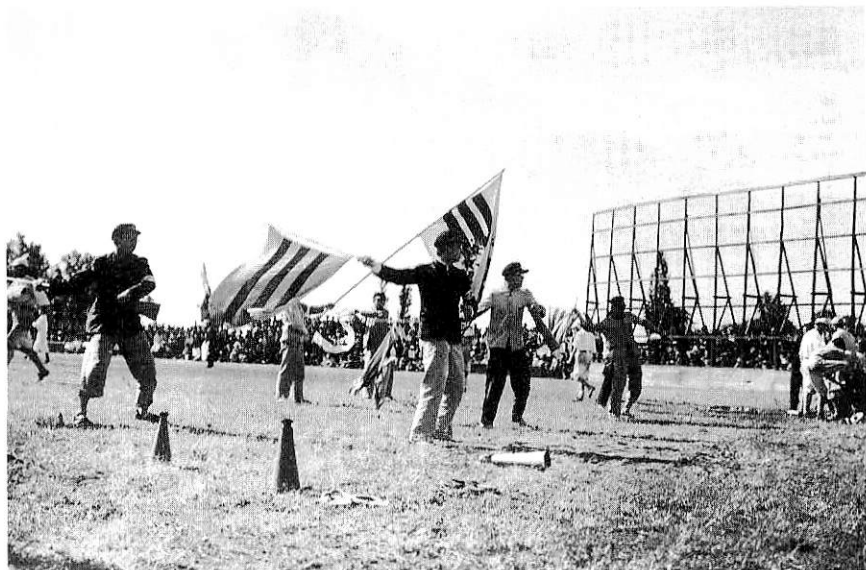
文明開化とともに日本に導入されたベースボールだが、北海道では、札幌農学校生が一八七六年（明治九年）の開校時から人気スポーツとして親しんだ。二十世紀が始まった一九〇一年（明治三十四年）、他の運動部とともに野球部が発足。その四年後、現在の理学部前に移転・開寮した初代恵迪寮生を中心に本格的な部活動に移った。校名は札幌農学校↓東北帝大農科大↓北海道帝大・予科↓北海道大と変わったが、一九一二年（明治四十五年）に始まる小樽高商↓小樽商大との定期戦は「北の早慶戦」といわれ、人気を集めた。その間、一九二〇年、予科と本科の野球部は分離された。当時の予科野球部にとって、全国高専↓高校大会（インターハイ）制覇が目標だったが、それにも増して最大の眼目は恵迪寮生の応援団を先頭に全校一丸となつての春秋の対小樽高商戦だった。「得点のたびに試合を中断し応援団がグラウンドで狂喜乱舞した」「試合時間が長びくため選手たちの空腹をいやそうと応援団がベンチに差し入れした」「小樽市民は高商勝利をちようちん行列で祝った」「予科は勝利の翌日の授業が休みになった」など、往時の逸話が残されている。しかし、戦争の世紀の苛烈さは、「敵性スポーツ」として、野球部の解散と伝統の対校戦中止という事態にまで立ち至った。前々号・前号に続く本稿は、この時代状況に焦点を当てたい。

（西暦主体で記述・文中敬称略）

■野球部廃止命令前の最後の定期戦

歴史的な試合だった。北大予科―小樽高商の通算五十五回目

の定期戦だ。一九四二年（昭和十七年）六月二十八日、日曜日。ところは第二代恵迪寮前の北大球場。前日の雨でグラウンドは少し軟弱だったが、朝からの快晴でコンディションはまずまず。



戦時中、最後の北大予科一小樽高商戦。
予科側の応援風景（1942年6月28日～今宮明男氏提供、以下同）



（同。予科側は着々と得点）

予科チームは、この日に備え合宿していた恵迪寮前から部先輩の須田政美（豊原中・一九二八年入寮）が作詞した莊重な部歌『南征歌』を歌いながら球場に乗り込んだ。かつての源平合戦を思わせるように、応援団は紅白の対決。三塁側に陣取った予科側は羽織はかまの団長を先頭に白いのぼりを掲げ白旗を打ち振り大太鼓をとどろかせ、『都ぞ弥生』や『昭和五年応援歌』

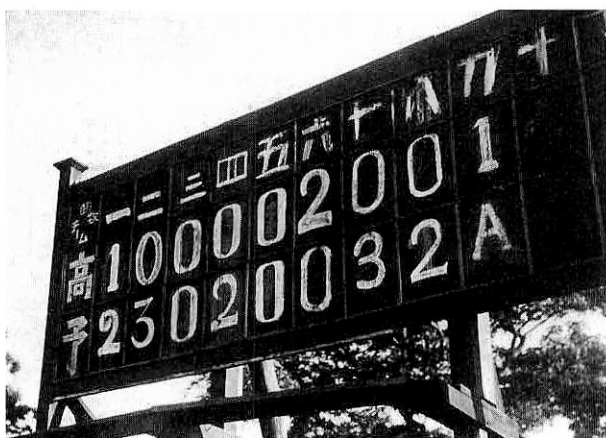
（須田作詞）の

「大鵬めぐる北海の空」を歌いながら、歓声をあげれば、一塁側では高商応援団が赤い装束で対抗した。

戦時下とあって、試合に先立ち、二年前からの慣行どおりに中村重夫主審の発声で「宮城遙拝（きゆうじょうようはい）」「戦没英霊への

感謝と皇軍将兵の武運長久を祈願する黙禱（もくとう）をし
て、午後二時五分、プレーボールとなった。

小樽高商 1 0 0 0 0 2 0 0 1 4 安5四11振3失6
北大予科 2 3 0 2 0 0 3 2 A 12 安5四20振7失4



（同。大詰めで騒ぎとなったスコアボード）

高商は初回二死から四球を足掛かりに盗塁と敵失で先取点を挙げた。しかし予科はその裏、二四球と連続ワイルドピッチで逆転。二回にも高商・中島投手の制球は定まらず、急きょ滝沢捕手が救援登板したが、予科はこの回五四球三ワイルドピッチで3点を追加。その後も四死球に安打を絡めて着々と加

点。予科は出場9選手が全員四死球・全員得点をマークし、両チーム合わせて29残塁という乱戦を制した。

高商側は懸命の追撃を試み、再三チャンスを作ったが決定打がないまま回は進んだ。そして大詰めで騒ぎが起った。9回表、高商が四球・盗塁の走者を、適時打でかえし、なお攻撃中に、センター後方のスコアボードで得点係をしていた予科生が故意か偶然か、予科9回裏にA（現在ならX）を掲示し、試合を終わらせてしまった。気付いた高商側が猛烈に抗議中、赤だすきの高商応援団副団長がグラウンドを一直線に駆け抜け、その予科生を引きずり下ろし投げ飛ばしてしまった。グラウンド内では応援団双方が入り乱れて騒然となったが、審判団の仲裁で何とか試合を再開し、午後五時四十分、熱闘は終わった。予科は対高商戦に3連勝した。高商側マネジャー井上哲夫（札幌一中＝現・小樽商大野球部OB会長）はスコアブックに記している。「われわれは白旗乱舞の中を涙にむせびながら退場しなければならなかった。唯（ただ）無念である」と。

予科ナインは一・二年生だけで、主将の塚田文男二塁手（開成中）有馬俊六郎投手（神戸一中）鹿野清六一塁手（東京府立九中）鈴木英世右翼手（石巻中）宮川桃司捕手（飯田中）長岡亮一中堅手（奉天一中）の六人が恵迪寮生だった。喜びにわくチームは狸小路そばのおでん屋「両関」で祝勝会を開き、応援団の寮生たちは春宵の町に繰り出しストームを爆発させた。

これが「最後の定期戦」になるとは、両軍選手も応援団

も、そのとき知っていたわけではない。しかし、この日、農学部に進んでいて予科チーム監督を務めた今見正（79歳）早稲田中・一九三九年入寮）は、「ひょっとすると」という予感が胸をよぎったと話す。前年のインターハイが中止になったからだ。今見は父・昇（一九〇九年入寮）と二代続く野球部員寮生で、予科二年時からエース3番打者で奮闘。前年の三年時も六月の高商戦で連勝を飾った後、インターハイに出場するため勇躍京都へ出発した。途中の駅で「タイカイムキエンキトナル」との電報を受け取った。とにかく京都まで行き、当番校の三高に確かめると、「急な命令で大会は開けなくなった」とのこと。

近衛内閣は七月中旬の改造を控え、泥沼化する日中戦争に加えアジア太平洋全域への戦線拡大に備えて臨戦態勢をとった。そして学生を居住地に足止めするため全国的スポーツ大会の禁止を文部次官名で極秘通達した。インターハイにとどまらず、第二十七回全国中等学校優勝野球大会（通称・甲子園大会）も中止に追い込まれた。既に各地区予選が始まっていたが、この通達で甲子園での決勝大会が開催できなくなったのだ。「防諜を理由に中止を紙面で報じることを主催者の朝日新聞は禁じられ、国民の知らぬ間に大会はシンキロウのように消えてしまった」と全国高校野球選手権大会史は記している。

■戦時動員体制下で恵迪寮にも重圧

戦争の時代だった。満州事変（一九三二年＝昭和六年）↓満州国建国（三二年）↓日中全面戦争突入（三七年）↓第二次世界大戦開始（三九年）↓日独伊三国同盟締結（四〇年）↓太平洋戦争突入（四一年）という経過だが、恵迪寮にも野球部にもその重圧が次第に大きくなっていった。

一九三四年に入寮した梶原英雄投手（麻布中）河合正恭遊撃手（東京府立二中）小川芳郎一塁手（横浜一中）は、三年生となった三六年、寮委員長・北寮寮長・購買部委員などを務める一方、チームの主力だったが、八月下旬、野球部室に帰寮し、名落書きの数々が白いペンキで塗りつぶされているのを見て、がく然とした。昭和天皇が統監する十月の陸軍特別大演習の際に新装の農学部本館が大本営・行在所（あんざいしよ）になることが決まり、それに先立って学校当局は寮各室の落書きを夏休み中に全部消してしまつたのだ。「当時の落書きは廊下には全くなくて室内だけだつたうえ、天皇の恵迪寮視察が予定されていたわけではないのだが、学校側は強硬措置をとり、以後の落書き厳禁を命じた」と河合正恭（82）は話す。

大演習のため九月下旬から二週間、練習も禁止された。やつとグラウンド使用が許され、十月十八日に催された対小樽高商定期戦は北大予科が梶原主将の力投で快勝した。梶原は父・兄も野球界で著名な選手だった。兄英夫は高松中投手として第十二・十四回甲子園大会で活躍。東大では七割二分二厘という不滅の高打率首位打者記録を東京六大学野球リーグ戦史に残した

が、一九四三年、中国戦線で重傷を負い三十三歳で死去した。

ところで北大予科当局は三六六年の大演習後、寮行事への干涉を一段と強めた。三七年入寮の上原茂胤（神戸一中）は予科三年時に熱血漢の主将・中堅手として活躍するとともに、伊藤直国左翼手（安積中）小林吉郎一塁手（柏崎中）らと寮委員として学校側の横やりに抵抗。復活させた寮生の定山溪旅行の際、芝居を強行したため、計五人が停学二週間の処分を受けた。

学校側は寮の自治運営にも介入、一九四一年初めから選挙での委員選出制を廃し、予科長が任命する幹事会での運営へ変えた。黒羽仁左翼手（東京市立二中・三八年入寮）は第一期寮務部幹事に任命された。一年後輩で、今見正とともに第三期幹事会委員として十二月八日の日米開戦時を迎えた尾崎克平三塁手（78歳＝田辺中）は「あの日、札幌は大雪で、私は寮の仲間と春香山へスキーに出掛けた。しかし大部分の予科生は、学校当局の方針に従い、市内の全中学校・女学校生らと円山の札幌神社（現・北海道神宮）での『戦勝祈願』に参加した」と話す。

戦火の拡大につれて、国民生活への制約が厳しくなっていた。学生スポーツ全般について「競技より決戦体制での体力育成が主眼」という文部省の方針で、各運動部は各校の鍛練部に属することになった。本科野球部は北海道帝大全学生会鍛練部野球班、予科野球部は北海道帝大予科桜星会第二鍛練部野球班、小樽高商野球部も鍛練部野球班とされた。定期戦は一九四一年から年一回だけになり、この野球班同士の対戦は六月一日小樽

花園球場で行われ、今見の力投と打線の援護によって、予科が4―3で高商を下した。そして、太平洋戦争突入から半年後の四二年定期戦が最後となった。

その定期戦に出られなかった4番打者・斎藤実（一九四〇年入寮）のことを今見正は痛切に思い起こしている。予科野球部員で甲子園大会経験者は、木村英男（一九二三年入寮）が長岡中時代、北陸代表として第五回と第七回大会に右翼手で出場したのが第一号。斎藤は秋田中三年のとき、奥羽地区代表となった同中チームのトップバッターとして第二十三回甲子園大会に出場。四・五年生時は予選で敗れたが、北大予科の入試にパス。予科野球部が誕生して以来2人目の甲子園経験部員となった。入学直後の対小樽高商戦から4番・遊撃手として登場。3番今見とのコンビで四〇年と四一年の定期戦連勝の立役者になった。その高揚感からか四一年六月の試合後、斎藤は中寮の野球部の部屋の壁に墨書してしまった。巡回の寮監が発見し、前述の経緯を踏まえた「寮規則違反」として彼を即刻退寮処分にした。球友たちによる赦免嘆願は実らなかった。その後、彼は留年をして野球部からも離れていた。「順調にいつていれば、あの最後の定期戦の際も最上級生として、4番を打っていたらう」と今見は述べた。

■敵性スポーツ視され野球部は解散

剣道・柔道・弓道・馬術・射撃・相撲や肉弾戦を伴うためラグビーが奨励されたのに対して、野球とテニスは「敵性を帯びた外来スポーツ」という見方をされた。一九四三年（昭和十八年）四月、文部省は戦時学徒体育訓練実施要綱を通達。これに基づき、神宮球場を舞台に数々の名勝負で全国のファンをわかせた東京六大学野球リーグ戦をはじめ東都大学野球と関西六大学野球の3リーグ戦が廃止され、各連盟は解散となった。同時期、全国高校長会議は硬式野球班の完全廃止を決定。五月十三日、北大予科野球班は学内学生ホールで解散式を行った。部結成から四十三年目のピリオドだった。対小樽高商定期戦は通算55戦で北大側33勝22敗で止まった。

前年、予科に入学早々、最後の定期戦にトップバッター・三塁手で出場して、戦後、理学部卒業後は北大教官の傍ら野球部の監督・部長・総監督を長く務めてきた今宮明男（74歳＝旭川中）は当時19歳。「五つのときからボールに親しんできたが、もう二度と握ることはあるまいと思った」と話す。野球班員たちは「戦場競技班」に組み込まれた。手りゅう弾を投げたり、銃や背のうを身につけて走ったり、障害物を突破するといった「競技」だった。

プロ野球は何とか存続を認められたが、陸軍情報部の命令で三月から「野球の日本化政策」を実施。セーフ・ストライク・よし（一本）、アウト↓引け、ファウル↓だめ、などに言い換えたほか、ユニホームを国防色（カーキ色）、帽子は戦帽帽、

ストッキングはゲートル巻きとし、背番号もなくした。一九三六年に誕生した日本のプロ野球リーグは、翌年秋に三位チーム名古屋軍の米国人バッキー・ハリスを満場一致で最高殊勲選手（MVP）に選ぶなど、開かれた感覚だったが、わずか六年で様変わりとなった。

■戦死の部OB六人中、寮出身三人

一九四三年（昭和十八年）、北大全学のシンボルとして十七年前に建立のクラーク胸像が金属回収令で献納させられた。六月、本土防衛のため学生の軍事教練と勤労働員を法制化。十月には緊急勅令で学生の徴兵延期制度が撤廃され、二十一日、首都圏の出陣学徒二万五千人が明治神宮外苑競技場での文部省主催の壮行会に参加した。壮行会に先立つ十六日、「最後の早慶戦」が早大戸塚球場で行われ、10-1で早大が勝った後、『海行かば』の合唱が惜別の歌となった。

繰り上げ卒業や学徒動員で北大出身者も次々と戦場へ送られた。送る者と送られる者。札幌駅頭では、万感の思いを込めて『都ぞ弥生』が歌われた。北大の場合、徴兵延期撤廃の対象は農学部、農学・農経両学科生だった。農学科の尾崎克平は出陣壮行会もないまま、富良野の援農先から直接、広島県呉の海軍部隊へ入隊した。切り詰められた時間の中で実験を重ね、稲の染色体についてまとめた卒業論文が、この時代に学び、生きた

証（あかし）として提出されていた。

野球部OBで把握できている戦死者は六人。厚生省社会援護局の資料などから判断すると

鎌谷士（一九三七年卒・四五年七月二十五日ルソン島で死去）

長島新（一九四〇年卒・四五年三月二日中国で死去）

二階堂孝一（四一年十二月卒・四四年七月十七日中国で死去）

富屋津一（四二年九月卒・四五年二月二十五日比国で死去）

野村正夫（四二年九月卒・四五年四月二十四日ルソン島で死去）

須藤良男（四三年九月卒・四五年六月二十日沖繩本島で死去）

このうち長島・富屋・二階堂の三人は恵迪寮出身者だった。

長島（東京府立三中・三三年入寮）は軍医として旧満州牡丹江で従軍中、死亡したとみられる。富屋（明倫中・三六年入寮）は強肩の捕手で予科入学直後からレギュラーとなり、三年時に主将・投手となって活躍。また寮では南寮寮長↓炊務部長を務めた。本科への進級が「欠席日数超過」を理由に認められないため再調査を求めた結果、事務局のミスと判明したが、留年決定は取り消しにならず、この一年間富屋は予科チームの監督をした。工学部土木科卒業後の満鉄就職が決まっていたが召集され、転戦の輸送船がマニラ沖で撃沈されて死亡したという。

富屋と同期入寮の二階堂（仙台一中）は、予科二年春の対小樽高商定期戦に代打で、秋の定期戦は二塁手として先発出場している。寮委員会では炊務会計委員↓中寮寮長を務めたが、三年時の一九三八年（昭和十三年）に作詞した寮歌『津軽の滄海

（うみ）の』は今も歌い継がれている。野球部員が作詞・作曲に携わった寮歌としては、『一帯ゆるき』『帝都を北に』『藻岩の緑』『幾世幾年』『我が運命こそ』『荒潮繞（めぐ）る』『魔神の呪（のろい）』『黒潮鳴れる』に続くものだ。二階堂は『津軽の滄海の』の八番までの歌詞に、ひたすら北の自然への賛美と青春の鼓動を描きながら七番だけは戦時下の空気を突出させている。彼の心に去来したものは何だったろうか。日本が対米英戦に突入した数日後に農学部農学科を繰り上げ卒業した二階堂は、アジア各地を転戦した後、中国雲南省で二十代の生命を断たれた。

二階堂と同期入寮のチームメート矢島四郎（82歳〓網走中）は、入隊を控え卒業式には出ずに一時帰郷した。「前線へ行けば生きて戻れないだろう」と思いだった。二階堂もあの繰り上げ卒業式には出ていないはず」と顧みている。一年後輩の上原茂胤も四二年九月、繰り上げ卒業と同時に兵役に就き、ラングーン（現ヤンゴン）で軍服の二階堂に偶然会った。その夜、杯を傾けながら、過ぎし日の札幌に思いをはせ、野球部のことを語りあった。数日後、二階堂から「前線へ出動」と知らされラングーン駅へ急いだ。しかし、二階堂が乗る軍用列車は予定より三十分早く発車してしまい、今生の見送りはかなわなかった。「あれが最後だったのか。現実はいまにもはかない」と上原は復員後、亡き球友をしのび書きとどめた。

小樽高商野球部OBでは、あの最後の定期戦で先発した中島

道孝投手（東海中）を含む十人が戦死している。また、早大野球部は三十人、慶大野球部は二十人の戦死者を出し、プロ野球選手は七十人が戦死した。十五年にわたる日中・太平洋戦争の中で、日本人三百十万人とアジア太平洋地域の推定一千八百万人が死んだ。野球を愛した者たちも例外ではなかった。

■食料も用具も足りぬ中で練習再開

一九四五年（昭和二十年）、北海道は冷夏だった。松井泰夫（72）は当時、予科二年。八月十五日、日本の敗戦を告げる天皇の声を援農先の富良野で寮友たちと聞いた。「ああ、助かったか」。地元の国民学校の校庭に流れたラジオ放送は雑音混じりだったが、前線で死ぬ身という緊張感から19歳の少年が解放された瞬間だった。次に胸に浮かんできたのは、「また野球ができる」という思いだった。東京高師付属中時代に捕手を務めた松井が入学したとき、予科野球部は解散させられており、恵迪寮ではラグビー部の部屋に入った。一年の冬休みは道外出身者の帰省が禁止され、授業より援農の日々で、田植えや除草などの作業の合間に軟球でキャッチボールをするのが、わずかな楽しみだった。

札幌に戻った松井は、毎期のように寮委員として忙しかったが、やがて野球好きの寮生たちが周りに集まってきた。四四年に同期入寮した浜本恒男（小樽中）藤井貞郎（正則中）、翌四

五年入寮の鈴木三八郎（開成中）斎藤光太郎（芦屋中）佐藤裕（旭川中）細野「現・村野順三（関東学院中）牟田悌三（麻布中）」のほか、かなりの人数が加わった。自宅から通学の斎藤恒哉（札幌二中）長谷川博（小樽中）も参加し、敗戦の翌年の四六年四月二十二日、雪解け水が残るグラウンドで練習が始まった。部の解散から三年ぶりだった。

五月の寮部屋替えて野球部は中寮の三部屋を占めた。しかし練習が進むにつれ、運動部としての規律をもち勝利のために技量の向上を目指す考え方と、野球をただ楽しみたいという考え方が対立するようになった。予科入学前の中学時代に野球部の経験があるのは松井泰夫と斎藤恒哉だけで、他は部が廃止されていた。前年の冷害も響きカボチャや海宝麵（かいほうめん）ばかりという寮の食事も練習にはきつい。こうして、同好会的な楽しみを期待した人たちの退部が続出、前記のメンバーだけが残った。

この時期、自治運営を取り戻していた恵迪寮委員会は、あまりの食糧難を打開するため、道内各地の農家へ寮生を派遣し、その援農の見返りに米や雑穀類を寮が受け取る方式を始めた。八人の野球部寮生は、網走地方の能取湖畔など二カ所で畑の暗きよ排水工事にあたった。鈴木三八郎（70）ら三人は屯田兵が開いた地区で一カ月働き、豆や麦など一俵ずつが統制経済下で厳しい取り締まりの中を寮に届けられた。

四月に入寮した浅倉悟（東京高師付属中）渡辺保（仙台市立

中) からも入部し、夏休み後半の八月二十日から寮に合宿して本格練習に入った。最後の対高商定期戦に出場後、野球を奪われていた学部生の塚田文男・宮川桃司や今宮明男らがノックバットを振るった。球音が恵迪寮にまで響いてきた。午前中から毎日六時間に及ぶ猛練習だったが、コーチする先輩たちと現役部員の意識がぶつかることもあった。主将として橋渡し役を務めた松井泰夫は次のような趣旨を当時の部誌に記している。「部のためにおれ達が存在するのか、おれ達のために部が存在するのか、という問題で、先輩方の気持ちが前者とすれば、我々は後者の言葉で表されよう」。

しかし、「野球をやりたい」という部員たちの情熱は、練習の苦しさを次第に克服して行った。寮の倉庫に保管されていたユニホームやグラブは数が足りず、石油缶ひとつ残されていた硬式ボールは直ぐ糸が切れ、毎夜縫い合わせるのが日課だったし、バットが折れるとテープを巻いて使った。「道具、食料、体力といったすべてのものが不足している飢餓状態にあっても何かを求めて身体を動かしたいという、まさに青春のエネルギーがそうさせたのだろうとは思えない日々だった」と牟田悌三(70)は振り返っている。

九月初めから練習試合を重ねた。十月五日、仙台でのインターハイ東北地区大会で予科チームは二高と対戦。2-10で敗れた。3安打11失策と攻守に多くの反省材料が残ったが、試合後に部員たちは二高明善寮で仰天するような体験をした。「お米

に縁のなかった私たちの目の前に、米の粒以外に何も入っていない純粹のおむすびが現れた。私たちは思わず顔を見合わせ、まさに感動に涙ぐみながら、米の一粒一粒をかみしめるように味わった」と牟田は書いている。

一九四六年(昭和二十一年)寮歌は『時潮の波の』だ。敗戦の激動期に生きた若い魂の叫びを華麗につづった歌詞は新寮寮長だった渋谷富業(73歳)東京市立一中(四四年入寮)の作品で、「自然賛歌より当時の心情を盛り込もうと一氣に書き上げた」というが、メロディー決定には曲折があった。野球部だけでなく恵水会(聖書研究会)メンバーでもあった牟田悌三の応募曲が当選と決まりかけたのだが、オルガンで聴いた選考委員たちから「賛美歌のようで力強さに欠ける」との異論が出された。このため、渋谷と同期入寮・同級で親しい寮委員長の寺井幸夫(釧路中)が急きょ取り組み、あの転調を織り込んだ重厚なメロディーが決定版になった。

■よみがえった定期戦で涙の初勝利

一九四六年十月十七日、木曜日、北大予科―小樽高商定期戦が復活した。四年ぶりの対抗試合は平和の到来を札幌・小樽両市民に告げるものでもあった。戦時下の「ストーム自粛令」などで廃止されていた予科応援団は、渋谷富業たちの猛烈な運動で四五年末に復活。寮生だけでなく学内全体に参加を求め、残

されていた資料・写真を手掛かりに応援の仕方を研究した。そのお披露目がこの復活定期戦だった。宇野親美予科長（元野球部長）ら教師・応援団・一般学生・選手ら予科側は、羽織はかま姿の山口哲雄団長（安積中・一九四四年入寮＝柔道部員）渋谷ら四人の副団長を先頭に札幌駅から一列車借り切るかたちで、小樽花園球場に乗り込んだ。雨模様为天候だったが、白いのほりの下、大太鼓や法ら貝の響きも交えて、『生命の争闘（いくさ）』（一九二二年＝大正十年＝寮歌）や『桑榆哺紅（そうゆほこう）』（一九二五年＝大正十四年＝桜星会優勝歌）などの歌声が、伝統の一戦に臨む選手たちを奮い立たせた。

小樽高商 0110001003
北大予科 00063000A9

予科・松井泰夫、高商・飯田政晴と両主将が先発登板。2点のリードを許した予科は4回、猛反撃に転じた。雨が激しくなり制球がままならない飯田投手の乱調を突き、7四死球に松井の中前安打を絡め一挙6点をあげて逆転。5回には6盗塁をマークする攻撃で3点を追加した。高商は再三チャンスを作ったが、松井のけん制球で二度刺されるなど攻撃の流れを自ら断ち切る試合運びが響いた。

午後四時半、二時間五十分のゲームが終わった。「ついに高商戦に勝った。我々一年間の努力は立派に報いられたのだ。うれしいというよりも、ばうぜんとしてなすべを知らず、九人は立ち尽くした。おれ達は勝ったのだ。ああインターハイの惨

めな敗戦の気持ちに比し、何たる感激歎喜」と松井は記した。スパイクがそろわず、地下足袋の選手もいる予科チームが大方の予想を覆して勝ったのだ。グラウンドでは、選手も応援団も一体となつて、涙・涙のストームが繰り広げられた。応援団の喜びの渦は、小樽の坂道で、札幌へ戻る列車の中でも爆発したという。一方、選手たちは球場そばの緑小学校で高商チームとの合同コンパを開いた。この日の勝敗よりも、野球禁止命令から復活までの厳しい道程をかみしめての杯だった。

九日後の二十六日夜、秋色深まる恵迪寮裏の原始林で、野球部員を含む寮生たちが寮記念祭を彩るキャンプファイアーを囲んだ。新寮歌『時潮の波の』を高唱しながら、新生日本の一端を担っていく気持ちを胸に刻んだ。

四四年十一月限りだったプロ野球は、四六年四月、後楽園球場のゲームで再開。五月には東京六大学野球リーグ戦が復活した。また、全国中等学校優勝野球大会も六年ぶり復活となり、十九地区の予選を経て、敗戦一年後の八月十五日から第二十八回大会が西宮球場で開かれた。甲子園球場を進駐米軍が接收しているためだった。

■学制改革で予科、高商の校名に幕

恵迪寮の野球部室では、鉄かぶとを改良したなべで煮たジャガイモをバットでつぶして塩をかけ夜食にするのが常だった。

乏しい寮の食事を補うためだ。イモの主な調達先は寮そばの農場。夜陰に乗じて掘り起こし、便所の窓から持ち込む。一九四七年（昭和二十二年）四月、予科一年の伊藤辰男が、その部屋に住人になった。彼は前年復活した全国中等学校野球大会に、北海道代表となった函館中チームの2番・二塁手で出場。2試合で9打数5安打（うち三塁打・二塁打各1）と活躍した。チームは2回戦13―5で山形中を下し、準々決勝では0―6で平古場昭二投手の浪華商に敗れたが、2回戦後に美談が報じられた。出場校は米を持参する時代で、負けた山形中が帰郷の際、途中の弁当を節約し浮かした米二升余を、勝ったために食料に苦しみ函館中に贈り、「頑張つて下さい」と激励したのだ。その米について現在70歳の伊藤は「ありがたかった。宿舎に配られた七輪で自炊する決まりで、おいしく食べた」と話す。

伊藤が出場した年の全国中等学校大会は西宮で開かれたが、この通称甲子園大会に出た選手が北大予科野球部に入るのは、七年前の斎藤実に続いて3人目だった。（4人目は、この三十四年後になる）。伊藤は予科一年からレギュラー内野手で、2番か3番を打つ主力選手になった。翌年には寮生の友杉修右翼手（台南一中）や寮外生の網本皓二投手（小樽中）富田収三塁手（札幌一中）らが加わり、チーム力はぐんと上がった。しかし、対小樽高商（経専）定期戦は、復活戦で圧勝した後、一九四七～四八年の春秋4試合に予科は一度も勝てなかった。翌年から教育制度刷新を図る改革で、6・3・3・4制の構成に変

わるため、北大予科―小樽高商という名称での定期戦は四八年十月九日、1―6の敗戦が最後になった。この時点で対校戦の総通算成績 北大側34勝、小樽高商26勝＝計60試合

（うち北大予科21勝、小樽高商22勝＝計43試合）

この年、最後のインターハイ東北地区大会に出た予科チームは、弘前高校を下したが、代表決定戦で山形高校に敗れ、全国大会へは進めなかった。

一九四九年（昭和二十四年）四月、予科（旧制高校）は新制大学に統合された。予科野球部は、二十九年にわたる独立の活動を終わり、再び学部生と一体の「（オール）北大野球部」が約二十人で発足した。医学部に進んでいた松井泰夫が引き続き主将に選ばれ、四月二十三日に発会式をあげた北大体育会のメンバーとして、新たなスタートを切った。小樽高商（経専）野球部は小樽商大野球部になった。定期戦は北大―小樽商大という新たな装いで継続され、十月九日、小樽桜ヶ丘球場での試合で、北大は3―0で快勝した。しかし、この部結成から半世紀後の新たな展開については、稿を改めたい。

■いまでも燃え続ける予科野球の精神

白線三条に札幌農学校から受け継ぐ桜星の記章をかざした丸帽の予科は消えた。が、予科野球の精神は消えなかった。一九六九年（昭和四十四年）に始まった旧制高校OB野球大会に、

北大予科OBは第八回大会から参加した。最高時は二十二校のOBが出場する盛況で、予科チームは桜星の胸マークという往時のユニホームを新調して臨んだ。二十二年間に優勝4回準優勝2回、通算57戦43勝13敗1分けという健闘ぶりだった。

最長老の河合正恭（一九三四年入寮・現・北大野球部OB会東京支部長）をはじめ上原茂胤（三十七年入寮）木村三郎（同）小池康平（三十八年）今見正（三十九年）塚田文男（四一年）松井泰夫（四四年）藤井貞郎（同）浜本恒男（同）鈴木三八郎（四五年）斎藤光太郎（同）伊藤辰男（四七年）戸田三樹雄（四八年）上林晟（同）たちが常連参加した。長くリーダー役を務めた上原や浜本・上林は先年死去したが、木村は80歳を超えても投げ続けた。

選手の後継者がいないため、一九九五年、平均年齢が71歳を超えて、このOB大会は二十九回で終止符を打った。その最後の決勝戦で北大予科は一高チームを10-9で破り、優勝杯を手にした。一方、数年前から毎秋、首都圏在住者を中心に、北大・小樽商大OB戦が催されている。軟球と硬球の2試合制で、予科OBたちは軟式戦に元気に出場を続けている。これら往年の選手たちの脳裏では、永劫（えいごう）の彼方に去った、あの恵迪寮の部室と寮前のグラウンドの像が今も鮮やかに生き続けており、身体が続く限り、先に逝った球友・寮友たちの分もプレーしようと、胸の炎をかき立てているに違いない。

本稿は、北大OB河合正恭・今宮明男・松井泰夫・川村潤一・柴田正敏、小樽商大OB井上哲夫各氏の資料と証言、文中で年齢を明記した人たちの証言、さらに『北大野球部史』『北大予科野球部誌』『小樽商大野球部史』『檜陵（北大予科農類修了50年記念誌）』『大事なことは、ボランティアで教わった（牟田悌三著・リヨン社）』『学徒動員 最後の早慶戦（恒文社）』『東京大学野球部史』『全国高校野球選手権大会70年史（朝日新聞社・日本高野連）』『球児たちの復活（佐藤光房著・あすなろ社）』『ああ青春の甲子園（好村三郎著・朝日ソノラマ）』『地域史研究・はこだて第28号（函館市史編さん室）』などを参考に執筆しました。



「都ぞ弥生」の米寿に思う

石 川 舜

(昭和三十二年入寮)

日本人はなにかにつけ、「三」でくくるのが好きらしい。「日本三景」、「日本三急流」、「日本三大松原」——などなどゴマンとある。そして寮歌にまで「三大寮歌」なんていうものが設定されている。

「三大寮歌」とは、『嗚呼玉杯に花うけて』（一高）、『紅萌ゆる』（三高）、『都ぞ弥生』の三曲、というのが「定説」になっている。しかし、旧制松本高校の人たちにいわせると、そうではない。『琵琶湖周航の歌』（三高）、『都ぞ弥生』、そして『春寂寥』（松本高）の三つなのだそうだ（旧制高等学校記念館）＝松本市＝での展示。

ほかにどんな説があるのか、また「三大」選定基準がそれぞれどうなのかは知らないけれど、ともかく、私たち恵迪寮同窓生にとつては、『都ぞ弥生』がいずれにも推されていて大変名誉なことである。

ことし（一九九九年）、『都ぞ弥生』は米寿（数え年で八十八歳）を迎える。

北大では、入学式、卒業式をはじめ、学内の諸儀式、催事に『都ぞ弥生』が奏でられている。校歌でもない一寮歌が、式歌の如くこのようにれんめんと奏でられ、唱いつづけられている大学は他にない。これは、北大ならではの独特の文化といつてもよいだろう。

一般的にいつて寮歌というものは、寮での生活の中から生ま

れたものである。したがって寮で生活したことがない人たちに「理解しにくい」「共感を得にくい」面もある。ものによつては「いい気なもんだ」「いいご身分だ」など反感・反発すら買いかねない。しかし恵迪寮歌は寮に居なかつた人にも、他校の人にも、また一般市民にも、おおむね好感を持って受け入れられている。

それは、その大きな要因は、恵迪寮歌が「自然との対話」を基調とした、詩情豊かな、ロマンチックなものに溢れたものが

多いからであろう。つまり、恵迪寮・北大、北海道に縁のない人びとも、恵迪寮歌にうたい込まれた、北海道の自然、風土、風景などに自分自身の体験、心象を重ね合わせ、色々想いをめぐらせていくと、自然と「波長」が合ってくる。そのとき、その寮歌は、恵迪寮歌という領域を抜け出て「北海道のうた」となりあるいは自分をおおらかに、元気に、はたまた詩人にしてくれるような歌となる。人の心をそうせしめる不思議な力が恵迪寮歌にはある。そしてその最高峰が『都ぞ弥生』なのだ。だからこの歌は、「三大寮歌」の一つであるのはもちろん、近代日本の生んだ「唱歌」の中でも指折りの名曲、といつてよいと私は思う。

いま「唱歌」といったが、「唱歌」とはいつたいう歌を指すのか、私は戸惑った。そこで手許にあった本、『日本の唱歌』（金田一春彦・安西愛子編。講談社文庫）を読み返してみた。金田一先生は次のように仰言っていた（要旨）。

① 唱歌という言葉は日本独特のもので、英語など外国語にはこれに相当する言葉がない。

② 私たち日本人が唱歌としているものは、明治時代になって文部省が編集・刊行した『尋常小学唱歌』を祖としている。

③ これは、教室で先生のオルガンやピアノに合わせて生徒たちが斉唱するもの、という広い意味で教育的な目的でつくられた。

④ そしてさらに上級の中等教育過程の中でも『中等唱歌』が作歌、選定された。

⑤ そういう意味で唱歌は、多分に学校との結びつきが強く、生徒・先生が一緒になって斉唱する校歌や式典の際の歌は唱歌の典型的なものである。

⑥ 唱歌の特質は、その内容が「かたい」「まじめ」な、広い意味で教育的な目的でつくられた歌であり、その点で、旧制高校の寮歌やキリスト教の賛美歌も唱歌の同類である。

まさしく、われらが寮歌も唱歌だ。寮生たちが自主的に学びとり、互いに教訓とし、心の誇りとしていつまでも唱いつづけていこう——という思いをこめてつくった、いわば己の「生涯教育の歌」とも言えるだろう。

そして、みんなと一緒に唱うとき、その寮歌（唱歌）の味わいは最高のものとなる。音楽会などでプロの歌手が独唱するといった類のものではなく、そこに居合わせる人びとが、うちそろって斉唱したり合唱したりして楽しむことで、寮歌はますます生きてくる。

そういうことからしても、唱歌（寮歌）は誰もが唱いやすいことが望ましい。佳い歌詞、それに合ったメロディー、テンポ、音階などが重要な要素になる。

横山芳介さんは生前、『都ぞ弥生』が広く人びとに親しまれ唱われていることについて「それは曲がいいから」とつねづね

仰言っていたという。もちろん、横山さんの詩は素晴らしい。しかし、単に「詩集を読む」とか「詩を朗読する」というのではなく、それを音楽的に表現するとなると、どんなに詩が秀れていても曲が佳くないと唱いにくい。当然、「広く人々に唱られる」ことは難しい。作曲者の赤木顕次さんは「それまでの寮歌にはあきたらなかったし、他校の寮歌には見られないものにしてやろうと思った」と述懐しておられる。



(学生時代の横山芳介)



(学生時代の赤木顕次)

そして「横山の作詞と並行して一句一句工夫していった」という。

お二人の苦勞、懸命な努力ぶりなどについては、すでに多くの人が記述しているので省略するが、こうした苦闘、努力の結果『都ぞ弥生』は生

まれたのであった。

横山さんの言のように、赤木さんの曲は、日本人の体質によくなじむ、いわゆる「ヨナ抜き」の五音階のもの。2、4拍子

を基調とした「颯爽と歩く」ときの歩調（♩♩90〜100）で、しかも「莊重に」である。歌っていると誰もが元気に、朗かに、ロマンティックになってゆく。オーケストラ演奏にも向いている。

この歌が発表されたとき（明治四十五年四月八日）、寮生たちは一様に「難しい歌だな」と戸惑ったというが、先の赤木さんの話のように「これまでにはなかったタイプ」の歌であり、当時は楽譜を読める人はほんの僅かしかいなかったという状況にあったというのだから、「不評」を買っても、それは当たりまえといえる。そんな中で、数年前、寄宿舎係もされて寮生と深いつながりのあった有島武郎先生は「いいぞ。素晴らしい」と二人の手を固く握って、何度も褒めて下さったそうだ。やがて、有島先生の評は現実のものとなった。

『恵迪寮史』の伝えるところによれば、昭和五年（一九三〇年）十二月、コロムビア・レコードからSP盤の『都ぞ弥生』が出版された。つづいてその翌年六月、NHK（現）のラジオ放送で『都ぞ弥生』が『生命の争闘』、『魔神の呪』、『環珞みがく』とともに全国放送され、全国的に知られるようになった。そしてその後、北大OBが大勢、満州（現 中国東北地区）に渡り、よく唱ったので有名になったとも聞いた。

いまから四十年ほど前の正月休み、寮で一年後輩のS君の家へ招かれた。何人かの学友たちで酒盛りとなり、当然のことながらいつしか寮歌放吟となった。すると「私も歌えるわよ」と

S君のお母さんが仰言って『都ぞ弥生』、『環珞みがく』を、歌集も見ずに見事に歌われた。みんなびっくりして「どうして知ってらっしゃるんですか？」とうかがったら「戦前満州に居たでしょ。北大OBの方たちから教えこまれたのよ」。：ははあS君、お母さんにおおられて北大へ行つたんだな、とナットクした。

また、「トットちゃん」こと黒柳徹子さんのお母さん、黒柳朝さん（北海道滝川市出身）は小学校六年生のとき、代用教員として赴任してきた若い男の先生に『都ぞ弥生』を教えられた。朝さんの著書『チョっちゃんが行くわよ』によると、その先生は、札幌一中（現 札幌南高校）を出て北大を受験したものの失敗、浪人したのでアルバイトをしていらつしやつた。先生は「俺は代用教員だから教壇には上がらないで教えるからなあ」と、字を書くときだけ教壇に上がったり降りたり、消したりと、忙しく動くという変わった先生だったが、「音楽」の授業がまた変わっていて、教える歌はぜんぶ、北大予科とか小樽高商（現 小樽商大）の寮歌、応援歌ばかり。なにかというとすぐ、へ都ぞ弥生の雲紫に：となるのだつた。

そんなわけで、朝さんたちはそれらの歌をすっかり覚えてしまい、卒業後六十年ぶりに泊りがけで先生を囲んでクラス会をやったときも、『都ぞ弥生』をはじめ昔よく唱つた北大寮歌を全員で唱つたという。

S君のお母さんや黒柳朝さんらにとつて『都ぞ弥生』は、

完全に「自分たちのもの」になっているわけである。

ところで、どんなに「いい歌」であつても声を出して唱わないうことは始まらない。また、世の人びとに広く愛唱してもらうには、普及活動を積極的に行わなくてはならない。そのため、私たち恵迪寮同窓生たちは、寮同窓会など身内だけの集まりではもちろんのこと、各種寮歌祭その他で唱つてきた。『寮歌集』、テープ、レコード、CDなども出してきた。現役の応援団の諸君を中心に学内では「一万人の寮歌祭」も毎年開催されている。しかし、毎日「新しい歌」が生まれる一方、毎日「また一つ歌が消えて行く」といったご時世の中では、不朽の名歌『都ぞ弥生』といえども影が薄くなる恐れがある。なにかいい手だてはないものか…。

私の学生時代、昭和三十年代前半、JR札幌駅では、毎日、毎正時、北海道・札幌にちなんだ著名な歌をオルゴール演奏で流していた。曲目は月ごとに定まっていた、四月は『都ぞ弥生』であった。街ゆく人たち、駅頭に立った人たちには、聴くともなしにそのメロディが身体にしみついていた。

この、時報を兼ねた「オルゴール放送」はいつの間にかなくなつてしまつたが、駅舎（ビル）が新築されたら、ぜひまた復活してほしいものである。

そうだ、いま、北海道へは「空の旅」の時代である。新千歳空港ビルの搭乗・到着フロアで適宜、BGMのように、メロディだけでも流すようにしてもらおう——というのはどうだろうか。

大きくはばたけ北海道の翼 頑張れAIR DO

私たちは応援しています。

提供：恵迪寮昭和28年入寮有志

() 内は、勤務先または自宅所在地

○吉岡 秀明(札幌市)	○山中 洋(札幌市)	○柳澤 重美(札幌市)
○村山 幹夫(札幌市)	○宮内 久元(札幌市)	○三浦 陽治(札幌市)
○榎 英哉(小樽市)	○船越 一幸(北見市)	○藤田 宏(札幌市)
○藤田 明德(東京都)	○中川 時宏(札幌市)	○寺田 周史(網走市)
○田中孝一郎(北広島市)	○多田 孝男(札幌市)	○多田 和夫(札幌市)
○竹川 忠男(札幌市)	○高根 仟(札幌市)	○高橋 邦臣(札幌市)
○鈴木日出男(東京都)	○鈴木恭一郎(東京都)	○佐々木勝敏(札幌市)
○坂西 八郎(札幌市)	○小林 正人(札幌市)	○井口 光雄(札幌市)

以上24名



AIR DO

札幌－東京16,000円(大人片道)
(青少年割引運賃8,000円)

●毎日6便運航

発着時間 (1月8日～3月31日)					
便名	札幌発	東京着	便名	東京発	札幌着
12	09:45	11:15	11	07:25	08:55
14	14:45	16:15	13	12:25	13:55
16	19:45	21:15	15	17:25	18:55

●予約受付は

AIR DO予約センター

札幌(011)200-7333 東京(03)5350-7333

または弊社指定旅行会社(JTB、JTB関連会社、JTB提携会社、北海道ツアーシステム、牧野航空旅行)の各店舗にて承ります。

・座席のご予約は2ヶ月先の同一日分まで承ります。

・詳しくは、予約センター及び各旅行会社におたずねください。

「北海道国際航空支援持株会」会員募集中

2機目をめざして、新たなチャレンジ。15億円の増資を目標に、1口5万円からの新規加入・出資金の増額をお願いしております。

●お問い合わせは北海道国際航空株式会社 TEL (011) 252-5533

恵迪寮名・慣習・寮歌をめぐる

恵迪？・恵迪？・それとも恵迪？

まかない会（注1）

柴田 松太郎

（昭和十九年入寮）

△この発端▽

一九九四年の十月三日（月）「第七回まかない会（於銀座アサヒビアハウス）の席上、山岸（稔）幹事より「どなたか恵迪寮の『迪』が『迪』でない理由を知っている方、次回に解説して戴けませんか」との問いかけがあった。同月二十四日付けで、「第八回まかない会（忘年会）」の件について通知があり、その通知の末尾に、「前便にて『恵迪寮の件』申し上げましたら、早速、中西（三郎）・福地（俊臣）・畑島（好古）・四方（英四郎）・増淵（法之）の諸兄より文献やご自分の見解等お寄せ戴きました」とあった。

「第八回まかない会」（一九九四年十二月五日（月）開催）の席上、山岸幹事より「正しい『けいてき』はどう記したらいいのか？」というまとめの一文と、山岸幹事のもとに寄せられた資料のコピーが配られた。山岸幹事のまとめによると（若干資料追加―柴田）

① 文字としては、一般的には、『迪』が正しく『迪』は俗字と言われる。但し、増淵説は、大変面白く、これでどちらが正しいかは、結論づけられなくなった。（とはいってももの、寮名選定に当たられた田中義麿氏が恵迪寮史・復刻版で述べておられるように、その出典が書經の大禹謨と分か

つた以上、この説は採用できない。―柴田)

〔増淵説〕手元にある辞書によると、中日辞典を含めて啓迪はあるが恵迪はない。啓は「ひらく」、迪は「導く」の意があるから、「教え導く」となり、我々が寮で教えられた意味となる。啓と恵は日本では「ケイ」の同音であるから、啓迪が恵迪に変わったのは我が国においてであろう。

* 中日辞典：『啓迪』『啓迪』はあるが『恵迪』『恵迪』はない。

② 語句としては、辞典によると、

* 新明解漢和辞典：『啓迪』も『恵迪』もある。

* 字源・大漢和辞典：書經を出典として『恵迪』としている。

* 大漢和辞典 卷二 によると、啓迪(ケイテキ) 教へ導く、啓発する。(書、太甲上) 旁求俊彦啓迪後人。(伝) 開道後人、言訓戒。(後漢書、章帝記) 朕聞、名君之徳、啓迪鴻化、緝

熙康乂、光照六幽。(柴田)

③ 書としては、

南鷹次郎総長筆 「恵迪寮史」(一九三三年、昭和八年：同

復刻版、一九八八年、昭和六十三年) および「恵迪寮史第

二卷」(一九八七年、昭和六十二年)の表紙の背文字およ

び扉の文字：恵迪寮

佐藤昌介総長筆 「恵迪寮史」および「恵迪寮史第二卷」の

題字：恵迪吉従逆凶惟影響

今 裕総長筆 「恵迪寮小史」(一九四三年、昭和十八年：

同復刻版、一九八七年、昭和六十二年 背表紙の文字)の
表紙の文字：恵迪寮小史

恵迪寮々報部(一九四六年、昭和二十一年七月二十日付) 発

行寮報第九十号の題字：恵迪寮々報、柱：恵迪寮々報

恵迪寮々報部(一九四六年、昭和二十一年十二月二十日付)

発行寮報第九十一号の題字：恵迪寮々報、柱：恵迪寮々報

④ 解説としては、

田中義磨先生(「恵迪寮史」回顧録)

字野親美先生(「恵迪寮小史」〔背表紙〕、「恵迪寮小史」〔表

紙〕序文)

小島悦吉先輩(「恵迪寮史」編集後記、「恵迪寮小史」〔背表

紙〕、「恵迪寮小史」〔表紙〕、後記のことも 四) (追加

資料―柴田)

⑤ 看板(写真)としては(追加資料―柴田)

北海道大学恵迪寮同窓会会報「恵迪」第三号(一九八五年、

昭和六十年七月二十二日)、一ページの写真「野幌の『北

海道開拓の村』に復元されたエルムの園の寮生の魂の故郷

恵迪寮と全国から集まった同窓会員」の看板：恵迪寮

「恵迪の青春」(一九八六年、昭和六十一年)二百六十五ペ

ージの写真「思い出の「コマ」(昭和二十八年、一九五三年

十二月 河辺 傑写)の看板：北海道大学 恵迪(寮)：

写真資料としては最も古い

「恵迪寮史第二卷」所収のグラビア写真(一九八二年、昭和

五十七年)の看板：恵迪寮

恵迪寮同窓会会報「恵迪」第五号(一九八七年、昭和六十二年八月一日)二ページ最上段の写真「懐かしい恵迪寮舎の前で肩組み合う遠来の友ら」に写っている看板：恵迪寮

「青春の北大恵迪寮」(一九九一年、平成三年)所収の北海道開拓の村に移設された初代恵迪寮の玄関に掲げられた看板(収録写真番号 二、五六一、五七四：恵迪寮)

「青春の北大恵迪寮」(一九九一年、平成三年)所収の、昭和五十七年(一九八二年)夏開催された寮OBの会の、寮玄関前で撮影された写真に写っている看板(収録写真番号 八)：恵迪寮

ただし、第三代恵迪寮に掲げられた看板は除く

⑥ 畑島兄の結びの言葉のとおり、心の故郷にある文字は、夫々にあっているのかも知れません。中西兄は、『迪』が、ワープロに無いので(山岸のにもありません)、『迪』にするといっておられる。私(山岸)は、『恵迪』すなわち、旧字の『恵』と、俗字でもよい『迪』を使いたいというと、強情っ張りといわれるでしょうか。云々

添付資料として、

* 中西三郎氏の「恵迪寮」寮名について

(北大東京同窓会五十年史、木原 均著「一粒舎主人写真譜」、「恵迪寮小史」、恵迪寮同窓会文集編集委員会編「恵迪の青春—エールの樹蔭で—」

* 中谷泰夫氏の記憶と中谷氏個人の見解

(予科時代のアルバムの写真をみて)

* 小島悦吉氏から畑島好古氏宛ての返事

* 増淵法之氏の説(主として中日辞典による)

* 四方英四郎氏の調査資料(「恵迪寮史第二巻」の凡例)

* 柴田松太郎氏の調査資料(大漢和辞典)

* 「恵迪寮史」(一九三三年、昭和八年：同復刻版 一九八七年、昭和六十二年)、「恵迪寮史第二巻」(一九八七年、昭和六十二年)の題字(佐藤総長筆)、表紙の背文字及び扉の文字(南総長筆)

* 「恵迪寮小史」(一九四三年、昭和十八年：同復刻版 一九八七年、昭和六十二年)(今総長筆)、恵迪寮小史(同小史の背 表紙)

ところで、今日では、漢字については当用漢字・人名用漢字などが用いられている。従って人名用漢字の「迪」は、これで正しい。「恵」は勿論、当用漢字であるから、これで正しい。従って、今ふうに書けば、「けいてき」寮は「恵迪」寮となる。

また、旧字体を好まれる方は、「恵迪」寮となる。

さて、われわれ「まかない会」のメンバーは、これをどのようになっているのだろうか。数人の方のご意見を紹介しよう。

Y. N. 氏の意見：私事ながら、小学校時代に□□迪子という才色兼備の子がいました。従って小生は躊躇することなく恵迪寮で通しました。

Y. H. 氏の意見：それにしても迪で育った我々としては、
迪が嫡出子でないと言われ、それを認めることに聊もためらう
ものではないが、じゃ迪の字よサヨウナラと言うことになる、
オイ、オイ一寸待てよということになる。迪の字に対する思い
入れは、殊更取り沙汰された、或いはした覚えがないが、惠迪
寮生の心意気があつた様に思う。之からも迪と書く度に悪女の
深情の如く迪を憶うことであろう。之もまた懐かしきこと哉。

山岸 稔氏の意見：前述のとうり。

S. N. 氏の意見：四以上のことから、迪は誤りであるよう
である。

小生のワープロには「迪」の漢字がなく、以後「迪」の漢字
を使う以外にない。

少なくとも、「まかない会」のメンバーは「惠迪」寮のもと
で生活してきたのであるから、「惠迪」が正しいからといって
おいそれとそれに従うわけにはいかないのではなからうか。

とはいふものの、山岸幹事の問題提起がなければ、「まかな
い会」のメンバー各位も「けいてき」寮のルーツを調べること
もなかったであろう。山岸幹事の問題提起に感謝する。

〈惠迪寮命名の由来〉

そこで、これを契機に、「けいてき」寮の命名にまつわる歴
史をまとめておこう。

惠迪寮寮史編纂委員会編「惠迪寮史」復刻版（一九八七年、

昭和六十二年）によると、三百三十七ページの欄外に「寮歌寮
名の募集」の文字が見え、本文には次のような記述がある。
「二月二十七日（一九〇七年、明治四十年）、委員会に於いて寮
歌募集・寮名募集を議決す。是寮歌募集の初である。」ついで、
三百三十九ページの欄外に「寮名の決定」とあり、本文には、
「名は体を表すとか寮名の決定は到底舎生の之をよくなし得る
ところではなかった。遂に湘香新居敦二郎先生（在任期間 一
九〇七年九月―一九一一年三月―柴田注）に依頼して惠迪寮の
名を戴く。書經の大禹謨に、『禹曰。惠迪吉。從逆凶。惟影響』
とあるところから採ったのである。」と。

さらに、回顧録（六十四―六十六ページ）には、「寮の命名
當時」と題する、田中義麿先生の一文「一、惠迪寮命名」によ
って寮名の命名の経緯を知ることができる。また、田中義麿先
生が惠迪寮史に書かれたのと同じ文章が「青春の北大惠迪寮」
二十四ページに「惠迪寮命名」と題して記されている。

さらに、編輯後記の四ページから六ページにわたって小島悦
吉氏の「自治寮史に就いて」という一文がある。その中に、又
本寮の寮名たる「惠迪」に関しても往々「惠迪」に綴らるゝ、こ
とあるも、出典たる書經の大禹謨に「惠迪吉」とあって迪の字
が用ひられてある。簡野道明氏の「字源」に依れば迪の項に迪
は迪の俗字とあるも、迪の項には迪に作るは非と記されてある。
我々は我々の寮の名を常に正しく惠迪寮と書きたいものであ
る。以下略

また、恵迪寮小史・復刻版（一九八七年、昭和六十二年）の宇野親美先生（一九四三年、昭和十八年当時学生主事）の序には

「恵迪」ハ道ニ從フノ意ニシテ：

と述べられている。また、同小史の末尾に載せられている「後記のこども」の四、には、小島悦吉氏が恵迪寮史の編輯後記で述べられたのと同じ趣旨のことが記されている。

恵迪寮史第二卷（一九八七年、昭和六十二年）の「凡例」には、

一、寮名の「恵迪」は、中国の書経の「恵迪吉從逆凶惟影響」に由来するものであり、「恵迪（恵迪）」が正しい。本文中では「恵迪」を使用した。尚、「恵迪」は間違いであり、書経の種々のテキストにも「恵迪」は見られない。ただし、表紙に限り、第一巻を踏襲し「恵迪寮史」を用いた。以下略。

中西三郎氏の資料によると、

北大東京同窓会五十年史に、「寮名は時計台の辺りから理学部前に寮が移転した明治三十八年（一九〇五）の二年後に『恵迪寮』と命名された。」とある。また、木原均著「一粒舎主人写真譜」には、

「恵迪寮」の寮名を誰が命名したか、詳らかでないが、書経の「迪（みち）に恵（したが）えば吉（よ）し」からとられたとある。

さらに、恵迪寮同窓会文集編集委員会の編集になる「恵迪の青春―エルムの樹蔭で」（昭和六十一年、一九八六）の編集後記に「ここで特に論議になったのは『恵迪』で、原稿では『迪』『迪』『迪』の三通りが使われておりましたが、結局、事務局や寮史が採用している『迪』に統一することにしました。」とある。

今回の「けいてき」論議で、小島悦吉氏（第三次及び第四次恵迪寮史編集委員をされ、現在もお元気で活躍されている）に小島好古氏が直接手紙を、また電話を差し上げ、疑問点の解明につとめられたので、それを記しておきたい。ただ、小島先輩から畑島氏への書面は、寮史の編輯後記（上記）と同じ内容なので省略するが、電話での交信の一部を紹介しよう。

畑島：扉の「恵迪寮史」は南総長に書いて戴いたとありますが、小島さんご自身が行かれたのですか？

小島：そうだよ。その時俺は恵迪については何も知らなかった。とに角寮史の編集は予科の間ではとても終わらず、本科に行ってから夏頃までかかったんだ。みんなに、お前予科に戻れよってよく言われた位寮史に明け暮れた。その時全国的に諸先輩に手紙を出して色々教えて貰った。田中義麿先生の手紙とあるのもその一通。

畑島：そうすると、えんにゆうが使われるようになったのは、この寮史の扉以降ということでしょうか？

小島：それは知らない。だが、手紙に書いた通りしんにゆうが正しいと思うから、その様に使うべきだと思う。

最後に、書經の写本が沢山ある中で、最も標準とされている、中国は西安の碑林博物館に保存されている書經の碑文でどのようなになっているか、調査する機会があったので、紹介しよう。

〔碑林博物館における書經の碑文の調査結果〕（柴田、一九九六）中国の西安にある碑林博物館に陳列されている書經の碑文は、楷書で書かれており、恵迪寮寮史編纂委員会編「恵迪寮史」復刻版（一九八七）に書かれているように「禹曰恵迪吉從逆凶惟影響」とある。ただし、碑の一部が欠けており、「禹曰恵」の三文字と「響」の一字は見られないが、「迪吉從逆凶惟影」の七文字は残っている。そして、問題の「てき」の字が「迪」となっていることを確認した。従って、「てき」の問題は楷書の「迪」、旧漢字の「迪」が正しいということになる。

〔まとめ〕

1) 「けいてき」寮の「けいてき」の典故は、書經の大禹謨の中の「恵迪吉」である。従って、当用漢字・人名用漢字を用いれば、「恵迪」寮、旧漢字を用いれば「恵迪」寮、楷書では「恵迪」寮となる。

2) われわれは、入寮以来今日まで先輩から「けいてき」寮は、「恵迪」寮と教えられ、後輩に伝えていったのであるから、小島悦吉先輩には申し訳ないが、今更ここで「恵迪」に直せ

といわれても、そうはいかないし、そうする必要もないのではなからうか。つまり、1)を知ったうえで、従来通り「恵迪」寮でいいのではなからうか。

3) この問題提起のお蔭で「恵迪」の原点を知り、その意味を知ることができ、大変有意義であった。

以上で寮名に係わる報告は一応終わるが、今後明らかにしなければならぬ点がいくつか残ったので、それらを記して締め括りとしたい。

〈今後明らかにしなければならない点〉

1) 寮名が「恵迪」と命名、公表されたのが明治四十年（一九〇七）、寮史が出版されたのが昭和八年（一九三三）年である。この間僅かに二十六年という間に、「迪」が「迪」と混同使用されるに至っていることが、小島悦吉先輩によって指摘されている（恵迪寮史・編輯後記）。この間の事情を明らかにする必要があるように思われる。

2) 前述の田中義麿先輩の「寮の命名當時」に、「四月八日記念祭會場（食堂）内正面に吾々本科二年の寮友の手になった恵迪寮の大額が天井から吊るされ…」とあるが、額を書かれた先輩のお名前が分からないし、また、その額がどうなったかも不明である。

3) 寮の玄関に掲げられた看板の歴史も明らかにされなければならぬのではなからうか。というのは、われわれ「まかな

い」会のメンバーが入寮（一九四四年、昭和十九年四月）してから退寮（一九四七年、昭和二十二年三月）するまで、寮の玄関にはどんな寮名の看板が掲げられていたのか、はつきり覚えているものは一人もないし、写真を持っているものも一人もないのであるから。

なお、第十期、第十一期生活部幹事および第百三十三期、第百三十四期生活部委員全員の氏名と担当部署は以下の通りである。（*印は故人）

第十期生活部幹事（任期：一九四五、三、十五～十二、七）

部長：玉置昭英、庶務：後藤純一*、中西三郎、購買：畑島好古、出口奎二、畜産園芸：福地俊臣、会計：中小路茂次*

第十一期生活部幹事（一九四五、十二、八～四六、五、五）

部長：中西三郎、庶務：畑島好古、森戸敏明*、福地俊臣、購買：山岸 稔、柴田松太郎、会計：中小路茂次*

第百三十三期生活部委員（一九四六、五、六～十一、十二）

部長：増淵法之、庶務：野村謙三、四方英四郎、購買：橋本達文、会計：板倉仁三

第百三十四期生活部委員

（一九四六、十一、十二～四七、二、十五）

部長：増淵法之、庶務：野村謙三、四方英四郎、中谷泰夫、購買：橋本達文、会計：板倉仁三

注1）まかない会とは第十期（部長 玉置昭英）、第十一期（部長 中西三郎）、第百三十三期および第百三十四期（部長 増淵法之）の生活部幹事・委員経験者の親睦会の名称である。

『恵迪』の故郷・碑林を訪ねて

先にも触れたように、『恵迪』の出典は書經（尚書の大禹謨にあることは知っていた。しかし、一九九五年十二月に観光旅行で西安の碑林を訪ねたときには、碑林に書經の碑があることも知らず、その上時間も足りず、碑文の中から「恵迪」の二字を捜し出すことなど到底出来なかった。いつかまたチャンスがあったら訪ねたいと思っていたが、その機会は八か月後にやってきた。

それは、一九九六年八月第三十回万国地質学会が北京で開かれ、私もこの会議に参加した。会議の期間中に、旅行社の企画するオブショナルツアーに西安観光（八月七日～九日）があったので、それに参加することにした。碑林には七日午後と八日午後の二回訪れた。七日のときは、他の人達とも一緒にであったし、ガイドが肝腎の第一室を通り越して有名な書家、王羲之、顔真卿らの碑の方へ行ってしまったので、仕方無く私は別行動

をとり、第一室の方へ行つた。

第一室の入り口には説明書きがあつて(第一図)、

第一室には尚

書(書経)の他

易経、詩経、周礼、

儀礼、礼記、春秋

左氏伝、春秋公羊

伝、春秋穀梁伝、

論語、孝経、爾雅

等いわゆる「開成

石経」が陳列さ

れているとある。

目的の尚書は第

一室の一番奥か

ら十番目の石碑

で、全文楷書で刻

まれている。

「恵迪」の二

字は八段のうち

の一段目にある

(碑の高さは土台も含めて約二メートル、幅約一メートル(注))

ことを確認するにとどめた。

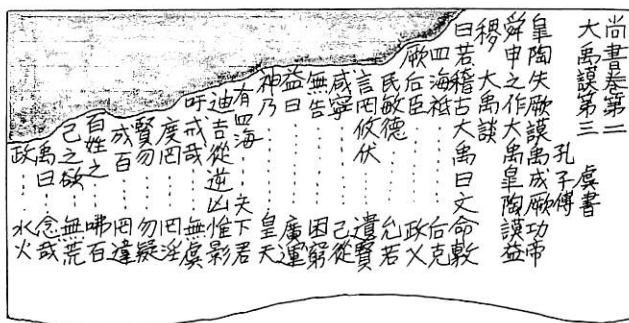
八日の午後は、私一人で一時間以上時間をかけて石碑の状態

第一室 説明

本室以唐文宗开成二年(公元837年)所刻石经为主,其中有周易、尚书、诗经、周礼、仪礼、礼记、春秋左氏传、春秋公羊传、春秋谷梁传、孝经、论语、尔雅等十二部经书。因刻于开成年间,故称“开成石经”。

十二种经书为封建社会知识分子必读之书,唐代印刷尚不发达,为了避免学习时传抄错误,特刻石经为范本,立于长安城国子监内,为校对的标准。开成石经共114石,228面,六十五万多字,是我国古代七次刻经中保存最完好的一部。北宋元祐二年(公元1087年)首批移入碑林。清代又补刻了“孟子”十九石,合称十三经。

(碑林第1室の説明)



碑林第1室の奥から10番目の碑

尚書卷第二、大禹謨大三虞書第一段目、黒い部分は欠損……の部分は字を省略してある。

を調べた。すると、この石碑の左上の三、四字が、石碑分の幅の約三分の二以上欠けており、丁度「恵」の字も欠けていることが分かった。

また、佐藤元北海道

帝国大学総長の書かれた

「恵迪吉従逆凶惟影

響」の最後の「響」も

欠けていた。しかし、

幸いなことに「迪」の

字は残っており、「迪」

が正しい事が確認でき

た(第二図)。

また、残念ながら今

回も写真の撮影には失

敗してしまった。とい

うのは、室内が暗いう

えに、石碑の前面には

ガラスが張っており、

外の景色が反射してい

たからである。どなた

か碑林を訪れる方があ

つたら、写真撮影に自

信のある方に写真の撮

影をお願いしたいと思っている。

(注) 京都文化博物館編 (一九九六) 「長安―絢爛たる唐の都」 角川選書 二六九 「唐代長安の石刻」、 「碑林の中核となった開成石經と科舉制度」 一九七―二〇七ページに詳しい。

第一図「第一室の説明」余田浩司郎訳 (注)

この部屋は、唐の文宗が開成二年 (西暦八三七) 年、石の經典を刻ませたのを主 (中心) としており、その經典の中には、周易、尚書、詩經、周礼、礼記、春秋左氏伝、春秋公羊伝、春秋谷梁伝、孝經、論語、爾雅など十二部の經典の本があり、開成年間に刻まれたので、「開成石經」と称されている。

十二種の經典の本は、封建社会の知識人にとって必読の書であり、唐代の印刷 (技術) はまだ発達していなかったため、学習するとき、転写を重ねての間違いを防止するために、特に石の經典を刻んで「手本」とし、長安の街の国子監 (最高の教育管理機構兼最高学府) 内に建て、正誤を照合する標準とした。「開成石經」は、全部で百十四石、二百二十八面、六十五万字余りで、これはわが国の、古代に七回經典を刻んだなかで、保存が最も完全で、良いものの一つである。北宋元祐二年 (西暦一〇八七年)、真つ先に「碑林」に移した。清代にまた「孟子」十九石を補充として刻み、合わせて十三經と称した。

(注) 筆者のかつての勤務校都立鷺宮高等学校の同僚 (国語科) で、中国語に堪能。面倒な翻訳をお願いして、心から御礼申しあげます。

げます。

書經・大禹謨^はを読んで

「恵迪」の意味は、多分入寮直後、宇野さんあたりに教わっているはずだが、私は覚えていない。ただ、その出典が中国の古い文献であるらしいことは、うる覚えで覚えていた。寮友竹内茂雄氏に聞いたところ、恵迪寮史を調べてみたら、と教えてくれた。そして、出典は書經であることを知った。

さて、こんどは「恵迪吉」という句が書經の何処にでているか分からず、かつての同僚大川龍太郎氏 (都立鷺宮高校・世界史担当、大学で東洋史を専攻) に尋ねたところ、直ぐに調べてくれて、大禹謨全文をタイプし、返り点まで付けて送ってくれた。しかし、それだけではとても独学で、理解できそうもないと思い、本屋を捜していたところ、ある大きな本屋で、野村茂夫著「書經」 (名徳出版社) を見つけ、早速購入して大禹謨の解説を読んできた。

書經は最初は「書」とのみ呼ばれていた。書經と呼ばれるようになったのは、宋時代以後である。「書」の語源は、単に「記録されたもの」あるいは「記録すること」で、本来は時代

を超えて、はるか過去から、未来永劫に受け継ぐべきものとされていた「書」も、歴史の流れの中で見直せば、それはある時代の「書」という限定されたものとなる。すなわち、書經は

虞書：堯・舜の時代の記録

夏書：夏の時代の記録

商書：商の時代の記録

周書：周の時代の記録

の四つの「書」から成り立っている。「恵迪」を含む「虞書」には

一、堯典・史官の記録になる帝堯の不滅の事蹟

二、舜典・史官の記録になる帝舜の不滅の事蹟

三、大禹謨・大禹の献じた政治の方策

四、皋陶謨・皋陶より禹に語られたばかりごと

五、益稷・益と稷

が含まれている。さらに、「大禹謨」には

(一) 禹、帝舜に進言する。

(二) 帝舜、禹に位を譲らんとす。

(三) 禹、摂政となり、有苗を討たんとす。

の三項目があつて(一)に「恵迪吉」の句が含まれている。

そこで、

(一)の概要をみると、

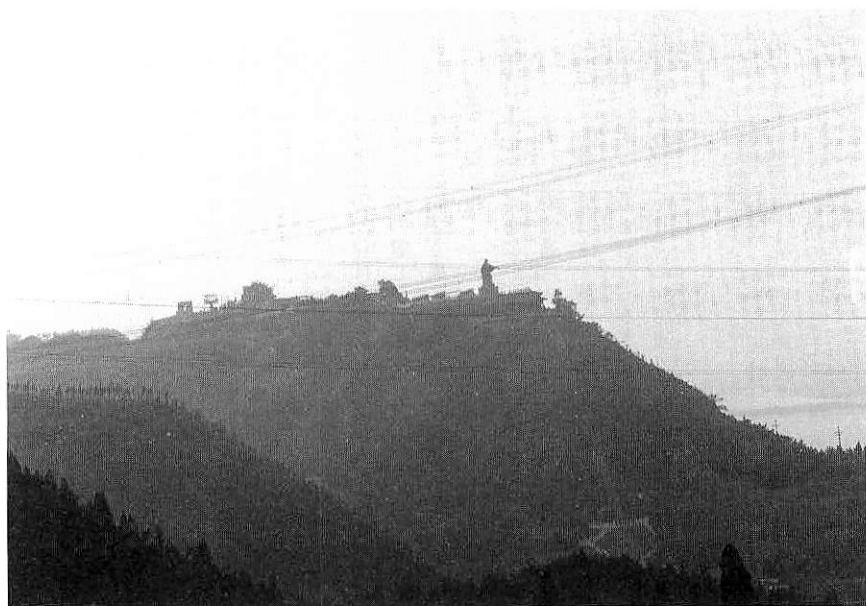
禹が帝舜に進言し、帝舜はこれに応えて、帝堯の功績を称えた。益はさらに、帝堯の徳を称えた。禹は引き続き「恵迪吉、從逆凶、惟影響。(善道に従えば吉となり、惡逆に従えば凶と

なります。吉凶が善惡に應ずること、影が形に伴い、響が音に應ずるようなものであります。)」と進言し、益も「人の道に外れないよう」進言した。禹は帝舜に「…帝王の徳は、帝王個人の善行に限られるのではなくて、民に善政を施すのも帝王の徳であります。政治の目的は、民の生活を豊かにすることです。…」と述べ、帝舜は「その通りである。幸い、洪水は治まり、地平天成(現在の元号平成の語源)(天下の水陸ともに平穏となり)、万物はそれぞれの生育を遂げている。…これも汝の功績によるものであるぞ。」と、禹の治水の功績を称えている。

百科事典(旺文社)によると、書經(尚書)とは、中国の古代伝承をもととした帝王説話で、理想的な政治を仮託したものである、ということになる。

ところで、宇野親美先生は恵迪寮小史(注)(復刻版)の序で、『恵迪』ハ道ニ從フノ意ニシテ、恵迪寮生ハ道ニシタガフ鍊磨ノ同志タリ。中略：マコトニ道ハ萬古不滅ナルモノ、而シテ不滅ナルモノヲ捨テムニハ滅アルノミ。道ハマタ恢弘スベキモノニシテ徒ニ株ヲ守ラムニハ亡アルノミ。志ヲ一ニスルモノ引率ヲテ、コノ道ヲ踐ンデ勇往邁進セリ。誠ニ理アル哉。…以下略…」と解説されている。

さて、禹とはどんな人物であつたのか。彼は、堯・舜二帝にブレーンとして仕え、特に黄河の治水に功績のあつた人物である。その功績により、舜から帝位を禪られ、夏(殷の前にあつたとされる中国最古の王朝)の国を建てたとされている。



(丘の上から黄河を見下ろす大禹の巨像～像の高さは15メートルぐらい。河南省鄭州にて)

たまたま一九九六年の万国地質学会後の地質見学旅行の際に河南省鄭州を訪れる機会があった。黄河ならびに中国の生い立ちを知ることができる、邙山黄河遊覧区を尋ねると、滔々と流れる黄色の大河黄河を眺めることができる。

また、小高い丘の頂に建てられ、黄河を見下ろして立つ、大禹の巨大な像を遠望することができた(上の写真)。また、鄭州市内の交差点に彼の立像が建てられているのを見かけた。彼は中国の古い伝説上の人物であるとはいえ、今でも多くの人々から尊敬されていることを知ることができた。

「恵迪」から始まって、書経・大禹謨までかじることになってしまったが、なにかきっかけがなければ、こういうことはなかなか勉強してみようという気にならない。問題提起をしてくれた山岸兄、問題解決の緒を御教示戴いた竹内、大川の両兄には深甚なる感謝を申しあげたい。

(注) 表紙には恵迪寮小史とあるが、背表紙には恵迪寮小史とある。

旧制高等学校記念館特別展

小 篠 守 正

(昭和十七年入寮)

信州を旅し、松本に立ち寄った人の中には、駅前道を東に一・五キロ真直ぐ行った突き当りにある緑色濃い「あがたの森公園」を訪れた人も多いことと思う。ここは、かつて旧制松本高等学校のあった場所で、今も往時の校舎の一部がヒマラヤ杉の林の中に静かに佇んでいる。

平成五年、この旧校舎に隣接して三階建の「旧制高等学校記念館」が建てられ、全国の旧制高校から寄贈された物品と文獻資料を収蔵し、常時展示を行うようになった。

同館では、平成六年、開館一周年記念事業として旧制高等学校特別展を企画し、その後毎年数校ずつ、旧校舎の教室を借りて、それぞれの学校の特色を示す展示が行われてきた。今年（平成十年）は富山・姫路・広島の高三高等学校と、北大予科・神戸商大予科・学習院高等科が当番になり展示を行うことになった。

昨年（平成九年）十一月、各校の世話人が招集され、平成十

年度の特別展について記念館の館長から詳しい説明があった。私も呼ばれたので同席したところ、主催者側の一人から「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の伝統のある北大さんは、予科時代に限らず札幌農学校以来の歴史的資料を沢山お持ちでしょう。期待していますよ」と言われ、展示する部屋も一番広い教室が割り当てられた。

見る人の期待を裏切らない展示はしたいが、そのためにはいくつもの課題（資料収集・展示品リスト作成・展示場下見・包装・搬送・展示作業・展示品撤収作業・資金集め等）を一つずつ解決してゆかねばならない。とても一人や二人で出来る仕事ではない。何はともあれ組織作りが先決だというわけで、有志が相寄り「平成十年度旧制高等学校記念館特別展北大予科実行委員会」（委員長六戸昌夫）を作り作業に取りかかることになった。

まず、六戸委員長が札幌に丹保北大総長を訪ね特別展に協力

を要請し快諾を得、事務局総務課を通じて「北海道大学予科看板」「エルムの鐘」「予科校舎の立面図（写し）」「予科運動大会旗」「赤木顕次氏、横山芳介氏回顧録（複製）」等の貸し出しを承認してもらった。これには札幌在住の小菅高之氏の尽力によるところが多かったのだが、北大事務局も本腰を入れて協力してくれ、松本まで出張して記念館長と資料送付の打ち合わせをしてくれた。

北大からは上記資料の他に「北大予科応援団旗」「応援団采配」「応援団羽織」が届けられたが、この羽織は札幌在住の和田輝義氏が寄贈したもので、裏に歴代の着用者の署名があった。特別展を訪れた一先輩は、自分の名前をこの中に発見して、六十年代のわが姿を思い浮かべ感無量であったと述べている。



（展示中のエルムの鐘）

「エルムの鐘」も特別展の目玉の一つとなった。戦前・戦中を通じて農場のエルムの枝に掛けられ時を報じていたこの鐘を私も初めて身近に見たが、予想以上の大きさ（重さ五十四キロ）で、見学者は軽い気持ちで鐘のロープを引っばって、その音の大きさに驚いていた。戦時中の金属回収の際、七つ程あった中でたった一つ残されたこの鐘も、戦後盗難に会い行方知れずとなってしまったが、偶然にも市内の古物商の店で発見され、無事エルムの園に帰還することが出来た。それから半世紀近く経った今年、数々の思いを秘めた「エルムの鐘」は遙々津軽の海を越え、日本アルプスの麓で四ヶ月間、その牧歌的な音を「あがたの森」に鳴り響かせて来たのであった。

もう一つ見学者の目を引いたものに、三東（旧姓秋間）哲夫氏が北大予科在学中に走り高跳の日本新記録を達成した時の写真がある。三東氏は理学部物理学科を卒業し、後に神戸の大学の学長をつとめた地震学者であるが、天才的なスプリンターで、この時につくった二メートル〇二の記録は、その後十八年間で破られることがなかった。

三東氏は私にとって北大理学部だけでなく中学の先輩でもあるので、奥様（群馬県在住）にご主人（故人）の思い出の品を展示のためにお貸し願えないかと頼んでみた。奥様は私の不躰な申し出を心よく聞き届けて下さり「日本記録達成の瞬間の写真」「北大陸上競技部からもらった記念のカップ」や、それに因んだ伴義雄元北大学長の記事、更に「もう家にあと一冊しか

残っていない」という貴重本「異例な競技歴を残した男の物語」(三東哲夫著、近代文芸社発行)等をわざわざ東京まで持ってきてくれた。これらは何れも松本の会場に展示されたが、特別展終了後奥様から北大に寄贈の申し出があったので早速手続きを取ることにした。

関西エルム会の阿澄昌夫氏(別府在住)・札幌の谷口博氏を

寮歌祭事情―寮歌祭はその役割を終えたのか―

阿 澄 昌 夫

(昭和二十二年入寮)

三十回を迎えた北海道寮歌祭が、昨年を最後に幕を閉じたようだ。昨年あたりから全国約四十八ヶ所で催されている寮歌祭のうち「もう今年で終わりにしよう…」の声をチラホラ耳にする様になった。年々参加する方々の高齢化が進み、後に続く者のいない集まりでは致し方のない事である。寮歌という青春の歌は、年はとつても勢いのある声で叫んでもらわねば聞いてい

始めとして、九州から北海道まで、今回の特別展のために物心両面で厚い支援を頂いた全国の同窓生の芳名を挙げる紙面のゆとりがないのが残念である。北大予科の展示が好評であったのは、このような物がよくとつてあったものだ、と驚くような貴重な資料を寄せて下さった方々のお陰である。人の心の温かさ、同窓の有難さをしみじみ思い知らされたこの一年間であった。

られない。

「都ぞ弥生」を歌う時、いまでも熱いものがこみあげてくる。青春と夢とロマンが蘇り、明日への挑戦の想いをかき立てられる特効薬である。残念ながら札幌には遂に一度も参加できなかった。北は秋田から関東、関西の各地、四国四県、九州の各地、沢山の方々とのお会いの中で素晴らしい一刻を持つことが



(第20回九州寮歌祭での阿澄氏・前列左端 平成8年11月2日、於博多)

できた。大変幸せな事と思っている。

昭和三十七年七月、東京文京公会堂において、第一回日本寮歌祭の幕が揚げた。作曲家呉泰次郎氏の旗振りでスタートしたが、親しくしていた北大出の先輩（故人）が協力者として呉氏の許にいたのが、今日まで私を寮歌祭に張りつけた。きっかけである。戦中戦後、その殆どを学寮生活の中で過ごした私には、寮歌が大きなシコロとして体の中に残っていた。世の中は産業復興の最中で、若者の世界では労音主導によるコーラスブームが拡がり、ロシア民謡などを歌いにホールへ通った。然し、第一回寮歌祭は大きな反響を呼び、マスコミの話題となつて全国的な拡がりを見せ始めた。正に日本の高度経済成長と共に、新しい文化として定着することになる。東京だけでなく、かつての旧制高校の所在地を中心に燎原の炎の様に。寮歌祭のポリシーについても当初から、凄まじい議論が戦わされていた。参加資格などというものについても真面目に論じられ、旧制高校以外の参加をシャットアウトする所も出てきた。

私もいつの間にか日本寮歌振興会の運営委員になり、関西に住みながら、なぜか東京の世話役まで仰せつかる事になった。戦後の文化活動はいろいろ制約を受け、中々骨のある催しのなかったうちでも、寮歌祭は多少の批判はあれ、バックボーンのあるイベントではなかっただろうか。

寮友―寮歌祭を通じて交遊をさせて戴いた数多くの友人。この貴重な財産は私にとっては人生の宝石である。寮歌祭に功罪

があるなら、功の最たるもの。これまで友人から与えられた様々な教えは、古希を過ぎた私の血肉となつて、現在を支えてくれている。

今年、東京での寮歌祭は三十八回を迎える。先日、機会があつて、この寮歌祭の立て役者である神津康雄（山形高）氏に現在の心境を聞いてみた。私も、彼とはスタート時点からお付き合い戴いているが、リーダーとして素晴らしい才覚と実行力の主で、戦後の日本文化史の一端を切り開いた逸材である。「やる事はすべてやった。もう二回、四十回の節目で終わらせたい。皆さんが決めることだが」。私の考えです。「皇国史観に集約された戦前の社会環境に育つた我々の世代が、戦後教育の混乱の中で闇雲に働いてきた結果、価値観の多様化という言葉に振り回されながら、新しい時代の道筋が、今、問い直されようとしている。教育再認識のキッカケの一つとして寮歌祭が存在していた———」と思いたい。

寮歌祭は何処へゆくのだろうか。地域社会のイベントとして、若い世代の歌声を拡げてゆく所もあれば、老人サロンの存在を堅持して小さく纏まっていこうとしている所、大体この二通りの形に集約されて行くように思われる。全国の催しの中で代表的な二ヶ所をご紹介してみよう。

その一つは「神戸寮歌青春コンサート」である。一九八一年神戸で開かれたポートピア博覧会を記念して誕生した。「来年はもう止めよう」。そんな事を毎年話題になりながら今年で

十七回を迎えた。神戸という歴史的な国際都市のためか、明るい県民性が色濃く、旧制高校だけでなく私大や市音楽隊、芸術性のある舞踊団や女性のバンド演奏など多彩なイベントが催されている。大震災の年も復興へのかけ声に力強く続けられて来た。行政の一環として定着している一つの例だろう。

もう一つは「佐賀県青春寮歌祭」、今年六回目である。この旗振りは北大出の大宅公一郎君（昭和五十二年・工学部卒）。県庁の公務員ながら当初から一人で駆けずり回り、人集めから運営まで取りしきってきた。この特徴は六大学を始め地方大学が多く、旧制高校は二校のみ。今年は女子大の参加が決まっている由。地域文化の魁として新しい試みがすすめられている。

「寮歌は他人に聞かせるものではない。己の心の叫びだ。足を開き手を腰にあて 目を閉じて ゆっくり歌ってくれ」。私が尊敬していた安部晤（故人）（恵迪寮第二期幹事長）氏の言葉である。

一人一人胸の中で寮歌は生き続けている。恵迪寮と寮歌は二十一世紀の新しい学寮の中で生き続けていつて欲しい。

（恵迪寮同窓会西日本支部長）

資料紹介

窓シヨンのことなど

石 村 義 典

(昭和四十年入寮)

窓シヨンは一階の窓よりも、二階の窓のほうがふさわしい。それは高さをもつ位置からの行為であるからである。現在の札幌時計台のある、その場所に存在した、札幌農学校の初代の恵迪寮は平屋で、根雪の季節にはその窓は、積雪により高さをもたなくなり、窓シヨンにはふさわしくなくなる。窓からひよいと飛び出し、雪山の麓での放尿の方が安定していて、快適かもしれない。そんな光景を、明治十八（一八八五）年の札幌農学校簿書のなかに見たことがある。

始末書

私儀

昨夜十時定規ノ検閲ヲ自室内ニ於テ相受ケ候後、徒然ノ余第九舎ニ至リ、雑談致シ居候ヒシニ諧謔百出説語漸々佳境ニ入り、一週間ノ積鬱モ此一時ニ解散ス可キヤナドト存シ候際、偶々溺水非常ニ充チ来リ到底便処迄歩行スルニモ不便ナル程

二相成リ候俟、暗サハ暗シ、殊ニハ校前ニ通行人モ相見ヘサル様故、別段不躰裁ノ事モ有之間敷ヤニ相考ヘ窓ヨリ立下リ、校門ノ傍ラナル積雪ノ中ヘ放溺致シ居候処ヘ、何人ニヤ校門ヲ入り来ル人物有之候故、是ハ失策ヲ致シタリト後悔モ今更ラ詮ナク、其俣快通致シ居候処、彼ノ人物ハ如何ナル故ニヤ、玄関ノ方ヘ参リ其戸ヲ押開カント頻リニ彼是致シ居候ヘ共、

因ヨリ十時過キニモ相成リ居候事故、開カル可キ筈モ無之、其俣元ト来シ途ヘ帰ラント致候ヘバ、私ニ於テハ益々疑惑ヲ抱キ偕テ々々不可思議ノ事モアル者カナ、学校内ノ人ナレバ八時ヨリハ彼ノ玄關ハ如何様スルトモ開カヌニ極ハマリ居ル者ナルニ、之ヲ無理ニ押開カント試ミルハ抑々何処ノ者ニテ何故ニ斯ク夜半ニ至リ来リシヤト疑訝躊躇致シ居候ヒキニ、彼ノ人物ハ漸々私ノ佇立シ居タル辺リヘ近ツキ、忽然何誰セラレタル声音ハ正シク取締碇山氏ナリシカバ、私ノ驚愕更ラニ甚ダシク、穴ヘモ這入り度キ心地ノ致シ候ヘ共、將タ茲ニ至テ致方モ無之白々地々私シナリト御返答申上タルニ氏ハ左様ニテ候カト笑ヒ乍ラ、校門ヲ出デラレ何処ヘ御出ナリシヤ、黒白モ分カヌ烏羽玉ノ暗夜ノ事ニ候ヘバ、私ニ於テハ存知申サズ、只一大失策ヲ為シタリト悔ヒ乍ラ元トノ窓ヨリ第九舍ニ這入り、又々暫時談笑致シ興ノ尽ル頃オヒ□ヲ立出テ校内ノ諸舍ヲ処定メズ徘徊致シ、十一時ニ至リテ自室ニ歸リ入床致シ候。承レバ何ニカ御用ノ筋ノ有之候ヒシトテ、小使ヲシテ私ヲ種々搜索セシメラレ候由、定メテ何処ニテカ行違ヒタル者カ或ハ便処ニ参リタル間ニテモ有之候ヒシニヤ、私ニ於テハ合点参ラズ候。右ニ述べ候処ハ即チ昨夜十時ヨリ十一時ニ至ルマデ私カ行為ノ顛末ニ御座候ヘバ、取締碇山氏ヨリノ御命令ニ従ヒ書認メ、始末書トシテ差出シ候。何ニ致セ窓ヨリ出テ門傍ニ放溺セシ候ヲ今ヨリ考レバ、不都合不躰裁千万ノ次第ニテ申訳ケモ無キ事ニ候。実ニ快談ノ間ニハ万事ヲ忘

却シ溺水ノ詰ルニ氣モ付カズ、又氣ノ付ク頃ニハ最早歩行ニサヘ難渋致ス様ノ事随分有リ勝ちノ義ニ候ヘハ、情実御酌量被下御寛大ノ御詮議所願ニ御座候也。

三月十五日

四年生 安岡携二郎

「雑談致シ居候ヒシニ諧謔百出説語漸々佳境ニ入り、一週間ノ積鬱モ此一時ニ解散ス可キヤナドト存シ候際、偶々溺水非常ニ充チ来リ到底便処迄歩行スルニモ不便ナル程ニ相成リ」、「実ニ快談ノ間ニハ万事ヲ忘却シ溺水ノ詰ルニ氣ヲ付カズ、又氣ノ付ク頃ニハ最早歩行ニサヘ難渋致ス様ノ事随分有リ勝ちノ義ニ候ヘハ」と言い訳しているが、便所は駆け行くにも困難なほどの距離をもっていたのであるうか。彼、安岡携二郎は、より快適の方をえらんだにすぎないのではないだろうか。

札幌農学校の宿舍、恵迪寮の門限は八時、石油ランプの消灯時間は十時、門限、特に消灯時間の違犯による、始末書の提出に、これでもか、これでもかというほどに簿書のなかでである。明治十八年一月十五日、助教碇山晋は三名の生徒の内則違犯の処分案を教授会に提出している。その案のとおり処分されたことは、三名の生徒の提出した始末書によって知る。

明治十八年一月十五日

碇山 晋

校長代

幹事

生徒内則違犯ニ付処分之儀伺

二年生 石橋 朗

二年生 友高猪之輔

初年生 西川忠太郎

右三名別紙之通り犯則候ニ付左記之処分致候テ可然哉。此段相伺候也。

達案 一

二年生 石橋 朗

右ハ本月十三日夜消燈定時ヲ犯シ候ニ付来ル廿四日（土曜）及ヒ廿五日（日曜）兩日外出相禁候事。

明治十八年一月十五日

札幌農学校

二年生 友高猪之輔

同文

初年生 西川忠太郎

右ハ本月十四日舎内ヲ下駄ニテ歩行候段不当之挙動ニ付来ル廿日外出相禁候事。

明治十八年一月十七日

校名

昨夜十時係之通り各舎巡視ノ折ハ違条ナク其後十一時過キ、小子便所ニ参リ其際廊下石橋朗ナル者舎ヨリ燈火ノ光相見ヘ候ニ候付、不取敢同舎ヘ罷越候処、同人臥床ニ入り点燈シ新紙閱ミ居故、消燈為致、当直舎ヘ引取り居候処、碓山氏十二時頃帰校イタサレ、友高ノ舎ニ点燈アリシニ扨リ、消燈イタサセ置候旨御申就ケテ候。今朝本人取調候処、別紙ノ通申出候。就テ右処分方如何ナル事ニ取斗可キ哉。此段御協議ニ及候也。

十八年一月十四日

加藤政敏

不当之挙動ニ付来ル廿四日外出相禁候事

明治十八年一月十七日

高田 助教殿

大嶋 助教殿

内田 助教殿

大瀧 助教殿

山崎 助教殿

碓山 助教殿

本日午後四時頃下駄ヲ以テ舎内廊下ヲ歩行スル西川忠太郎ヲ見認メタリ。暫クシテ其事実ヲ質問セシニ自室ヨリ浴室ニ至

ル之間一度往復セシト云ヘリ。兎モ角モ不当之挙動ハ謂ハザルヲ得ス。是レヲ内則ニ照シ第十五、十六、十七条ヲ以テ処分スベキ者ト判定シ、則チ初年生西川忠太郎ヲ土曜日一日之禁足ニ処スベキ者ト致テハ如何哉。此段及會議候也。

別紙一証相添

十四日 当直 碓山 晋

十八年一月十四日

高田 助教殿

大嶋 助教殿

内田 助教殿

山崎 助教殿

大瀧 助教殿

加藤 助教殿

二年生石橋朗、初年生西川忠太郎の両名はランプ消灯時間違犯、友高猪之輔は廊下を下駄で歩行していたことによる処分である。

浴室へ下駄履きで、自室から往復したとしている。冬期の積雪、一月から三月の積雪のある季節には、上履きを玄関まで用いることなく、自室からそのままゴム長その他外履きでの外出がみとめられていたのは、私たちの経験であるが、寮内、入浴へ下駄で往復することは。私たちには考えられないことである。消灯時間違犯の石橋朗および友高猪之輔の始末書はつぎのごときも

のである。

始末書

私儀昨日消灯時間ヲ過キ候也

明治十八年一月十四日

事務係御中

石橋 朗

始末書

私儀

昨晚九時頃ヨリ伏枕其後突然目ニ醒シ既二十時過ナルヲ知ラズ、点燈読書致シ居候段、誠ニ以テ恐懼之至リニ御座候。

友高 猪之輔

札幌農学校

御中

一月十四日

浴室へは室外で下駄を脱ぎ入室するようになっていたのだろうか。食堂では寝間着、和服はみとめられず、支給された制服以外の着用は許されていなかった。食堂での和服の着用は前もって、和服着用願を提出する必要があった。「寮生の皆様まもなくエッセンの時間がおわります。お急ぎ下さい」のアナウンスで寝間着のまま、食堂へ飛び込むのはよくみられた光景

であつたが、明治の恵迪寮では嚴禁であつた。その制服着用違犯の始末書をつぎに見てみる。

始末書

私儀

毎日食事ニハ必洋服着仕候處、今日起床時間ヲ誤リ驚愕之余り寢衣之俣食事仕後ニ而氣付申候。実ニ恐縮之至ニ御座候。仍而始末書如件。

明治十八年十月廿日

小野 三郎

札幌農学校事務御中

明治十八年十一月廿日

碓山 晋

校長代理

事務員

教員

生徒處分之儀ニ付伺

四年生 小野 二郎

右者今朝寢衣之俣喫飯致候ニ付之レ内即十一條犯之重キ者ト存候間、土曜一日外出相禁候テ可然哉。左ニ達案相添へ此如何候也。

達 案四年生

小野 二郎

右者本月廿日朝寢衣之俣喫飯候廉ヲ以テ、來ル三十一日（土曜日）外出相禁候事。

月 日

校名

始末書

私儀今日昼餐ノ際和服着用致候處、御規則ニ相背キシ故ヲ以テ、始末書可差出旨御申達ニ相成リ其事情ヲ開陳スル左ノ如シ。

御校ヨリ御渡相成候西服ハ凡テ二重ニ有之候處、一重ハ當時洗濯中ニテ無之、他ノ一重ハ今日午前十一時頃ヨリ用事ノ為メ外室致候處、此ノ酷暑ニ依テ流汗体ヲ濕シ上衣下衣共絞ルカ如ク槌モ着用スル事難出來故、日光ニ露シ乾カシ候得シヲ以テ、暫時和服着用致候訳ニ有之候。素私三四日万一如期事モ候ハンカト慮リ、洋服洗濯又ハ汗乾ノ際和服着用ノ儀ヲ書面ヲ以テ願出候處、右ハ今日又一重洋服相渡ス可キニ付キ敢テ書面ノ趣キ出願ニハ及バスト御申渡ニ相成リシヲ以テ、今日此ノ仕合ニ遭遇致候又如此場合ニハ冬服ニテモ着用致居ル可キ旨御諭ニ相成候共、旧冬御下渡ニ相成リシ洋服ハ上衣下衣共檻樓ニ相成リ着用致能ハズ、若シヤ有之トモ炎暑ニ嚴寒着用ノ冬服ハ私ニハ一分時ナリトモ着用難出來候。依テ始末書略々如此。

明治十九年七月二十一日

札幌農学校

御中

第二年生 高林甲子郎

二年生高林甲子郎服制違背二付七月二十五日一日外出差止

十九年七月二十四日

碓山晋記ス

制服は冬服一着、夏服二着支給されている。翌明治二十年二月十二日には「学生高林甲子郎、遠藤吉春ズボン洗濯中和服着用願出、乃今月十六日ヨリ向フ二週間被開置タリ」との高田信清助教の当直日記に読む。貸費品明細書によってつぎの諸品の支給を知ることができる。

貸与品目明細書

冬服	一
冬襦袢ツボン下	一
夏同	二
夏服	一
半靴	一
帽子	一
長靴	一
寒冒着	一
寝衣	一

枕	一
農服	一
ランブ	一
椅子	一
卓	一
布団	三
毛布	二
寝台	一
蚊帳	一
洗濯汁	
石炭油	
薪	
食料	
計	

給費は金額で明示されているが、実際の支給は現品である。ここに明示金額と実際の支給品時価総額とのギャップが生じるはずである。ここに不満が生まれ、これを確かめるべく生徒の動きをも簿書のなかで知る。中途退学者にとっては、給費は現金での返還が義務づけられていて、中途退学者にとっては、大抵の場合、分割の返納がみとめられているが、大きい負担となっている。これらについては次稿に譲ることとする。

思い出の恵迪寮・知られざるエピソード

燠製ニシンを焼くけむり

太 條 正 義

(昭和九年入寮)

信州蓼科に山荘を構えてから三十年近い。山荘とは言っても、平（オカ）屋根のマツチ箱小屋である。ただ、土地の標高が上高地と同じく千五百米ほどあり、八ヶ岳に抱かれ、常に無風なので、落葉松の爪楊枝ほどの枝先に粉雪が四センチも積もり、そのまま凍結して朝日にかがやくさまは絶賛に値する。

春夏秋冬、当初は毎週末マイカーで東京から通ったが、年の

せいか、冬場には足が遠のいた。しかし、亭々たる大樹に囲まれ、屋根に降り積もる落葉が雨樋を詰まらせるので、年一度の屋根掃き作業は欠かせない。

今年は四十七才になる次男、二十一の娘婿の二人を連れて出掛け、作業をすませた。食事の支度は男手だけだ。冷蔵庫を開けたところ、昨年札幌で買った燠製ニシンが出て来た。息子どもは、古いから焼かなけりや、と言う。骨つきのまま薄切りで食うのがぼくの好みなのだが、然るべくやれ、と折れた。眠くて仕方ないのである。

ガス台から立ち昇るニシンのけむり。椅子に掛けて目を細めたぼくは、突如六十年の昔に引き戻された。けむりの彼方に、入寮したばかりの恵迪寮の玄関の間が見える。トタン張り木製の大きい火炉。鼻を突くニシンの燠煙。炉を囲み、裸電球に照らされている先輩の面々。ここは夕食後のひと時を過ごす寮生の溜まり場であった。ぼくも含め、内地出身の寮生は、燠製ニシンの食べ方もろくに知らない。焼いて食うのがおきまりだ。

奥隣の間は監督員の詰所で、軍事教官が交替で詰めていたが、規則に縛られるのを嫌う若者どもとは所詮折り合わなかった。

さて、ぼくの心は、一本だけ見つけた古いニシンの煙に導かれ、長いタイムトンネルを一気に駆け抜け、古い恵迪寮に安着したのだ。あれ、ぼくの霞んだ目には、あの懐かしいSL、C—53に牽引される列車がまざまざと浮かぶ。

この列車は、大学当局の要請により札幌鉄道局が特別に編成した臨時列車で、一輛の二等車と数輛の三等車からなり、数百名の学生、教官が乗り組んでいた。昭和十一年（一九三六）六月一九日には道東地域を皆既日食帯が通過することが予想されていたので、日食の観測と教職員学生の懇親を兼ねた、車中泊まり三泊四日の大イベントを目論んだのである。

さて、汽笛一声、札幌駅頭を離れた列車は夕刻、弁当、茶を積み込むため旭川駅に停車した。と見るや、多数の学生が出口改札の柵を跳び超え、雪崩を打って市中に消えて行った。間もなく駅のホームにはビールの通い箱が山積みされ、車中に搬入された。発車予定時刻をとうに過ぎても、多くのものが帰還しないので、慌てたSLの運転士はひっきりなしに汽笛を吹鳴する。発車したのは結局、三十分も経った頃であった。

ビヤバーティーが、車内各所で始まったのはいうまでもないが、“札幌農学校は蝦夷が島”のストームが、列車の後部から前方に押し寄せてきた。いつスキー板を持ち込んだのか。先頭の数人は六尺禪姿。板で車床を打ち鳴らし、教官達が乗り組む

二等車へと進む。寮詰の軍事教官達のハゲ頭を叩いたり撫でたり、かねての恨みを晴らしたあげく、うしおの如く引き返す。正にシユトルム・ウント、ドラングのアニメ版だ。

ひと時過ぎれば、車室の床にはスヤスヤ眠る人とビールの空瓶がゴロゴロ。嵐の後の静けさ。一晩目はほくも、座席のクッションを取り外し、床上に横たわって寝た。しかし、四人掛けのコンバートメントで全員が横たわるのは無理。通路にはみ出た一人は通行人に踏まれるまま。そこで二晩目、ぼくは網棚を利用することを思いついた。当時の網棚は正にハンモック状であるが、幅が狭く、おまけに支腕の間隔が短いため、仰向けに寝ると鉄の支棒が背骨にあたって痛い。ぼくは仕方なく、支腕が腰骨と肋骨の間に来るようにし、横向きになって一夜を明かした。

列車はついに、目的地である屈斜路湖最寄の川湯温泉駅に到着。手に手に日食観測用の煤ガラスを持ち、湖畔へと急ぐ。待つことおよそ一時間、広い空は徐々に暗転し、地平線は茜色に染まった。どこからともなく疾風が巻き起こり、突然に八方から押し寄せる夕焼けに驚くカラスの大群が大声をあげ、自らの巢を見つけかねている様子だ。

輝く六角形のコロナに取り巻かれた黒い太陽のことは新聞の解説等で既に知っていたので、格別驚かなかったが、冷たい疾風とともに八方から迫る血色の夕焼けや、帰巢を求めて行き迷うカラスの狂乱のような、地獄絵巻的情景は全く予期していな

かっただけに、ただただ感動。ぼくはついに叫び声をあげてしまったらしい。????

「パパ、どうしたんだい」と息子達の声。僕はけむりの薄れたタイムトンネルを引き返し、とうに焼き冷ましになったニンニク製の丸焼きと地酒の一升瓶を目の前に見た。

「恵迪寮の思い出」

野 原 博

(昭和十二年入寮)

一 入寮・柔道部

恵迪寮に入寮のため玄関に入ると四、五人の寮生がおり、名前を云うと、お前の部屋はこちらだと云って南寮二階の柔道部

の部屋につれてゆかれた。入学試験を終わって廊下に出た時、沢山の運動部員が入部を勧誘しており、通してもらえない雰囲気、最初につかまった柔道部に名前を書いたためであった。中学時代（旭川中学）は汽車通学であったため、運動部などのクラブ活動は何もしておらず自信がなかったが、流れに従い柔道部員に編入された感じであった。

寮では各運動部が集って部屋をとり、梁山泊のような状態であり、一般寮生からは改革案が度々出されていた。柔道部に対する予備知識はなかったが、後になって一番古い伝統のある部で、猛練習で有名であることを知った。

当時の運動部は、主として夏休の高専大会を目標にしていたが、柔道部は、運動部の中では一番全国的に知られている強い部で、昭和九年には京都の全国高専柔道大会で初優勝しており、小樽高商とは負けたことがなかった。まず立派な柔道場（武道場）に驚いた。練習には、兼元師範を初め沢山の学部先輩が指導に來、中学の正課で習った柔道と異なり、寝業ばかりで、練習も次第にきびしくなった。しかし、練習が終わると和気藹々とした雰囲気、新入生に親切に接してくれ、又予科の上級生は寮生が多く、家族的で、道外から遠く札幌に初めて来た者が多数であったが、ホームシックになる者はいなかった。

当時の中学はきびしい校則があり、管理教育が行われていたため、学生の自治を重んずる自由な雰囲気、特に自治寮に入ったことで大きなカルチャーショックを受け、全国から寮

生が集まっていることも非常によい人生経験となった。

入寮した年の五月、第三十回記念祭が盛大に行われ恵迪寮生としての自信が次第に生まれてきた。しかし、記念祭歌の中に「長髪頬に戯れて、昔変わらぬ風なれや」と歌われているが、肩まで長く髪をのびた者はほとんどいなかった。前年に北海道で陸軍特別大演習が行われ、天皇の行幸があり、予科生に断髪令がおりたためと聞いた。まだ、寮生活に軍国主義的な圧力を感じずことはなかったが、寮の便所の壁に軍を批判する落書きが沢山あり、断髪の強制は寮生に大きなショックを与えたことが感じられた。

二 昭和十四年の秋の定山溪旅行

私は第百十八期寮委員として寮務庶務（風紀・衛生）を担当した。昭和四十六年編集の「恵迪自治寮史」に寮務部長森本とあるが、彼は病気のため歸寮が遅れ、笹島が部長となり、寮務部は一名欠の三名であった。森本君は次期委員長となった。寮務の部屋には委員長南部、部長笹島、庶務野原、会計石浜の四人が入った。

私が入寮した当時から、寮生大会等で炊務部長から度々寮費滞納者に注意があった。過去において、寮費の滞納が多くなつて自炊制度が破綻し、多額の借金返済のため復活に先輩が大変苦勞をしたらしい。私達が委員になった時も相当数の滞納者が

あり、寮生大会等にも無断欠席する者が多く、寮の規律が乱れていた。このため寮務では該当者を部屋に呼んで注意し、滞納者はなくなり、無断欠席もなくなった。寮務室の四人の中三人が柔道部員であったことも効果を高めたかもしれない。

寮の年中行事の中で特に委員が力を入れたのは、春の記念祭と秋の定山溪旅行であった。しかし、昭和十二年七月支那事変が始まったため秋の定山溪旅行は中止され、余った金は陸海軍に献金された。昭和十三年、昭和十四年の記念祭は寮の開放を中止し、自粛した記念祭となった。昭和十三年秋の定山溪旅行は学校からの要望と定山溪ホテルから宿泊を断られたため、二軒の旅館に分宿し、演劇会は中止された。

吾々が担当する定山溪旅行をどうするかで委員会は真剣な討論をした結果、恒例の行事にもとずくことが全員一致で決まった。支那事変の発生により、当時は時局柄自粛するという言葉が盛んに使われるようになっていたが、この問題についての議論は出なかった。委員の中には、近衛内閣の不拡大方針に反して陸軍が中国内地に戦争を拡大していることに對する反発と、事変は余り長くならずに終わるだらうという空気があったように私には思われた。国内の物資が次第に窮屈になり始め、非常時を叫ばれるようになったのは昭和十五年終わり頃からで、戦争による好景気で国民に危機感はまだあまりなかった。

傳統の定山溪旅行の行事はクロスカントリ、寮歌祭、ホテル大広間の演劇会であるが、前年の例から考えて、行事担当の

寮務部には荷の重い問題であった。寮生全員が宿泊出来、舞台付大広間があるのは定山溪ホテルだけであった。昨年の失敗にかんがみ、ホテルの交渉は上原炊務部長外数名の交渉のベテランに依頼し、寮務は演劇会について曾我学生掛と交渉を始めた。学校は、軽いアトラクション程度ならよいが芝居は許可出来ないということ、最後には先生の円山の自宅まで押しかけて夜の十二時過ぎまで議論した。許可できない根拠をただしたところ学校でも困った様子で、その後、明治時代の大政官令を出して来たのにはあきれた。吾々は定山溪ホテルが決まったことを秘密にしていたので、先生は、ホテルを借りるのが大変だらうと楽観している様子であった。

ホテルの交渉団は思ったより強硬で、吾々の手におえないので寮務部に返すと云って来たので、寮務では委員長を含め四人で再交渉に行った。ホテルでは息子という支配人が出てきて、私も大学を出ており皆さんの気持ちはよく判るが親父が承知しないということ、親父さんに出てもらい交渉したが、色々理由を述べて老人特有の頑固さで断られた。私達は諦めて歸ることにし、最後に私が、今後は定山溪に恵迪寮生を一步も踏み込ませないと宣言した。親父さんはびっくりし、そう云われると定山溪の住人として私は大変困る。昨年は断ったが皆さんは来てくれたので今年も来てくれると思っていたと言い、ホテルの宿泊を了承した。

満州事変後日本の景気も次第に回復し、最近では軍需産業等の

恩恵を受けて学生の団体客を受け入れるメリットがなくなっていたためと思われた。

十月二十二日の旅行日も決まり、委員会は最後の決断を迫られた。二学期の寮委員は元気な運動部員が多く、余り深く考えず傳統の行事の推進に向かって突き進んできたが、予想通りの問題に打ち当たり真剣に討議が行われるようになった。しかし、ホテルも決まり、ここまで頑張ってきたのだからと予定通り行事を執行することが決まった。委員会には緊張した空気になり、責任問題に対する不安があった。しかし、後に引けないという気持ちで皆を支配した。学校に対してはアトラクション程度の演芸会とすることが決まり、予想される処罰問題については委員全員で責任を負い、問題を発展させ寮生に責任が及ばないようにすることを決めた。

当日の演劇会には予科主事、学生主事等数名の教授、定山溪陸軍病院の入院患者を招待した。

最初の演目の寮生の芝居（飯の梅）が初まったところで、予科主事達は席を立てて部屋に引き上げ委員の来室が求められた。急遽委員が集まり対策を協議した結果、委員の芝居（ある日の一休）を次の演目として繰り上げ実施し、芝居に参加しない委員が予科主事との交渉に当たって時間を稼ぎ、委員の芝居を終わるまで実施することに決まった。はつきり覚えていないが、芝居に参加したのは委員長を含め十名位であった。

私は芝居は苦手で、寮務室の中で一人だけ参加しなかったた

め、参加しなかった委員数名と予科主事の前で頭を下げて話を聞き、時間稼ぎをするようになった。この時の時間の長かったこと、自分も芝居に出ればよかったと後悔したことは忘れられない思い出である。芝居が終わった合図を受けて演劇会の中止を申し入れた。旅行終了後の委員の総辞職を決定したが、事後対策等については事前に決めていたので特別に話し合った記憶がない。寮生の中には寮務委員室に来てストライキを主張する者もいたが、問題を拡大せず、学校の処分決定を待つ方針を貫いた。

学校では学生課が中心になり調査が進められたが、昭和七年の学内の共産党事件で多数の学生が関係したこともあり、左翼思想との関係を一番心配して調査したようである。委員は一人、一人学生課の学生掛と呼ばれて調査を受けた。私に対しては、君は仕方なく同調したのだらう、主謀者は誰かとしつこく追及された。私は進んで行事に賛成したことを強調した。大変嬉しかったことは他の委員も同様な返答をし、主謀者の特定が出来ず困っていると聞いたことである。教授会でも吾々の行動に同情的な先生も多く、処分決定に困っているという噂が聞かれた。

処分は全委員の退寮、芝居に参加した委員長、部長二週間、その他参加委員一週間の停学と決り、十一月末頃、学生が登校する前の朝早く学校の入口に掲示し、短時間で取りさつたと聞いた。吾々は委員の共同責任と考えており、私は処罰に差が出る場合には寮務委員が重いと考えていたのでこの決定に不満で

あった。しかし、寮生の芝居を二組準備しており、芝居をした寮生に処分が及ばなかったことでよかったと思った。事件を拡大せず、早期に寮活動を正常化するためこの決定に従った。私は寮務委員として行事の推進に当たったが、芝居に参加しなかったため停学をまぬがれ大変心苦しい思いであり、一週間学校を休んだ。これ以上休むと及第する出席日数をオーバーするためであった。吾々は処分発表前に次期委員の選出を行い、十二月中に全員退寮した。

学生課の組織については解らなかったが、学生掛の下に二、三名の調査等を担当する職員がいた。その中の先任者と思われる人で、名前は忘れたが北大水産専門部出身の人が居り、君達のような学生がいるのは大変嬉しいと云って寮務室の四人を官舎自宅の夕食に招待してくれ、大変歓待を受けた。吾々学生の気持ちを知ってくれたものと思ひ大変嬉しかった。

同期委員の残存者も少なくなった。私の記憶も薄れ間違っている点もあるかもしれないが、当時の恵迪寮生の気持ちの一端が判つてもらえれば幸いと思ひ筆を取った。この問題については「恵迪自治史」に簡単にふれられている。



私の思い出にある恵迪寮

(B面)

高 安 一 郎

(昭和十二年入寮)

独りよがりの拙文を本誌二号に載せて頂き、未完の

ま、続編を書くことは余り考えて居なかった所へ、

井口さんから、何か書かぬかとのお話があり、

お言葉に甘えてあの続きをと思い立った。

S P レコードの時代のことだから、

続編は「B面」ということにさせて頂こう。

第三章の章 寮生はよく高唱し、又喚き、時に乱舞する

(スケルツォ、アレグロ)

寮の年中行事の中に、寮歌祭、記念祭の外に、何回かの晩餐会があった。何れの時もその会の主題にふさわしい特定の寮歌が斉唱される。甚だ残念なことに、どの会にどの寮歌だったか、殆ど忘れた。唯、三学期の自炊復活記念晩餐会では「生命の争闘(大正十年)」ではなかったか。学年最後の送別晩餐会には「別離の歌(昭和六年)」だった筈だ。そしてどの会でも閉会の締めく、りは、「都ぞ弥生」である。

また、南、中、北、新の各寮棟にそれぞれ持歌があった。南

寮は「穹蒼高く」、北寮は「荒潮繞る」と、これは寮歌集にも明記されて居る。私に縁の深かった新寮は「魔神の呪（大正六年）」だった。中寮は「藻岩の緑」ではなかったろうか。又、その頃寮内では、運動部、文学部がそれぞれとまって部屋を占めて居り、各部も寮歌の持歌があり、寮歌祭でもそれを歌うことになって居た。私はア式蹴球（サッカー）部で、私達の持歌は「春雨に濡る（大正十二年）」だった。運動部の合宿も寮内でやるのが認められて居て、合宿中の早朝の散歩で、ポプラ並木を、この歌を唱い乍ら逍遙したのと、その頃の生活のすがすがしい一齣として記憶にある。（その後、寮内の自主的な論議に基づいて、部の割居制は一時廃されたこともあった）

寮歌の高唱は入浴場で最も日常的である。何人かが入浴して居ると、そうち誰かが何時しか唱い始め、他がこれに和して喪々の大合唱となる。ロッキーの月に吠えるコヨーテの熊である。私の在寮は昭和十二年から十五年の三月までで、その頃第三十回記念祭歌もよく唱われた。又、この頃の「都ぞ弥生」は、逍遙歌の如く、一番を唱い切るのに五分間を要した。之は寮の風呂の中で生まれた傾向かも知れない。

所で、学年はじめの新人生歓迎晩餐会には、その後で「鈍才会」というのが行われる。食堂に急格えの舞台が出来、立前では新入生が、一人一人登壇して持芸を披露するということになつて居るが、歌であろうがどんな隠し芸であれ、聞く方ははじめから聞く気はなく、新入生が一人ずつ上がると直ぐ「鈍才！」

「タタ」とがなり立てる。これは聞く為の会ではなく、「鈍才！」の怒号を浴びせ、度肝を抜く為の会である。然し新入生は決して聞いてもらえないと分つても、歌うか、弁舌をふるうかし



（第118期炊務部委員、後部左が筆者）

での「大声」はいろいろな時に響く。当時の予科は年三学期制で、各学期末に試験がある。試験直前から試験中、夜きまつて一人の爺さんが、北十八条の電停の方から屋台を引いて来て、

ないのであつた。た。他も、寮内

寮の玄関前でラーメンを売る。「満州軒」という屋号だ。チャルメラの音を聞きつけた寮生が「ラーメン来たぞー」「満州来たぞー」と怒鳴ると、それとなく待つて居た寮生が、ドタドタと廊下を駆け出して「オヤジ一杯」と注文、ガリ勉組も「何うとなれ組」も、次々と出て来て、若き故の空腹を充たすのである。親爺さんにしても結構商売になったのだろう。

ついでながら札幌、特にすすき野がラーメンの街の名を全国的にしたのは昭和三十年かそれ以後の事、未だこの頃はたまに街を流して歩くラーメン屋の外、狸小路を西三丁目以北に出た所に、歩道に沿って定置屋台を張って居た丸一ラーメン、札幌駅の西側、五丁目の電車の通る跨線橋を北に降りかゝる所、東向きの「鉄北ラーメン」、そのすぐ北の「なぎさ」という喫茶店位のもの、大学正門前の中華料理店「竹や」でもラーメンは食えたが、こゝは少々格式を感じ、そのすぐ近く、北9条通りの質屋のノレンをくぐった時、その勢いをかりて入るとか、だれか学部先輩におごつてもらうか位の時でないとい寸入りにくい。とまれ、「満州来たぞー」のあとの廊下のドタドタ、特に冬、カンテラの光の輪の中のおヤジと湯氣を中に囲んでラーメンの上がるのを待つ寮生の面々の姿そのものが、一つの風物詩としてなつかしい。

第四章の章 嵐（アレグロ）

戦時体制へなだれ込む、正にその第一歩と言うべき大きな事件が、ついに寮をゆるがした。私の予科三年の二学期、寮恒例の定山溪旅行の時である。

会場は定山溪ホテル。「此の非常時に何たる事、まかりならん」というのが学校当局（後の予科長―当時学生主事―服部品吉先生、同、曾我孝之先生ら）の基本姿勢。之に對し時の第百十八期委員にしてみれば、この学期だけという任期中でのピークとなる行事という意識が強い。懇請を続けた末、隣の鹿の湯クラブで療養中の日支事変の白衣の傷病兵の方々を慰問の意味をこめて招待し交歓すること。また、恒例といえども学校側から見て軽佻華美と感ぜられる「恵迪座」の上演は取りやめるということの様であった。

然し、一旦妥協したと言え、矢張り「恵迪座」の休廃演は残念、既に演目と配役も決定、貸衣装の段取りも出来、舞台稽古も確実に進んで居るし、然も当日白衣の客人達を前にし、急に「中止せよ」とは言われないのではないかと踏んで予定通り敢行とひそかに決定、晚餐が済み、客人や寮生の隠し芸の披露などあり、さて時もよしと遂に「恵迪座」の幕が切つて落とされた。

この日演目の第一は寮生有志演ずる「箴の梅」、続いて委員連中出演の「ある日の一休」と、こゝまではよかったが、突然同席の学生主事らが座を立ち、別室に委員を急遽集め、寮生側の背信をなじると共に、即刻プログラムの進行中止が命ぜられ、委

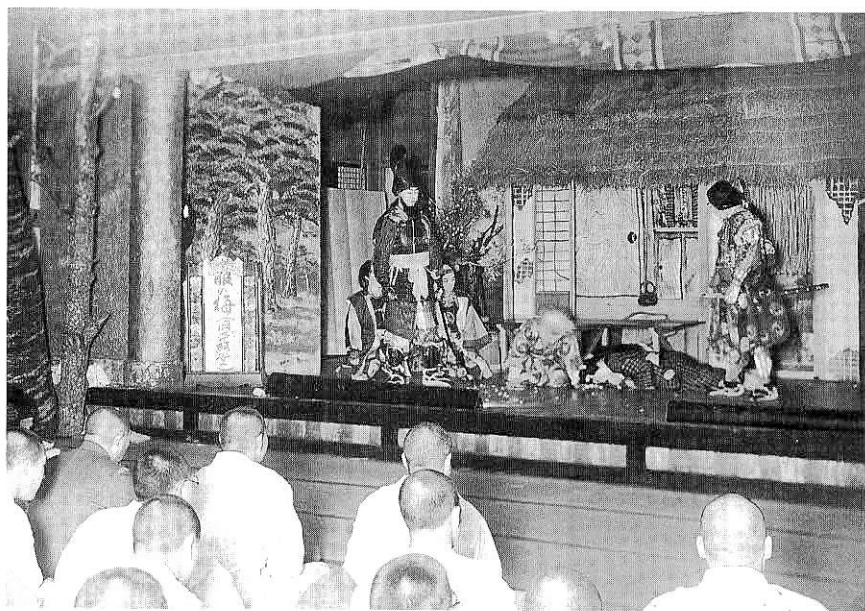
員は表面を取り繕って、寮生の演ずる予定の山本有三作「同志の人々」以下を切り棄て、緊急のお開きに持つて行つた。

本当はそれから後の集収が大変だった。第百十八期委員は、委員長南部直彦以下全員の退任は勿論、退寮の上、二週間乃至一週間の停学という処分。委員以外の演劇参加者は、南部兄等の俠気ある上請により、一応叱り置くということで予科長室によばれお説教は受けたが、訓告、戒告と言う様な正式の処罰もなかった。私もその一人だった。百十八期委員退任後、寮の生活は一日も休めないもので、次の三学期を任期とする第百十九期委員を選任、繰上げて運営が開始され、その方は事なく運ばれることとなった。

尚、急変に伴う運営の渋滞を避ける為、前寮務部長森本忠良君が辛うじて許されて残留、次期委員長に選ばれることを得た。そして私はその期の炊務部長（自炊復活第二十一代）を勤めた。定山溪旅行の顛末は、ある寮生の手記の形などを混じえて、寮史第二巻に記録がある。私の記憶と搦き混せて見て頂き度い。

第五章の章 原曲では、この章は嵐の後の牧人の感謝（アレグレット）だが、前の第四章は実は苦難への序曲で、私の編曲での第五章の章は、戦争への挽歌である。

昭和十五年三月末までの私の炊務委員任期中、食糧不足という難問題はまだそれ程緊迫して来なかったが、そろそろその前



（定山溪旅行での問題の演劇、岡本綺堂作「飯の梅」）

兆らしいものを感じさせる事があった。或る日炊夫さんが「砂糖を急に切らして。」と言って来たので、南一条のいつもの店に電話したら、「今すぐなら、店が空かないので。」と言う。炊夫さん達は既に夕食の準備に忙しい。それならともう一人の委員と二人で急拠取りに行き、市電と手櫓で凍てた雪道を運んだことがあった。確か二、三袋の黄ザラだった。

その時、何となく「こんな時代になって来たのかナ」と感じたのを覚えて居る。寮の委員制度も昭和十五年一杯まで、あとは学校主導の幹事制となり、戦時体制へと雪崩れ込み、寮史第二巻も第二章「太平洋戦争期」に入った。

さて、私達のその後である。昭和十五年四月、私は前記百十八期委員長だった南部直彦、同炊務部飯塚和夫、百十九期購買部倉上武士の三君と一緒に農学部畜産学科第一部に進んだ。

南部君はもと予科柔道部主将、二男坊ながら青森八戸南部藩主の末裔。倉上君は、姿なり丸ごとの魚の副食には決して箸をつけないので皆に不思議がられて居たもの、実は当時余市の道立水産試験場の長男。この二人は学部在学中に結核で死亡。この二人の名は農学部同窓会である札幌同窓会の名簿にも無い。飯塚君は札幌農学校の先輩飯塚幸四郎氏の長男で群馬県出身、予科、学部、庭球部主将で、これもい、奴だったが、戦死だ。

前記私達を含めて、この年畜産一部に進んだ者は九名、そのうちの三人は結核で夭折、ついで三人は戦死。さて残る三人は、

一人は数年前に脳溢血で死亡、最後まで残った二人も共に成人病。二十才前後の第一の関門は結核性疾患、第二の関門は戦死、残る三人が成人病、正に我が世代の歩みを表徴する人生像かと思う。恨むらくは、今すでに八十路に在りて顧み、特に戦後の自己喪失の中に、何事の為すなかりしを。

寮の名に「恵迪」を残してくださった若い方達、それを支援して下さった先生方に、満腔の謝意を表します。私自身、転を奉じて居た新制大学で、その母体校となった旧制高校の寮の名が、誠に無残に、官僚風の圧力で消されて了ったのを見て来ただけです。



(右) 退任後贈られた委員就任記念メダル。なお吊り下げのためのリボンは予科の夏の略帽のリボンを筆者が加工した)

(下) 同メダルの裏面。二六〇〇は皇紀二六〇〇年の意)



恵迪寮で青春を過ごした皆さん 北海道自由が丘学園設立の取り組みにご協力を！

— 自由と協同、進取と創造の理念は恵迪の精神と共通 —

いつ思い出しても涙の出るほどの青春時代、それがまさに私たちの恵迪寮時代だった。私たちが得た珠玉の精神、それこそ自由と協同、進取と創造ではなかったろうか。

97年の秋から、北海道夕張の地（旧鹿の谷小学校跡地）でつくろうと取り組んでいる北海道自由が丘学園中学校の理念はまさにこれである。

今、教育と学校の問題がいろいろいわれている。教育を変えなければ日本の未来がないとまでいう人がいる。

閉塞された学校と今日の教育状況に重大な一石を投じようという試みが「北海道自由が丘学園」の設立の取り組みである。

◎ 設立の趣旨に賛同してください

今、「自由が丘」に賛同してくれる人は 6,000名に達しています。さらに多くの 人たちの賛同を期待しています。

◎ 設立資金を寄せてください

夕張での「自由が丘」の設立に必要な金額は1億円強です。現在6,000万円が集まっています。1口1万円。一人でも多くの方がたのご支援をお願いします。

（他に教育備品、教育資材の提供といったご協力もあります）。

振込先 北海道自由が丘学園設立基金

郵便局 02710-7-23353

銀行 北洋銀行北24条支店 (319-3286800)

空知信用金庫札幌北支店 (52-374350)

「自由が丘」を支援する恵迪寮OB

設立発起人 山田定市 (S26農)、坂下五郎 (S28経)、亀貝一義 (S31教)、
太田原高昭 (S34農)、白浜憲一 (S40法)

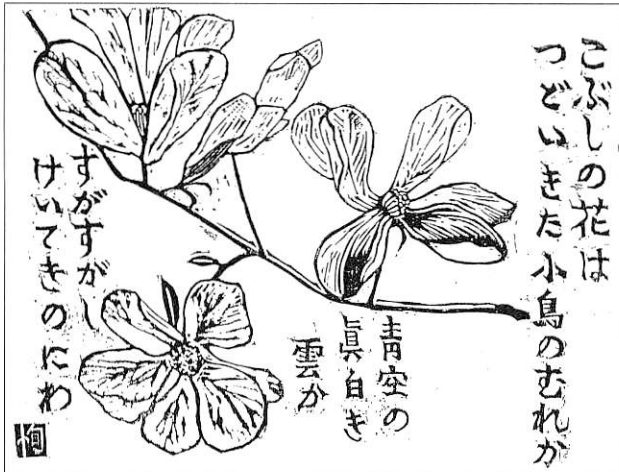
賛同者 坂下志郎 (S25理)、高村康雄 (S25理)、河原克美 (S26文)、野崎弘明 (S27教)、
伊東 孝 (S30経)、正岡雄司 (S31文)、干場一征 (S31教)、石川 舜 (S32教)、
神谷忠孝 (S33文)、森元忠恒 (S34文)、小林 甫 (S35教)、上野八郎 (S36教)、
諸富 隆 (S36教)、国吉昌晴 (S37教)、吉田康祐 (S40水)、今 重一 (S41法)、
山田洋二 (S41法)、鹿瀬憲治 (S41水)、番留 進 (S41教)、森越清彦 (S41法)、
腰岡雅昭 (S42文) 中間 徹 (S42水)、伊藤誠一 (S43法)。

※ 昭和43年以前の入寮者だけです。敬称略。漏れ、または誤記あればご寛恕ください。

連絡先 〒001-0016 札幌市北区北16条西4丁目21番地
自由が丘本部

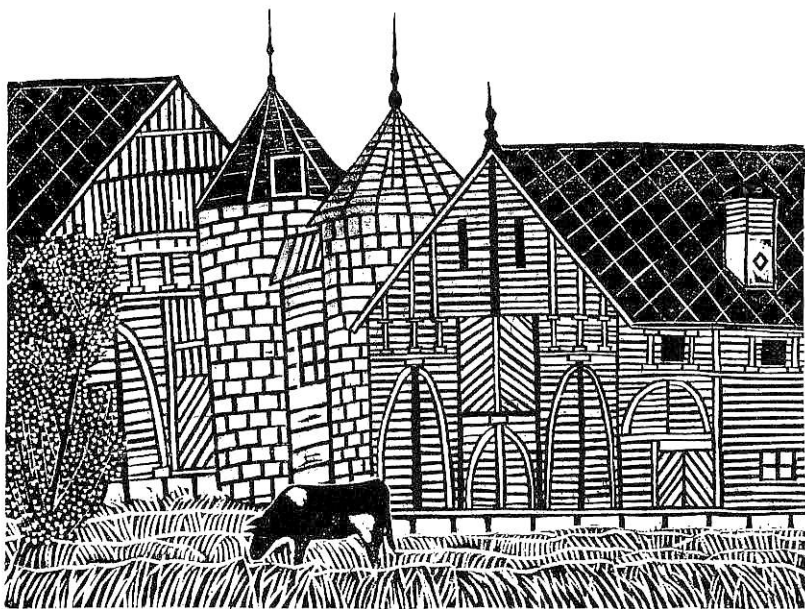
TEL(011)736-5345 FAX(011)736-5755

思い出は、版画に
思い出は、版画に



入江

恂(昭和二十七年入寮)



送られてきた古いレポート

村山 正
(昭和二十三年入寮)

数年前の事であるが、Aさんから手紙と一緒に古いレポートが一束送られて来た。それは私が寮に居た頃に書いたと思われるもの（とは云っても勉強などほとんどしていなかった筈なので、何かの本を丸写しにしたものと思われるのであるが）も含めて、かれこれ十人ほどの学生が何かの課題として提出したレポートであったのだが、問題はその裏である。

すくて見えるような粗悪な紙質のレポート用紙の裏には、きれいな字でびっしりと数学の練習問題が書き込まれて居た。

Aさんは当時、寮のボーイラーマンとして、また奥さんは寮の掃除婦として働いて居られたと云う事が手紙に書かれて居た。

1. 複素数の因数分解

$1.6 \times 0.4 = 0.64$ $0 = p$ $d = 9.6$ $l = 2.0$
 $17.8 \times 0.4 = 7.12$ $D = 7$ $d = 9.6$ $l = 3.0$
 $9.4 \times 0.4 = 3.76$ $D = 10$ $d = 9.6$ $l = 2.0$

$2x^2 + 5x + 2 = (2x+1)(x+2)$ 2×1
 $2x^2 + 7x + 3 = (2x+1)(x+3)$ 2×1
 $2x^2 - 11x + 12 = (2x-3)(x-4)$ 2×3
 $-9x + 4 = -(2x-1)(x-4)$ 3×4
 $-17x + 6 = -(5x+2)(x+3)$ 5×3
 $+9x - 2 = -(5x-1)(x+2)$ 5×2
 $4x - 3 = (2x-3)(2x+1)$ 2×3
 $x - p = (2x+1)(2x-p)$ 2×1
 $1 - 6y = (2x+3)(2x-2y)$ 2×2
 $-4 + 6y = (2x-3y)(2x-2y)$ 3×2
 $-3a^2 = (2x+a)(x+2a)$ 3×1
 $-6a^2 = (2a+2a)(2a-3a)$ 2×2
 $x^2 - y + 1$
 $2(1+x+4x)$
 $3(a^2 - 9a + 16)$

寮論
一年一組
村山正

聖賢は人間と自然との衝突相を明かにせん
 ものである。混沌たるものを分割して
 なる要素と

Aさんは寮から支給される安い給料で物資窮乏の中を懸命に生きて、何かの事情で寮のどこかに捨てられて居た学生達のレポートの裏をノート代わりにして、ボーイラー技師の資格を目指して勉強を続けて居られたようである。

それから三十数年が過ぎ去った。定年を迎えられた時、Aさんは工学部のボーイラーマンとして勤務して居られたようであるが、こつこつと勉強を続けて、一級ボーイラー技師として働いて

居られたとの事であった。定年退職に当たって身辺を整理している内に古いレポートを見付け、その中に工学部に居た私の名前を見付けてわざわざ送って下さったもののようであった。

それらのレポートを、寮の名簿を頼りにそれぞれの書き主達に送りとどけた事により三十数年振りの文通が始まったり、何人かの人々には、その間の人生を報告してもらったりした。中にはAさんに礼状を書いて呉れた人も居て、Aさんはその事をととても喜んで下さり、再度手紙を頂いたりした。又、それを契機として、B君とは東京で再会して寮の思い出話をする事が出来た。なおAさんはお子さんも順調に生育され、お孫さんに囲まれてしあわせに暮らして居られるとの事であった。

色々楽しい事が多かったので、何時か文章にしなればと考えて居たのであるが、資料をどこかにしまい忘れてしまつて、折角の機会でありながら大変不完全な文章に成つてしまつて残念である。

しかし、私の書いたレポートだけは別にしてあつたので眺め直す事が出来た。粗悪な原稿用紙と、その裏に鉛筆でびっしりと書き込まれている因数分解の練習問題を見ると、敗戦後の、あの何もなかった時代の青春が眼の前に浮かんで来るような気がするのである。

恵迪寮での一年半の生活は、私の人生の中でも一番充実した思い出深い、なつかしいものであるが、我々が誇りとした自治寮を裏方として懸命に支えて居た人々の事は、あまり深く考え

る事もなしに過ごしてしまつたような気がする。しかし、そのような人々の中にも同じ年代の人が居て同じような青春があり、そして、懸命に生き抜いて来られた人生があつたのだと云う事をしみじみと感じさせられたものである。

先人記念館と

島 善鄰先生の思い出

水 庭 久 尚

(昭和二十六年入寮)

昨年の春東北地方を旅したとき、盛岡市の先人記念館をみる機会があつた。記念館といえは個人の顕彰を目的とするものが多いが、この記念館のユニークさは、館設立の趣旨にうたわれているように、盛岡の誇りであり、近代における盛岡の豊かな精神文化の基礎を築いた、盛岡にゆかりのある先人百二十五名を顕彰していることである。

その総合展示室には、百二十五名の業績が紹介されているが、その中の「學術・教育に生きた人々」のコーナーには、「北海道大学の父・佐藤昌介、太平洋のかけ橋・新渡戸稲造、実験物理学者・中村儀三郎、農学者ゴールデンデリシヤスの父・島善鄰」の四人の北大関係者が紹介されている。

また、その際入手した記念館の館報によると、平成七年の九月から十一月にかけて、「北の巨人たち——北海道大学と盛岡の先人」と題するテーマで、特別展が開催されたことが記されている。その解説文には

『明治九（一八七六）年、北海道における開拓者の養成を目的に「札幌農学校」として創設された「北海道大学」には有益な人材が多く集まった。

佐藤昌介は母校の初代総長となり廃校の危機を救い、新渡戸稲造は世界へと雄飛した。島善鄰は教授・学長としてリングの発展に尽くし、中村儀三郎は理学部の基礎を築いた。本展は書簡・原稿・研究論文を中心に構成し、四人の先人について北海道大学での足跡を中心に紹介した」とある。

この四人の先人のうち、私が直接その聲に接し得たのは島善鄰先生だけであるので、ここで島先生の思い出を記してみたい。私が北大恵迪寮に入寮した頃、島先生は北大の学長であった。新入寮生の歓迎晩餐会や記念祭での全寮コンパの時など、来賓として出席され、挨拶をいただいたのを思いだす。

昭和二十七年の寮祭は、当初の寮生大会では非公開と決定し

たものを、再度の寮生大会で公開と逆転し、さらに寮祭最終日には、伝統のファイヤーストームと寮歌祭すなわち聖火祭の実施も決まった。そして聖火祭の挙行を強く主張した私が、ファイヤーの薪材を調達する役目を負うことになった。丁度その頃農学部本館の増築にともない、旧農芸化学教室の一部が解体されたので、その解体材に目を着けた。そして、これを払い下げてもらうのに、こともあろうに島学長に直接頼みに行ったものである。いま思えば、寮の世話係でもあった学生部に頼み込めば何とでもなったろうが、あの頃我々寮の炊務委員と学生部は、食堂の炊事人の採用をめぐる意見が対立し、気まずい関係にあった。それならいっそのこと、学長の島先生にお願いしてみようという単純な思いつきであった。

島先生は、私が北大へ入学する前年の昭和二十五年、イールズ事件の責任を負われて辞任された伊藤誠哉先生の後をついで学長に就任されていた。当時の受験誌『螢雪時代』の北大紹介記事に、新しく北大学長になった島善鄰氏を、「リング研究の権威で、リングの気持ちのよくわかるリング博士」と紹介していたことを思い出し、リングの気持ちのよくわかる学長なら、恵迪寮生の気持ちもよくわかってくれる筈と勝手に納得して、大学本部の二階にあった学長室へ単身出掛けていった。

長髪・和服・袴に手拭いという寮生スタイルで現れた私の汚い高下駄をみて、秘書嬢はかなり躊躇しているようだったが、島先生は意外にあっさりと会って下さった。そして気やすく私

の話を書いてくれて、早速農学部に話をつけて下さった。本当に有り難いことだった。そのお陰で、この年の聖火祭は大いに盛り上がり、巨大な篝火が夜空を焦がし、寮歌の歌声は寮舎を取りまく原始の杜にこだまし、会場が感激と陶醉の坩堝と化したことは言うまでもない。

そして、一寮生の訴えに、真摯に耳を傾けて下さった島先生の温顔が、いまでも懐かしく思い出されるのである。

(北大茨城県同窓会報「創刊号」より)

「恵迪」回顧

寺 田 周 史

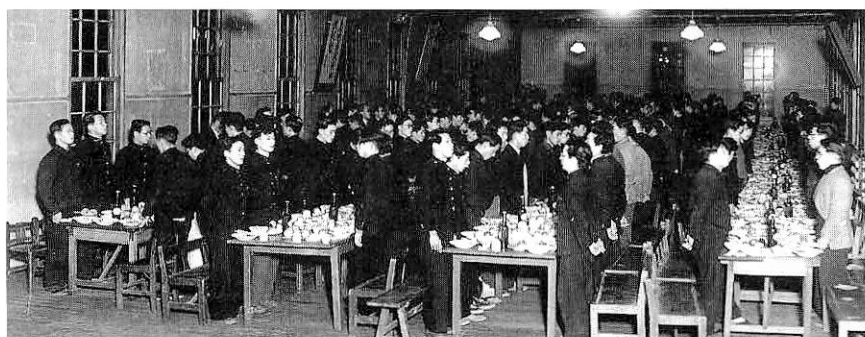
(昭和二十八年入寮)

入寮四十五年と言うことで支笏湖の集いに参加、古い記憶に推測も重なって蘇った。記憶違い御免で、想い出の釣瓶を揚げ

てみたい。

札幌の木造駅舎も改築のため、前年にそのロシア風の姿を消して、全ては戦後改革の勢いの中にあつた。新学制も低学年から押上げて進み、その先鋒を受けて教育も試行錯誤の連続であつた。昭和二十五年旧制の予科は消滅したが、学内には院生もまだ見かけられた。

寮には古き良き時代の遺習も残り、それを否とする派と大事にする方に分かれたが自治の志向は強かつた。大学最後の角帽生で、大半はノンポリ、いつのまにか長髪族も姿を消して、これ又最後となつた入寮洗礼を司つた





(第150期坂西八郎委員長—中央—と寮務部長だった筆者—左端—)

て、得意のドイツ語でゲマインシャフトとやらゲゼルシャフトなど難しく煙に巻いて当選、要は中道左派的な西欧的自由を求めて、左からの束縛を拒否、友宜の親和を感じた結果であると思われた。意気のがらぬ学生運動は白鳥事件などの後の休戦の態、精々住民登録反対や職場デモ応援の呼びかけを受けながらバイトの方が忙しかった。

旧体制が伊沢革命委員会に替わり、伝統的な行事など全ては否定的に見られ、寮生活に或種の緊張も兆して、坂西君によれば、寮生集団の陥った錯覚に（道新・一九七六・七・一六 北大寮歌史のある空白）寮風は沈滞しながら旧制の遺風も形骸化して消えた。

新風を目指してか、坂西君立候補の経緯は識る由もなかったが、当時はやった壁新聞に所信の主張が掲げられ

寮務渉外（岡部君）の仕事はもっぱらバイトの斡旋であった。十八条止りの市電沿いには喫茶代わりのおやき屋が繁盛、十条市場の廉売で、松葉食堂のラーメンは狸小路の「月」と味を競い、三十円が始まりであったと思う。とにかく腹は空くばかり、喧しい早朝の蒸気暖房弁の音も恨めしく、バイトと練習の一日が始まった。当時、新改築したばかりの大通の東京海上、安田火災、東銀等々の窓ガラスを拭いて回ったが、その建物もなくなった。井戸掘や引越し手伝いも悪くなかったが、石狩の新田の田植えは宿、食込みの四百円、日雇いのニコヨン時代が過ぎ、普通の参百円よりは増しだった。それより大阪屋の徹夜の、駅売り用アイスクリーム詰めは圧巻で、空弁当一杯に詰めて暁の寮に凱旋、同室を叩き起こしての王侯の振舞となつて感激されたが、後に工場長は罷免と聞き惜しまれた。

出来秋は唐黍、南瓜等家畜用ともしらずヒーター室は常に満杯、停電は営繕係の寮務を泣かせた。空腹を抑え込むには歌が一番であった。右手に寮歌集、左に青年歌集でもないが、ロシア民謡などよく流行ったのも、歌ごえ運動や戦後引き揚げ者の影響で、その多くは解放軍歌即ち赤軍々歌を歌わされていたわけである。寮歌をはじめ学生歌の多くも時流に左右されて、驚いたことに残された遠征歌に「Uボート出撃の歌」など、迷いなくナチス軍歌を歌っていたものを、動機は夫々ながら気付かず受け入れられたもの不思議である。卒後も歌える寮歌が多くない所以ではある（後にこの歌を知らぬ若いドイツ人に教えた

ことも皮肉であった。

奨学金二千百円、寮費千八百円が二千三百円になり、直ぐまた揚がつたと記憶している。予科時代ほど在寮期間にゆとりはなかったが、何よりも食住の保証された環境は憧れ派でなくとも是非の願望強く、補欠選考では傷を残し永く恨みをかけていた。何もせずいつも四丁目辺りをぶらついていると批判も受けたが、明るい電燈と便所の仕切りがかたじけなかった。保全のため下駄の土足とスキーを突くストームは自粛できたが、寮雨と称する窓シヨンは止まなかった。通うには遠くて寒すぎたのである。

笑い話ながら、パジャマを洗った坂西君が自分のでないと主張した事件があつて驚かされた。その隠れていた模様様が原因だったが、洗濯はしていた証左とも言えよう。何かのコンパの折に、皆で歌をうたうことになって歌声派の抵抗に合つて立ち往生、しかたなく全学連の歌を提案して可とされたが音程が合わずズッコケてしまった事がある。合わないものは所詮無理することないとし投げた。かくていささか疲れて任期は満了、食堂に声明を張り出して終わった。内容は忘れたが確か寮生による山小屋運営などを提案したことを覚えていて、それが昭和五十三年に土幌小屋「チセフレップ」として実現したらしい。いつの日か行つてみたいものである。

(第百五十期 坂西委員会寮務部長)

「あの頃」

高 根

つかさ 仟

(昭和二十八年入寮)

私が入寮した昭和二十八年、戦後の混乱も落ちつき平穏な社会情勢の中で寮生活を送っていた。

あの頃の札幌は殆どが砂利道で、雨上がりや雪解けの頃には路面の至る処に水たまりが現れ、多少歩きづらいが気になる程ではなかった。市内の物流は専ら馬車であつたから、道路に馬糞がふりまかれ、こんな状況が春先の札幌名物「馬ふん風」の元凶で我々も悩まされたものであるが、現在の環境の中では想像もできぬことである。町中の交通手段は徒歩か路面電車で、我々寮生のはほとんどは懐具合がそれほど豊かでないから、余程の急用以外は専ら自分の足で春の花見、藻岩の山開き、薄野での息抜きなど遠近にかかわらず、歩け歩けと足を鍛えたもので

ある。

近頃は健康管理への関心の高まりにつれ、歩く人達が結構目につくが、歩くことの効用は、四季折々に変わる周囲のたすまいを身近に感ずることが出来る事で、あの頃の我々の経路であつた北大構内では、寮歌の一節に符号するような情景に遭遇することがしばしばで、心なごむ一瞬でもあつた。

入寮して柔道部の部屋に入り、恵迪ジュースによる洗礼や新人寮生歓迎会の行事が終わる頃には、同室の先輩や同輩ともなじむようになり、快適な寮生活の幕あけとなつた。寮生活の中で色々な人達と付き合ひの友の輪が広がる中で、忘れ得ぬ友人が何人か居る。そんな中で畏友、松沢敏男君（昭和二十七年入寮）の印象が特に強い。

室蘭中学では席を同じうした仲間で学業成績優秀、豪放磊落、非常に人情に厚い男で、入寮して再会した時は「松ッアン」「松ッアン」の愛称で寮の名物的存在であつた。彼の積極的勧誘もあり、北大に入学し、入寮間もない頃は寮生活のノウハウの教示を受けたし、応援団に入るきっかけも彼の存在による。卒業後も恵迪時代のベースで、お世話になったりなられたりの交際が続いていたが、不死身のように思われていた彼は、平成元年七月肝臓疾患で五十七歳という若さで鬼籍に入られたことは誠に残念である。謹んでご冥福をお祈りする。

さて、あの頃の応援団活躍の場は春秋二回、札幌と小樽を会場として行われていた対小樽商大戦で、対面式、野球をはじめ

とする幾つかの競技の応援と、寮祭での市中パレードへの参加であつた。応援団の組織は恵迪寮生が主体で、リーダー諸兄の氏名は省略させて頂くが、各寮棟の有志により同志的結合で成り立ち、団長以下の縦割分担は話し合ひで決められていた。現在の応援団のように計画的な練習というのはなく、先輩から応援行事進行上の指導のみで、対小樽商大戦にはブツケ本番で臨んでいた。

あの頃の対小樽商大戦は、季節的イベントとして多くの市民に親しまれていて、特に対面式には、応援の学生ばかりでなく見物の市民の人垣の中で行われていた。こういう雰囲気は独特なもので、新米団長として挑戦状朗読の折、「団長、足が震えているぞ」との相手応援リーダーのヤジに、それまで何ともなかったひざ頭がガクガク震えたことなど懐かしく思い出している。

八十有余年の歴史をもつ対小樽商大戦が、小樽商大応援団の解散によつて、平成十年度の応援団行事が中断したと聞いているが、関係者の努力によつて、小樽商大応援団の復活を心から願うものである。

近年、スポーツが隆盛をきわめ、ブラウン管を通していろいろな競技が観戦でき誠に喜ばしいことである。この様な世の流れにつれ、応援団行事も多岐に亘っていることを団誌「蟹聲」で拝見しているが、伝統継承のリーダーとして精力的に活動している応援団諸君に敬意を表したい。

旧制予科、高等学校有志によって北海道旧制高等学校寮歌祭が毎年秋に開催されていたが、参加者の高齢化により平成十年、第三十回をもって幕を引いたという。これも時の流れか、それにしても私達の身のまわりには、とかくネガティブな話題が多いのは残念である。先憂を断ち後楽を願う気持ちは誰しも等しいことであるが、ともかく、同窓諸兄のご健勝とご多幸を祈り拙文の筆を置く。

恵迪寮越冬記

高 津

(昭和四十五年入寮)

敏

青春の一時期を恵迪寮で過ごした日々は、ご多聞に洩れず、多くの事が今も牧歌的なキャンパスの四季の移り変わりと共に鮮明に脳に浮かぶ。

九州出身であった故か、六月に萌え出る中央ローンの緑の鮮やかさと成長の早さ、さらさらの雪の清冽さとそれらにまつわる出来事が、特に印象深く、水産生であったこともあり、一度限りの札幌の冬の体験を記す。

札幌の地で私が、最初で最後の恵迪寮越冬を体験できたのは、昭和四十五年の暮れであった。

この年は、三島由紀夫が盾の会の若者と共に、フリーパスであった陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地において、電撃的にして壮烈なる愛国の演説後、自殺を遂げた事件が我が寮生で剣道部仲間の稽古帰りに、ひときわ花を咲かせた年であった。

越冬（今もそうであるのか？知らず、当時、内地出身者で年末年始を寮で過ごすことを、そう呼んでいた。かなり、思い入れたっぷりのことではある。）

その越冬は、南寮階上四号新入生ばかりの剣道部の部屋。メンバーは、剣道部福田成志（水戸）、少林寺拳法部高山俊樹（宇部）及び小生（福岡県田川郡）の隊員によって行われた。

普段、ストーブのある時は、室内外の気温差が四十度に達し、室内は真夏並み。よって、Ｔシャツ一枚で過ごすこともある。これが、本越冬の頃ともなると、毎夜繰り広げられる宴のどよめきや蜜声はなく、無論ストーブも消えて室内即大気温度。端的に言えば、寒天冷気吹き荒ぶ農場に座しているのと、何

ら変わりはない。

この時ばかりは、所狭しと寮友が、汚らしく投げ散らかした厚さ数センチに及ぶ紙屑やゴミが、やけに頼もしい保温のジュタンとなる。

夢は枯野を駆けめぐるところか、早、凍死寸前の情けない状態。

だが、持つべきものは友である。

我ら越冬隊員三名は、市内の悪友遠山（剣道部）から差し入れられた酒―これが、何とコンパでは終ぞ口にする事のない生粋の日本酒、当時の寮生にとつては幻の銘酒「北の家族」であつた。

決して、合成酒「花の友」ではないのだ。 嗚呼：

その馥郁たる五臓六腑に滲みわたる滋味に酔いしれ、酒さえあれば何も要らないなどと吠えまくる始末。

熱き心は止めを知らず、軒端から垂れ下がる氷柱をツマミにし、破れた窓越しに降り注ぐ雪の下での大乱舞。

いやはや、チャンチキおけさの開幕だ。

もつれる足で、何とか北海道神宮に参詣したのだが、どこをどう辿つていったのか定かでない。

興も乗り、極めつけの「都ぞ弥生歌碑」の前で、くだんの面々厳かなる心持ちで新年の寮歌の歌い初め。

流石に若さに溢れる三人組も、空腹に酒精の注入のみでは根も尽き、朝日の輝く中、凍てつくベッドに崩れるように倒れ込むのであつた。

寮友よ！

かの日を笑うことなかれ、誰ぞ常ならん。

大いなる人生を祈らん！





北斗循環器・内科 北斗循環器・外科



心のかよう医療をめざす

循環器科・内科

院長 阿部 秀樹
副院長 青木 健郎

心臓血管外科・外科

院長 南 勝晴
名誉院長 中瀬 篤信
(昭和26年入寮)

◆診療時間

月～金 / 9:00～18:00
土 / 9:00～14:00

■交通期間■

市営バス

地下鉄環状通東駅始発

(東81) (東79) 開成高校前下車

地下鉄北24条駅始発

(東70) 北24条東21丁目(西友前)下車

札幌市東区北21条東21丁目



内科 011-785-7555
外科 011-785-1515

【同窓・同期交流】

「熊の仔会」

岩 田 善 輔

(昭和十五年入寮)

昭和十五年北大予科入学で、柔道部に入り最後まで柔道が続けたものは十五名であるが、この十五名が強い絆に結ばれ今でも交流が続けている。この会を熊の仔会という。

この十五名のうち殆どが入学と同時に恵迪寮に入寮し予科を終えるまで在寮した。寮外生は医類五名のうち一名、農類八名のうち一名、工類二名のうち一名の計三名のみであった。従って部員は寮生が殆どであったが、これは小生等の学年だけでなく各学年とも部の中心は寮にあった。又柔道部だけでなく他の運動部もみな寮生が中心になって動いた。そのため当時は各運動部はそれぞれ結束が固く、部活動も活発でありそこそこの実

績を残した。

小生が現役の部員の頃は、毎日予科の授業が終わると、まっすぐに道場に行き夕飯前までの稽古である。学部の先輩も指導に来て猛稽古の毎日であった。道場は北十二条の外人教授住宅の西側にあった。故青葉萬六先生の建てたすばらしい道場であったが、今は無い。大会前のシーズンになると、合宿といって恵迪寮の柔道部員の居室に畳を敷きつめ、寮外生も起居を共に

し、授業以外の時間は殆ど稽古に当てた。夜も夕食後道場に出かけ9時頃まで乱取の連続稽古である。又夏は夏休みを早々に帰寮して土用稽古、冬は帰省せず寒稽古である。

小生等が予科三年の昭和十七年は大東亜戦争開戦の翌年であつて、それまで全国大学高専柔道大会であつたものが、この年は第一回全国高校体育大会の一種目としての柔道大会（所謂インターハイ）となり、各地区の予選なしに全国から一斉に東京に集い大会が行われたのだが、この年の北大予科は力が充実にあり、予選リーグでは九州勢の五高、佐賀高を軽く破り二回戦に進み、当時優勝候補とされていた六高と対戦することとなったが、下馬評では北大予科・六高戦が実力上の決勝戦と言われていた。

わが軍の大將は体調を崩していたので、試合は十五人の勝抜き戦だから予選は出場せずにすんだが、六高戦では大將として出場した。わが大將は試合開始間もなく抑え込みに入つて勝つたと思つた途端に、彼は痙攣を起こしてひっくり返り、試合中止となり負けたのである。大將が健全であれば六高に勝つて優勝できたのにと今だに残念な語り草になっている。結局は六高の優勝であつた。又第二回以降のインターハイは戦争のため中止となつた。

これまでの北大柔道部の長い歴史の中で、決勝戦まで進んだ年は何回もあつたが六高に拒まれて志を達することができなかった。昭和九年に大学高専の全国制覇の輝かしい記録がある。

その年は六高はすでに他校に敗退して決勝戦は松山高校との対戦だったので、六高とは直接対戦はしていないのでその前も後も六高には一回も勝つたことがないのである。われわれの時代も二度目の全国制覇と目されながらも六高に敗れたのである。

現役の部生活が終わつて予科を修了し学部に入ることになつたわれわれ十五名が集り熊の仔会が結成されたのである。初めは毎月集會もやつたが、戦争が次第に激しくなり、学徒出陣や学部卒業でちりぢりになつて集る回数も人数も少なくなり、終戦後も會合がとぎれがちになり、昭和三十二年七月を最後に途絶えてしまつた。その後初老の皆の人懐かしさが再開を欲するようになり再び集る氣運が高まつて昭和六十年七月に定山溪で久しぶりに再會の友の變貌の中にも昔の面影を確認し合つた。そして現役時代の苦勞を語り合つた。その後は毎年一回所を変え（札幌・東京・鎌倉・青森・岐阜等）懐旧の熊の仔會を開いている。これらの結成以來の記録は「熊の仔會誌」として残している。

今やメンバー十五名のうち残念ながら二名が亡くなり、だんだんと淋しくなつてゆくが、今後に残っている者だけで亡き友を偲びながら、柔道の恵迪寮を回顧しこの熊の仔會を続けてゆきたいと思つてゐる。

昭和二十六年入寮同窓生による 「仙台での集い」も終えて

久 門 雅 史

(昭和二十六年入寮)

(一)

昭和二十六年入寮の「恵迪」同窓の有志が、去る平成十年九月二十七日から三日間という旅行会の形をとって「仙台」に集まった。寮生の参加者は全部で三十一名（夫婦での参加者が十二組のため総勢は四十三名）、遠くは関西方面から北海道の奥地まで、しかも卒業以来初めてという顔ぶれも何人かみられるなど、近來にない多数の人の参加をみる事ができたのである。

初日は天気も良く、午後一時集合場所である「仙台駅」に一人の遅刻者もなく集合。その後、貸切バス（工学部の後輩＝昭



和四十年機械卒の長岡弘氏が社長としている縁で「J.R東北バス」の利用となった。で、まず「塩釜」から観光船に乗って松島湾を横断、最初の宿泊地である「松島」に到着の後「瑞巖寺」や「伊達政宗」資料館を見学して、松島一のデラックスホテル

「大観荘」に落ち着いたのは日もとつぷりと暮れる頃であった。

夜の宴会は総会に始まり、ついで各自の自己紹介を終え祝宴に入る頃から次第にお互いの名前を呼び合い、又肩を抱きあうなどして久し振りの再会を喜びあう姿が目につくようになった。更に嬉しい事には、同伴のご婦人連中もすっかり打ち解け、祝宴の締めとして水庭久尚氏の発声による「都ぞ弥生」の斉唱の際には、それこそ参加者全員が肩を組み一体となつての大合唱となり、まさに青春時代をしのぐ程の盛り上がりを見せたのである。その後も宴はつき

る事なく、殆ど全員が二次会の場所に再集合して寮歌を心ゆく迄放吟しあい、それこそ夜が更けるのも忘れる程の懐かしくも又楽しい一夜を過ごしたのであった。

(二)

翌朝惜しくも関東勢の三人の仲間と別れを告げた後同じバスで今度は岩手県に向い、最初は東北の秘境といわれる「猊鼻溪」を探勝、約一時間半に及ぶ舟下りを満喫して午後は「毛越寺」「中尊寺」などのかつての奥州藤原一族の栄華の跡をつぶさに観て廻り、それこそ芭蕉の名句にもある「夏草や兵共が夢の跡」を存分に探索したのであった。そしてその夜は岩手山の勇姿が間近にみられるという「繁温泉」に再び宿をとったのである。

この日の宴会は既に昨夜で打ち解けているためか当初から和気あいあいの雰囲気、まず参加したご婦人全員のユニークな挨拶に始まり次いで参加ブロック別の寮歌合戦の後、二次会に入るや今度は酔いに任せて日頃の体談や持論を披露する形となった「開識社」など、全く我々幹事の予期せぬ展開となり深夜に亘る迄再び昨夜と同じ盛り上がりを見せた事は云う迄もない。

(三)

さて最終日であるが、特に午後からの行程については後に詳しく触れる事とするが、仙台在住の三人の世話役（小生のほか工学部機械の澤正雄と経済学部の前怜の両氏）が、前もって下見に出かけた際に偶然にも発見した立寄先でもあったのである。

それはともかく、午前中はかつての洪民村（現在は滝沢町）にある、余りにも有名な詩人「石川啄木」の記念館と啄木が教わった小学校の旧舎、そこでは改めて、豊かさ溢れる現代と貧しい時代の差を切実に見せつけられたのであるが、一方でどんな時代にも影響されない、いわば心の教育の大切さをしっかりと汲み取る事ができた事は大きな収穫であった。只一つ残念であるといえば、啄木が詠んだあの思い出の山といわれる岩手山が、雲に隠れて見えなかった事であろうか。

そこからバスは一転して再び高速道を南進し今回の旅行のいわば目玉ともいえる「花巻」、そこは又多くの札幌農学校時代の先人が育った所でもあるがそこで名物の「わんこそば」の昼食、中には五〇杯以上も平らげる大食家も出るなど参加者全員が十分に満腹した場所でもあった。

その花巻市街から車で十分程の距離にある「新渡戸稲造」記念館のすぐ近くの道路沿いにある「島 善鄰」氏の石碑の前で一旦下車、入寮時の学長であられた同氏の功績の数々が刻まれた石碑をつぶさに拝見するにつれ、改めて、同氏の偉大さを存分に偲ぶ事が出来たのである。その感動も醒めやらぬうち次の



「新渡戸稲造」記念館も又劣らぬ程の興奮をおぼえたのは私だけであろうか。

「花巻」こそはそれこそ初代学長であった「佐藤昌介」氏及び「島 善鄰」氏の出身地であり、又「新渡戸稲造」氏のキリスト教信者としての博愛精神と太平洋のかけ橋にならんとした心の広さ、更にその世界観などを余す所なく掴み取る事が出来たのはそれこそ予期せぬ喜びであった。それと掛軸にある有名なクラーク博士の「青年よ……」の文字が注釈つきではあるが、「志大」と逆に書かれていたのも妙に印象に残ったのである。そして最後にやはり岩手県出身の農民作家「宮沢賢治」記念館にも立ち寄り、解散の場所である「新花巻」駅に着いたのは時刻の三時を廻った頃であった。

以上三日間の旅程を中心に概要を記述してみたが、先程にも触れたとおりこの「仙台」での集いが実現する迄の経緯と裏話などについてもこの機会に若干記しておきたいと思う。

(四)

顧みるとこの集いを「仙台」で開く事となった動機は、二年前「神戸」で再会を果たした時に逆上る。勿論当時我々三人も喜んで馳せ参じたのであるが、その折に、二年後には「仙台」で開催するようにとの声が掛かりそれを受け入れた事にあつ

た。以来東日本の代表幹事である澤正雄氏が中心となり、それこそ何度も話し合う中に、この機会に東北独自の歴史と文化の一端を是非見て貰うこと、更に夫人同伴でも充分楽しめるようにと旅程を三日間、それも貸切バスで廻ることと決めたのであった。

しかし、初日と二日目の日程まではすんなりと決まったものの、最後の日のスケジュールは一切未定のまゝ、とりあえず澤氏の車で下見に出かける事としたのであった。そして向かったのは東北の秘湯ともいわれている岩手県の「夏油温泉」、たしか一年前の十一月上旬と記憶しているが、折りしも着いたその日は、冬季で休業となる前日とあつてか湯治客もまばら、それに肝心の露天風呂も閉鎖されており、部屋の間取りも旧式で、到底同窓仲間を連れて来る程の宿ではないと判明、結局同夜は、その先の計画も立たない俤に三人で苦い酒を飲み就寝したのであった。

そして翌朝、ともかく「盛岡」迄行ってみようと車を走らせるうち、先日「繋温泉」のあるホテルに泊まったところ、料金も安く待遇も良かったとの澤氏の発言から急遽そのホテルに直行する事となったのである。下見の結果も上々ですぐに予約を入れ、次に向かったのは滝沢町（昔の洪民村）にある啄木の記念館、ここは是非一度見せておきたい場所という前氏の言からであったが、結局同所もコースに加える事として、最後に向かったのは「花巻」にある宮沢賢治の記念館、その途中の道路沿

いに建立されて間もない「新渡戸稲造」記念館の立看板と、その又近くの電柱に貼りつけられた「島 善鄰」の石碑の案内板が、それこそ偶然に目に入ったのであった。三人とも期せずして「これだ」と歓声を上げ、かくして最後の日の行程もすべて決まったのであるが、今ふり返ってみても、それこそ先人の魂が我々を呼び寄せたというか、まさに「天の声」ならぬ「天からの誘い」を受けたとしかいいようのない、それ程の靈妙な発見でもあったのである。

愉快なる哉！

恵迪寮スキー部OB会

高 野 豊

（昭和三十二年入寮）

一九九八年六月二十七日（土）札幌はジャスマックプラザで、初の恵迪寮スキー部OB会を実施した。参加者は十三人。



以下に入寮年次（昭和）と氏名を示す。

三十二年：岡 利雄、加藤勝久、加藤 武、滋野三樹、

高田朋則、高野 豊、中村 寿

三十三年：伊藤 勝夫、松山哲三

三十四年：稲森久彦、岡部伸孝、富田恭司

三十五年：藍原英樹

ススキノのド真ん中に温泉がでた。そこを会場にした。面々は一風呂浴びて、浴衣に着替えてくつろぎ、祝宴に入った。祝は三十二年組の還暦祝いである。かつ、現役リタイアのご苦労さん会でもある。特に、三十二年後半の M（中寮）上 S 七人の面々は全員出席である。年次の中から、全員と直接寝食を共にしたわけではないが、たちまち皆々タイムスリップして、往時を語り、齢を忘れ、夢のようなひとときでありました。



現惠迪寮・現寮・現惠迪寮・現寮・現惠迪寮・現寮

男女学生の共同寮となつて五年、

現惠迪寮の総決算を、と構えてみたが……

高 橋 邦 臣

(昭和二十八年入寮)

女人禁制の惠迪寮が男女共同の寮となつて五年経過し、その後、寮の住人は或いは巣立ち、代わりに新しい人が入寮し、学生生活を過ごしている。厳冬のある日、懐かしい惠迪寮を訪れ、寮生諸君と話をする機会を得たので、生活状況、活動状況について、その概要を報告する。

寮が新しくなった、と言つてももう随分昔のこと、しかし私自身は、寮の場所すらよく知らないまま、とにかく取材をこなしてはとばかり、現執行委員会浜野委員長に連絡を取り、趣旨説明したところ取材の快諾を得た。同行してくれたのは、同期

(昭二十八年) 入寮の応援団長でもあつた高根君である。

正門の案内図をたよりに構内北西方向、教養部の更に西数百米の所に位置する現寮を訪問した。寮の資料室に卓球台を置き、それを囲んで現執行委員の内、十名程度の方々が出席してくれ



(輪になって寮歌の練習に励む現寮生達)

た。取材の方向として、寮運営の現況から説明してもらった。

棟はA棟・F棟の六棟構成、うち、女子棟はA棟・B棟の三階・五階の内側六十室、入寮者数四十四名一人一室が原則である。F棟は九十八室、大学院五十名、留学生五十名の枠で、残りが男子棟となっている。一般寮生の生活は十名で一ブロックを形成して、このブロックがサークル活動、食事の単位となつて、日常生活がいとままれていく。食事の献立作成、買い物、調理が当番制で役割をこなす。役割の決め方はブロックごとに自主的に運営されているという。

我々の寮時代、夢現の中で食事開始の合図の鐘の音を聞きつつ、時間ギリギリまで寝ていることができたあの頃は、考えてみると本当に良き時代で、一つ釜の飯を食った仲という実感がわいてくる。賄いがつかない現在はそのような贅沢は味わえない。朝食は手間をかけられないことから、執行委員会(炊務部)が仕入れたパンと牛乳を購入してすませるのが多いとのこと。

ズッベ・米飯・沢庵二切れの朝食だった我々に比べて牛乳を摂取する点、栄養バランスは良いが、ズッベを通じて野菜を摂取する機会が少ない分、昼食・夕食で野菜を補給するような食生活を組み上げて健康を維持して欲しいものと、老婆心ながらの感想である。

執行委員会の構成は十八名、寮務・会計・炊務の三部構成で運営されている。内女子委員は三名で、出席してくれた女子委員の担当は炊務であった。役割分担は、女子だからということ

でなく、それぞれの意向に沿って分担を決めるルールが守られている。委員会として入寮者に対する努力の一つとして提供しているサーヴィスにスペシャルの話が出たので報告する。



(日曜夜のにぎやかなスペシャル風景)

スペシャルといえば、我々は夕食の残った分を処分するため、炊務から寮内放送で「本日、スペシャルがあります」というアナウンスを聞くや否や、廊下を我先に駆けだす風景を思い起こす。武器をひっさげ駆けつけ、うまくありついた時の至福の思いと、一人手前で売り切れた時の悔しさは、今でも忘れられない。

スペシャルの一つは先程の牛乳と

パンの販売で得た利潤、つまり、仕入れ値と販売値の差額を蓄積して販売する、これは日曜の朝のスペシャルである。もう一つは、土曜日、日曜日の夜のスペシャルで、百食分用意すること、販売価格は、百円である。



(張り出されている)

寮歌募集などの告知ポスター

今回の我々の訪問は奇しくも土曜日の夜であり、我々が辞去する頃、丁度スペシャルの時間となった。それは、寮に入つてすぐの所に、机、椅子を並べて用意されていた。

食生活が豊かな時代ではあるがさすが若い人達である。アナウンスされるとでんでに食器と武器を持参して行列ができる。委員が次々と盛りつけ

食卓は賑やかにうまる。販売実績はこの分から見るとほぼ完売しているものと思われた。

文化活動については、文化常任委員会が展開している。図書室のことについて尋ねたが、現寮にはないとのこと。なるほど、資料室もガランとした部屋で特別に保管されている資料は目につかなかった。例えば、古典文学に関して、寮友からの刺激はないのか、あっても、図書室に揃えて提供しなくても、個人個人が必要に応じて購入すればそれで良いというのか、十分な答えは見いだせなかった。

オーディオについても、CDの時代であるし、個々に再生装置も所有しているようで、特に、寮の備品として寮生に提供していない。我々の頃、当時としてはかなり高水準の再生装置が寮にあり、貴重なLPがコレクションされ、クラシック音楽に目覚めさせてくれた寮の恩恵は、生涯忘れることはできないが、この点では、現寮生とは話がかみ合わなかった。

特記したいのは、ビデオテープでライブラリーを作成していることである。年間、ビデオテープ三百本分予算化している。これならば、現在の情報源として内容が豊富であり、かつ質が高く、哲学・文学・歴史・専門分野の広範にわたって、正確な知識がえられるものと期待できる。系統的分類と資料索引を作ることやその管理・整理に労力がかかってくるが、ビデオライブラリーの充実は重要な文化活動である。

文化活動の具体的な計画として文化講演会を五月に実施する

予定という発言があった。新入生を主とした対象とするが、一般を含めたものとしていること。このような行事が成功するよう祈りたい。開議社の伝統につながる行事になって欲しいものである。

寮史編纂の話も出たが、いままで、何回も計画されているがなかなか実現にいたっていないのが現状である。資料収集に加えて、執筆の困難があるだけに、容易ではない事業である。

寮歌作成の伝統は守られるべく努力が続けられて、女子寮生にもよびかけた旨の発言があった。

寮生活の意義については、積極的な発言が得られなかったもので、我々の方から寮生活を経験して良かったと思う点を投げかけた。第一点は家庭から離れて生活するなかで、特に今までの判断基準が変わってしまったことであり、第二点は先輩から自分の意見を持つことと同時に、相手を尊重することを教えてもらったこと、第三点、違った分野の者同志が同じ部屋で生活することによる、人間交流の広がり that 得られたことを例示したが、特に反発もなく率直に認めてくれたようである。

いきなり、先輩が押しかけていつて話せといわれても、なかなか本音が出ないものかもしれない。

結論として・・・、男子・女子共同の寮になつての総決算というテーマからは、かなりかけ離れた報告になつてしまった。現寮生は、男だから、女だからといった視点で生活しているわけではない、一人の人間としての生活の場と認識しているとい

う発言があったが、これが現在の寮生の素直な発言と言っているだろうか。つまり、中学（旧制）において、女人禁制であったところに、学制の改革で新制高校になり、更に、その途中で男女共学という大変革にさらされた戦後まもなくの我々の時代とは全く違うのである。その我々の時代でも、男女共学の当初、木に竹を継ぐような思いであったが、制度が定着すれば違和感、は次第になくなっていったのが思い出される。

今日、北大に女子学生の入学が特別の事柄でなく、至極、当然となっている。寮生活においても、男女共同に切り替わった頃は、確かに受入れのための施設の準備、心の準備等々、当時の男子寮生にとっては、かなりのカルチュア・ショックがあったものと思われる。しかし、五年経過した現在、すでに運営は順調であり、女子寮生は特別な存在と思っていた我々、つまり一緒に行った高根君と私の二人の認識が甘かったというか、時代の移り変わりを痛感した次第である。

ここで、今回の我々の訪問の印象を総合的に言えば、今の寮生活を否定的に受け止めるものはなかったということ、寮ではその歴史的な役割を今後も継続しつつ、よりよい運営が進められるであろう、ということだろうか。

つまり、寮史編纂、寮歌の作成等、今の寮生達も古い伝統を継続する姿勢を持ち続けており、その上に、ビデオ・ライブラリーの新設をするなど、時代に沿った新しい寮生活の充実を図りつつある。かつての我々もそうであったに違いはない、若者

らしいアツケラカンとした現寮生諸君の姿を見ることができ、多少の戸惑いはあったものの、ほっとしたような、さわやかな気持ちを抱いて寮を後にした。



（3人の女子寮生も加わっている第272期現執行部の皆さん）

昭和三年入寮(旧・旧寮)

中川 義一

〒二八九一〇二四四
千葉県八日市場市イの二七四
電話 〇四七九一七二〇三二九

昭和五年入寮(旧・旧寮)

中山 二郎

〒二五一〇〇五三
藤沢市本町三一九一〇
電話&FAX 〇四六六一二二二七四六

昭和六年入寮

中里 和夫

〒〇六六〇〇六五
千歳市春日町一丁目一番地
電話 〇一二三二四一〇三三五

昭和十六年入寮

村山 正郎

財団法人 深田地質研究所
評議員
自宅 〒一六八〇〇七三
東京都杉並区下高井戸
電話 〇三三三二一九九五三

昭和十八年入寮

安井 勉

〒〇〇四一〇〇一三
札幌市厚別区もみじ台西五丁目
十一番七号
電話 〇一一八九七六〇三二

昭和十九年入寮

柴田 松太郎

〒二六一〇〇一一
千葉市美浜区真砂
三十一六一一三〇六
電話 〇四三二七八六一二九

昭和二十三年入寮

児島 仁

日本電信電話株式会社
相談役
〒一〇〇八〇一九
東京都千代田区内幸町一〇一六
電話 〇三三三〇九二五〇〇

昭和二十三年入寮

小島 雄

鹿島建設(株)
代表取締役副社長
〒五五〇〇〇一一
大阪市西区阿波座一三十五
西本町三井ビル
電話 〇六六五三六一三三一一

昭和二十三年入寮

沢山 豊

沢山クリニク
〒〇五〇〇〇七二
室蘭市高砂町二一七
電話 〇一四三三四五三九七一

昭和二十三年入寮

村山 正

北海道自動車短期大学教授
北海道大学名誉教授
〒〇六二〇九二二
札幌市豊平区中の島二条六丁目
電話 〇一一八二二一〇一七一

昭和二十六年入寮

河原 克美

(株)光ハイツ・ウエラス
代表取締役専務
〒〇〇五一〇八四一
札幌市南区石山一条三丁目
三番三十三号
電話 〇一一五九二一八〇八〇

昭和二十六年入寮

辻山 昌佑

門真銀座書店
〒五七一〇〇四七
大阪府門真市栄町九十一
電話 〇六六九〇九一二三九

昭和二十六年入寮

小樽商科大学名誉教授
札幌学生野球連盟常任理事

沼田 久

〒〇六三〇八六四
札幌市西区八軒四条東三丁目
電話 〇一一六三一八四八二

昭和二十七年入寮

(株)ラルズ監査役

小寺 義彦

〒〇六一〇九三二
札幌市豊平区平岸一条一丁目
電話 〇一一八三一五二五

昭和二十九年入寮

加藤 法愷

〒〇〇二八〇七二
札幌市北区あいの里一条二丁目
電話 〇一一七七八一八九六二

昭和二十九年入寮

仁木 良哉

〒〇六一三二二二
石狩市花川北二条五丁目一七五
電話 & FAX
〇一三三七四一六〇六三

昭和三十年入寮

日本福祉リハビリテーション学院
学院長

厚谷 純吉

〒〇六一一三七三
恵庭市恵み野西六丁目十七番三三
電話 〇一二三三七四五一〇

昭和三十年入寮

北海道地域農業研究所

幸 健一郎

〒〇六〇〇〇〇四
札幌市中央区北四西北
北海道厚生連別館5F
電話 〇一一二八一二五六六

昭和三十一年入寮

(株)ラルズ代表取締役社長

横山 清

〒〇六二〇九三二
札幌市豊平区平岸一条一丁目
電話 〇一一八一三二二五五

昭和三十一年入寮

(株)地域計画センター
代表取締役社長

小笠原 孝之

〒〇六〇〇〇〇三
札幌市中央区北三西一六一一九
電話 〇一一六四四一二二三

昭和三十一年入寮

医療法人 社団開成病院
副院長 医学博士

田 中信義

〒〇一一〇〇三三
札幌市北区北三十三条西六丁目
電話 〇一一七五七一三〇一

昭和三十一年入寮

酪農学園大学 教授
北海道文理科大学

湯浅 亮

〒〇六九一八五〇一
江別市文京台緑町五八二番地
電話 〇一一三八六一二一一

昭和五十二年入寮

塩井歯科医院

塩井 孝

〒五八〇〇三二二
松原市天美東七丁目十二番十八号
電話 & FAX
〇七三三二六二二三四

昭和二十七年入寮

囲碁同好会在札幌有志

坂田 理一郎
白井 重俊
鈴木 泰三
辻井 泰輔
中原 義秋
小寺 義彦

小寺 義彦

【一九九八年度開識社講演会】

日時

平成十年九月十九日 十五時開講

会場

北海道大学クラーク会館 講堂

司会

厚谷純吉（昭和三十年入寮）

「私の生きざま」

☆ トルコ国の現状

岡部 賢二（昭和二十九年入寮）

☆ 老人福祉について

河原 克美（昭和二十六年入寮）

☆ 現在の子どもを取り巻く状況

牟田 悌三（昭和二十年入寮）

主催者挨拶

恵迪寮同窓会代表幹事

幸 健一郎（昭和三十年入寮）

ご紹介を頂きました昭和三十年入寮で代表幹事の幸でございます。最初に私からは開識社の歴史をご紹介してご挨拶に代えたいと思います。

実は開識社は明治九年、今から百二十年前にクラーク先生を中心に、当時の札幌農学校の寄宿舎で組織されました。

自治の精神をもとに、知識の開発や交換、寮生の発表能力の錬磨を主眼に、開識社が運営されてまいりました。明治の二十年頃には、寮内ばかりでなく学外者にも公開しようと、演武場、今の時計台で、社会、経済、文化等について、農学校の教官や市民を含めて意見の発表を行い、地域の交流を深める一助として好評を博しました。

札幌農学校の二期生で後に国際連盟の事務次長までされた新渡戸稲造先生が、恵まれない子弟の教育のために札幌に開設された遠友夜学校は、寮生が講師の中心になって運営されました。開識社もそれと同じ思想のもとに、恵迪寮が社会的な存在として、市民にいろいろな知識を還元していこうということでした。この開識社は明治、大正、昭和へと延々と続き、実は、昭和二十五年まで続けられたという歴史的な事実が残っておりますが、その後途絶えました。

恵迪寮は北十八条に古い寮があったのですが、昭和五十八年、一九八三年に、取り壊されるのを機に、恵迪寮の同窓会を設立致しました。その時の初代会長が星先生で、会長就任の際「恵迪寮の同窓会は単に昔を懐かしんで、寮歌を歌い酒を飲むというばかりじゃ駄目だ。この恵迪寮が、現代に生きるといことを考える必要があるんじゃないか」とおっしゃられました。

私どもはいろいろ検討した結果、かつての開識社を復活させようということになり、平成四年、一九九二年に、復活第一回の恵迪開識社を開催いたしました。今回は三人のOBの方々から、寮で育てられた精神が社会でどう活かされているのかということを、「私の生きざま」という形で講演頂きます。皆さんのご静聴をお願い致し、主催者のご挨拶と致します。

ご来賓挨拶

北海道大学副学長 中村 睦男（北海道大学法学部教授）

北海道大学で副学長をしております中村でございます。こういう開議社という形で、講演会が今年も盛大に開かれますことを大変うれしく思っております。私は寮には入っておりませんが、北海道大学で学び、学んでいく中で、やはり恵迪寮の存在の大きさを感じております。まずは「都ぞ弥生」で、北大では入学式、卒業式でオーケストラで奏でられ、特に卒業式では、卒業生が全員で歌って北大を去っていきます。まさに実質的に北大の校歌であるのが恵迪寮歌でありますし、北海道大学の魂はやはり恵迪寮という伝統にあることは、私も日々感じているところであります。

さて、北海道大学もずいぶん最近変わってきております。一番変わったのは、「大学院重点化」ということです。これからは少子化の影響で大学生も減ってきます。国立大学では学部学生数を減らしていき、その代わり大学院の学生が多くなり、たくさん院生を養成するという形式を探ることになります。現在北大では、歯学部と水産学部を除く理系の学部は全部大学院重点化を終わったか、あるいは進行中で、文系の4学部もいずれそうなっていく方向で検討しているところです。

北大の従来との違いは、理系の学生ですと、むしろ六年というのがノーマルになってきており、今年の大学院進学率を見ましても、理学部ですと七四%、工学部七〇%、農学部で六二%、だいたい六、七割が大学院へ行っております。つまり、最初から、少なくとも修士までいくようになっていく点が最大の変化です。最近国立大学も民営化だとか、独立行政法人とか、いろいろ言われて行政改革の波をかぶり、厳しい状況に置かれております。その中で、国民の税金を使って存在価値を示すためには、北海道大学は、いわゆる全国の研究の拠点大学としていくというような形を取っていただく必要があります。

それから学生の大きな変化としては、女子学生が圧倒的に増えて、現在だいたい二五%、全体の四分の一が女子学生です。従って、現在一年生の教育は旧教養の校舎を使っておりますが、女子学生のトイレが足りないというのが、女子学生の今一番の不満でして（笑い）、なんとかしなければ北大のイメージが悪くなるんじゃないかなと考えているところでございます。

それから建物も、理学部では、大学院重点化に伴い新しい建物が建っており、工学部もやがて少しずつ新しくなってきました。ただ歴史的に非常に価値のある現在の理学部本館は、北海道大学博物館になることが正式に決定され、北海道大学の歴史をそこに蓄積するという形になるかと思えます。

そういうことで北海道大学は新しい世紀に向かって大きく動いておりますので、この伝統ある恵迪寮の同窓会の皆さん方も、ぜひ今後とも北海道大学をご支援頂きたいと存じます。どうもありがとうございます。

(司会) 中村先生、どうもありがとうございます。さて、それではただいまより、講演会の方に入っていきたいと存じます。

今日は寮のOBの三人の方に講演をしていただくことになっております。一番目にトルコ国の現状について岡部賢二君、二番目に老人福祉について河原克美君、三番目に現在の子どもを取り巻く状況を牟田悌三君、このお三方にお願いすることになっております。それではまず、第一番目の講演をやつていただく岡部賢二君の略歴を簡単に紹介申し上げます。

岡部君は昭和九年、群馬県に生まれ、昭和二十九年に恵迪寮に入寮いたしました。のち理学部を卒業され、通産省の工業技術院地質調査研究所に勤務しておられました。その間昭和五十年から五十三年、さらに平成六年から十年にかけ二回にわたり、足かけ九年の間、トルコ共和国鉱物資源調査開発研究所あるいは鉱物資源調査開発総局に技術援助の形で派遣されております。今年の三月にやっと戻ってきたところでございます。岡部君、どうぞよろしくお願いします。

岡部です。四年前に同窓会の仕事を友人に任せてトルコへ赴任したものですから、敵前逃亡とみなされ、今回の講演を「お前やれ！」と言うことになってしまいました。いずれにせよ折を見てトルコでの見聞や考えた事などをお話したいと思っておりますので、良いチャンスでした。

帰国してから会う友人たちからは「トルコってどんな国なんだ？」と言う質問を良く受けます。また、トルコについてはかなり量の知識を持っている人が多いのは「さすがインテリ！」と思います、私が話すべき何かはあるとも思います。

一般的な日本人がトルコについて持つイメージは、その知識・情報をイスラム教徒と対置されるキリスト教徒を通じて得たものであったが故の、誤解や誤った評価に陥っていたのではないかと言うことを滞在中に感じさせられました。殊に、人に対する細やかな気配り、文化・教養に対する関心、文学的な思

索など現在の日本人が忘れている何かについてです。だが、最近、日本人自身の手になる一次資料による研究成果や官民多様なレベルでの交流・旅行情報などが、手軽に入手できるようになってきました。そうは言っても、未だ「遠くて近い国」であり「近くて遠い国」であることも確かなようで、日本人にはトルコ人が日本に抱く関心の半分でもよいから、トルコについて関心を持つ「余裕(ゆとり)」が必要かも知れないという気がします。トルコの自然地理については多くの市販されている書籍にも書かれているので説明を省略しますが、トルコは東西に長い矩形に近い形の国土を占め、西はギリシア、ブルガリア、東はゲルジア、アルメニア、イラン、南はイラク、シリアなどと国境を接しており、北、西、南はそれぞれ黒海、エーゲ海、地中海に面しています。トルコと言うと多くの日本人は、中近東の暑い砂漠の国の様な印象を持っている様ですが、国境の半分以上

で、三面が海に面している海洋国なのであることに気が付かない様です。現地の人たちは食べませんが日本人好みの鯛や鮪の冷凍されていない刺し身を食べることもできます。また、南北海岸線に近い地域に山脈が東西に走り、中央部が東高西低の高原を形成し、首都アンカラの標高は約八百五十メートルで、その市内で外国人が多く住む地域は一千メートルをこえています。また、中央部高原地域は乾燥地域でもあり、殊にその東半分は豪雪地帯でもあります。最近はスキー場の開発も進められてきており、何年か後には日本からのスキーツアーも有り得るでしょう。

トルコと言えば何と言っても「オスマントルコ帝国」が念頭に浮かぶでしょうが、その四百年以上にわたる帝国時代に至る以前にもトルコ共和国の位置するアナトリアは旧石器時代からのダイナミックな人類の活動の絵舞台でした。そしてそれらに関する遺跡や遺物も多く残されており、世界中の考古学研究のメッカと言えるほどで、各国の大学や研究所の発掘隊が、トルコ文化庁のコントロールの下で発掘・研究を行っています。日本隊も中近東文化センターがカレホユックで十年以上の年数をかけて発掘をつづけ、大きな学術的成果を上げていますが、大村幸弘さんによると、世界の各国は十年単位、百年規模の、人も金もつき込んだ息の長い発掘作業・研究を続行しており、日本隊は未だやっと「一人前」の仲間に入れて貰えるようになってきたニューフェイスの段階だそうです。文化活動に対する取

り組み姿勢と実績の欧米諸国と日本との相違を感じさせられる話です。

このことに関してはまたお話しする機会もあるでしょうが、トルコはこれらの遺跡や遺物、考古学的成果を自然の風土・景観とともに目玉にした観光開発を国家施策の柱のひとつにしています。未だ欧米、ロシア、イスラエルなどには及ばないとしても、日本人観光団の訪土は確実に急増しており、成田・関西国際空港とイスタンブールを結ぶトルコ航空の直行便も繁盛している様です。トルコで見ていると日本人客の旅行の仕方は欧米諸国のそれとは大いに異なり、忙しく通り過ぎて行くスタイルが一般的です。殊に、観光オフシーズンの冬季の団体客は日本人オンパレードと言えるほど目立っています。このことから、トルコの公認観光ガイド（国家試験合格者）達に冬季間にも稼げる日本語ガイド免許の取得熱を煽る結果を招いています。日本はこの点でも大いに貢献していると言うことでしょうか。

また、日本人団体客構成の特徴は、熟年の婦人達が圧倒的に多いこと、若い女性たちが多いことであり、数少ない男性たちを見かけてもなんとなく意気が上がっていない様に感じます。「おじさん方よ、頑張ってくれ！」と言いたくなるのは、私が男性だからでしょうか。いずれにしても、この現象から日本人の休暇の取り方、休暇の過ごし方、旅行の仕方、訪れた国に対する態度など「日本人は貧しい金持ちの働き蜂」なのかと日本人社会の在り方を考えさせられることもあります。だが、見るべ

き対象についてかなり詳しい勉強をして来る人も散見され、また、特定分野のテーマを持って団体とは別に現地調査に訪れる若者達にも会うことがあって、「日本人はこれからで、捨てたものでは無い」と、気分が良くなることもあります。

トルコはどんな国か？ との一般的な質問に答えるのは大変難しく、観光旅行で一瞥しただけの人の方が明快に答えられるのかも知れませんが、私の認識段階がそれよりは若干深く学んだが、かと言って専門家ではない中途半端なものだから難しいのでしょうか。それでも、色々な体験や学び考えたことなどの話しはできますが、ここではトルコ共和国が持つちよつと特異な側面のお話を致します。

敢えて！あえて申し上げますと、トルコは軍国主義国家ではないが「軍隊国家（学問的な規定ではなく、単なる印象を表しているだけである）」です。トルコ共和国は、民主的に国民の選挙によって選出される国会を持つ法治国家ですが、国家の運営の背後には常に軍部が目光らせている様に思われます。この事を理解していただくには、トルコ共和国の歴史を語らなければなりません、トルコの軍隊は途上国に多く見られる「独裁者」の道具とは異質であることを先ず指摘しておきます。

第一次世界大戦に枢軸国側について敗れたオスマン帝国が、創立の本拠地であるアナトリア、トルコ族の本拠地そのものを分割・消滅させられる危機に直面した時に、敗戦国の国民を鼓舞し戦勝国相手に独立戦争を始め、新生トルコ共和国を樹立

（一九二三年）させた指導者のケマル・アタチュルク（ムスタファ・ケマル）の名を知る人は多いでしょう。

この時に示されたトルコ人の驚異的な意気と能力は、ムスタファ・ケマル將軍（パシャ）の下に結集されたものですが、オスマントルコは西欧風の民族国家の概念の国家では無く、イスラムと言う宗教と社会規範にもとづいた国家であって、単一のトルコ族で構成される民族国家ではありませんでした。そして、政治や経済、殊に商業はトルコ族以外の人間に握られていましたので、それらが崩壊した後の新生国家では政治も経済もゼロからの出発にならざるを得ず、新国家体制作りにも將軍の指導力は不可欠でした。国民にとっては、民族国家への思考転換を伴う大激変でどうして良いか分からない混乱を経験させられることになったのでした。

そのケマル將軍が初代大統領に選ばれ、トルコの父を意味する「アタチュルク」の姓を贈られたのですが、大統領が提起し実現に邁進した建国の原則は「ケマリズム」と言われる「六原則」でした。簡単に述べますと、それらは（１）共和主義でスルタン制を排し、共和制の国家とすること。（２）は民族主義で、トルコ民族（トルコ国籍を持つ者をトルコ族と規定）の誇りを取り戻せと言うことでアラビア文字からのラテン文字への改革と言語の浄化、民族の歴史研究。（３）は民衆主義で、市民権の確立、教育制度の確立、民衆活動の普及。（４）は国家経済主義で、旧時代の治外法権の廃止、国营企業中心に商工業

を興し経済基盤を形成する。(5)は革新主義で、イスラムの伝統廃止や婦人解放(婦人の国政への参政権は一八三四年)。(6)は世俗主義でカリフ制の廃止、完全な政教分離、イスラムを国教としないこと、などです。

残念ながら彼は建国事業、国家体制整備の途上で一九三八年に逝去しました。国民の民主主義的な成熟度は満足できるような状況にはなく、宗教関係者、旧体制に連なる者、急激な変革に反対する者などの反対・抵抗の活動もあり、それらを押さえ切れるのはアタチュルクしかいなかったでしょう。従って、彼は現在でも国内のあらゆる学校、役所、銀行、オフィス、ホームの壁面、街の中、公園などの彫像、コイン、札など全国民の目にする全てから国民に鋭い目を向け、光らせており安眠できないと感じます。それを実践的に具現しているのが軍隊ですが、それにはこんな歴史的経緯が一因になっているのではないかと思います。即ち、一九三〇年にアタチュルクが自ら率いる共和人民党の一角独裁になっていた国会に、野党の育成を目指し求めた時に、不満分子や反対勢力が全国的に国の礎を瓦解させかねない混乱を生じさせましたが、忍耐の緒を切った大統領は直接に軍隊を指揮しそれを終息させました。民主化を望みながらも国民はまだそれに馴れていなかったと言うことでしょうか、大統領にとっては苦い経験であったと思われる。この経験から教訓を得た軍隊はケマル亡き後の「ケマリズムの守護神」をもって任じざるを得ないことになったのであらうと推

察しています。その後、軍は二度(警告で政権を辞職させた一回を加えると三回)クーデターによって政治家が収拾できない国内の混乱事態を治めています。アタチュルクは軍に政治に関与することを禁じていますので、混乱を沈静させケマル路線に復する措置を取ったのち民政に戻しています。他の国に見られるような軍閥の独裁体制がつづいたり、軍の有力者一族が私財のため込んだり、利権獲得に狂奔したりはしていません。この様な行動規範を実践していることから、軍に対する一般国民の信頼は非常に強く、それは学歴や階層を問わないように思われます。

この一般庶民の軍に対する信頼には、国民皆兵制度による兵役が大きな影響を持っていると思われます。約二十年前、「自分は軍隊で文字を習った」と言う何人もの人がいましたが、へき村で十分に初等教育を受けられなかった若者には軍が初等教育を施したとのことでした。また、フィールドでジープの車軸部が故障した時に、ほぼ完全なまでに分解し修理してしまった運転手がいいましたが、彼もまた軍隊で教育されたと言っていました。勿論今は一般教育も職業教育も制度として整備されており、軍隊での初等教育は行われていないと言うことです。これらは同じ釜の飯を食ったと言う以上に人間の連帯感を育てるようで、野外調査でよその土地へ行った時にも必ずその周辺出身の同期兵の安否を尋ね歩きます。初対面でもどこで、いつ、兵役を務めたかで人間関係が構築されるケースは常に見られるこ

とです。これには、外見風貌からすると他の民族ではないかと思われるような人間が構成するトルコの様な多民族国家では、トルコ人だと気を許せる基本的な行動パターンなのであるうと思います。また、カウンターパート達と仕事以外にも色々な問題について議論やおしゃべりすることがありますが、解決に困難が伴う話になると、「我々には優れたペイガンベルが必要だ!」と言う科白で責任回避をすることがあります。優れた言者とか指導者が必要だと言うことです。確かに庶民が個人で解決できない問題に直面した時、「英雄待望論」に傾く気持ち、は理解できない訳ではありませんが、しかし、「いざとなれば、軍隊がある!」と言われ、自らは努力を放棄する様に見える生き方には疑問が湧きます。軍隊も「今様、水戸のご隠居様」では、ケマルアタチュルクは安眠できません。

このようなことはどこの国にも見られることなのかも知れませんが、トルコの軍隊は私がこれまでに持っていた軍隊のイメージとは少し異なるものでした。勿論、何事も一面からのみ見てはならないでしょうが、東欧や所謂途上国の混乱を聞くにつけ、何よりも市民社会の西欧型民主主義が未成熟な段階でのトルコ軍部の在り方は、1つの選択肢として有り得るであろうし、ケマリズム尊守の懸命な努力の結果なのであるうと思います。しかし、宗教関係者の保守的な人たちばかりではなく、一律的な西欧方式に対する性急な実現要求には疑問もでてきており、世界的な政治力学の矛盾が国内にそのままの形で現れて来てい

るようにも感じます。国内の政治状況が安定するにはまだまだ時間が必要なようですが、これも世界的な情勢の動きと連動するものでしょう。

仕事の仕方はあきれるほど完全な縦割り分業制で、日本人が持つ組織的な連帯感の様なもの、つまり全体的な状態として業務をよりよく進展させると言う様な意識は見られませんでした。これは私の配属部署の幹部の指導力不足が原因かとも思いますが、他の機関に派遣されている日本人専門家達も同じことを口にするので、特殊なことでは無い様です。ただ、色々なトルコ人とこの問題について話をしていると、「それは国の機関だからで、私企業では全く異なる」との答えが出されてきます。しかし、考えてみると、上からの命令が無ければ何もしないと言うことは欧米では特殊なことではないとのことですし、仕事は自らの家族の生活の糧を得る為にするものであって、仕事以外の家族との生活や自らの自由な時間の確保が大切だと考える訳です。まして、組織の発展や幹部の成績向上のためにするものでもありませんので、より良い収入を得るための個人的努力と転職の機会獲得には熱心です。担当を命じられ任された業務の遂行には努力を払うが、余計なことをしないうことの様で、家族や友人との関係の方により時間を使います。仕事をずる組織としての在り方がばらばらであることと、仕事以外の場面で示される他人に対する親切過ぎるほどの親切さとは共存できない行動のようですが、これは彼等が人とのつながり、人脈

つくり熱心な行動の一つと見る事ができます。仕事の上でも買物などの商取引に際しても、欧米流に事務的に効率良く処理するだけでも、相手を良く知ろうとするおしゃべりに執着することと同一パターンではないかと思われます。仕事をする場合のグループや組織作りの難しさを感じさせられます。

さて、現在のトルコの国家機関、特に試験研究機関のリストラ、合理化は急速に強力に進められ、上級技師であるスタッフの中でも益々多忙になる者と、座して仕事等待つ者との分化が生じてきています。殊に、労務職員を中心とする定員削減は急進しており、私が派遣されていた機関では、十年前に一万人以上の職員数が帰国時には五千人を切っていました。従って、これまでのように自らは手を汚さず若手や労務職員に命令していた上級技師のメンバーも実技・実務を求められるようになってきました。仕事の上でもプロジェクト提案が求められることになり、仕事の仕方は急変して来ています。心有る幹部たちは現在の職員の高齢化、彼等に対する研修の効果、知識・技術の継承、若手の育成など心を痛めています。政治家絡みの人事異動・配置の中で苦慮しています。それで現状は少しきしくしく

(司会) どうもありがとうございました。二番目には河原克美君をご紹介します。テーマは老人福祉の問題についてです。河原克美君は、昭和七年に東京都でお生まれになりまして、昭和二十六年恵迪寮に入寮され、農学部、文学部を卒業されております。学生時代から生活協同組合活動に参加されまして、札幌市民生協で役職を歴任された後、現在は老人施設でございます。光ハイツヴェラスの代表取締役専務をなさっております。よろしくお願いいたします。

している所がありますが、外国留学経験者や外国で学位を取得した職員も少なくありませんし、人材は豊富です。僅かな人数ですが新規職員が補充されるようになってきましたし、研修制度も本格的に検討されるようになってきました。新しい環境には直ぐに対応して行けるようになるでしょう。その場合、日本の研究機関の在り方の後追いはなくて、トルコ的な新しい在り方を見つけ出して欲しいのですが、それは私にも皆目見当が付きません。ただ、日本の状況と類似した状況になるとすると、手放しで喜んでもいられない気分になります。

さて、日常的に経験する多様な場面で考えさせられる事は多々ありますが、彼等はよく「ここはトルコだよ!」といいます。これが持つ意味はその場面によって色々と、私に対する詫言の場合もあれば、より深い理解を促す場合もあります。自らの国に対する失望・諦めの場合も誇る場合もあります。

まとめりと焦点の無い話になってしまいました。トルコの現在の一端をお話ししました。ご質問があれば、また、お話しする機会があればお話し致しますが、是非一度はトルコを訪れて下さい。ありがとうございます。

今日のメインテーマが「私の生きざま」というんですが、実は生きざまのようなことをお話しするのは、かなり天国に近くなった人が、我が身を振り返って教訓めいたことをお話しするというのが本来だったんじゃないかな、と思っておりましたもので、それから、私もかなり年取ったものだと思えました。

協同組合の仕事にずっと携わっていましたが、四年前から、有料老人ホームという、これは老人福祉法で言いますと、老人福祉施設ではないと分類されている業種であります。福祉施設というのは公的な金が出るというのですが、それがありません。全く入居する人のお金だけで経営する株式会社です。

これは、入居する人のお金を出して、それで経営していく、建物も入居する人の金で賄う、生活費も全部賄う、私たちの給料も賄ってもらうと、そういう仕組みです。現在、全国有料老人ホーム協会に加盟しているのが百二法人、施設の数で百五十五あります。二万人位の方が入居しておられますが、業界としては非常に小さく、同業者団体としても発言力が弱く、よく厚生省から注文ばかりつけられて、お金を一銭もくれないくて、まあ、ひがみっぽくなってる業界です。

この有料老人ホームの大半は、分譲でも賃貸でもなく、終身の利用権を買うという形のもです。例えば、マンションのような作りですので、自分の専用居室と共用施設を死ぬまで使う権利を買います。二K位の住まいですと、千五百万円、二十万円とか、そのくらい出します。お風呂は居室にもありますが、

だいたいが大風呂を使つてらっしゃいます。共同の食堂は、もちろん召し上がっただけお支払いいただくわけですが、値段の方は大学生協の食堂と同じくらいで、大学生協よりちょっとおいしいものが食べられるというものです。

そういうところで生活をしている人は、いわゆる中産階級の方が比較的多く、企業あるいはお役所や大学に永年勤められて退職なさった方達です。子ども達は既に巣立ち、自分達の老後のことを考えたときに、資産としては退職金があつて、土地や家などの不動産を処分して買うことができた、大体そういう方たちです。で、手元には、まだ不安にならない程度のお金を持つておられ、年金も、月に二十四、五万は貰える。月々の生活費は、食事を全部食堂で賄い、管理費なども全部払つたとしても、十一万とか十二万で、月々ちゃんと生活ができる。孫が遊びに来ればお小遣いもあげられると。そういう暮らしができるような経済上の設計をした業種です。

これから先、こういう有料老人ホームのようなものは、どんどんできていくと思っております。そういう需要があります。特に、自分の始末は自分でしたいという意識の方が、非常に増えております。これは、人間だんだん年をとって体が利かなくなるし、知力も体力も衰えてまいりますが、いずれ人の世話になる。長寿で死ぬまで元気っていうのはあんまりないわけ、程度の差こそあれ、人様の手を煩わせる。

今までの日本の社会には介護は家族でするもんだ、あるいは、

親の介護は子どもの責任だというような考え、そういう倫理観に裏付けされた社会通念っていうのがずっとありました。しかし最近、特にここ十年くらいですが、介護は他人に頼んでもいいんだという意識が国民の中に広がってきて、そうした社会通念が形成されてきています。十年前と比べて、六十五歳の人の意識が変わったっていうよりも、十年前に五十五歳だった人が六十五歳へとなってきましたから、こういう人が年寄りになって、年寄り層の意識が全体として変わっていったというふうに認識するのが正しいんじゃないかと思います。

したがって、お上の措置費なんてのに世話になるのはいやだ、しかも自分で自分の始末くらいできるような財力がある人にとつての大きな選択肢の一つが、有料老人ホームだと思います。それから、有料老人ホームだけでなく、シニア住宅とかグループホームとか、いろんなものが今出てきております。特に介護保険制度が、西暦二千年、平成十二年四月から始まりますが、それに向かって、老人の生活の場のいろいろな業態が、まだ萌芽的ですが、生まれる時代になって居るんだと思います。

ついでに申し上げますが、私は社会福祉法人でやっている老人福祉施設が悪いって言っているんじゃないんです。でも、そこを選ばないという理由はあります。特別養護老人ホームに入る場合は、そこが自分の住居になります。住民票を移して、本当に自分の生活の場、多くの人は終の栖ですね。にもかかわらず、プライバシーが全くない。四人部屋でカーテンで仕切る

だけで、他人とずっと生活する。よく考えるとぞっとしますね、プライバシーが全くないってことは。高齢者として男女の暖かい心の問題がある。性の問題ともいえます。そもそもが生まれてこのかた、顔も見たことのない赤の他人がいいつも同じ部屋に暮らしている。恵迪寮ではないのです（笑い）。

で、そういうことを知ってる、あるいはお上の手でお世話をしてもらうのはいやなんだと言う意識の人達が私どもの所を選ぶということになっております。

私どもの所は、同じ施設の中で終身介護しますという約束で、一人二百五十万円、介護料を入居の時に頂戴しております。私どもはどんなに手が掛かろうと、御不自由のないように看護を致します。介護のためにお金を先に払っておくよということで、選ばれてお入りになるのが私どものようなホームです。

しかし民間の企業です。全部が全部安泰だというわけにはまいません。経営する当事者は真剣にやっていますが、常に倒産のリスクが消えることはありません。金融機関のように、破綻前だとか、破綻後だとか議論をする座敷もありません。これから増えてくるであろう高齢者住宅については、問題を常に抱えているということを申し上げてかなければなりません。私の所はがんばっています、今優良企業です。

経営ですから当然、入居されている方の処遇の向上とコストというのは比例致します、機械的に申しますと。手厚くしようと思うとコストが上がります。コストを上げて、一定の所まで

手厚くしないと、入居者の方の不満になるというようなことがありますので、非常にやりにくい経営でもあります。

それから、日本人というのは、契約という概念に非常に乏しい民族です。入居しようと思う方は、会社と契約いたします。契約の中に、ここまでは入居金と介護料で賄います。例えば、お部屋を掃除して下さい、という方がおられます。その方が、体の調子がちょっとでも悪ければ、これは介護サービスの中に入りますから、お部屋へヘルパーが行って掃除します。介護料を頂いていますから追加で頂かない、そう言う意味では無料ということになりますね。ところが、お元気な方が、今日面倒くさいからちよつと掃除して、と言ったら、これは有料という約束になっております。自分でできない身体の状態になったときには、頂いた介護料がありますから、それでサービスいたします。できるのにやらない、やりたくないからやってくれというのは有料ですという約束になっています。

ところが、契約上そうなっているにもかかわらず、長く住み慣れていると、だんだんわがままが出てきます。私共も、やれることはやっただけようと職員にいつておりますが、これは際限がなくなっていく可能性ががあります。そして、そういう契約外の要求に応えてあげないと、あのホームは酷いという話になってきます。契約外のことをやらないことがあたかも悪いやつだというような、つまり契約社会という概念の認識が非常に薄い社会です。

それから倫理上の問題で、私共は非常に苦慮することがある

んです。つまり、有料老人ホームは高齢者を食い物にしているんじゃないかと、こういう言い方をするのは、特に社会福祉法人系の方に多いですね。よくない考え方だと思います。もっともこれは、営利法人である株式会社の背負っている宿命かもしれません。営利の法人が高齢者の介護を含めた、住宅を供給する仕事に携わることの是非は、全社会的な規模で議論されていかないと、本当の意味での福祉社会を作っていくことは出来ないと思います。日本では倫理的な感情があつて、この位のことやっただけだつていいじゃないか、年寄りを食い物にしているんじゃないか、というような言い方をされる。株式会社というこの企業形態でやっている限りいつも倒産のリスクがあり、赤字にはできない、株主には配当しなければならぬ、という中で快適な生活と経営をきちつと維持するってことは、大変難しい技だと思ひます。そういう宿命を背負っております。

今、公的介護保険という問題が目前に来ております。この評価の問題ですが、これは介護ということを、家族の責任から切り離して、社会の責任にしたという点で、積極的に評価出来るというのが、だいたい識者の一致した意見であります。しかし私もそう思ひますけれども、動機が大変不純だと思ひます。国全体で五百兆円もの赤字を背負つてゐる我が国にとって、社会的入院を含む、高齢者の医療費の公的な負担が、非常に大きくなつてきている。いつてみれば高齢者の生活支援のコストを見直して年間五千億円くらい節約しようと、このような保険を導

入したというのが、国のそもそもの動機です。

一昨日、『赤旗』っていう新聞に日本自治体労働組合総連合が、国に対する要望をまとめるため市町村長の意見をきいた結果がありました。その要望の中に、たとえば、地方自治体の負担がものすごく多い、市町村が保険者になるんで、これは大変だということを言っております。そもそも特に大きな都市部は別ですけれども、離島などへ行くと、介護する人はいるけれども介護サービスを提供する組織ができるのかっていうことが皆目見当がつかない。ヘルパーは確保できるのかとかですね。国に聞きますと、これは市町村の計画に委ねていると逃げますけれども、そんなことでは国民は大変困るわけです。平成十二年から始まるこの制度の問題点は沢山あるのです。

それから介護支援専門員とか、新しい名前の付いた専門職を作っていかなければならない。近く初めての介護支援専門員の試験がございすけれども、本当に支援専門員に値するだけの能力がある人の人数が確保できるのかということは非常に問題で、わかりません。たぶんメチャメチャな目に遭うと思われますし、だいたいそういうふうな世論になっております。

ニーズに即して介護サービスが行われるんじゃないくて、サービスの量質に即してニーズが制約、選別されるような介護保険制度になっていくんじゃないかということが危惧されます。出だしは一人平均月額二千五百円の保険料と言っておりますが、十年後には六千円位支払わなければならないと、厚生省が既に

言っております。この前、或る役所の人に聞いたら、六千円なんて言うのは全然甘くて、もう出だしから八千円ないと出来ない、言っているわけです。ですから、そういうよくわからない介護保険という制度が法律になり、実務準備しているわけです。先行きが非常にわからないというのが、関係者の世論になっております。

介護保険がスタートしますと、例えば特養などの社会福祉施設では、措置費がなくなつて、介護保険で全部賄おうっていうんですから大変化です。老人福祉施設が、たとえば、現在入居者八十人規模の、ある特別養護老人ホームで、措置費がなくなつて介護保険料だけで賄うと、一年間の収入が六千万円減るという計算をしたという話を聞きました。非常に大変だなと思っております。それから一割負担で言っているのが本当に一割で済むのか、これだつて分かりません。既に去年、医療保険の改正があつて、私も一割負担だったのが二割負担になったとかね。したがって、介護保険ができてバラ色だなんて毛頭思っていないというのが、関係者の印象であります。

次の問題。私達の有料老人ホームの中では、いかに寝たきりにさせないか、身体機能の劣化をさせないかという努力をしております。少しでも身体的な機能が維持できるのであれば、手を貸せばいいのか、車椅子に乗ればいいのか、あるいは後ろから支えればいいのか、生きている機能を劣化させないようにやっていますが、そういうことに対する保険認定っていうのはな

いんです。重度であるほど、保険認定の度合いが高くなり、たとえば最重度の人には一ヶ月二十九万円の保険給付。要介護とはいわなければならない、虚弱と認定したら六万円、そういう風になつてますから、虚弱の人がどんどん劣化していく。その劣化をくい止めていくことに対する保険の報酬というのを見てくれない。ですから、特別養護老人ホームなんかでも言われているのは、これからは最重度の人を選んで入れていかないとやってけないと。少し能力があつて、最重度の一つ手前の人は、最重度にしちやつたほうが、保険の給付は大きくなるんです。そういう矛盾を孕んでいるのです。

最後になりますが、ちょうど百年前に、日本では横山源之助という方が「日本の下層社会」という本を出されました。これはエンゲルスが書いた、『イギリスにおける労働者階級の状態』それに匹敵するという方もいらつしやいます。同じ頃ですね、留岡幸助先生が、これは私が学生時代、教育学部に留岡先生という方がいらつしやいまして、その方のお父様ですね、遠軽に北海道家庭学校を作られた先生です。その先生が、「慈善問題」という本を出版なさいます。『學術的慈善事業』ということ提唱なさった。アメリカでは、メリー・リッチモンドという人が、今のコロンビア大学の社会福祉学科の源流になる行動を起こされております。これは慈善組織協会の、今で言うカウンセラーの六週間研修を始めたというのが、ちょうど百年前のことでございます。

このちょうど百年前に、「社会」という言葉が普通名詞として使われるようになりました。今日では社会という言葉は当たり前になつて、社会福祉だとか社会福祉事業と言うことが言われるようになってます。しかし今世紀の前半に、困った人を助ける慈善事業と言われたものから、社会事業への発展期となるべきだったんですが、日露戦争と二つの世界大戦があつて、社会事業、社会福祉として展開することができなくて、救済的な事業があつたに過ぎませんでした。では二十世紀の後半はどうかといいますと、日本は未曾有の、奇跡的な発展を遂げておりまして、非常に富める国にはなつたんですが、社会政策面では、もつともつと富を福祉に分けていくべきであつたのにそうなっていないということになります。富は、今、大きな金融機関の倒産対策のような安易な使われ方をするし、軍事費の問題もずつと言われ続けていることであります。

七十年代に在宅福祉ということが言われまして、確かにノーマライゼーション、自分の家で福祉を受けることは理想的に見えますが、この七十年代に言われた在宅福祉は、裏を返しますと、できるだけ国の持ち出しを少なくしたいってことなんです。私は先の方で申し上げたように、介護をプロフェッショナルな人に頼むってことは、決して罪悪でないというそういう新しい考え方が生まれて、これは社会的な前進だと思ひます。老人は、自分で判断能力のある歴史をずつと歩いてきて、自分で判断能力を持って選択をします。自分はこういう生き方を

したいって選択をしますので、これから選択の幅がもつと拡がっていくと思いますが、同時に問題も拡がっていくということが申し上げられると思います。

私自身も高齢者の類に入っておりますが、沢山の高齢者とお付き合いをしてみじみ思うのは、それはもう亡くなった方もいらつしやいますし、痴呆の方もいらつしやるけれども。結局、「死にざまは生きざま」とよく言いますけれども、死ぬ際のこととなくて、死に近くなったときの様って言うのは、まさに生きざま死にざまだと思いますね。

やはり意識のちゃんとしているときの生き方、これがだんだん体の能力も、頭の能力も落ちてきますと、その人が持つっているゼネリックなもの、その人の本質、真髄、だんだんそこだけ

が残って行くんですね。今からでも遅くないぞと、私ももうちよつと包容力のある、短気を起こさない人間にしないと、脳の力が弱くなったときに、非常に意地悪爺で、頑固で、ああ、あのひとの本質はこれかという風に思われないよう残る人生頑張つて磨かなければならんと思っております。

有料老人ホームのことで、もし何かございましたら、私の方に、お電話いただけましたら、大変光栄に存じます。ご静聴ありがとうございます。

(司会) どうもありがとうございます。それでは牟田悌三君をご紹介します。牟田悌三君は昭和三年生まれで、東京都のご出身でございます。いわゆる敗戦前後の、一番日本が混乱した時期である昭和二十年に恵迪寮に入寮され、農学部を卒業されました。在学中からNHKの札幌放送劇団に入団され、その後皆様方ご承知のように、テレビ、ラジオ、舞台、映画等にたくさんご出演されておられます。なおお聞きいたしますと、平成十一年度には、NHKの大河ドラマ「元禄繚乱」に堀部弥兵衛役でご出演と、こういう風に聞いております。現在は世田谷ボランティア協会理事長、東京農業大学の客員教授、国立オリンピック記念青少年総合センター運営委員、また第十五、十六期の中央教育審議会専門委員をなさっており、著書には「大事なことはボランティアで教わった」、こういった本もございます。牟田さんには非常にお忙しい中、今日わざわざ東京からおいで頂きました。よろしくお願いいたします。

どうもみなさんこんにちば。だんだん出てくる人間が古くなってまいりまして、私は昭和二十年に恵迪寮に入りました。まさに戦時中でした。旧制中学校は五年でございしますが、私どもは四年でむりやり卒業させられて、したがって十七の時に、津軽の海を渡ってこちらにやってきました。

そして恵迪寮に入って、さつき昭和二十五年まで開識社があったというお話だったですけれども、たしかにございました。開識社、始め何のことだか分かんかったんですけれども、寮に入ったばかりの時は新しい丸帽、新丸と言って、先輩達がわれわれのことをかわいがってくれたわけで。ただ本当に、開識社に出ろっていわれて出たときに、これはすごいな思ったです。日本国中から北大へ集まってきましたよね。そうするといろんな価値観を持った人達が集まってくるわけで、そこで当然いろんな違いがあるわけですから、その違いを闘わせるわけですね。開識社というのはまさにディベートであります。

ですから、こちらがこういうことをしゃべる、あちらがそういうことをしゃべる、そうすると、いや、私はこっちの方が正しいと思うという形で、そこにいる人間がほとんど何らかの形で発言していく、それが開識社であります。ちょうど土方与志さんという新劇界の元老がおられますけれども、その息子さんに土方与平君というのがあります、これはもう寮の部屋に赤旗をバーンと張っているような全くのマルキストであります。で、それに対抗したのが私どもの仲間で恵水会というキリスト

教のグループを作っておりました伊藤次郎君です。大いにやり合って、どっちが勝つとか、そういうことではないにしても、それぞれ相手に対して言いたいことを言い合うという状況の中で、識が開いて行くんではないか、ということだろうと思えますね。そんな開識社、私は二回出席した覚えがございます。

さて今日は「子どもを取り巻く環境」なんてタイトルに挙げましたけれど、まさに学生時代に、「問題意識」というのが育って行くんだろうと思うんですね。つまり、論理を闘わせることによって、今のこの社会はどうなんだと、今の社会はこれでもいいのかというこの中で、自分の考え方がそこに反映されていくわけです。ですから、私の今日のお話のキーワードは、「問題意識」であります。子どものことを語る場合に、これでもいいんだろうかっていう問題意識をわれわれが持たないのはおかしいと思うんですね。

つまり、いろいろと社会的に、子どもにとって不都合なことがございます。そしてまた、それを許してしまった、そしてそれの上にわれわれは繁栄してきた部分もあるわけですね。科学文明というのは確かに功大であるけれども、功罪の罪の方も少なくない。手間や時間をかけるということをどんどん省いてきているわけでございます。そういう社会、人間関係までも省かれてしまうような社会の中で、子ども達は人間関係が下手になっていくのは当たり前だと思うんです。そういう風にしてしまった責任のある大人として、それじゃあどうしたらいいのかと

いうことを、今、私どもは一所懸命考えて、それなりの対応策を練っているわけです。子どもの問題だなんて、そんなことは言えないですね。これは大人の問題であります。大人が子どもをそういう風にしてしまったんだと私は思っております。そういう問題意識といましようか、もつと言えば危機感といましようか、そういうものを私は今感じて生きております。

中央教育審議会に十五期から入りまして、そこで一番最初に私が申し上げたことは、この時代、子ども達の論理性と倫理性が欠けているのではなからうか。まさにわれわれは青春時代に開識社、そのほか恵迪寮の中で夜を徹して語り合って、翌日沈没して（笑い）。まあ、そんな中で、人生いかに生きるべきかってことが、論じられたわけですね。それがわれわれの体の中に染み込んでいて、その染み込んだものが幾つになっても、やっぱり外に出さざるを得ないという感じです、私の今の感じは。確かにこの青春時代に仕入れたものは大きいわけですね、それが目を瞑るまで絶えないわけで、ますます服らんでいくとか、そういう生き方を私はしたいなと考えるわけです。

中教審のなかでその論理性、倫理性、言い方はちよつと違いますけれども社会性という言い方をしました。それが明らかに欠けてしまうようなことを、われわれがやってきてしまった。だいたい子どもから遊ぶ時間を奪ってしまったわけです。遊びの中で子ども達というのは人間関係っていうものを体得して行くわけですね。そういう状況を奪ったことに、まず一つの原

因があると思います。そしてまた、知育に偏した教育制度みたいなものが、制度としてあるわけではないんだけど、そういう風潮が大勢を占めてしまって。したがって「体験」なんてやっている時間なんてないよ、勉強、勉強、知育、覚えりゃいいんだ、といった流れの中にどんどん追い込まれて。そして、そのままあまり考えることもせずに、学校を卒業しちゃう。

今五年目になりますが、東京農大でボランティア論という講座を持っています。そこでレポートを書いてもらいます。私は採点の一番の大きなファクターとしては、問題意識があるかないかっていうあたりを、基準にしようかと思っていたんですけども、農大も日本全国から学生が来ますけれど、問題意識を持っているなあという子が実に少なくなりました。ということはやはり、日頃の生活に追われている。私は、追われている、あの時期ちゃんと考えて、いろんなことを考えて、今のこの社会おかしいなとか、こんなんじゃないかからの日本はえらいことになっちゃうなあ、とかですね、いろいろ考えてるんじゃないかと思っていたけど、それどころじゃなかったんですね。ですから私はあえて問題意識ということ 키워ワードにしたわけですが。

中教審でそういう発言もしましたし、それ以外にも知育に偏った教育だけではこれは駄目だと、論理つてものがあるとする、論理というものが体験という裏付けがあつて初めて自分のものになってくわけだから、この体験、実験ということをです

ね、もつとしっかり教科の中に組み込んでいくべきであるということを主張しました。つまり体験学習という時間を増やそうということ提言しました。

それからどっちかという、子ども達にゆとりがないということ、中教審の流れとしては、カリキュラムを削っていいこと。はじめ精選という言葉を使いましたけれども、そのうち厳選という言葉がでるようになります、しっかりとカリキュラムを刈り込んでいって、そして子どもにゆとりをあげるといふ状況をつくりたいという流れが確かにございました。私もその通りだと思っておりますから、これは賛成しましたけれど、ただ刈り込む中でですね、子どもにとって本当にそれが子どもの時間になるのかどうか心配だったんです。

というのは、道徳という教科があります、小・中校に。高校になると公民ということになるんでしょうか。この道徳という時間がですね、どうも週一時間位ですけれども。これと特別活動というのがございますね、それは学校行事もその中に入りますし、それからいわゆる奉仕活動なんて呼ばれている部分もその中に入ります。この辺が今一番重要なのにですね、これが週五日制を目指す中で、カットされてくわけで、これはおかしいと思っておりますので、ここをなんとか確保しましょうよと、今、道徳という言葉で伝えようと思ったってそれは無理なんだから、これを一緒にして、一つの、人間を学ぶ基礎教科という形で、あらゆる教科の中心にこれを置きましょう、その周

りに各教科があるという体制にできないでしょうかねえということ提言しました。駄目でしたね。道徳という言葉、これは削れないというんですね、その理由は分からないんですよ、教えてくれないんですね(笑い)。

それから、時間がないなら、時間を作りゃいいじゃないですか、と私は申し上げたんです、私どもの年代の、予科から学部を出た方々は思いだすでしょうが、戦後まもなく旧制から新制に切り替えられてしまったんです。それはGHQからのお仕着せであつたわけですが。旧制時代は六・五・三・三であつたわけですが、新制ではトータルで一年少ない六・三・三・四になつてしまったわけです。つまり、一年間勉強する時間をカットされたわけですね。当時私は、ああこれであまり考えない人間を育てよう、あんまり日本が繁栄しては困るので、そういう意味でのやり方なのかなと思つたほどございました。

この三・三つてあたりが本当に致命的だったような気がいたします。というのは学校の体を成さないんですね、三年間では。要するに中学校に入つて、どういうところなのかよく慣れたあたりで、もう二年目、そしてすぐ三年。二年の後半ぐらいから上の高校のことを考えなけりやならない。いちばん人間揺れ動く時期にね、そういう受験なんてことで子どもをね、どんな追い込んでしまうようなことをやっている。

ですから私は一年ね、増やしたらどうですかと、今何の制限もないわけですから、だったら中学校を四年にしたらどうでし

ようかと。五年にこしたことはないけど四年だったら、学校の体を成します、中学校を四年、義務教育を一年増やす、それくらいのお金はみんなでなんとかしようよ、国民の皆さんにお願いして、一年増やしたらどうでしょうか。そして、そこで受験があるということではなくて、高校三年を繋げてですね、七年制の体制を作れば、少しはゆとりが出て、人間ってなんだろうなんてことをですね、考えるゆとりが持てるんじゃないだろうか、なんてことを言いましたけれど、これも駄目でした（笑）。そこまで論議はいきませんでした。

その他に言ったことというと、いわゆる子供達の問題を考えると、たとえば科学文明の問題、そしていわゆる文明論までいかないと、本当のこの二十一世紀の教育なんてことは語れないんじゃないかということを、これは終始私は口を酸っぱくして「毎度とお思いでしょうが」と言って、語りました。駄目でしたね、科学文明の陰の部分って言う形で多少の記述はございましたけどもね、まさに文明の問題と言うところまでは、中教審の答申としてはいってませんでした。

私が言って採用されたのは、体験学習ということですね、どういう時間にしたらいんだろうかっていうことを最後まで粘ったんですけど、そこで出てきたのが総合的学習という時間帯でした。これは教育課程審議会の方で、どういう風に料理してくれるか心配だったんですけども、週三時間位の時間を確保してくれたようです。それは学校にお任せする時間なんだと

いうことですね。どのように学校が料理してくださっても構わない、学校がそこでその時間を使って、主体的にカリキュラムの中に組み込んでいただければ、いっぺんにまとめて使ってもいいし、バラバラに使ってもそれはご自由ですよって形で、学校にお任せする時間というのを総合的学習の時間として確保した、これだけは何か私が一所懸命申し上げたことが、少しはね、取り入れて頂けたなと思います。

他に、私が言ったことで取り入れて頂いたのは、現在ここに子供って言う字が書いてありますけれども、「供」という字はね、これはちよつとおかしいんじゃないんですかね、文部省がこの供という字を使うのは、ということ、ひらがなの「ども」にしてもらったこと。それから奉仕って言う言葉を、答申の中から全部除いてもらいました。

奉仕ってことの中で、ボランティアを伝えるということは、これは容易ではない。それはむしろ誤解を招くのです。確かに小・中・高いろいろな形でボランティアってことが行われておりますが、やらされているという部分が大部分であって、したがって奉仕って形で、「いいこと」っていう形で、子供に伝えるとですね、それは偽善的な、あるいは、それをやることによっていじめの対象になってしまうみたいなことまであり得るわけですから、そういう形ではないと私は思っているわけです。

ボランティアっていうのは、自分が人様のお役に立ちながら、相手からも何かを頂いちゃう、つまり学習できると、この姿勢

がないと、人間同士がですね、やってあげるっていう人と、やってもらってるっていう立場の人間がいるという状態が生まれてしまつて、本当の人間関係にはならない。だからあげながらこつちも頂いちゃおうと思うと、タイ（平等）の人間関係にすることができぬ。どうも小学校なんかの教育の中に、平等ということをですね、どうもはき違えて伝えている部分があると思うんです。人間ていうのをなるべく同質にしようと、それが平等であるみたいな考え方が出回っておりまして。

私は、平等っていうのはですね、人間は一人一人違うんで、それこそいいところ悪いところそれぞれ持っているながら、一人一人違う。その違いを、お互い認め合う、認め合えるのが平等ということではないかと私は思います。ですから、いわゆるノーマライゼーションなんていわれていることは、そういう状況に人間がなっていく、人間同士がそこで初めて共生できるんだろうと思うんですね。そして、人間だけが共生すれば幸せになれるかっていうとそうじゃないですね。人間と自然が本当に共生できなければ、人間は滅びてしまいます。

今、まさに環境問題、ですから今、私の頭のなかには、子どもの問題と環境の問題、これが一番大きな割合を占めております。なんとかこれを解決するべく、現在子どもの問題としては、子どもの電話っていうのをね、なんとか開設しましょうということを随分発言しました。そして心の教育の最終答申が六月にございましたが、その中に、子どもの電話というのを一項目新

たに設けていただいたわけです。そこで文部省としても、それはやっぱり受けなくちゃならないということで、来年度の概算要求の中に盛り込んでくれまして、初年度は八千万ですか、十八都道府県に、その子どもの電話を作ったらば援助するよという形で、三年間でなんとか全国に子どもの電話を展開させようということをや要求として出しているようでございます。

ただ文部省が、行政指導でそういうことをやっても駄目だと、私は、私どもは思っております。つまり、子どもの電話っていうのは、今まで行政がやりますと、これだけのお金を使つたんだから、問題解決しなくちゃならないということで、その現場の人達が、問題を解決するために色々指示をします。大人の価値観をやっぱり押しつけます。あるいは助言をします。そういうことの中で、子どもからそつぽを、もうすでに向かれております。だから相談現場というのはですね、今本当に機能していない部分が多いと、私は思います。

三月に発表されました総務庁の調査で、いじめられても、それを誰にも相談できないで我慢してるって子が、小・中・高の平均で三七、八%もあった、つまり四割近くの子どもが相談できないでいるという状況が発表されました。その表のすぐ隣に電話相談っていうのがあつたんですね。で、電話はどうかかって思つたら、何と一%に満たないです。つまり、電話をかけないんです、子どもは。電話をかけると、学校の先生とか、学校というのが見え隠れしてですね、そんなところへ相談したって、

どうせなんか言われるだけだってことで、子どもはもう既にそつぱを向いております。先生にも親にも友達にも相談できないという、今の子どもの現状があるわけです。

だからわれわれは、その子どもの声をとにかく聞いて、学校に保健室なんてのがありますけれども、あそこが子どもの居場所であるという風にいわれておりますけれども、それよりもっと積極的に子どもが電話をかければ、その、向こうに自分の話をちゃんと聞いてくれる大人がいてね、そして、一緒になって考えてくれて、心の中を整理してくれる、そういう相手のいる電話をわれわれは目指しているわけでございます。

そして、これは、子どもの側だけでなく、大人にとっても子どもの声を聞きながら、そこでいろんな気づきをしてもらえる場。今や大人と子どもの接点というのは、実に少なくなつたと思いますね。だから、これが一つの大きな接点になっていくんじゃないだろうか、そういうことを全国展開できていければね。それで問題解決になるとはいえませんが、いえませんけれど、今日、明日死のうかなんていう子どもにとっては、それはとっても役に立つことではないかなという風に、私どもは思うわけです。そんな活動も現在しておりますが、私が申し上げたいことは、そういう問題意識を大人が持てるかどうか、というところで、したがって大人が、今意識改革をして行かなきゃならないんじゃないかというのが、私の考えでございます。

私も、まもなく七十になりますが、何とか生きてる限り、大

人の意識改革、そして子どもたちをどうやって受け止めていくか、そしてこの環境問題をどうやって解決していくか、そういうことを考えながら生きていきたいというのが、私の思いでございます。北大学生新聞に英文で毎回報載っておりますよね、クランク博士の言葉が。あれを訳すということになるかということなんですけども、「青年よ大志を抱きたまえ、しかし金を求める大志であってはならない、利己心を強める体質であってはならない、名声という名の、あの束の間のものを求める体質であってはならない、人間としてあるべき全てを主張する大志を抱きたまえ」という風に私は訳したわけでございますけれど。人間としてあるべきことを主張するのが、クランクさん、札幌農学校からのこの学校の伝統だろうと思うんです。

人間としてあるべきことがどうもおかしくなつてこの社会です。それを、そうじゃないよ、こうだよってことを主張する大志、これは生涯抱くことができるんじゃないかなっていうのが私の思いでございます。どうも失礼いたしました。



五十五才からのお住まいと

一度ご覧になって見ませんか？

前略

光ハイツ・ヴェラスは、自由とプライバシーを尊重し、五十五才以上の方がお住まいになれる、さまざまなサービスがついたところですよ。自立自助の精神で自分の人生を送りたい。自分の生き方に誇りを持ち、それを損なうことなく自由に生活を送りたい。そういった生活をお手伝いする住まい（有料老人ホーム）です。

専用居室のほかに、共用部分として食堂、スカイラウンジ、多目的室、大浴場などがあります。また、常時介護が必要になったときは、静養室にて介護をいたします。

光ハイツ・ヴェラスでは、毎月見学会を行っておりますので、ご自身の将来の参考のため、ご両親のため、ご親類のためにも是非一度、見学していただければ幸いです。

追伸 パンフレットだけでもお送りいたしますので、

ご遠慮なくお問い合わせください。

草々

お問い合わせ・見学のお申し込み

(社) 全国有料老人ホーム協会正会員 〈介護付終身利用型〉

フリーダイヤル

スズケングループ

(株) 光ハイツ・ヴェラス

0120-8080-62

代表取締役社長 小田島 善吾

札幌市南区石山1条3丁目3番33号

代表取締役専務 河原克美 (s.26 入寮)



人生エピソード・エッセイ……………

宇宙飛行迄なし遂げた

独乙V1号の威力

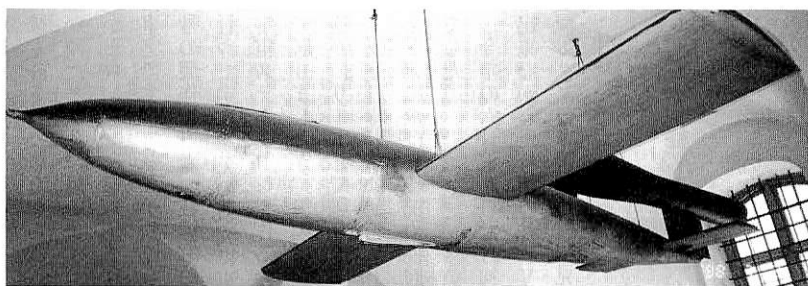
繁 富 一 雄

(昭和六年入寮・恵迪寮同窓会長)

独乙V1号、V2号はベルリンからロンドンに撃ち込んで多大な戦果を挙げた大陸弾道弾で、今の missile (ミサイル) の前身であります。先日、北朝鮮から日本国に撃ち込まれた只一発のミサイルに日本人は驚き戦いて居る状態を見て、誠に情けない気がします。防衛庁では、「現在日本にはミサイルはありません。今後米国と共同研究をします」と額賀防衛庁長官が発表して居ります。

私は昭和十二年(一九三七年)三月北海道帝国大学工学部機械科を卒業して、同年四月に株式会社日立製作所日立工場へ入社致しました。約九年間、日立工場で機械家としての技術をたたき込まれ、陸海軍の工廠へ技術指導に派遣されました。当時、海軍の呉工廠では軍艦大和を作つて居り、その主砲を follow forging (中ぐり鍛造) するか、solid forging (鍛造) にするか問題になつて居りました。大砲の砲身を forging する時、ghost (お化け) と呼ばれる疵が出来るが、この疵が出ると大砲の弾を撃つと砲身が破裂して吹っ飛んで終います。勿論精密な顕微鏡検査をするので疵を見落とす事はありませんが、完全な砲身を作るには技術的に大変な努力が要ります。結論的には、solid forging した後トレパニング (中ぐり) をする事にして作業を進めました。

二週間の予定で出張して来たのですが、熟練工は少なく、微用工 (国家が国民を強制的に呼び集める) を使うので仕事は捗りません。三週間もかかり、二週間分の米は宿屋に取られ、残り一週間は宿屋で米一粒も出してくれません。



実物のV1号

朝食、夕食は「はるさめ」だけを腹に入れ工廠に入り、昼に軍より支給される米五十%、麦五十%、味噌汁一杯、タクアン二切れが私に取って大変な御馳走でありエネルギー源でした。

工廠内のある作業場では、爆弾を徴用工が一生懸命に磨いているのを見て某海軍大尉に、何故爆弾を磨かせるのですかと尋ねた処、命中率に関係があるとの返事に驚いて反論しました。「大砲の弾丸なら命中率に関係がありますが、例えば、米国のB29に搭載して爆撃するのであれば、飛行速度、高度、風速夫々を計算して落すので、研磨は

余り命中率には関係ないと私は思います。爆弾は荒削りで良い

のではないのでしょうか？」と言うと、某大尉は、民間の君達に何がわかるかと顔を赤らめて怒鳴るので、小人御し難しと熟々思いました。それなら何故私達を技術指導に呼ぶのか？大いに疑問に思いました。

そうこうしている中に、次第に敗戦の模様が明らかに、本土を枕に死ぬ覚悟でした。昭和十九年（一九四四年）四月二十七日に突然大西工場長（東大銀時計組）から呼び出され「明日、海軍の横須賀の航空研究所へ綿森君（東大昭和十二年卒）と一緒に行き独乙秘密兵器V1号の図面をもらって来い。陸海軍の主脳が集って回天の事業として独乙V1号の製作をする様株式会社日立製作所に命令が来た。大変名誉な事で、日本には沢山の立派なメーカー（例えば三菱重工、東京芝浦、等）がある中で一番優秀な技術者は何処のメーカーに居るかを慎重に陸海軍が協議の結果、日立へ決定した事である。V1号の図面は独乙のUボート（潜水艦）で日本に運ばれている。図面をもらって来て綿森君が設計し君が製作をするのだ。工場内の何処を使っても良い。優先的に仕事が出来る様にしておくから行って来い。」と命令が下りました。綿森君と私は欣喜雀躍し、日立を背負って立つのは私達二人だと喜んで海軍航空研究所に行き、担当の某大佐を長とする設計陣と打ち合わせ図面をもらって帰って参りました。

早速作業にかかりましたが、六月十日の米軍B29の爆撃に会い、工場もろとも吹っ飛んで終い、完成する事は出来ません

でした。然し日本で最初に独乙V1号の製作を手にかけたのは私達二人丈で、後にも先にも誰も居りません。この研究が終戦後も許されて居たならば、今時北朝鮮のミサイルに驚く事もなかったと残念に思います。この独乙V1号、V2号がベルリンからロンドンに撃ち込まれロンドンは壊滅の状態になった事は事実です。ロシアが独乙を征服した時、一番先にV1号、V2号の製作担当者の技術家約二百名を捕虜としてロシアに連れて行って宇宙開発の研究に専念させたのです。それで宇宙飛行、宇宙ステーションを作るのはロシアがリーダーシップを取って居りましたが、米国は頭脳と金に物を言わせて現在は米国が遙かにリードして居ります。

戦争当時、軍は独乙V1号を日本で作りニューヨーク、ワシントンに飛ばし戦況の挽回を計画し吾々に製作命令を出したのです。

今年の六月末から七月初旬のヨーロッパ旅行で、私達が完成出来なかった待望の独乙V1号の実物をコペンハーゲン（デンマーク）の軍事博物館で見て来ました。

仕様は次の通りです。

『ドイツ製V1 爆弾』（和訳：株式会社繁富工務店）

しばしばミサイルと表示されるが、専門的には、飛行爆弾と



（右・V1号の仕様と筆者夫妻）

（上・デンマークの軍事博物館にて、後方上部にV1号）

みなされ、ロケット・モーターではなくバルブ・リアクター・エンジンを使用しており、更に、自動操舵装置を備えている。一九四四年六月十五日以降は、その後継者である“V”と同様、ロンドンに対して使用された。

“V” は “Vergeltungswaffeins” (報復兵器) の略称である。時速六百 km、総重量約三・五トン、弾頭部重量 約一トン、燃料八百二十、全長八・三 m、翼の長さ五・七五 m、製造数約八千個

来年の九月、第二回目の宇宙飛行を予定されている毛利衛君は我工学部の後輩で、山科俊郎教授の下で助教授をしておりました素晴らしい学究の徒です。又、山科俊郎教授は世界的に有名な核融合の権威者で国際学会がある毎に彼が委員長 (Chairman) を務めて居ります。原子爆弾や原子力発電所は原子核の分裂であって、有害な放射能が沢山出ます。核融合は海水より取り出せる無尽蔵のトリチウムを使うので放射能も少なく将来性が大有りです。恵迪寮出身の諸兄は是非山科俊郎教授著「核融合の話」の本を読んで欲しいと思います。

尚、工学部には有江幹男元学長(総長と呼ばれなかった時代)や丹保憲仁総長と実に多士済々です。工学部は北海道大学の誇りです。

「入れ歯」後日譚

中 瀬 篤 信

(昭和二十六年入寮)

「先生、早急に何か書いて下さい。先生なら、書こうと思えば右から左でしょう。」二年前の瀬も押し迫った頃であった。会誌「恵迪」Ⅱ号に編集者の井口君(昭和二十八年入寮)の巧みな教唆にのせられ、「入れ歯」と題して尊厳死、安楽死についての小編を書かされた。

私自身、会誌「恵迪」再刊を主張した張本人でもあることから断ることも出来ず、創刊号に引き続き何かを書かなければならない羽目に陥ったのである。創刊号では、雑誌の質を高めるべく自分自身の専門分野の心臓移植にまつわる話を書いたが、少し専門的すぎて難解であったとの批判があった。

約四十年に亘る臨床医の現役生活に終止符を打つ直前の多忙な状況であったが、どうしても書かねばならぬとしたら、もう

少し平易な語り口で、誰しもが思い悩むような問題：人間の死に際の現実的な、具体的な問題を取り上げてみようとかねてから考えてはいたのである。

この雑誌が発刊されて数ヶ月を経た頃、あの文を読んだ仲間からお誉めの言葉やら、色々な批判の手紙を頂戴することになった。その中で一番多かった質問が「なぜ、入れ歯などという変なタイトルをつけたのか？」というのであった。

今にして考えれば確かに色気のない題名ではあると自分でもそう思うのだが、なぜあの題名にしたのかの経緯を少し説明してみよう。

確かに古典的な安楽死については、有史以前から議論されたり、また暗黙裡に、あるいは慣習的に行われていたに違いないが、法的社会が成立した現代においては、尊厳死、安楽死の概念は受け入れられてもその執行にはかなりの困難が伴う。また、民族による死後の世界の捕え方の違い、或いは宗教の異なりなどは、この問題を複雑にする。しかし、日頃、目にする苦痛に顔を歪める臨死患者に、どのように対応したら良いのか、自分自身がその様な状況になったらどうしたらよいのか、誰しもが思い思う問題なのである。

しかし、こうした題材をかなり前から温めていても、このテーマの先行きの困難さを考えると、まったくペンを執る気になれないのであった。全く身の程知らずのだいそれたテーマであ

った。しかし、いたずらに日が過ぎても書き出す糸口がなかなか思いつけず、どうして書き出そうかと呻吟していたのである。

その頃、歯槽膿漏で口腔外科の治療を受けていたが、約ひと月前の十二月に数本の歯をまとめて抜かれ、取りあえずの仮歯を入れられたのであった。しかし、そのマウスピースがどうしても馴染めず、ことあるごとにその異物を噛みしめることになり、ついにはある大きな手術の際、緊張の余り余程噛みしめたのか、残歯に固定する片方の金具がボキリと折れてしまったのであった。従って、固定が不十分となり、なにか喋る度に入れ歯がはずれ口から飛び出しそうになるのであった。すぐに新しい仮歯を作ってくれるよう依頼したのだが、健康保険上、ひと月やふた月ですぐに作り代えるのは難しいと渋い顔をされたのである。

そんな一月の末、恒例の恵連寮同窓会「新年歌会初め」が開催された。例年のように南二条の北家の座敷に先輩後輩が集まり、酒を飲み、論を交わし、寮歌を歌った。来賓として北海道大学前学長の有江幹男先生も参加され、さらに会は弾んだ。時は過ぎ、終焉の挨拶を依頼されたのだが、なにを喋ったか全く記憶にないほど酔っ払っていた。

その後、井口君や有江先生のお供をして薄野のとあるバーに繰り出したのである。妙齢のママさんがウイスキーの水割りとお通しを運んできた。井口君はカラオケで歌おうと誘う。有江先生も「大いに歌おう」と濃いめのウイスキーをぐいと飲み干す。

音痴の私は隅の方に座をずらし、お通しのモロキユウをがぶりと食べようとしたり。あれえッ、モロキユウが齧れないのである。

そこで初めて私は、入れ歯を料亭「北家」に置き忘れてきたのに気づいたのであった。そういえば閉会の挨拶をしようとして、喋りずらいからと入れ歯を外したまでは思い出すことが出来たが、それを何処に置いたのかはまったく記憶にないのだった。

すぐに北家に歯を取り戻しに人を遣ったのだが、小一時間の後、彼は手ぶらで帰ってきた。女中さんが座敷の隅々まで、そして残飯の中まで探しても見つかることができなかったのことであった。酔いが醒め、困ったなあとかツクリとなったのである。

仕方がない、あの嫌な歯医者に無理を言ってまた作って貰うしかないと自分に言い聞かせても、先ほど来の陽気さは何処かに吹っ飛んで、急に奈落の底に落ち込んだような、とてつもなく暗い気分になってしまふのであった。

帰宅後、かみさんにその子細を告げると「あら、まあ！」とあいた口がふさがらない態でそれ以上何も語らず、テレビの方に視線を移した。何を言われるかと懸念していた私は、更に暗い気持ちになって布団の中にもぐり込んだのであった。

翌朝、北家から電話があり、入れ歯は、使用後のおしぼりの中から出てきたとのことであった。嫌がるかみさんを引き連れ、五千円の菓子折りを携え、私の分身である半分壊れた入れ歯を

受け取りに行ったのである。北家の女の人が、綺麗な紙に包んだそれを差し出し、「入れ歯の忘れ物は初めてです」と云った。かみさんは大汗をかきながら、しきりに恐縮していたのである。「そうだ。歯がなくなることは、人生の終わりのひそかな告知なのだ」と帰路の車の中で思いついたのである。こうして書き出す糸口が出来ると、不思議なことに、文章があれば、あれよとばかりに短時日で出来上がってしまったのである。

当然、文の題名は「入れ歯」であった。しかし出来あがった原稿を編集の井口君に提出すると、彼は題名を見た途端、きわめて不思議な顔をしたのである。数日後、やはりあの題名は少しおかしいかな？と思いつくようになり、文頭の導入部分で「老ライオンの挿話から「ライオンの歯」にしたほうが格好いいと思うようになった。しかしそうした申し出に、井口君は「あれで良い」とにべもなかった。

数週間後、「ゲラ刷りが出来たので自分で校正しろ」ということで、ゲラを見ると、文末の余白に顕微鏡かなにかの挿絵が載っていた。これを見て「これだ」と、また妙なことを思いついたのである。私は、この妙案を思いついたことに独りでニヤリとほくそえんだのであった。

無理を云ってその挿絵をタンポポの絵に差し替えて貰ったのである。タンポポの挿絵の何処が妙案なのか？と訊ねる人にお答えしましょう。

御存知の通り、タンポポの英訳はダンデライオン (Dande-

lion) という。タンポポの黄色い花がダンディなライオンのたてがみに似ているからこう呼ぶのかと思っていたら、そうではないのである。この Dandelion の語源は、フランス語で、dent de lion (ライオンの歯) なのである。タンポポの花ではなく、葉縁のギザギザがライオンの歯に似ているからなのである。どうです？ おわかり頂けましたか？

最近、編集長から再度「恵迪」Ⅲ号の寄稿を求められたが、腹案はあるものの書き出す糸口が見つからず困っているのだが、たとえば格好よいのだが、本当はビールを飲みながら恵迪Ⅱ号のタンポポの挿絵を見てニヤリと笑い、鼻くそをほじってばかりいるのである。

恵迪とフィリピンの子供達

—— 郷愁を超へて ——

小 寺 義 彦

(昭和二十七年入寮)

編集子の依頼を受けて「何を書こうか」と色々迷った挙句、結局は右の様なタイトルで書くことにした。

タイトルが決まってからは、今の私の心境がすらすらと出て来た。決して皆さんに伝える為の文章ではなく言うなれば独り言の様なもの、乞う御容赦！

恵迪寮で何が起こったか

恵迪寮と私の間に一体何が起こったのか、どんな関係が生まれたのか。この事を解き明かす「キーワード」の一つが「恵迪の心」であり、標起に結びつくこととなる。

人皆六十才を過ぎる頃、その人の現在あるについて何が、誰が一番大きな影響を与へたかが判る。小学校の時の一人の先生、高校の時の或る教師、青春に読んだ一冊の本、生まれて初めての恐怖の体験、空腹に耐へた「食べたい願望」そして永年に恒る両親の生き様：等々、様々の体験がその人をその人たらしめるのである。そして、それらの経験体験の中でも最も強烈なものが、その人の人生の後半を彩ることになるのではなからうか。

君のそれは何かと問われれば、私の答へは躊躇なく「恵迪」となる。恵迪寮が私に何を与えてくれたか、私は恵迪寮から何を学び何を得たのか、その全てを語るとすれば、原稿用紙百枚を以ってしても十分とはなるまい、限られた紙数その万分之一

を以下箇条書きで記す。とすれば：

(一) 恵迪寮はそれまでの私にとつて最大の「カルチャー・ショック」であった。田舎（羽幌町）からヒョイト出て来た十八才の青年にとつて、札幌は物理的に驚きであり、恵迪寮はと言へば精神的な驚きであった。未だ見た事も想像したことも無い世界であつた。三十才以上と思われる髭面のオヤジの様な二年生（私は長男坊で兄貴がいなかつたので特にそう思へた）ドイツ語で寝言を言う紅顔の秀才、オドロ恐ろしい数々の寮儀、マルクスをしゃべりまくる苦学生、学生でありながら実家に送金していると言う人、三百人の寮生全てが、自分とは異なつた文化圏から来た人種の様に思へたものであつた。

(二) 人間これ程多様なものか、同じ寮生でありながら三百人の一人一人の行動パターン、考え方、興味の持ち様が見事に異なつていた。高校を卒業する時二十三人の同期生しか居なかつた私にとつては、三百人の異なり様はマサに大発見であつた。「人間それぞれ固有の考え方独自の哲学を持っているもの」これは、後の私の生き方に大変大きな教訓となつた。

(一) 腹がへつた。お金が無い、あいつはお金があるらしい、お金の意味が、今迄とは全く違つて理解するようになったのも恵迪であつた。

お金の悔しさ、お金の大きさ、お金の力、等々、お金なるものに対する新しい体験、それは他の事とは別の意味で誠に貴重

な体験をすることが出来た。

(二) 通学出来る事の嬉しさ、有難さ

もし恵迪寮なるものが無かつたら就学出来たのだらうか、札幌で下宿に入る余裕は殆ど無かつた。恵迪二年目の頃、ハッと気が付き思はず「ダンケ恵迪寮」と心底思つたものである。昭和二十四年、羽幌町の方々が定時制高校を創つてくれなかつたら、私の高校生活は無かつたはず（留萌高校へは下宿代の工面つかず不可能）。とすれば、私が大学教育の恩恵にあずかれるのも数々の人のお陰、奨学金制度のお陰、恵迪寮を支えてくれた多くの先達のお陰、そして貧乏人なるが故に発見出来たお金の意味、田舎者故感じ取る事が出来た文化・思考・多様性、そして、それをたつた二年間で教へてくれた恵迪寮、恵迪は吾師である。

フィリピンの学生を支援して

私はこの十四、五年間、フィリピンの子供達（生徒・学生）の就学のお手伝いをしている。頭が良く向学の志しがありながらも、貧乏なるが故中学校以上に行けない子供達が進級出来る様に支へる役目である。何故フィリピンの子？これは、フィリピンで人質として苦勞し、先年札幌で死去した三井物産札幌支店長若王子氏（同氏は私と昭和三十二年同期の入社である）との関係が深い。詳細を述べる機会もあろう。その時を期したい。

今現在の学生数は、高校生・大学生・大学院生合計で約九百人、それを支へる日本側の支援者は約八百人であり、私もその一人である。高校、大学の八年間を頑張った一人と、現在大学三年目の学生を担当している。

この組織は日本側、フィリピン側共に非常にしっかりした体制があり、支援する者にとって確かな手応えを感じる事が出来、「サラマツボ会」と言う。

この会の特徴を参考まで述べると次の如くなる。

(一) 支援が一对一の関係にあり相手顔がハッキリし且つ生長の過程が手にとる様に判る

(二) 支援内容が学費の応援に限定されている事(生活費は親又は本人の責任で)



(一) 金額が妥当。一人の学生に対し年間で高校は三万円、大学は五万円で学費は充分出る(吾々は月五、六杯のコーヒーをセーブすれば学費が出来る・日本円は現地ペソの十倍の価値あり)

(二) そして、送金以外に出来るだけ文通をすることであり、出来れば、時折現地で会い直接コミュニケーションすること。

会がその辺を見事にアレンジしてくれる

(一) 現地側の選定作業が極めて正確適切である。行政の適度の理解もある：等々である。私はこの三月、六回目の訪問を楽しみにしている。

(二) 蛇足。現地は教へられた英語なので、私の英語で充分通ずる。又歴史的に日本との関係も種々あり、共通の話題ともなる。



教育を受けている子供達の輝き

前ページの写真を見て頂きたい。彼等の場合に依つては裸足で道路のタバコ売りをやっていたかも知れない。ゴミの山で這いずり廻っていたかも知れない。教育を受けられる事の喜びが全身に満ちている。知性を身に付け始めた体の輝きが見える。理屈抜きで嬉しい。

恵迪で教わったものの一つが今ここにある。恵迪は師であり大事にしたい。恵迪への郷愁は尽きせぬものがあり、殆どの行事に参加している。恵迪の友は人生最高の宝である。又行事に参画するは、郷愁にひたると同時に往時の数々の教訓を確認する為でもある。

然し何よりも大切にしたい事は、郷愁を超えて恵迪を現在に生かす事だと考へている。一人より二人、二人より三人と教育の恵みの輪を広げたいもの。この子供達が社会人となり、その子供をキチント育てる時、フィリピンは文化国家になる事を信じて。

私とドイツ

坂 西 八 郎

(昭和二十八年入寮)

古武士の如き人物がいた。名は国見金熊。約五十年にわたる私とドイツとの関わりを思い起こす時、必ずこの名が出てくる。松本深志高校のドイツ語教師。

新制高校になってから、ドイツ語のクラスが出来、私はその一回生だった。毎日五十分、週五回もの授業でしごかれたが、十七才の柔らかな頭には、どんどんしみ通る。半年も経つと、シュトルムの "Immen See" も読んでいた。

音楽部に入っていたので、ドイツリートを原語で歌えるのが嬉しく、「冬の旅」や「美しき水車小屋の娘」などに、それこそハマっていた。もともと、ドイツリートの古典ともいふべき「野ばら」をはじめて聞いたのは十四才の時で、シューベルトのメロデーのみが頭に残り、歌詞がドイツ語だったのか日本

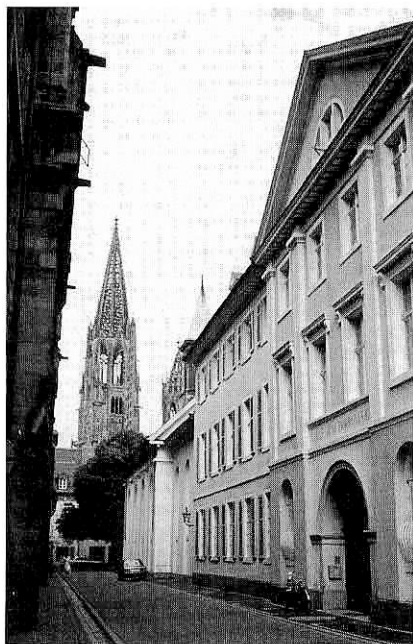
語だったのかも憶えていない。しかし、これが私を歌曲好きにするきっかけとなった。

松本に中山樫一やゲルハルト・ヒュッシュが来た時も、勿論聴きに行った。入場料などどう工面したものだったか。

とにかく、金熊に叩き込まれたドイツ語のお陰で、北大に入る事が出来た。漠然と農学部に憧れて理類など受けたのに合格できたのは、ドイツ語のせいに違いない。ところが、恵迪寮が教養の校舎からあまりに遠いので（同じ構内というのにこんなに離れている所なんてあるのか?）、雨の日は傘は無いし、ましてや生物・化学の実験になぞ出ないのだから、最後には独文に行くしかなかった。独文時代は、ヘッカー先生に可愛がつて頂いた。先生から教わったことは数知れない。後にドイツで、いくつも思い当たることになる。

さて何とか卒業にこぎつけ、三年間は農業関係の通信記者、四年間は私立男子高の国語教師をしていたが、この間も、札幌短大夜間部でドイツ語を教えたり、夜はドイツ民謡や民話の本を訳したりしていたので、あながちドイツ語と無縁の生活というのでもなかった。

この頃、「野ばら」に第三の曲があることを発見した。私たちがよく知っているシュペルトとウェルナー曲の他にライヒャルトの曲があった。本当に驚いた。第三があるなら第四、第五もあるのでは?と思ったことが、後の長いライフワークの端初



（南独フライブルク市内の教会尖塔を望む 一九八九年七月）

となった。民謡の本を読んでいると興味あることが次々に分かってくるので、研究生活に憧れてもいた。だから室蘭工大から招かれた時は嬉しかった。が、もっと嬉しかったのは昭和四十四年の夏から一年間、ドイツ留学が決まった時である。

高校時代ドイツリートを歌っていても、ドイツへ行くなどということは考えもしなかった。大学時代に、小栗先生が留学されたが、その時ですら自分が行く機会が来ようとは思いませんでした。留学先は南ドイツのフライブルクにある「ドイツ民謡文庫」を選んだ。ここはドイツ民謡の宝庫であり、その研究員と文通をしていたからである。

羽田行きの飛行機内でたまたま隣に座ったドイツ人のシスターが、私がドイツへ行くと知って「ドイツ人というものを理解するように、ガンと当たりが強いですよ。それに負けないようにね」と饒の言葉を送ってくれた。アンカレッジ、アムステルダム経由でドイツのシュトゥットガルト空港に降り立った時、話には聞いていたが本当に二十―三十年進んでいるな―と思った。二、三ヶ月するうちに、シスターの言葉はまったくその通りであり、ヘッカー先生の云われたことも実感できた。「ドイツ人は各々が生き方の原則を持っているよ。」

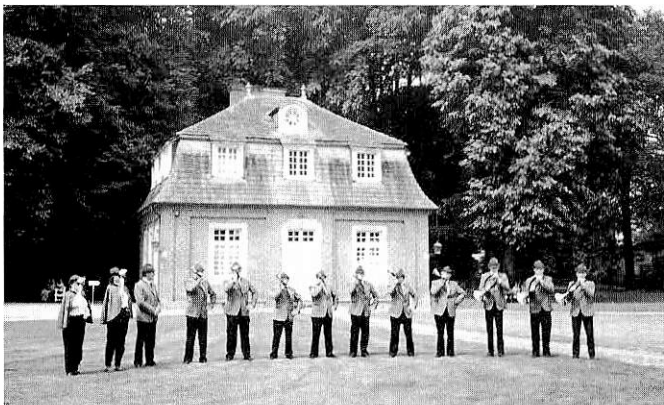
全く、ドイツ人は論理的で自己主張が強い。(民謡文庫には、ドイツ語圏のオーストリア、スイスからも研究者が来ていたが、彼らは全然違っていた。)機関銃のようにまくし立てられると全然分らない。やつの思いで少しだけ答えると、相手はさらに、高射砲のように打ってくる。研究者としてやっていくにはこれではいかんと思い、ゲーテ・インスティトゥート(外国人のためのドイツ語教室)に入った。

たまたまあるクラスで自己紹介の時、それは名前と出身国をいうだけの簡単なものだったが、一人の会社員風の男が名を告げた後「僕はシヨパンの国から来ました。」と言った。全員ウィンと頷き、納得。さて、四、五人後に私の番だ。何と言おうか。俺もカッコいいことを言いたい。芭蕉? 紫式部? 分るだろうか。下手に質問されたらドイツ語で答えることなど出来やしない。私は「アウスヤーパン(日本から)」としか言えな

かった。この体験は長く私の心に残った。

バッハ、ヘンデル、ベートーベン、ブラームス、ゲーテ、ヘッセなど、ほとんどの日本人は知っている。

日本人はヨーロッパについて実に多くのことを知っている(たとえ表相的とはいえ)。明治以来の文化輸入超過なのだ。翻って、ドイツ人は日本のことをどれだけ知っているか。私はこの在独中に、日本に関しいろいろな質問を受けたが、こういうものもあった。「日本人はまだ甲冑をつけているか」私はこう答えてやった。「そうだ。だから日本には背骨の曲がった者はいない」、「芸者がいっば



(北独ゼーゲル、中世貴族の城館内の狩猟館の前で、一九八九年七月)

いいるというが?」「いるとも。私の妻は芸者だ」そうしたら、
何とも彼らの羨ましそうな顔……。どうだ!! ……しかし、いつ
までもふざけてはいられない。



(ペーター・コリス記念文学賞を受ける

一九八九年七月)

はじめてのドイツでぶつかったさまざまの障壁を何とかクリアできたのは、北海道で暮らしたお陰とっている。長野県出身の私は、良くも悪くも本州に未だ色濃く残っている封建的遺物を引きずっていたが、恵迪・桑園寮での生活、北海道中を巡った記者生活、さらにミッシェン系の高校教師時代を経て、いわ

ゆる開放性、平等性、率直さ、開拓の心などを少しは身に着けたように思う。これがドイツ人とのコミュニケーションにどれだけ役に立ったか測り知れない。

さて、いつまでも向こうのものを翻訳、紹介、解釈しているだけではダメなのだ。日本にも世界に誇れるべきものがいっぱいある。それらを彼らに紹介し、知ってもらわなくては。そして、オリジナルな仕事をしたい。この思いが、後に、一茶の俳句、北海道の俳句、日本の切り絵をドイツに紹介する仕事につながり、ドイツ俳句協会設立のお手伝いをするにもなった。「野ばら」の異曲収集については、もう既に幾度も書いたので詳しいことは省く。異曲が数多あることが分って好奇心が湧き、歌ってみたい、聴いてみたいと集めたのだが、ドイツでも「野ばら」のみの歌曲集が無いというので闘志が燃えたのも確か。ドイツ人の宝ともいべきゲーテの「野ばら」を集めて、「ほら、こんなにありますよ」と彼らにプレゼントしたかったのだ。長い間日本に多くのことを教えてくれたお返しとして。

ドイツは、いうなれば私にとって、二十―三十才ほど年上の兄貴のようなものである。あまりにも論理的・強圧的に迫られると、時に反発したくもなるが、やはり博識な、視野の広い、頼りになる兄貴として敬愛している。

ビー・ジェントルマン、

今も

加 藤 法 愷

(昭和二十九年入寮)

恵迪寮に入った時の第一印象は、先輩がたがえらく大人に感じられたということだった。もともと、ジェントルマンというイメージより貧乏武士に近かったが(失礼)……。『二期違いの先輩の、この自信・落ちつきはどこから生まれたのだろう』高校の頃の頭でつかちな自立願望と、衣・食・住・学、生活まるごとの自治体験との大きな違いを知った。

私の出身校(都立北園高)は、大変自由な学校だった。校則がごく簡単に制服等のうるさい細則はない。完全単位制で、遅刻・欠席はほとんど注意されない代わりに、条件を満たさなければ単位は取れない。この点は厳しかった。ユニークだったのは入学半年後に、生徒は指導を受けたいルーム担任と教科担任を選ぶことだった。従って、時間割が生徒個々によって異なり、

登校も一斉ではない(必修科目を昼食前後の時間に集中)。昼食時に、一年から三年までが一つのホーム・ルームに集まり、上級生がリーダーとなって連絡等を伝え、担任の話を聞いたり、必要に応じて協議等を行う。

生徒達はこの学校が気に入っていた。「自分に責任を持って」といわれて一人前扱いされることを誇りに思い、教師を尊敬していた。新制に移った頃は、制度としてはこれに似た高校はかなりあったようだ。ここまで徹底した学校は少なかったかも知れないが、教委任命制(一九五六年)以前には、初・中等教育もかなり柔軟で、各校の独自性を生かすことが可能だったのである。

卒業後知ったのだが、私が担任していた先生(関根俊雄先生、一九〇六年生れ、実弟正雄氏はキリスト教無教会派の伝道で知られている)は、内村鑑三先生に(さらに、内村門下の塚本虎二先生に)直接教えを受けたということであった。先生は、旧制中学を新制高校として衣替えさせるとき、前述のような制度や自由な校風を実現し推進した中心的な存在だった。また、暗い戦時下の中学(府立九中)にあって、生徒達にボツと明かりを照らしておられたことである。筋の通った自由な生き方を無言のうちに示され、古武士のような風格があった。北大出身ではなかったが、ビー・ジェントルマン精神を体現しておられたと思う。

話は飛ぶが、昨年三月、寮の同窓名簿改訂に伴う調査依頼

のため、何回か現寮を訪ねた。委員長ほか執行委員会の諸君は協力的で、約一か月かけて調査してくれて目的を果たした。その際、「食堂がなくてさぞ不自由だろう。」と話しかけたところ「食べることの不自由さより、皆が集まる場所がないことが一番困る。」とのことであつた。なるほど、玄関にどうにか百名ほど座れるかなというスペースがあるだけで、寮生大会、コンパなどで全寮生が集まることは全くできない。

これについて、「恵迪」第一号の座談会で中瀬先輩（昭和二十六入寮）が「今の恵迪寮はまさに反社会的、つまりコミュニティをなさないように作られている」と指摘しておられる。また、「恵迪」第二号の座談会で現寮生達が「集会室が欲しい」と切実に訴えている。「あれは厚生施設であつて教育施設ではない」と建設当時の関係者は逃げたようだ。いまだき、ちよつとしたマンションだつて集会室を設けている。学園紛争の影響が残つていた当時を考えると、事情は分かるように思うが、建築後四半世紀の間、対策はなかつたのだろうか。

一方、「恵迪」一、二号には、現恵迪寮生の講義への出席率の悪さ、また、数々の不祥事・事故について触れている記事もある。私は教師生活（中・高）四十年の中で、子供らが対人関係や自立といった社会への適応の面で、大きく変化しているのを痛切に感じてきた。「モラトリアム人間」とか「新人類」という言葉が生まれた頃からである。

昔は放任家庭の子供達らが問題行動を起こしがちだったが、

今はごく普通の、むしろ裕福な家庭の親の過保護・過干渉が青少年の自律・自立を阻害している。前述の記事にある「寮生達の自治・自立の形骸化と生活の惰性化、自ら律する能力の欠如した大衆になつては大変」との心配・警告が大変よく分かる。「大学生にもなれば分別がつきそうなのだ。」ということにはならないのが現実のようだ。失敗や苦勞、人づきあいを学ぶ機会を奪われて、「進学、進学」と尻押しされての大学入学というのが大方の実態である（恵迪寮生は少し事情が違うかと思うが……）。頭の痛い問題点はあつても、いや問題があるからこそ、寮のような自治活動の場・コミュニティの場が欠かせないように思う。

もつとも、「みんなで渡れば怖くない。」といつて赤信号を渡つていううちに、大きなバブルが弾けてしまった。皆が踊つていた、いや踊らされていた。その「みんな」の中に、我々も入っているわけで、「今時の若い者は……」という資格はない。自らの考え・判断を貫くのが苦手な国民性である。

教養部制度がなくなり、学部縦割り、大学院重点化と大学が変わつても、学生に「自ら律する能力」を育てることの重要性は変わらない。様々な形で自治・自律のチャンスを与え、経験を積ませることが必要だと思う。寮生の占める割合が学部学生の四%にも満たなくなり、比重が変わつてしまつたとはいへ、恵迪寮の存在は軽視できないと思う。

つい先日、現寮の元執行委員長に話を聞くことができた。寮

の執行委員会は、せめてサークル（寮内ブロック）の集会室を、さらには大ホールをという交渉をずっと継続しているとのこと
で、これこそ自治の根幹に関わる活動の一端と思い、心強く思
った。幸い大学当局、学務部の教授方（寮担当の委員）も、
「集まる場」の必要性については理解を示してきているとのこ
とであった。かつての寮は、「自治・自立」のかけがえのない
道場でもあった。「諸氏を紳士をもつて対する……、各自、自
治をして本分を尽くせよ」という、W・S・クラーク先生の言
葉は今でも生き続けていると思う。

”恵迪 “ おゝ、わが原点

鰐 淵 俊 之

（昭和三十三年入寮）

一九九八年九月十九日、恵迪寮昭和三十一年、三十二年入寮
組が支笏湖に集まり、盛大に同期会を開催した。

退寮してから初めて会う友人とは実に四十年ぶりの再会であ
った。しかし話し合っているうち時空の隔りは消え、またたく
間に打ち解けて、懐かしい寮生活の想い出に話の花を咲かせた。
お互いに還暦もすぎ、頭髮も白くなり、中には薄くなっている
者もいるが、気概だけは今も変わらず昔のまゝであった。

集った者は元気で、来し方を語り、これまで、それぞれ悔い
のない人生であったと誇らしげであった。人生の披れきをし、
お互いの健康に乾杯した。

そして、自分達の余力を、さらに仕事に、趣味に、ボランテ
ニアなどに注こうとする意欲に溢れていた。

皆と話していると時間のたつのも忘れ、当時の恵迪寮が再現
したかの感があった。支笏湖畔で歌う寮歌もまた一入感慨深い
ものがあつた。

私は他の寮生とは大分違った人生を歩んできた。三十代で市
議となり、四十代で市長を五期つとめ、五十代後半で代議士で
ある。だから友人もずいぶん興味を持った様だ。残念ながら今
は政治家が、国民にとってあまり尊敬されない仕事かも知れな
い。

けれども政治抜きには、生活も国家も世界も語れないにもか
かわらず、今日政治は終世の大業でもなく、政治家は崇敬の対
象でもない。残念ながら揶揄と批判にさらされるばかりである。

そんな中で私は、政治家として政治を国民のものとし、筋を
通すことによって地域社会や日本の将来を確かなものにするべ

く努力を重ねてきた。

そんな私からすれば北大出身の政治家が数少ないのは、何とも淋しい限りである。

もともと北大の学風は、伸々とした進取の精神であつて、その原点に立ち帰れば明治の先達に劣らぬ優れたリーダーがもつと輩出してもおかしくはない。

恐らく私は恵迪寮では物質的には貧しい寮生の一人であつたであらう。しかし精神的には、最も恵まれた寮生であつた。そこで、はぐくまれた友情と人間関係なくして今日の私は語れない。

そこでの知的な語らいと情熱のほとばしりを通して、私という人間が形成されたのだ。

今の世の中は混迷を極めている。経済は不振で国民生活は圧迫され、日本の国際的地位は危うくなっている。政治に対する信頼は失われ、先行きが全く見えてこない。

人心は己の利益を追求することのみ急いで、乱れをただすすべを持たない。であればこそ、私は原点に立ち帰って正道を歩いていきたいのだ。そうしてこの混乱の中にも道があることを自らの行動で示したいのである。

私の原点は、いうまでもなく北大であり、恵迪寮である。

そこで培った自由と進取と友愛の精神である。今回支笏湖畔に集うことよつて私はあらためてその感を深くした。

誠に青春時代とは偉大である。そこでたぎった情熱は四十年

も経てまた甦った。

恵迪寮生よありがとう。

ここで充電された私は、また先へ進む勇氣が出た。皆さんも元気に生涯を全うされんことを!!

(衆議院議員)

砂上の人生回想

窪 田 開 拓

(昭和三十二年入寮)

齡六十歳、自分は何をし、何を目的に過ごして来たのだろうか?そしてこれから何処を目指して行くのだろうか?

昭和三十二年入学に始まり、同三十六年移転したばかりの新桑園寮(農学部南の旧第六講堂)を巣立った。ストリートで入るものと決め込んでいた入学試験に失敗(窪田の不合格は不思議

議の一つだ!」のあと、一浪して文類を替えて理類に入ったのが、愛する北大との縁の始まりである。

昭和六十三年五月、八十六歳で癌で他界した母に言ったことがある。「母ちゃん、俺京大か東大に行きたいんだ」。母は繕いものの手を止め、「遠くへ行ったら仕送りもままならないよ」とやんわり言つてのけた。実のところ一浪になったのも、見かけ倒しの自分のある種の実力に不安を持っていたので、母の言葉を受け入れた。

母子家庭と月仕送り二千円は、ベッドの上で胡座をかけた猛者連に恵迪寮入寮の許可を引いた。

高校の受験勉強から解放されたものの、好きな物理か化学への道とを考え、一層の学問探究をしなければと、我が身を昂揚させようとしたのも束の間、そこには多様な人格が屯していた。原語でロシア民謡をがなる者、寮歌を四六時吠える者、小説を書く族、毎日酔っ払って深夜帰る奴、時世に抗して行動する者、昼寝で夜起き出すもの、麻雀に明け暮れているもの、アルパイトを続けているもの、山ばかり登っているもの、そして勉強している御仁、さらにその年齢差は予科錬出身から、ストレート現役合格四月一日生まれの最年少者まで幅広く、まさに人格の縮図であった。

自分は体が小さいものの何となく奔放さに憧れ、体育会系の応援団の部屋を選んだ。同室に今は慶応大学教授で恵迪睡魔の前島さんがおり、毎日寮歌の口伝を受けた。応援団活動とは別

に自分は一年のうち二回、四十日を越える長期アルバイトに出た。このため出席日数不足により一年目の英語を四年目で漸く単位取得した。この時稼いだお金の一部を母に送った。

昭和三十六年三月工学部鉱山学科を卒業し、水銀鉱山に就職し、採鉱課勤務を拝命し、二年間勤めた。しかし自由化の波は低品位鉱山を直撃し、初年度から希望退職を募り、将来に不安を感じた同僚はひとりふたりと山を去った。自分も当ても無く退職し、大学に帰り、相談した。結果、大阪の地質関連会社を紹介され、その先輩を頼って、顔も見たことの無い会社に就職した。

あてがわれた会社の寮（寝泊まりだけで、食事は外食）に入り、大阪・奈良・京都周辺のフィールドで土質調査、室内では土質試験に従事したが、一年足らずで退職した。

何故かと言うと、適度に多忙であったにも関わらず、社員にポーナスもままならない状態であったので、先輩社員と会社をつくり、創業時のひとりとなったからである。退職の際、社長に十時間に及ぶ説教を直立不動のまま受けたことは、ながく記憶に残った。

新会社では毎日十時過ぎまで働き、外業と内業を交互に一生懸命であった。四人で起こした会社が三、四年後には五十人に及ぶ社員数となった。しかし、急成長はときには人的にも資金的にも消化不良を起こすことがままあるように、組合問題が発生し、連日別の意味での気苦労が生じた。具体的提案(?)が

裏目になって、役員を辞任する羽目になった。この時期に退職した同僚が、その後自分の支えになってくれようとは思うべくもなかった。

退職した昭和四十六年当時は公共事業・民需も比較的活発であり、資格もない自分にも、レポートのまとめや中国自動車道・近畿自動車道の施工管理などで糊口を凌ぐことが出来た。

昭和四十八年オイルショックの最中、会社を設立した。この時期、地質土質コンサルタントの斯業はなく、阪神高速道路の床版クラック調査などで持ちこたえた。

こんなことの繰り返しで、今に到るまで経済的には安堵できた日は一日としてないような気がする。しかし、昭和三十六年から昭和四十六年の自立に到る八年間に、人には使われたいという精神が培われたようである。

自立独歩の道を歩み始めた頃より、北大や恵迪への想いが回歸し、同窓会などいくつかの会合に参加するようになった。また会社の方も社員数三十名となり、業界への仲間入りを果たし、浮きつ戻りつしながら、二十七年を経た。

この間の苦労話は結構ある。同行二人という言葉があるように、この世一人ではやれないことが多々ある。支え支えられるのは、残った者に与えられた特権ではないだろうか。こんなことを回想していると、過ぎこし日に向けて感謝の念が彷彿とする。いま告白するが、何ヶ月も持ち帰らない給料にも不満を言わない妻には感謝している。四人を育て、ローンを返済し、曲

がりなりにもよくやってくれたなと思う。

こんな人生の経緯を経て、関西北大同窓会の事務まで仰せつかうようになってから、十二年にもなる。その会員も三百五十名から八百五十名になった。関西在住の北大OBは四千名強だから、やりようによってはもっと増加するかもしれない。事務局をやっている一番の悲しさは、親しい先輩の死である。言葉を交わした方々の姿が目前にない。人とは何だろう。人生とは何なのだろうか。好きな寮歌を同窓会に登録してくれていたら、せめて霊前に吟唱させてもらいたい。明日は我が身と思いつつ。

低迷期に入り、いわゆる護送船団が瓦解し、二十一世紀に向けて、新視点が期待される終末となった。我が北大はクラックのように、新渡戸のように、内村のように利己に帰することなく、神が望む方にむかつて進むべきでないだろうか。

駄弁を弄した。北海道の片隅から関西を永住の住処と決めた自分に与えられた時間は多くはないが、貧しても鈍せず、先人を榮養にしてわれを律する、朋と固く手を握って歩むの気持ちで行きたいものだ。



「雜感雜語」

谷 口 哲 也

(昭和四十八年入寮)

先日、恵迪同窓会の一先輩からお電話を頂戴し、雑誌『恵迪』に寄稿せよとの仰せでした。何によらず恵迪寮の先輩からのお達しは絶対であると心得る私は、とっさにお請けしてしまいました。内容は自由ということであるが、ややもすると回顧談が多くなるので、この経済不況の中でも元気にやってみようという近況の話がよいとのことでした。受話器を置いた後になつてから、しまったと思いました。後の祭り。なぜなら、この未曾有の大不況の中、元氣なんかありません。とはいえ、しみつたれた不景氣談議でもあるまいと思ひ直し、自分の生業を通じて近頃感じたことや考えたことを、未熟ながらお話ししたいと思います。

私は札幌近郊の北広島市に本社を置く建設会社に勤務しており、住宅建築の部門を担当しています。

三題嚙ではないですが、『北海道』『建設業』『中小企業』となると、当世流行りの三重苦というあんばいです。それでもどっこい生きていますが、担当の住宅建築部門の活動を通じて、今日の諸世相を垣間見ることが出来ます。北海道は、以前から住宅金融公庫融資の利用が全国トップであると同時に、返済事故（つまり返済不能に陥ること）も全国一とのこと。ここで、いわゆる北海道人氣質を感じるのですが、おおらかで小さなことに拘らず楽天的であるが、反面計画性や締まりがなく世間体は無頓着な傾向があるといわれる北海道人の氣質類型のことです。どちらかというと勢いで借金し、やるだけやってみて、駄目ならアジャパーで、周りの世間の目も余り気にならないという流れでしょうか。

こう書いてくると、道産子である私自身が情けなくなつてくるので、プラス思考の部分も挙げてみます。北海道外（懐かしい言葉ですが内地）の大都市圏を除く多くの地域においては、今でも『家』を建てるということは、非常に重い意味合いがあるようです。そこにおいては、家は単に人間が居住する器としての存在ではなく、家父長制的な家制度の象徴として存在しているようです。例えば、男子（特に長男）は、現在は仕事の関係等で他所に居住していたとしても、将来においては、自分の生まれ育った家に住むことを無意識に考えており、そのことが家を継ぐという觀念の現れとして捉えられているようです。従って、老朽化による建て替えは別として、他郷に新たに家を建

てるということは、分家や別家を創設するような思い入れを感じるようです。

さて一方、北海道は明治以降の開拓により入植民が雑居して住み着いたせいか、古来の伝統的な家系の概念が希薄です。つまり、各世代が全て初代であるといわんばかりの在りようを感じます。就職や結婚等を契機として親の家から出れば、後は勤務や通学のアksesで場所を決めて家を建てて暮らし、また育てた子供が独立してしまえば、死に絶えてお仕舞いと相成ります。そして、その子供が家を建て・・・。

言い換えれば、北海道は、各世代ごとに家を新たに建てて下さる傾向の大変に強い地域であり、その為か、住宅建築専門企業つまりハウスメーカーが、他の地域と比べて驚異的に数多く存在しているとのことです。バブル経済崩壊後、住宅建設促進を経済振興の柱としてきた政府にとっては、世代交代に伴ってクラッシュ・アンド・ビルドが頻繁に繰り返される北海道は、顕彰に値する地域ではないかと思えます。ただ反面、世代を越えての資産の蓄積がなされない結果となり、過大な借り入れによる返済事故の頻発や、建築資金の不十分による家自体のグレイドダウン・レベルダウン（つまり安普請住宅の増加）も見逃せない現実です。

北海道人というよりも若い世代（二十代・三十代）の気質を感じさせるエピソードも体験しました。公営アパートにお住まいの若奥様のご依頼で、一戸建て住宅のプランニングとお見積、

そして資金借入返済計画提示と、順調に商談は進みましたが、月々とボーナスの返済額をご覧になった若奥様が突然大きな声で「アレー、これじゃあ毎年春と秋に家族で行っている温泉旅行に行けないじゃない。」とおっしゃいました。

私は、驚くよりも腹が立ってしまい、こう申し上げました。「奥さん、家を持つのであれば、今までの生活の何かを控えなければなりませんよ。これからは、ご自身の家の中に楽しみと幸せを見つけて下さい。それが一生かけて住宅ローンと付き合っていく方法なのです。」と、まるでメーテルリンクの青い鳥張りの迷台詞です。

今日新たに住宅を取得しようとしている若い世代の皆さんは、物心ついてからこの方、親が築き上げてきた豊かな環境を当然のように享受し、自分の人生の出発点においても、親の到達した生活レベルを求めたがるのでしょうか。こういう方の住宅は、結果的になかなか実現しません。また、現在お住まいのアパートのある学区内（特に小学校）に自宅を持ちたいと熱望する若いママさんも急増しています。その理由は、お子さんが友達と離れるのを嫌がるからとのこと。お気持ちは解らないことはないですが、お子さんは小学校に一生通う訳ではありませんよね。思いつくまに、日頃の仕事の中で見聞きしたり考えたりしたことを、だんだんと書き散らしてしまいました。

今まで誰も経験したことのない長期の不況が進行しています。が、先日読んだ新聞の記事に、平成十三年には住宅産業は確実

に上向くと書いてありました。嬉しくなって詳しく読んでみると、その頃には、息の根が止まって現在の住宅建築企業が半減し、その結果、市況が好転すること。何とか生き残りの部分に残って、景気の雪解けを迎えたいと考える今日この頃です。

自作「武蔵の剣」

ススキノ有線曲第3弾

いよいよ硬派登場!!
恵迪同窓生 あらい三郎デビュー

田 中 信 義

(昭和三十二年入寮)

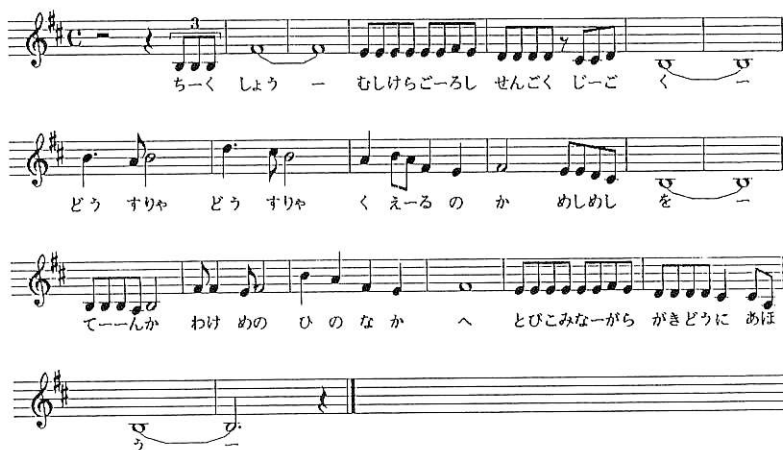
世紀末の凋落、景気低迷の嵐が吹き荒れて久しく、未だ晴れ間が見えない今日この頃である。暗雲を蹴散らすべく作詞したのが「武蔵の剣」である。

「詩」に「曲」をつけてみて、さて「だれ」に歌ってもらおうか―男らしい硬派がいい!? 少しの間迷っていたが、「彼がいよいよ」というワイフのすすめも入れて新井三郎氏に決めた。ススキノで三十余年も「青い城」という酒場をやっている硬派で、恵迪同窓生の多くもよく知っている。小生とは恵迪同期入寮である。向井承子著「北大恵迪寮の男たち」の「夜のオアシスを演出する男」の中で、彼女の来店時にカラオケで「時代遅れ」を歌い、情念のある歌い手と言わしめているのである。

「武蔵の剣」は四百年前の戦国乱世に生きた剣豪宮本武蔵の苦悩の意気地を今の廃れた世相に投影したものである。歌手のあらい三郎は情念の持ち味を生かして思わく通り歌い上げてくれた。「百見は一聞にしかず」の逆説がうれしい。酒の肴にリクエストはいかが!!

三、 武蔵！ 流れ一つの 明日の旅 武蔵！ 流れ一つの 明日の旅 行けるのか 天の剣で 闇を切る どうすりや 浄土へ どうすりや 血の池渡り 万理一空 どうすりや 兵法！ 万理一空 どうすりや	二、 馬鹿野郎！ 死んでしまえば 極楽蜻蛉 どうすりや どうすりや どうすりや 勝てるのか 巖流に どうすりや 一心不乱 剣の技 どうすりや 女心も 斬り捨てて どうすりや 戯け！ 斬り捨てて どうすりや	一、 畜生！ 虫けら殺し 戦国地獄 どうすりや どうすりや どうすりや 食えるのか 飯の飯を 炎の中へ 天下分け目の 炎の中へ 餓鬼道に 飛び込みながら 餓鬼道に 餓鬼道に 阿呆！ 餓鬼道に 餓鬼道に
---	---	---

武 蔵 の 剣



※巖流島決闘

慶長十七年（一六一二）四月十三日

武 蔵（二十九歳）

〔俳句〕

春 しゅん しゅう
愁 しゅう

春

歸りぎわに一寸見えたる籬の室 へや
春を待つベンチの隣に人来る しゅんしゅう
春愁や犬大ければ尚更に

夏

縦縞の細き袋の新茶かな はなごさ
花莫塵を売る名店街の一として
夫婦して床屋家業の熱帯魚

小 沢 久 弥

(昭和十七年入寮)

秋

鶏が静かに歩く ひざり 蛸鳴く
今年又従兄と会へり墓参り
秋山に音なき滝の見えて来し

冬

静かなる十一月の日曜日
人形を椅子に坐らせ毛糸編む
カーテンのレース透かして冬の鳥

論文

資源・エネルギーは幾らでもある

高 木 任 之

(昭和二十六年入寮)

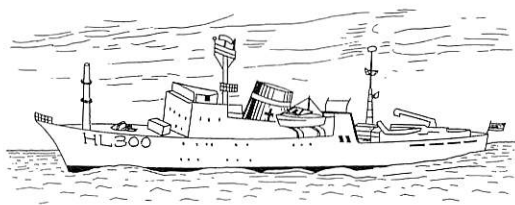
日本は石油資源大国の可能性大

ミセス・ジョーン・キグリー (Mrs. Joan Quigley) といえ
ば、前アメリカ大統領レーガン氏の夫人ナンシーさんのお抱え
占い師として知られている。



そのミセス・キグリー
ーが言うことには、

「一九九〇年代に日本近
海の海底資源が発見さ
れる可能性がある」と
のことだ。すでに今年
は一九九九年、この予
言もはずれたかに見え
る。しかし、それは国



(チャレンジャー号)

民に知らされていない
だけのことで、確
かに日本近海（日本
海）において、大石
油田が発見されて
いるとのことだ。（す
でに昭和五十八年十
一月に週刊現代がそ
れを伝えている）日
本海で油田を掘り当
てたのは、アメリカ
の地質調査船チャレ
ンジャー号である。

一九七七年に日本

海に入り、三、四本の試錐を行つたが、すぐに止めてしまった。石油が出なかつた訳ではない。余りにも多量の天然ガスが噴出したので、このまま続けると日本海が汚染するおそれが大きいので急いで中止してしまつたのである。同船に乗り合わせた日本人スタッフもそれを目撃している。

その頃からチャレンジャー号が石油を掘り当てたとのウワサが拡がり始めた。しかし、アメリカはそれを強く否定した。これが他国に知れると、日本海沿岸の日韓四カ国で資源の奪い合いとなるからであるという。それ以上に、日本がこれを独占し、資源大国となることをアメリカが恐れたからであらう。

現に海底油田の開発能力を持っているのは、前記四カ国のうち日本だけであらう。しかも、その埋蔵量は中近東諸国なみとさえ言われている。秋田・新潟での石油や天然ガスは、大油田の縁を囀っているに過ぎないのだ。

石油ショックとは何だつたのか

昭和四十年代以降、二度にわたつて我々は石油ショックを経験した。石油（化石燃料）は有限の資源であるという大義名分によつて、当時一バーレル（ドラム缶一本）一ドル台だった原油が、一挙に三十バーレルにも値上がりし、日本経済は根本から揺り動かされたのである。特に石油を全面的に輸入に頼っている日独両国の経済に与えるショックは大きかつた。

しかし、これは世界の石油を一手に牛耳っている勢力の芝居ではなかつたのか。言い方を換えれば国際的なカルテルといつても良い。本来であれば自由主義経済のもとでは、需給バランスによつて取引価格は決定されるべきもので、供給がタイトになれば、自然に価格は上昇するものである。それも拘らず人為的に急騰したのは不自然というべきであらう。

事実、その後も産油国の増産により市況は低迷気味であり、OPECでは産油国の減産を申し合わせたりして価格の維持を図っている状況である。産油国のアメリカが国内での石油採掘を凍結して輸入国に転じたのも、資源保護のためと言われているがひよつとすると石油価格維持策の一つかも知れないのである。

石油「有機生成説」は正しいのか

石油資源を化石燃料と称し、有限説を展開する根拠の一つとして、石油有機生成説があり、何故かこの説は世界に拡がっている。しかし、本当に石油は石炭と同様に過去の生物（有機物）の化石がエネルギーとして蓄積しているものであらうか。

確かに石炭の中には植物化石の含まれているものもあり、石炭の成因としては有機生成説は肯くことができる。しかし、何故、石油までそれを拡大できるのであらうか。石炭の一部が石油化している現場（地層）が世界で一箇所でも発見されたとで

もいふのであろうか。それとも、生物化石は石炭を経由せず、いきなり石油となり得るものなのであろうか。

このような疑問のある有機生成説に代って、近頃は無機生成説が有力となり始めた。生物化石の燃料化ではなく、地中のマグマが間断なく石油を生成しているというのである。もしも、これが正しければ、資源は有限どころか無限に地中で生産されていることになってしまう。

確かに石炭も石油も炭化水素系の燃料であることには違いないが、石炭は化学反応を生じやすい「不飽和炭化水素」であるのに対し、石油は安定した「飽和炭化水素」であることが基本的な相違点である。これは生成のプロセスが異なることを示すものとして注目される。

大体、資源埋蔵量の統計などは、既に知りつくしている鉱脈や油田の統計にすぎない。新規に油田を開発しようとする人達は、そんな過去の学説や統計にとらわれてはいない。新しく油田開発を志している人達が注目しているのは、石油は宇宙からの巨大隕石によってもたらされたとする新説である。

石炭が比較的平坦な地層に堆積しているのに対して、石油は褶曲のひどい背斜構造に蓄積されているのは、地球上の大変動期に石油が生成され蓄積されたと考えられるからである。これは、地球上の大油田の地形を調査してみれば直ぐ判ることである。

その点、日本海の中央部分に存在する大和堆や北海道沖の武

蔵堆は、探し求めている巨大隕石の衝突地形として世界有数のものであるという。何しろ、チャレンジャー号が掘り当てた直後「仮に、炭化水素（石油・天然ガス）が湧出しても、直ちに



回収し、噴出を閉鎖することができると設備を持った船が供用されるまでの間、日本海の深海掘削を認めない」と国際会議で決定したのは何を意味しているのであろうか。

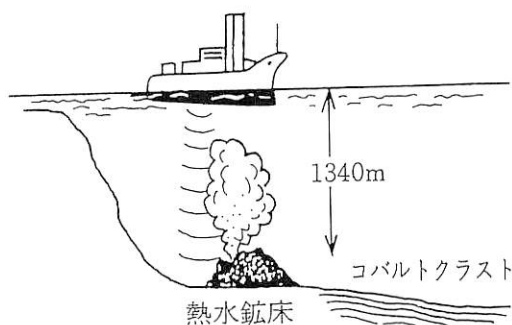
熱水鉱床は海底の大金山

石油だけではない。日本近海には熱水鉱床と呼ばれるものが山ほどある。一九八八年九月、しんかい二〇〇〇が沖縄の近くの海底で発見した熱水鉱床の鉱石からは、一トン当たり金十四グラム、銀一キログラムが含まれていた。これではまるで金銀の塊のようなものである。国内有数の最高品位の鉱山でもこんなにすばらしい含有量のものはいない。普通は銀ならば一トン中、せいぜい十〜二十グラムでも高品位鉱といわれるのに、何と一キログラムも含まれているという。正に日本近海は宝の山（正しくは「宝の海」）なのである。地上でも素晴らしい金鉱が発見されている。金属鉱業事業団によると青森県下北半島にある恐山付近の金鉱脈には、金鉱石一トンあたり六千五百グラムの金が含まれていた。普通はトン当たり五グラムが採算ベースであると聞く。従って、その千倍である。これは超優良金脈なのである。日本は、やはり黄金の国ジパングだったのだ。

地球全体を構成する元素のうち、金は十億分の二という含有量の少なさである。そこで金が濃縮されている場所（金鉱床）を探し当てなければならない。

そのような金の濃縮が起こった時期は、地球五十六億年の歴史の中で二度しかない。一つは三十億年前の地層である。その頃の造山運動で各地に金鉱脈が形成された。大陸で産出する金

はその鉱床が侵食され、砂金となって流れ出して堆積したものが大部分である。日本でも佐渡金山などは、こちらの方に属するらしい。もつとも、このような探鉱法による金山は、戦時中にすべて掘りつくしてしまっている。



（熱水鉱床は、熱水（摂氏200度）に溶けて地底から噴出した重金屬が、長い年月沈殿した大団塊である）

もう一つの高濃縮期は、ぐつと新しくここ数千万年間に形成された「熱水金鉱床」である。地下に浸透した地下水がマグマにより加熱され高温水となって再び上昇する。その際に金の成分を融かし込んでくる。

それが五十万年もの年月にわたり噴出すると、僅かに含まれている金も立派な鉱床に育つ。このようにして、近頃日本には新しい探査法による金山の開発が相

次いでいる。そのコツは（これは余り言いふらして欲しくないが）日本の地形では「活火山の西方約三十キロメートル近くの地点」から金鉱床が発見される可能性が大きいということだ。火山国日本は、その点いたる所に金が埋まっていると言える。

九州の菱刈金山の発見もこの新探査法で発見している。この菱刈でも含有量が一トン当り平均八十グラムというので世界の脅威となっている。ここでの金の埋蔵量は二百五十―三百トンと言われている。佐渡金山の産出量が八十四トンであったことから、その雄大さがうかがえる。昔から薩摩の地下には金の延べ板が敷き詰められているとのウワサがあったが、今やこれは現実のものとなりつつある。

金価格の低迷している昨今、金の資産性について疑問を持つ人もあろうが、現にアメリカは赤字をかかえつつも、その保有する金塊八千四百七十七トンを手放そうとしていない。もしも、世界経済が恐慌にでも陥ったとしたならば、金価格は急騰するのではないかと、ささやかれている。

金の卵は生体内原子核融合の結果か

かつてアメリカのテキサス州で金の卵を産んだガチョウがいた。これは別に珍しいことではなく、各地で良くあることだ。表面的には変わるところはないが、殻の下に厚さ二ミリ程度の

金の膜が入っていたのだ。

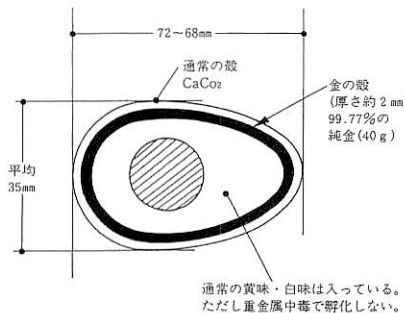
こんな卵を産むガチョウを増産すれば、金鉱脈を探すよりも、余程手つとり早い。大金持ちになることは疑いが無い。しかし、この卵は孵化することはなかった。重金属中毒に冒されていたからである。

アメリカ農務省もウワサが拡がるにつけ放置できなくなり調査に乗り出した。卵の中身は塩化金イオンの集積が著しいことが判明した。これが中毒の原因であることも、突きとめられた。



（右・テキサス州のガチョウが金の卵を生んだ）

（下・金の卵の断面図）



しかし金の出所は判明しなかった。農場の中に金が存在し、それをガチヨウが口にしたのではないかと調査が進められた。農場内の土のサンプルが採取され、微量分析を行ってみたが、結果は期待に反したものだ。農場内で発見された金は、奥さんの指にはめられていた指輪のみであった。

そこは、さすが科学の国と呼ばれるアメリカのことである。生理学者を巻きこんで血液分析が進められた。その結果、奇妙な事実を発見した。

血液中のヘモグロビンが変質していたのである。それはヘモグロビン分子の中央にある鉄原子(Fe)が金の原子(Au)に置換されていた。そこで、それはオーレモグロビンと名付けられた。黄味の中にも僅かに含まれていた鉄分と金分の謎も解けた。

これは、昔からいう錬金術が、ガチヨウの肝臓の中で行われているのと変わりが無い。通常の科学反応では、鉄の原子が金の原子に変化することはない。もしも原子量の小さい原子が、原子量の大きい原子へと転換するのであれば、それは核融合反応しかあり得ない。とすればガチヨウの体内では「原子核融合反応」が生じていたことになる。これではガチヨウの体内に原子炉を持っていることになる。

これからは「原子生物学」の時代

北大工学部(原子工学科・水野忠彦工学博士)でも、常温核融合と思われる実験に成功したと報道されたが、その追試が必ずしも思わしくないと聞いている。それは無理もないことで、これまでの科学が無機的装置で実験を続けることを原則としているからで、そこから脱却しないと、大きな展開はあり得ないと思う。

近頃のDNA操作による遺伝子工学も、生命体をベースとするから進展するのであつて、あれを無機物質から始めようとするれば、とてもあのような成果を得ることは困難であろう。

最初から生体内での原子変換のメカニズムを解明しようとしても、それは簡単ではないと思うが、とにかく現実には生体内では、原子変換が行われているとの前提に立つて議論を進めるのが良いと思っている。特に微生物を媒体とす手法は成功率が高いのではないかと考えている。

いきなり結論めいたことを先に書いたので、若干面食らわれたかと思うので話を戻すことにする。

その卵というのは殻が炭酸カルシウムで形成されているという。近代の科学は、そういうことを分析するには手慣れている。しかし、その成分であるカルシウムは生体内で、どのようにして卵の殻となり得るのか。それに対して現在の科学はまともな説明ができないでいる。

ニワトリの内臓すなわちトリモツでは、卵のもととなる卵黄

の粒が見受けられるが、それが順次育って行き、やがて卵として産み落されるまでの間に、どのようにしてカルシウムの殻が均等に設けられるのであろうか。

それは産み落す瞬間に、周囲からカルシウムを吹き付けているようにも思えるのだが、どこを調べてみても卵管にそのような組織は存在しない。むしろ産み落とす直前に周囲の原子を変換してカルシウムにしていると考えた方が科学的なのではないか。それとも現代科学は何か別な説明を用意しているのであろうか。少なくとも筆者は寡聞にしてそれを知らない。

むつかしく考えることはない。自然界（特に生命体の体内）においては、自由自在に原子変換が行われていると考えた方が気楽なのだ。そうすれば卵の殻の成因一つでそんなに悩まなくても済むからだ。

ガチョウの体内で生じている原子核反応

金の卵も生体内原子核反応を肯定すれば、次のように説明がつく。先程のヘモグロビン中の鉄がどうして金となるのか。また、少なくとも鉄が金に変換するには、吸熱反応が生じるはずであり、周囲から莫大なエネルギーの供給がなければ、核融合反応が生じる訳がない。

ところが、その説明は別にむつかしいことではない。酸素が



(15世紀の錬金術、金は作れなかった)

なるのである。すなわち、空気中の酸素を吸収して一たんは鉄とし、さらにその鉄を金へと原子核反応を進めれば、その謎は解けるのである。金の卵を形成する金の原料は何と空気中の酸素だったのである。このようなカラクリがスナナリと理解できるような柔軟な思考力がないと、二十一世紀をリードする学問には不向きかも知れないのだ。

もう少し追求したい人々のために解説しておく、科学者はガチョウから採取した血液を、原子力研究所へ送って、同位元素分析まで行っている。その結果は、考えられていたように Fe^{56} 、 O^{16} はともに正常値よりも遥かに減少していた。(それは

鉄に変換する場合
は、それが発熱反応
となり、そのエネルギー量は何と、鉄から金への転換の吸熱エネルギー量と等しいからだ。従って、
酸素↓鉄と、鉄↓金
という二つの核反応
が同時に進行している
とすれば、熱エネルギーはプラス・マイナス、トントンと

金の原子に化けたという証拠である。)

そこで科学者は、ガチヨウに O_{32} を多量に供給してみた。すなわち O_{32} が多量に含まれている水槽の中でガチヨウを飼育してみることにしたのである。その結果、ガチヨウの産む卵に含まれる金は一日当り四十六グラムに急増したのであった。

もうこうなると、ガチヨウの体内で原子核反応が生じていることは疑う余地がなかった。近頃でいう低温核融合は、生体内ではイトも簡単に行われていたのである。

ルイ・ケルブランはいう。「中世のアルケミスト (Alchemist) 錬金術師」が原子転換によって金を造り出そうとして失敗を重ねたのは、実験室内の無機的な装置で金ができると信じたからだ。彼等は原子転換は生体内でしか起こらないことを知らなかったのだ」と。

石油の成因も原子転換で説明できる

ついでに、先に述べた石油の無機生成説についても説明しておこう。何故、地中のマグマから石油(炭化水素)が生成されると考えられるのであろうか。それも、高压高温というマグマの環境下では原子変換が生じやすいのである。

すなわち、マグマの主成分は珪素 Si である。それは結晶片岩が融けて形成されている。その原子量が二十八であることに注目して欲しい。これが、炭素原子と酸素原子に(原子転換によ

って)分解されると考えれば良い。炭素原子は十二、酸素の原子量は十六であるから足すと二十八となる。正にピッタリなのだ。



これは小学生でも理解できそうなことなのだ。地中で、酸素や炭素を供給し、石油を作り出していたのは、他ならぬ珪素(シリコン)だったのだ。何のことはない石コロから油が取れていたのだ。従って「石油」いうのかも知れない。ま、話のオチはそんなところだ。

蛇足かも知れぬが、硫黄分の多い石油がある。何故、石油の中に硫黄が含まれているのか。温泉にも硫黄分を多く含むもの(例えば草津温泉など)がある。それは地中の硫黄分が溶けているからだと思う人もいる。しかし、石油層や温泉、火山などは硫黄分の多い地域に存在するのであろうか。それは先程述べたように、地中のマグマの珪素が、酸素と炭素に分解される際に、安定的な炭素と異なり、酸素の方は遊離しやすい傾向にある。そこでこの酸素が行き場を失ってしまうことになる。その結果、再び原子変換が生じて、二つの酸素原子が融合して、一つの硫黄原子となる。原子量十六の酸素が二つで、原子量三十二の硫黄となる。キチンと計算があうではないか。



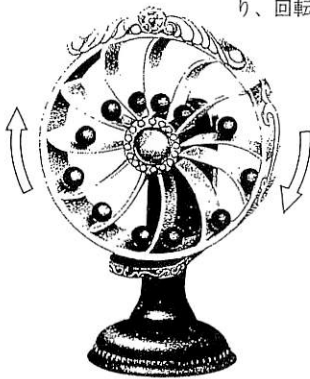
硫黄分の多い石油はこのようなして生成される。

筆者の言わんとしているところを、素直に理解していただければ、二十一世紀の資源問題の解決は比較的容易ではないかと、一転して楽天的な気分になっていただけると信じている。

永久運動はあり得るのか

エネルギーの問題になると、直ぐに永久運動を思い浮かべる人もあろう。左右のバランスがいつも同じ方向に傾くような装置を作り出せば、そのアンバランスを正すために、永久に回転し続けるというのである。さらにこれに水中の浮力を加えた

右半分では鉛玉が外側へ転がり、左半分では鉛玉が内側へ転がるため、アンバランスとなり、回転し続ける。



(ウースターの考案した鉛玉車)

り、磁力を組み合わせたりする装置も考えられているが、同巧異曲である。

(上図)の鉛玉車(ウースター考案)も、その例の一つであるが、結論から言うと、どれもこれも使いものにならない。一見、なるほどと思わせる処はあるが、実際に作ってみると全然動かない。永久運動とは理論先行の夢であって、現実には期待通りに回転し続けるものではない。

大体、地球の重力を利用して永久に動き続けるということは、降下によって失われるポテンシャルエネルギーを、再び同じ位置に引上げる訳だから、それらのエネルギーは、プラス・マイナスがびつたりと釣り合っている訳で、回転のエネルギーはどこからも出て来ないのである。

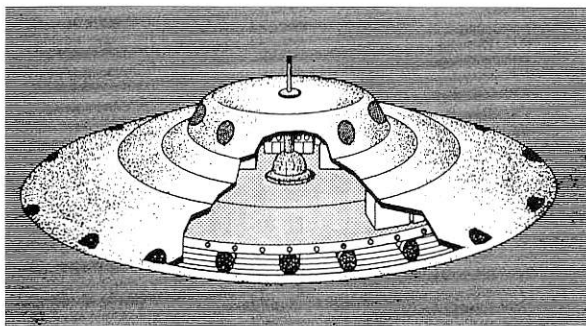
UFO飛行の原理から重力の謎を解く

ところが、このポテンシャルエネルギーの原理もクソ食らえで自由自在に空間を飛行しているのがUFOである。UFOそのものを否定する人もいるが、UFOとは文字通り Unidentified Flying Objects であって、宇宙人が乗っているとかないとかを主張しようとしているのではない。

要するにUFOは、これまでの経験則からする飛行とは異なる動きをするといわれているので、そんなことが可能かどうか

を考えてみるのも無駄ではない。

そこでモノの本を調べてみると別図のようにUFOには、中央部に反物質リアクターなる装置が設けられているとのことだ。言うなれば反重力装置なのだ。この装置によりUFOの上方空間に引力場が、下方に反力場が生じる。UFOは位置的に



(頂部に突出する細い柱の下端にある小ドーム型の装置が、
UFOを動かす反物質リアクターといわれている)

その中間部にあつて、地球の重力から脱出することができの
で、あのように自由自在に飛行できると
いうのである。

読者の中には「エッそんなことができるのか」と素朴な疑問を呈される向きもあると思うが、現にアメリカのステルスなどは、沖縄基地から千歳上空まで三分間でやってくる、とさえ言われているのだ。これはUFO

アメリカ空軍が公開しているステルスは、ジェットバージョンと呼ばれる公開専用機であつて、ジェットエンジンが搭載されている。本物のステルスとは形が似ているが全くの別物である。

さて、話は脱線したが、仮りに地球の中心部に達する穴が掘れたとしても、地球の中心には何ら引力の原因（引力を惹き起こす装置）となるものは発見できない。それは石コロを割ってみても、その中心に地球に引っ張られる何ものも存在しないことと同じである。大体、ビックバン以降、この宇宙は膨張に膨張を重ねているというのだから、お互いに排斥しあつて離れて行くと考えるのが素直であるのに、全く相反する考え方（引力によつて引きあつている）を前提とした理論など信用できるものではない。

宇宙には萬有引力でなく、萬有斥力があるのみである。水中にピンポン玉を入れれば、水圧がかかるのと同様に、宇宙空間に地球のような物質が割り込むから、周辺から歪を正すような圧力を受けているに過ぎない。それを地球の中心が引っばつてい、と勘違いしているだけのことなのだ。

(注) 地球が回転しているのだと理解できても、なお、朝日が昇り、夕日が沈むと思つて生活することは、別に差支えないが、学問的には自転を前提としなければ発展はあり得ない。

同様に、日常生活では引力によつてモノが落ちると理解するのは自由であるが、それにとらわれてしまうと学問的な発展は

望めない。エネルギーは消費すれば、エンタルピーは増加して元へは戻らないはずなのに、地球の引力は誕生以来、数十億年を経て一向に衰えることを知らぬのは何よりも、引力説を否定するものである。この引力なるものは、地球が存在しなくなるまで（空間の歪を創り出している以上）決して弱めることはあり得ないのである。

従って、この永久的な地球の重力を上手に活用することができればエネルギー問題に役立てることができる。そのヒントは引力の原因となっている空間の歪を逆転させて無重力空間を造り出すことである。UFOもこの原理によって飛行している。

永久磁石も謎のエネルギーだ

地球の重力と共に、もう一つ不思議なエネルギーがある。それは永久磁石である。電磁石であれば強力な磁力を発生させるのに相應の電力が必要となる。すなわち相應のエネルギーを消費しているのである。ところが、永久磁石はどこからもエネルギーを補給せずに、磁力を発生させて仕事をしている。（表面的にはそのように見えるだけで実は地球の自転による内部摩擦から発生する磁力線からエネルギーの補給を受けていると思われる。）

日本はこの永久磁石の分野では世界のトップである。東北大学の本多光太郎博士（一九六三年文化勲章受章）以来、常に世

界の先端を歩んでいる。磁石は金属という常識を破って粉末冶金による焼結金属という焼き物でフェライトという磁石を作ってしまうなど、世界の意表を突く方法で次々と新しい磁石を開発している。近頃はボンド磁石といってゴムやプラスチックに磁粉末を練り込んでしまう方法を開発した。現在、冷蔵庫の扉が密閉できるのも、扉に設けてあるゴム部分が磁石となっていて閉めたときに本体と密着するからである。



（冷蔵庫の扉はボンド磁石で密閉）

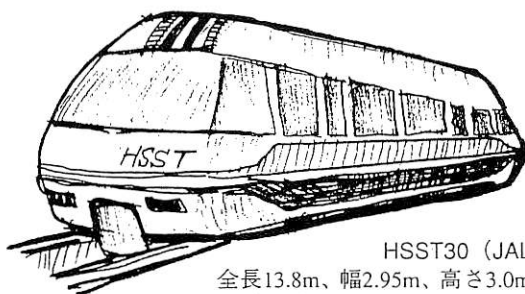
本人の発明品なのだ。

このような日本人の磁石開発能力に世界は驚嘆した。アイゼンハワー大統領は一九五七年、当時のソ連がアメリカに先駆けてスプートニク衛星を打ち上げたことに関連して演説した際、

音や光を記録するテープ、キャッシュカード、自動改札機、コピー機など、近頃の情報化社会の基礎は、すべて磁石にあり、しかも日本人の発明によるものなのだ。フロップディー

スクも、光通信も日

わざわざ日本の磁石開発の優秀さを称賛して、アメリカの科学者も「日本のように「頑張れ」と檄をとばしている。



HSST30 (JAL)
全長13.8m、幅2.95m、高さ3.0m、
吸引型浮上リニアモーターカー

(浮上型リニア・モーターカー)

その磁石王国日本が近頃また大ヒットを飛ばした。住友特殊金属（住友金属工業の子会社）が開発したネオジム磁石は世界の水準を大幅に抜く一万一千エルステッド（普通の磁石は百エルステッド程度）という途方もない保持力を有している。これはネオジム・鉄・ホウ素の合金で世界特許を取得し、当分の間（少なくとも十年間は）市場を独占することとなる。実はアメリカも同じ組成の磁石を研究していたのだが、特許申請が日本よりも十三日遅れたため、結局、

日本に独占されてしまったのだ。かくて日本は世界の四十二％の磁石を生産し世界のトップの地位を保っている。二位はアメリカ、ヨーロッパ諸国は東になっても日本の半分にも達しない。

超電導を利用した浮上型リニアモーターカーでも日本の独走は続く。さらにこの強力な磁石を用いて光を屈折させリング状にして強い光とする射光施設（Shingō）も播磨科学公園都市に完成した。これは電子顕微鏡で倍率を高くして分子構造まで調べるには、普通の光源では暗くて役に立たないことから、強力な光を重ね合わせて人工光源（太陽の明るさの一万倍）とするものである。

すでにバクテリアのべん毛の分子構造のような微小なものから、地球内部の岩石構造の観察に到るまで、これまでの装置では考えられなかった分野まで、わが国の研究範囲は拡がり世界の研究者の羨望の的となっている。

さらに特筆すべきは、これらの強力磁石であれ瞬時に磁力を消失させたり、元へ戻す技術が開発されたことである。その技術を活用すれば、現在の電気モーターを同様の回転力を生み出すことも夢ではなく、それを応用すれば磁力発電も可能になるということである。すなわち、永久磁石の磁力が電力に化けるのである。そうなればもう世界のエネルギー問題は一挙に吹っ飛んでしまうのである。

【紀行】

シルクロード一万五千キロ、五十五日間バスの旅

小林 正 人

(昭和二十八年入寮)

一九九六年九月から十一月にかけてシルクロードを西安からイスタンブールまで、全行程一万五千キロをバスで旅をしてきました。ここでは印象的だったことのほんの一部だけを紹介させて頂きます。

最初に、通過した国々での滞在した日数と宿泊地名だけを列記します。

中国 二十日間

上海、西安、威陽、平涼、蘭州、武威、酒泉、敦煌、ハミ、

トルファン、コルラ、クチャ、アクス、カシユガル

キルギスタン 三日間 ナリン、イシク・クル湖、ビシユケク

カザフスタン 一日間 ジャンブール

ウズベキスタン 五日間

タシユケント、サマルカンド、ブハラ

トルクメニスタン 二日間 マリ

イラン 十日間 マッシユハッド、ミンダシャット、ナウシ

ヤール、テヘラン、シラーズ、サンジャン、タブリーズ

トルコ 十三日間

ドウバヤツジド、エルズルム、エルリンジャン、シバス、

カッパドキア、コンヤ、バムツカレ、エフエス、

イズミール、ベルガモン、ブルサ、イスタンブール

ギリシャ 一日間 (サマス島)



(西安の西の城門で出発式。)

後方のバスは古いとはバス)

の様子を彷彿とさせるものあり、逆に心に描き、夢にまで見てきたものとは全く異なる現実とが交錯し、複雑な印象を受けま

同行者は旅行会社の企画に参加した十七名。男性九名、女性八名、内夫婦三組み。最高七十二歳、最低四十三歳、平均六十三歳、旅なれていて、他人を思いやる心豊かな楽しい仲間たちでした。

数千年の昔からユーラシア大陸を東西につなぐ文物の交易路があったという。1月の砂漠をはるばると、旅のラクダはゆきました…。

憧れて書物を漁り、さらに憧憬を強め、はるばる訪ねて来たシルクロードは当時

した。

かつて栄えたシルクロードの史跡や遺跡などについては別の機会に詳しく記させて頂くこととして、今回は旧シルクロードの現況を思いつくままに書く事にします。

中国で見たり聞いたり感じたこと

まずびつくりしたのが猛烈な勢いで進められている列島改造工事、歴史的な建造物や街並みはいとも簡単に破壊され、広い道路と高いビルの建設ラッシュが進行中です。何年か前の日本の姿とそっくり。国有地の住民は一片の通告だけで追い払われ、国有企業の民営化で失業者は路上にあふれ、貧富の差だけが拡大してゆくありさまは凄まじいものでした。

もうひとつ驚いたのが観光。秦の始皇帝陵などでは、沢山の国からの観光客にガイドが大きな声で説明をしています。英語、ドイツ語、フランス語からイタリア、スペインまで様々な言語が飛びかっています。日本にも観光名所が多いですが、これほど国際色豊かな状況はここが始めてで、以後、延々と続くのでした。

トイレ事情も日本や欧米各国の清潔さとは桁外れにひどい。二本橋の間に窪みがあるから用を足るのであって、そこが先人の排泄物で盛り上がり上がっていたら、あなたならどうしますか。別の場所を探すなんてことは不可能。そこしかないのです。期

待していた中華料理が腹に合わず、毎日下痢に悩まされた私は、このトイレにはいささか参りました。

出発前に、中瀬篤信ドクター（昭和二十六年入寮）が、特別に持たせてくれた特効薬がなかったらどうなっていたことでしょう。

大きな都会では漢族が多く、幅をきかせていて、その尊大な素振りにはどうしても親しめませんでした。西へ進み漢族以外の中国人が多くなると様相は一変します。素晴らしい笑顔で親切に私たちを迎えてくれるようになります。お互いの笑顔だけでお互いを理解しあえて、一緒に写真を撮ったり、乾杯したり、ときにはハミングでの合唱ならぬ雑唱をしたり、心和む楽しい思いでがいっぱいです。

黄土高原で、台地に掘った横穴式住居やオトンを訪ねた時の老婦人の、喪中とは思えぬ明るい笑顔での歓迎にはびっくりしました。日本の標準的な家屋と比較して、ヤオトンでの生活が貧しいと言いつつ切れないと思います。あれだけ無心の笑顔で人を迎えることができる心豊かな日本人がどのくらいいるでしょう。

ゴビ砂漠からタクラマカン砂漠へと、天山山脈の南側の天山南路をたどるわけですが、風に舞うサラサラの砂を想像し、砂漠の山の端に昇る美しい満月とラクダのシルエットを夢想していたのですが、それは敦煌の近くで出会っただけ、あとの砂漠は石まじりの荒れ地の連続といった感じ。この荒れ地のど真ん

中を、アスファルトの道路がほぼ直線的に果てしなく続きます。オアシスから次のオアシスまで時々バスが停車します。トイレ休憩です。遮るもののない荒野の中で、あるのはバスの左側が男性、右側が女性という決まりだけです。右側から歓声が上がります。「都会のトイレに比べて何と素晴らしいトイレでしょう」「一度味わいたかったこの青空トイレの解放感」というわけです。私も同感でした。

ほんもののほかに、観光用の施設が作られているのも驚きです。西安のシルクロード出発地なところ「糸路の源」で、旅行社が出発式をしてくれたのですが、これは明時代につくられたもので、唐代の本物の出発点は別のところにあつたりして、大変な興冷めでした。

爆発的な人口増加と食料生産能力の相対的な不足も深刻な問題だと思いました。少子（二人子）政策で抑制はしているものの、非公然で生まれ育つ戸籍のない子供の数だけで一億人を超えるというのです。食料生産は地域を決めての小種大量生産政策で、効率の悪さと土地の疲弊で必要量を確保できないでいて、今後この傾向は一層厳しくなると予想されていました。

中国では文字どおり「耕して天に至る」山の頂上まで段々畑が作られていて、尚、食料がたりないという。日本は折角の農地を休耕地として遊ばせ、食料をアメリカから輸入させられて、食料の自給率は世界の第百十位の二十六%だという。国の政策の間違いが、その国の農民や国民の生活に深刻な影響を与える

例として考えさせられてしまいました。

中央アジア（旧ソ連領）で見たり聞いたり感じたこと

西安から二十日間走ってくれた中国側のバス（といっても実は古いハトバスを日本が寄贈したもの）と別れて、国境間の緩衝地帯だけを走るバスに乗り換えます。

カラコルム山脈の北側のトルガルト峠を超えて、キルギスタンに入ります。飛行機での出入国手続きは、精々待たされても三十分くらいですが、陸路のここではなんと五時間を要しました。バスポートを提示すること三回。麻薬対策と軍事上の理由があつてのことだそうです、なにをするにも長蛇の列です。広大な大陸を旅するのに、五時間位でじたばたしてもナンセンスなのでしょう。文句を言っているのは私たち日本人グループだけです。おかげで沢山の外国人と雑談することができました。

二人のノルウエーの青年はどこかいザックを背負っていて、これから歩いてイスタンブールまでゆくのだそうです。シルクロードの旅のスタイルもどんどん変化しているというか、バリエーションが多いのでしょうか。ドイツ人はベンツのバスの後ろに寝台車を連結して往復しています。各地で一部屋だけホテルを借りて、全員が交代で入浴だけするという徹底振りでした。自転車に荷を積み、テント泊をしながら旅するグルー

プもいました。何年かかけてリレーで全コースを結ぼうと言うのです。

逆に昔のままラクダを使つてのグループもいます。彼等は最新の情報機器も携帯していて、インターネットで世界中と通信をしながらの旅です。私も出発前に彼等と交信して、予定を聞いていたので、このキルギスタンでの出会いを期待していたのですが、彼等はハイウエーとは距離を置いた、砂漠の中の道なき道を進んでいたことを後で知り残念でした。

グループでの通過はこれでもスムーズなのだそうです。個人で、特に自家用車での場合は、通関の度に課税が問題になりクルマでの旅はこれからの課題のようでした。

国境を越える砂漠地帯から草原（ステップ）地帯へ入ると風景が一変します。十月中旬だったため牧草は黄色くなりかけていましたが、緑が人々に与える安らぎの効力の大きさに感動をしました。天山山脈から水を余計に授かるため、この背丈の低い牧草が三千五百メートルの高地でも生育し、羊の放牧が行なわれています。冬場はだんだん高度を下げて放牧をするので、ところどころに仮泊用の小屋が建っていて、子どもたちが羊と戯れているのどかな風情を堪能しました。

砂漠を流れる川は全て砂漠に消え、海まで流れる川はないのだそうです。地図を見るとかなりの大きな川が途中で消えているのが良く判ります。反対に流れ込む川の数が五十を越えるが、流出する川はひとつもないというイシク・クル湖（琵琶湖の面

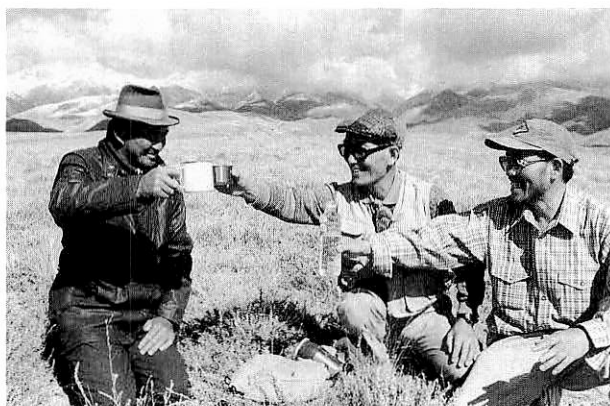
積の約九倍の大きさ)湖畔で休日をとりました。

天山山脈とアルトウ山脈に囲まれたかたちのこの湖の面積

は、ここ数年でどんどん大きくなっています。地球温暖化のひとつの現象だと言われています。湖岸が五百メートルも広がったところもあるようで、ホテルの湖畔には堤防が張めぐらされていました。残念なことに、湖面の拡大で湖畔にあった遺跡などは湖の底になっていて見ることはできませんでした。

湖の全貌を見たくてアルトウ山脈に数名で登ってみました。勿論上部はアイゼンとピッケルの世界ですの上まではゆけませんでした。途中からの美しく壮大な湖眺めは息を飲む素晴らしい絶景でした。

イシク・クル湖のアルトウ山脈の前山で、犬を連れた騎乗のキルギス人と偶然に出会い、言葉がほとんど全く通じないのになぜか意思が通じてしまつて、私たちの持参のワインを抜いて山上の酒盛りをしたのも、とても印象的でした。湖での水泳、このアルトウの斜面でのスキーは最高だから、雪の季節にまた出かけてくるようにと、熱心な身振り手振りで話してくれました。



(キリギスタンと楽しく乾杯)

この山脈の北側の斜面には、旧ソ連のアルペンスキーのナショナルチームの練習バーンがあるので、折をみてスキーをかついで

出かけてみたいと思っています。

旧ソ連領だった中央アジアのいわゆるスタンは、ながい年月をかけて自然発生的にできた中国の街や村とは異なり、比較的新しい時期に中央政府の方針で計画的につくられた街が多く、市電やトロリーバス、に加えて地下鉄の走っている都市もあります。トイレ事情は中国よりかなり良くなっています、安心出来ます。食事も私にとっては中国より腹にあつたようで、楽しくおいしく頂くことができました。

独立後も残留したロシア人は多く、他のスタン人よりは実入りの良い仕事についているようでした。旧支配者層が、相変わらず支配的な地位を獲得し続けていることがとても気掛かりです。私は、戦後五十年以上も日本に駐在続けるアメリカ軍隊を連想してしまいました。

貧富の差はここでも拡大の一途をたどっています。ロシア人が支配的でウズベキスタン、カザフスタン人などは概して日本でいう三K職場で、特に、強制移住させられ

帰ることも出来ず定住した朝鮮人が最下層の仕事を支えていたように思います。

紀元前二世紀のころからシルクロードを縦横に往来し、交易による巨富を築いたソグド人の故郷、サマルカンドのアフラシアーブの丘は二千年前の人類の足跡を彷彿とさせ、近くの博物館で、美しいロシア人女性が流暢な英語で説明するのも違和感もなく受け入れることができました。

が、その帰途日本人を待ち構えていて、私を買ってくれと執拗に迫る、十歳程度の裸足の美少女の声に慄然とし、その澄んだ眼がいつまでもバスを追いかけてくるような錯覚を植え付けられてしまいました。家族の生計のためにやむなく街頭に立っているのだらうけれど、ガイドのロシア人の娘はどんな生活をしているのだらうと思うと、あたりどころのない激しい怒りを覚え、しばらくのあいだ忘れることはありませんでした。

イランで見たり聞いたり感じたこと

イランに入国し、サラクス峠を越えてマッシュハードからミндаシャットへ向かう山道で立ち寄った、炊事遠足場のような休憩所で出会ったイラン人の少年達が、知っている全体的なと思われる英語の単語を並べて、自分達について説明し、私たちの名前を聞き、日本が何処にあるのかなど一生懸命に話しかけてきた姿もとても印象的でした。日本の少年達はこんなときにどう

するのだろうか、考えてしまった記憶が鮮明に残っています。

イランでの政教一致政策、禁酒とチャドルの強制も頂けないことでした。男性の本性はさもしいものだから、女性のからだを見ると心が動揺するといけないので、女性は顔以外の素肌を見せてはいけない、まして酒でも飲もうものならなにをしでかすか判らないから、酒は一切飲んではならないという教えであり政策なのでした。我々旅行者として例外ではなく、十日間の禁酒をよぎなくされたのでした。われわれもさもしい生き物として扱われたのです。

でもピンクのチャドルを着た女性、ミニ・スカートを誇らしげにはいていた女性、黒いチャドルをまといながらも勇ましく往来を闊歩する女性たちのなかに、政治と生活を変えて前進するであろうエネルギーを感じさせられました。

ほんの数人の方だけでしたが、私と対話してくれた殆どすべての人が、宗教の強制と女性だけにチャドルを強制することに反対の意思を示していたことにも、イランの夜明けの近いことも実感しました。

帰国後に読んだ新聞によると、イランでのウーマンパワーが日増しに大きくなっているとのことでした。

カスピ海を背に、雪のエルブルース山塊を越えテヘランに向かう地域の景観は素晴らしいものでした。特にエルブルースの斜面は、私のスキー滑走意欲を激しくかきたててくれます。改めて滑りにきたい絶好のスロープでした。

トルコで見たり聞いたり感じたこと

十日ぶりで飲んだ酒（ジョニーウオーカー）のなんとおいしかったことでしょう。酒は、シルクロードの昔から人類の歴史とともに生きてきた文化です。酒を飲む飲まないは自分の意志できめたいものです。仲間とことさら盛大な酒盛りをやりました。

イランとトルコの国境ギユブラック峠の通関も大変な時間を要しました。税関員が昼食を終えるまで椅子も、トイレすらないきかない部屋で、数名のクルド人家族と共に過ごしました。長い待ち時間の間ほとんどもきかず、まったくの無表情でひっそりと過ごし、通関すると、持ち切れないほどの世帯道具を抱えて去って行きました。大国の利益のために国土を奪い取られた民族の悲劇を目のあたりにし、他民族を犠牲にして、大国が自国の利益を追及する自分勝手な仕打ちに強い憤りを覚えました。

人間の尊厳は何人も犯しえないのと同じように、民族の自決権もまたいかなる国といえども決して犯してはならないものだと思います。

ギユルブラック国境からドウバヤジットにはいった時、銃を構えたトルコの兵隊が、7人もわれわれのバスを取り囲みました。クルド人を中心とする民族紛争から私たちを護衛するため

の好意でしたが、始めは大変な恐怖と驚きでした。

民族の十字路と呼ばれる地域を通過してきたので、民族問題の悲しい側面にも出合いました。

漢族にたいする他の中国人の憎しみの感情、ウイグル人とキリギスタン人との対立、サモス島で、ナイフを机に突き立てるようにして表現したアルバニア人のトルコ人に対するあからさまな反感など。恐怖を覚えたことすらありました。

南京虐殺の真相を知りたい、日本人は本当にあんな酷いことをしたのかと私に迫ってきたトルコ人のことなど、私は生涯忘れることはないでしょう。

逆に、バスで走った五十五日間、行く先々で沢山の見知らぬ人たちが笑顔で私たちを迎えてくれました。

トルコでは、とある中学校の生徒のほとんど全員が、私たちを日本人と知り、校舎の窓や校庭で盛大に手を振り、親しみを表わしてくれました。とても感動しました。

砂漠から脱出して海を船で渡り、ギリシャのサモス島での休日に、さんさんと降り注ぐ長い日差しを全身に浴びながら、ドイツ人たちとビールで乾杯し「野ばら」や「菩提樹」を合唱した、あの幸せな日のことがいまでも鮮明に蘇ってきます。

ついさっきまでは見も知らなかった人たちと、ろくに言葉も通じないのに心が通い会って、肩を組んで歌を歌ったり、談笑したりできたことが私の一番の想い出です。

私にとっての大きな収穫は、国や言葉は違っても、相手の立



(ギリシャのサモア島で、ドイツの人達と"野ばら"を歌う)

場を思いやる、寛い心を持つこと、異なる民族どうしが笑顔で交流し、友情を育んできていたように、世界中の人たちは共に手を携え、肩を組んで、合唱し、人類の歴史的文化を発展させて行く可能性を持っているのだということの確信を一層深めたことです。

伊東 孝法律会計事務所

弁護士 伊 東 孝

〒060-0042

札幌市中央区大通り西10丁目 南大通ビル 3階

電話 011-271-2475

ビルの省エネルギーの推進を目指して

ビルのエネルギーに関する各種の調査研究
ビルの省エネルギー診断サービス
ビルの省エネルギーに関する普及啓蒙

社団法人

日本ビルエネルギー総合管理技術協会

専務理事 村 瀬 哲
(昭和30年入寮)

〒105-0012 東京都港区芝大門1-8-1和楽路ビル
TEL(03)3431-1352

豊かな経験と確かな技術で
安全・安定輸送にんでいます。



双葉鉄道工業株式会社

取締役社長 佐々木 直樹
(昭和22年入寮・土木27期)

本 社 〒108 東京都港区芝5-29-14 田町日工ビル
TEL 03 (3454) 8731(代) JR057-4264
支 店 大井・東京・新横浜・湘南・小田原・熱海・三島・掛川
品川・静岡・大手町・土木・建築
出張所 小田原土木・三島土木・中津川溶接



豊かな社会づくりに創意と技術で貢献

エスケー産業株式会社

代表取締役 社長 木 村 保
代表取締役副社長 高 根 仟（昭和28年入寮）

（営業内容） ■道路資材事業部 ■土木・環境資材事業部
■建材・内装事業部 ■住宅事業部 ■企画開発室

本社 〒003-0001 札幌市白石区東札幌1条4丁目8番1号
TEL (011) 811-6600代・FAX (011) 811-3540
旭川営業所 帯広営業所



地質調査・試験・計測・測量・設計

株式会社 **カンキョー**

（旧社名 環境地質エンジニアリング株）

顧問 石川 舜（昭和32年入寮）
代表取締役 窪田 開拓（昭和32年入寮）（建設部門技術士）

本社 〒531-0071 大阪市北区中津1-17-23
TEL (06) 6373-7181 FAX (06) 6373-7190
技 術 部 TEL (06) 6864-2061 FAX (06) 6864-4900
和歌山営業所 TEL (0736) 62-9348 FAX (0736) 69-2178
東京営業所 TEL・FAX (03) 5762-9481

農業・農村整備の総合プランナー

北海道農業土木技術指導協同組合

理事長 柴 野 直 行（昭和32年入寮）
相談役 石 上 勇（昭和25年入寮）

〒060-0005
札幌市中央区北5条西6丁目農地開発センター内
TEL 011 (231) 8833・FAX 011 (231) 4084

(編集後記)

思いもかけない程の時間が経ってしまった。愚痴めいた言い訳には事欠かないが、早くから原稿をいただいた方には、この二ヶ月遅れの発刊を何とお詫びしてよいやら、ただただ申し訳ない。

ただ、遅れた分だけ充実したのも確かで、恵迪寮OBの活躍する世界の幅の広さ、奥行き深さが、会誌「恵迪」を、一同窓会の会誌の枠を越えて一層魅力あるものにしてくれた。「主張・評論」「世界をめぐる」「人生エピソード」等々、編集していても充実感があつた。

恵迪寮歌には北海道の自然を伸びやかに歌うという、他の旧制高校の寮歌にはない大きな特徴がある。今回グラビアはこれにせまり、山男で写真好きな、私と同期の高橋邦臣君の協力を仰いだ。本道を離れている同窓諸兄には、このすばらしい北海道の自然を贈りたい。

北大、恵迪人脈は第三回となり、「有島武郎と恵迪寮」を取り上げた。当時の寮

生に慕われた、大正期を代表する作家有島武郎の素顔の一面に触れてもらえれば幸いである。

最後に、発刊にあたっての資金不足をカバーするため、広告に協力して下さった同窓諸兄や企業の方々に深く感謝の意を表し、筆を置かせていただく。

(井口光雄 記)

会誌「恵迪」編集委員会

(一) 内は、入寮年次

委員長 井口光雄 (昭和二十八年)
委員 富永 巖 (昭和二十五年)

河原克美 (昭和二十六年)

白井俊三 (昭和二十七年)

高橋邦臣 (昭和二十八年)

鈴木勝男 (昭和二十九年)

高橋陽一 (昭和三十年)

岩船 修 (昭和三十一年)

湯浅 亮 (昭和三十二年)

石川 舜 (昭和三十二年)

窪田開拓 (昭和三十二年)

平岡義博 (昭和三十三年)

恵迪 — 第三号 —

(頒価 壹千円)

平成十一年三月一日発行

発行者／恵迪寮同窓会

会 長 繁富 一雄

〒〇六二・八六一一

札幌市豊平区平岸一条一丁目

株・ラルズ 気付

(TEL & FAX)

〇一一・八一五・六三七七

編集デザイン／(株)現代ビューロー

担当・中村信夫

印刷所／佐藤印刷株式会社

〈全道62店舗〉



〈グループ年商1,500億〉

北海道の豊かな暮らしを創造する

株式会社 ラ ル ズ

ラルズスーパー部門

関 連 会 社

- ラルズプラザ
- ラルズストア
- ラルズマート
- フレッティ
- ビッグハウス

株式会社北海道流通企画

株式会社道東ラルズ（道東地区スーパー）

株式会社道北ラルズ（道北地区スーパー）

株式会社イワイ（酒販売）

株式会社エルディ（保険・清掃・ビルメンテナンス）

株式会社ライフポート（ドラッグ部門）

（昭31年入寮）	横山	清	社 長
（昭31年入寮）	千場	一正	顧 問
（昭27年入寮）	小寺	義彦	監査役
（昭57年入寮）	松尾	直人	バイヤー
（昭59年入寮）	高橋	広樹	チーフ

厳選した酒造好適米を磨きあげ、

清冽な雪清水で醸しました。

森林のなかの空気のような

さわやかな吟醸香、

爽快で透明感のある

味わいのお酒です。

純米吟醸
都ぞ 弥生



RALSE

※ラルズグループの店でのみ、お取扱い致しております。

※地方発送は恵迪寮同窓会（TEL011-815-6377）へ電話下さい。



発行

惠迪寮同窓会